

蜃気楼にうつる魚津の暮らし

地域社会の文化人類学的調査30



2021

富山大学人文学部文化人類学研究室

蜃気楼にうつる魚津の暮らし

目 次

はじめに	3
第1章 地域概要	5
第2章 混ざり合う場としての祭り——変化する魚津八幡宮献灯みこし祭り (早川勝大)	17
第3章 魚津における銭湯の今昔——変わらない日常 (小野巧太郎)	47
第4章 魚津大火の記憶と防火建築帯に住む住民の声 (大坂瑞希)	63
第5章 文化町通りの記憶 (小林一世)	77
第6章 魚津商店街の変遷——新しい商店と商売の在り方の変化 (太田彩菜)	87
第7章 加積りんご栽培における女性の役割について (小野菜摘)	99
第8章 加積地区におけるりんご栽培と人々のつながり (荻原実穂)	121
第9章 魚津漆器の現在と過去 (出上岳)	139
第10章 山村の人々の暮らしと伝承——東蔵を中心に (加藤耀大)	153
第11章 松倉地区で消えつつある記憶と受け継がれてきたもの ——古鹿熊の分校と金山谷・松倉小学校の獅子舞 (近藤七茶)	171

は じ め に

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979 年の研究室創設以来、教育の一環として、北陸の一地域を選んで調査実習を行い、その成果を報告書『地域社会の文化人類学的調査』にまとめてきました。この報告書は、その第 30 巻になります。

節目ともいえるべき本報告書では、本研究室として初めて魚津市を取り上げることができました。海と山に恵まれ、城下町としての歴史もある魚津市のことを調べることができたのは、本研究室にとって非常に大きな意味をもちます。

富山県内の数か所を下見したのち、学生たちが魚津市を調査地として決めたのは 2019 年の夏休み前のことです。この年の夏休みが明けてから、学生たちは現地でテーマ探しを始めました。（この間、すなわち 2019 年度の後学期は主担当の野澤が育児休業のため不在でしたが、その穴は芸術文化学部の田邊元先生に埋めて頂くことができました。）翌 2020 年 4 月から 6 月にかけては新型コロナウイルスの影響のためにフィールドワークを中断せざるを得なかったのですが、その後は授業時間を中心に魚津に通うことが可能になりました。また、例年のような合宿調査こそかなわなかったものの、8 月の末には 1 週間の集中調査期間を設けることができました。その後は補足的な調査をしながらこの報告書を書き上げました。

取り上げたテーマは様々ですが、富山大学文化人類学研究室の伝統にしたがって、それらはいずれも学生たちが自主的に探し当てたものです。学生たちは、調査地で現地の方々と直接出会いお話を聞くなどすることで、教室の授業でのそれとは別次元の驚きやインスピレーションを得つつ問いを育てていきます。今回の一連の調査のあいだも、学生たちがそうした本来の学びをする過程に伴走することができました。これはフィールドワーク教育の醍醐味といえるでしょう。本報告書がそれに加えて地域の記録をまとめた資料的な価値をもつとすれば、研究室のスタッフとしてそれ以上の喜びはありません。

ところで、学生たちが話し合って決めた報告書のタイトル『蜃気楼にうつる魚津の暮らし』を見て感慨をおぼえずにいられませんでした。というのも、今回の報告書には印象深いかつての思い出話や記憶がたくさん取り上げられており、そのイメージと「蜃気楼」がうまく重なるように感じられたからです。そのイメージが読者のみなさんにも届くことを願います。

最後になりますが、今回の調査も数多くの地元の方々のご助力があつてはじめて可能になりました。個々の学生がお世話になった方々のお名前は各章に記してあります。ここでは、コロナ渦という状況にもかかわらず 8 月末の集中調査期間に事務所をお貸しいただいた魚津中央通り名店街理事長の木下清司さんおよび事務所のスタッフのみなさまに感謝の意を記します。どうもありがとうございました。

2021 年 2 月

富山大学人文学部 野澤豊一（主担当）
藤本 武（副担当）

追記

紙媒体の報告書は発行部数・頒布先ともに限られていますが、ここ 10 年あまりの実習報告書は富山大学学術情報リポジトリより閲覧可能です。関心のある方は「地域社会の文化人類学的調査」でご検索ください。

第1章 地域概要

1. 魚津の自然・地理・気候

魚津市は、富山県東部に位置しており、総面積は200.61平方kmである。北東部は布施川によって黒部市と境界をなし、南西部には早月川を隔てて西に滑川市、南に上市町が位置している（図1－1）。昭和27（1952）年の合併以来、魚津市内には13の地区が置かれている（図1－2）。表1－1に、各地区についてのごく簡略な特徴や代表的な施設をまとめている。



図1－1 魚津市の位置（「地理院地図」をもとに作成）

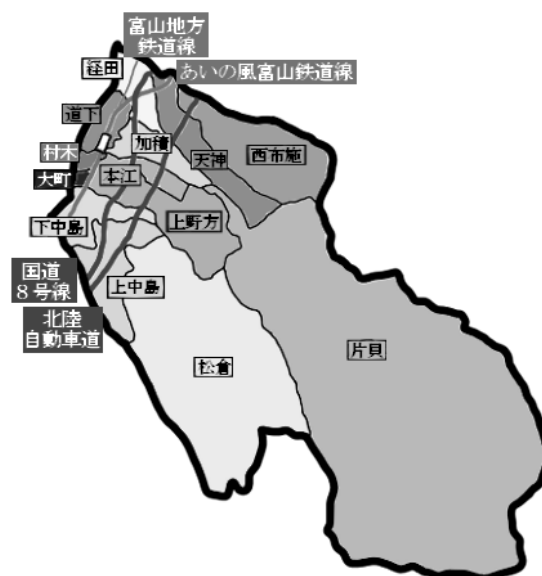


図1－2 魚津市内の地区を表した地図（「魚津市定住応援サイト」を参考に作成）

表 1—1 各地区の名称と主な施設・特徴

地区名	主な施設や特徴
大町地区	米騒動発祥の地
村木地区	埋没林博物館、諏訪神社
下中島地区	魚津水族館、ミラージュランド
上中島地区	ミラージュベル（有磯海 S A）
上野方地区	桃山運動公園
本江地区	梨生産、市内人口最大
片貝地区	洞杉群、片貝来られハウス
加積地区	加積りんご
道下地区	ありそドーム
経田地区	経田漁港、経田七夕祭り
天神地区	東山円筒分水槽、金太郎温泉
西布施地区	西布施ぶどう

魚津市は、海拔 0 m から標高 2,400m 以上の山岳地帯までが約 25km に収まる世界的にも珍しい地形をしているため、扇状地がそのまま海まで届いている。具体的には、片貝川が運んだ土砂による片貝川扇状地が大部分を占め、西部の一部では早月川扇状地が形成されている。その他にも布施川、角川、鴨川など多くの川が流れており、水質はとてもきれいで川魚を捕ることもできる。また、流れの速さを利用した水力発電も行われている。

海岸線は比較的平坦で延長すると 8 km ほどになるが、海中は急斜面となり漁業に適した地形となっているため、多様な海産物を捕ることができる。さらに、ウインドサーフィンのマリンスポーツもさかんに行われている。また、4 月から 5 月、11 月から 3 月にかけては蜃気楼を見ることができる。蜃気楼とは空気中で光が屈折するために、5 km から 20km 離れている景色が実際とは違う形になって見える現象である。冬の蜃気楼は全国各地の海岸で見ることができるが、春の蜃気楼は冬よりも発生条件が厳しい。その中でも魚津市は冬、春どちらも見ることができる数少ない地域である。

一方、市内南東部から標高 200m 以上の急勾配な山地が市域の 70% を占めており、そこではコゴミ、ウド、モミジガサ、ヨナナなどの山菜の自生、また熊、猿、猪などの動物の生息が見られる。また近年では「パワースポット」としても注目されている「洞杉」がある。「洞杉」とは巨石を抱えているように見える杉の古木である。洞杉の主幹の幹周は 1,560 cm であり、杉単体部門では日本で 3 番目に太い杉である。

また、魚津市主要部の気候は温暖湿潤気候で、山間部の気候は亜寒帯湿潤気候である。寒さのピークは 1 月で平均気温氷点下 1℃、暑さのピークは 8 月で平均気温 31℃となる。降水量は 7 月と 12 月が多い。特に、魚津では海と山が非常に近い位置にあることから、海で蒸発した水が雨や雪になり、山に降ったそれらが川を通して海に戻っていくという水の循環

環を一目で見渡すことができる。これは「魚津の水循環」と呼ばれ、他の地域では見られにくいものである。

2. 歴史

まず、魚津市の名前の由来から説明する。魚津は古くから「魚^お堵^ど」と呼ばれ、そのほかにも小戸ヶ浦、小戸、小津とも言われてきたが、魚の産地ということで魚津に改称され今日に至ったとされている。魚津の名前はそれほど古いものではなく1476年とするもの、また1595年に魚津に改称したとする文献がある。

次に魚津の歴史について説明する。現在魚津市の地区の名前にもなっている松倉城は、南北朝期の14世紀半頃に築城されたと推定されている。松倉城は現在の魚津市鹿熊字城山の山頂部に築かれた山城で、越中最大規模の山城だとされている。築城されてから戦国末期の16世紀末までの約250年間にわたって、新川郡の要として重要な役目を果たしてきたが、慶長年間（1596～1615）の初めには廃城になったといわれている。

江戸時代の魚津地域の行政は、当時魚津城代が新川郡を統括していた。1615年の一国一城の令により魚津城が廃城となると、寛永4（1627）年から魚津在住として魚津町と新川郡を治めることになった。その後、万治3（1660）年に魚津町奉行と郡奉行が区分され、魚津町奉行は明治2（1869）年の町奉行廃止まで200年あまりにわたって魚津町を治めてきた。

明治時代初期の廃藩置県後、短期間ではあったが新川県（今の富山県東部）が置かれ、その県庁が旧魚津町に置かれた。その後新川県は石川県に吸収合併され、さらに石川県から分離し富山県となった。富山県となった後も、旧魚津町には新川郡役所が置かれ、新川地方の政治、産業の中心を担った。

大正時代には全国を揺るがせた米騒動が起こっている。大正7（1918）年の7月23日の旧魚津町（現在の魚津市）で起こった米の輸送船への米の積み出し阻止が米騒動の発端と言われている。普段から米価高騰に苦しんでいた漁師の主婦ら数十人が、米の積み出しを行っていた大町海岸の旧十二銀行の米蔵で米の積み出しを止めるよう要求し、米の積み出しが中止された。その後、百数十人ほどに膨れ上がった主婦達が町内の米穀商店へ押しかけ、米の移出阻止を求めた。これが当時の内閣を総辞職に追い込んだ米騒動の始まりと言われている。

昭和の初めには松倉村、河原波村は廃村となり、古鹿熊村も明治初期の半分の戸数となった（詳しくは第11章を参照）。しかし、戦前の魚津は人口に比較して仕事が少なかったため、人々は所得が低くて生活に困った。戦後になると一転して好景気が訪れ、魚津町でも土建業、建設業、工場、各種商店、飲食店などが急激な勢いで伸び、それにつれて求人の増加、給料や賃金の急上昇が起こった。また、農業の機械化が進み、食糧の自給状況が良くなると同時に、農業の収入が沈滞した。そのため余剰労働力が村から町に流れて郊外に住宅が移り、山間部では集落の消滅や廃村が引き続き起こった。

魚津区域発展のために魚津町周辺の農村と合併を試みる動きが生まれてから、魚津市が誕生するまでには半世紀にわたる長い道のりがあり、第二次世界大戦前の昭和 15（1939）年までに魚津町当局や有志、富山県からの働きかけなど計 8 回を数えた。その後、日本の民主化や地方自治民主的制度、政府の諸改革の影響を受け、昭和 27（1952）年 4 月 1 日に魚津市発足が決まり、富山魚津区域で一町（魚津町）と 11 か村（上野方村、下野方村、上中島村、加積村、道下村、松倉村、片貝谷村、経田村、天神村、西布施村）の合併により、魚津市が誕生した。

魚津市は北陸街道の宿場町、魚津城の城下町として商業の中心地であり、中央通り、新宿、銀座通り、文化町の 4 つの商店街が中心商店街を形成している。これらの商店街は戦後の昭和 20 年代に賑わいを見せたが、中央通りと銀座通りは昭和 31（1956）年 9 月 10 日に起こった魚津大火の被害にあった。この大火は台風による強風にあおられ、市街中心部及び隣接地区（下野方、道下、加積の各一部）の計 15 万 3 千坪が焼失する魚津市最大の火災被害となった。大火後には復興事業の一つとして都市部の火災延焼を防ぐために昭和 34（1959）年に防火建築帯が中央通り商店街、銀座通り商店街に作られ、現在も人々が住み続けている（詳しくは第 4 章を参照）。復興後の昭和 30 年代には、消費都市魚津の特徴の一つとなっている遊興飲食店の開店が急増した。その例のひとつとして、本報告書では第 5 章において文化町の隆盛について記述されている。

市制実施後は、行政事務の増大と複雑化により明治 33 年（1900）年に建てられた旧庁舎は手狭になり、新たな行政需要の増大に即応するためにも新市庁舎の建設が望まれた。昭和 41（1966）年から二ヵ年継続事業として建設され、翌年の 10 月に落成式が行われた。それと並行して、商業施設も徐々に郊外に移っていき、荒町に位置していた魚津市役所は昭和 42（1967）年に現在の新魚津駅近くに移転し、昭和 50（1975）年には、当時売り場面積や駐車場、売上げが新川地区最大となる商業施設のサンプラザが新魚津駅近くにオープンした。また、新しい国道 8 号線である魚津市バイパス（住吉～江口間）が昭和 60（1985）年度に着工し、平成 27（2015）年に全面開通した。こうして市民の商業活動が郊外に移るようになりモータリゼーションが進んだことで、商店街は次第に不便になり空き家の増加、後継者問題などに悩まされるようになっていく。しかし、その中でも新たな取り組みによる新しいお店も増加している（詳しくは第 6 章を参照）。

3. 魚津の人口

令和 2（2020）年 11 月 1 日時点の魚津市全体の人口は 41,296 人、世帯数は 17,062 世帯である（外国人住民を含む）。性別人口は男性 20,133 人、女性 21,163 人となっている。大正 9（1920）年から昭和 60（1985）年（国勢調査を基に作成されたグラフを参考）、平成 2（1990）年から平成 27（2015）年（5 年ごとで国勢調査、住民基本台帳による推移）の人口推移と、平成 30（2018）年 10 月 1 日時点の年齢別人口を以下に示した。

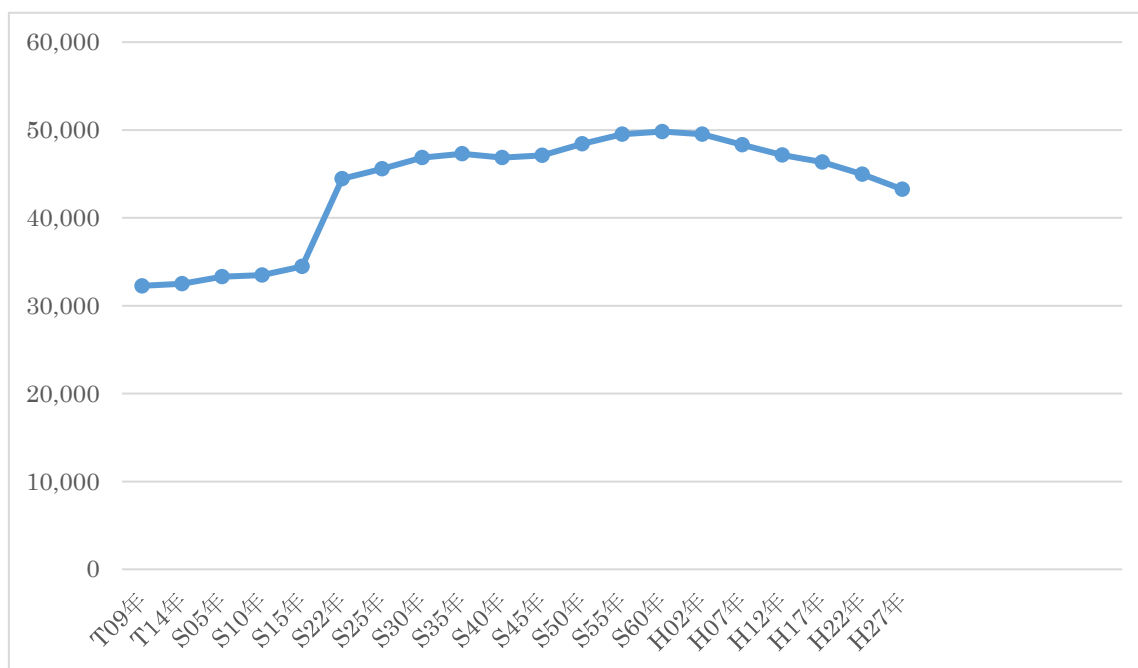


図1-3 魚津市の人口推移

(平成30年度刊行魚津市の統計、国勢調査を基に作成されたグラフより作成)

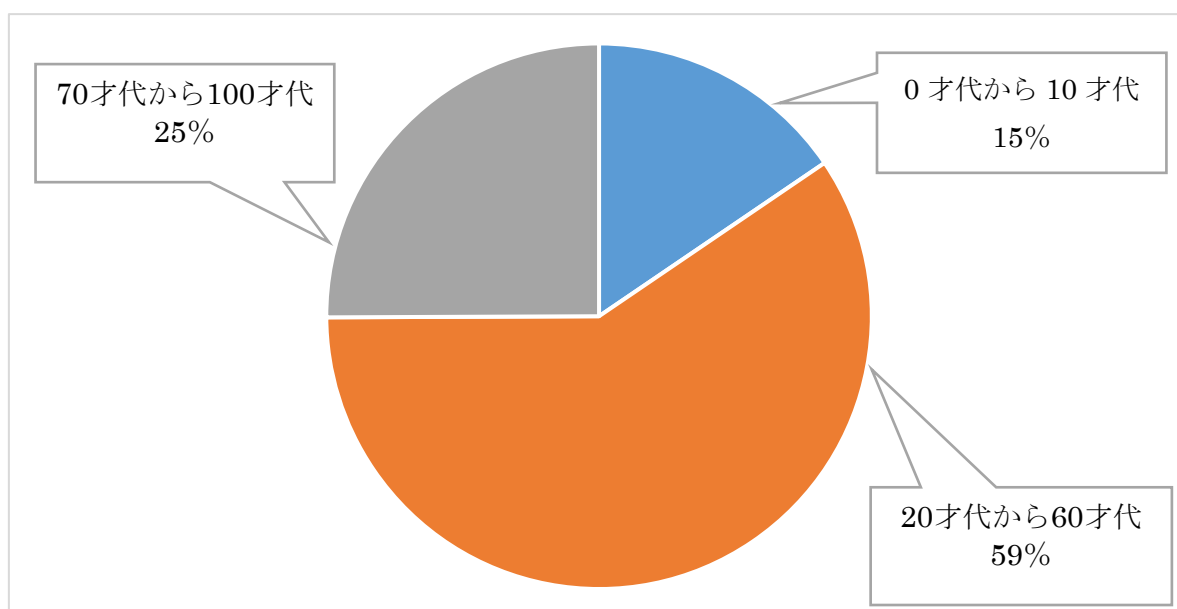


図1-4 魚津市の年代別人口

(平成30年10月1日時点；平成30年度の魚津市の統計より作成)

図1-3を見ると、昭和15（1940）年から昭和22（1947）年にかけて人口が急激に増加している。昭和15（1940）年は34,482人だが昭和22（1947）年には44,463人に増え、人

口増減率は、7年間で3.03%から28.95%になった。その後も徐々に増加し続け、魚津市の人口のピークは昭和60（1985）年の49,825人である。しかし、この年を境に徐々に減少していき、平成27（2015）年までの30年間で6,592人減少している。なお、魚津市の統計では、年代別人口割合は0才代、10才代、20才代と表記されていたが、年少年齢人口（0～14才）、生産年齢人口（15～64才）、高齢人口（65才以上）を考慮し、年代別人口割合の円グラフの区分は、0才代～10才代、20才代～60才代、70才代～100才代とした。そのグラフ（図1－4）を見ると、平成30（2018）年度時点では70才代～100才代が占める割合が25%を超えている。その割合に65才～69才は含まれていないため、その年代を加えると、さらに割合が増えるだろう。これは、WHOや国連が定める定義によると超高齢社会と位置づけられる数値である。

次に平成19（2007）年から平成27（2015）年にかけての魚津市の住民の転入・転出者数をグラフによって示す。

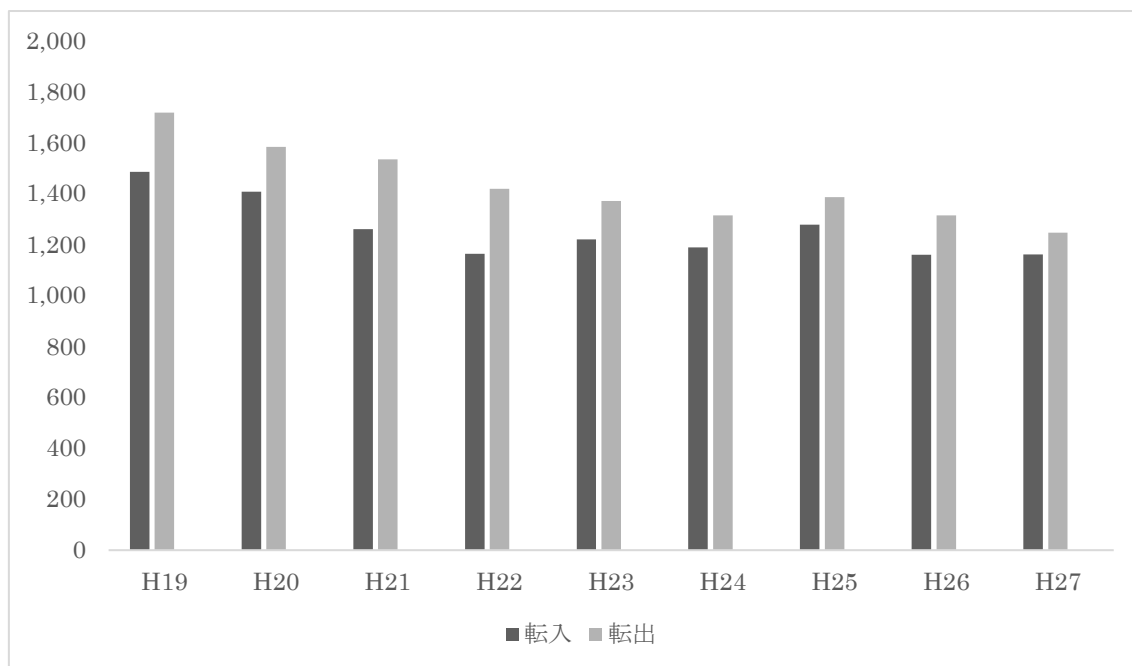


図1－5 魚津市の転入、転出者数
（平成24、25、30年度の魚津市の統計より作成）

過去8年間の魚津市における転入・転出者数を見ると、魚津市では常に転出者数が転入者数を上回っている。平成30（2018）年度刊行の魚津の統計によれば主な転出先は県内の他都市、次いで石川県、東京都、その他の道府県だとされる。一方で県内の他都市からの転入を除けば、東京都、新潟県からの転入者数が統計上多いとされる。

また、平成24（2012）年から平成27（2015）年にかけては、転出者数と転入者数の差が縮まってきていることがわかる。

4. 産業

平成 27（2015）年の魚津市の産業別就業人口の割合を示したのが図 1－6 である。第 3 次産業が半分以上を占め、第 2 次産業と合わせて全体の 96%を占めている。第 1 次産業の就業人口は 900 人、第 2 次産業は 8,521 人、第 3 次産業は 12,286 人となっている。第 3 次産業に従事する人が 5 割以上を占めており、その中でサービス業に従事する人が 7,240 人と最も多く、次いで卸売・小売業、運輸・通信業、金融・保険不動産業、電気・ガス・水道業、公務となっている。

図 1－7 には、20 年前の平成 7（1995）年の魚津市の産業別人口の割合を示した。第 1 次産業の就業人口は 1,575 人、第 2 次産業は 11,936 人、第 3 次産業は 13,766 人であった。この 20 年のあいだにも、第 1 次産業と第 2 次産業の就業人口が減少し、第 3 次産業の就業人口が増加していることが分かる。

魚津市はその由来の通り漁業が盛んで、富山湾では春のホタルイカにはじまり一年を通して豊富な魚種が、冬には寒ブリや寒ハギ、紅ズワイガニや甘エビなどがとれる。また、魚津は果樹栽培も盛んで、富山県内を代表するりんご産地である加積地区では、「加積りんご」という名前のりんごが販売されている（詳細は第 7 章および第 8 章を参照）。また、下野方地区友道では梨の、西布施地区ではぶどうの栽培が行われており、果樹園の直売所が多く見られる。他にも米、大根やネギといった野菜、鹿の子百合という「魚津市の花」にも制定されている花など、様々な農作物が栽培されている。

魚津はかつて江戸から信州善光寺、金沢を通り京都へと繋がる北陸街道があり、江戸後期頃は 360 軒を超えるお店が建ち並ぶ大きな城下町であった。現在は、文化町通り商店街・銀座通り商店街・新宿通商店街・中央通り商店街という 4 つの商店街があり、これらの商店街を中心に商業地域が形成されている。（商店街に関しては第 4 章―第 6 章に詳しい）

また、本新にある日本カーバイド工業の工場を中心に工業地域が形成されている。カーバイドとは炭素と金属元素の化合物のことで、生成に必要な石灰岩を安定的に調達できて、豊富な水資源による水力発電でエネルギーを得られる魚津市で昭和 10（1935）年に創業された。当時はカーバイドを使用したアセチレン誘導工業は化学工業の最先端だった。その後化学工業の発展とともに事業内容を拡大し、現在は機能化学品、機能樹脂、電子素材などの製造を行っている。

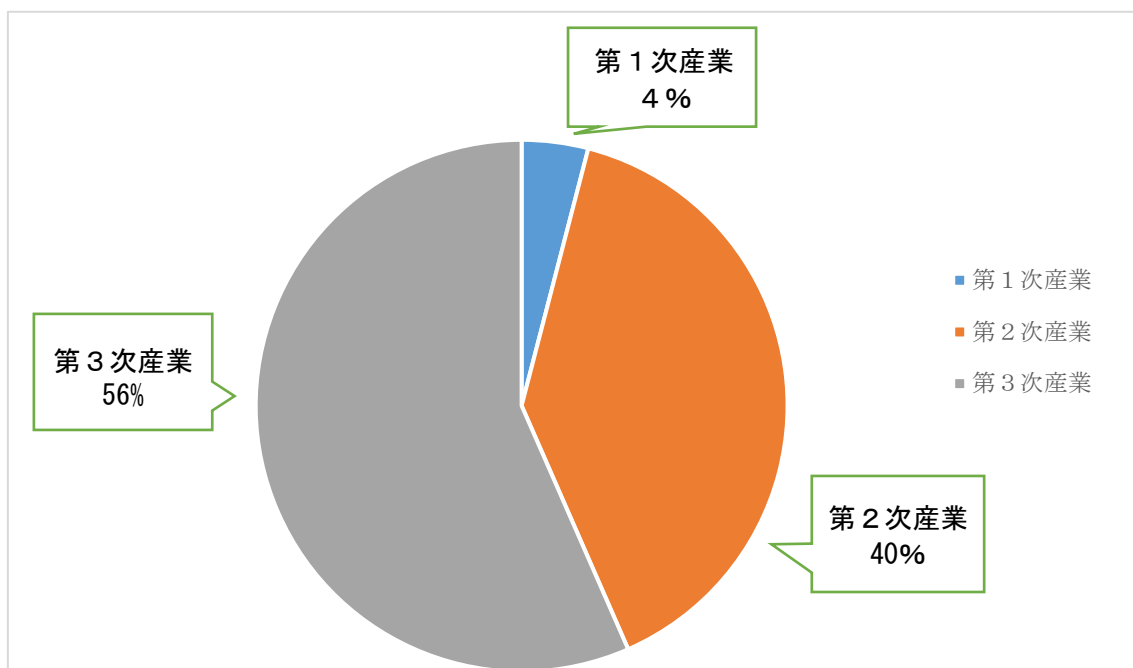


図1-6 平成27年度魚津市産業別就業人口
(魚津市ホームページ『平成30年度刊行 魚津市の統計』をもとに作成)

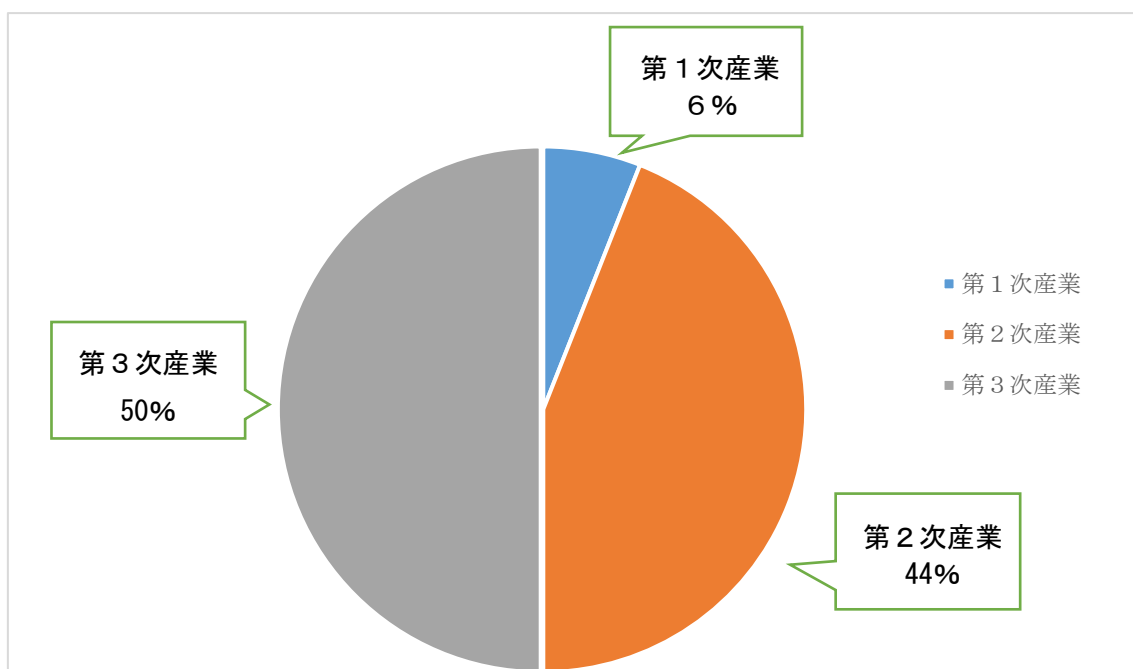


図1-7 平成7年魚津市産業別就業人口 (平成7年国勢調査をもとに作成)

5. 魚津市の祭りイベント

ここでは、魚津市で行われている祭りやイベントをまとめる。魚津市では以下のような様々な年中行事が行われる。本報告書の調査をおこなった令和2（2020）年は新型コロナウイルスの影響を受け、中止となったイベントも多いが、令和元（2019）年の年間スケジュールなども参考にして、表1—8にまとめた。

表1—8 魚津市の祭りおよびイベント
（「魚津市観光協会公式サイト」「魚津市公式サイト」より一部修正のうえ、作成）

日にち	イベント名
1月1日	元旦マラソン
1月16日頃	桃山雪まつり
1月第4日曜日	小川寺の獅子舞 火祭り
1月26日	魚津神社 火祭り
3月12日頃	小川寺の獅子舞 春祭り
3月中旬	金山谷の獅子舞 春祭り
4月第4日曜日	魚津しんきろうマラソン
5月中旬	よっしゃ来い！！CHOROKUまつり
5月下旬	戦国のろし祭り
6月4, 5, 6日	魚津神社祭礼
8月第1週金土日曜日	じゃんとこい魚津まつり
8月中旬	ミラージュランド サマーナイト遊園地
9月中旬	魚津八幡宮献灯みこし祭り
10月12日頃	小川寺の獅子舞 秋祭り
10月下旬	ハロウィン&よさこい inミラージュ
11月中旬	イルミラージュUOZU
毎週水曜日	経田漁港わいわい市
毎週水曜日	銀座ワイワイ市
毎週金曜日	銀座ワイワイ市 夕市
毎月第2第4日曜日	魚津の朝市

以下では、その一部について概略を示す。

「愛宕社の火祭り」は毎年1月26日、愛宕社が合祀されている魚津神社でおこなわれる。火祭りでは火消しの纏に似せた、高さ5～6mほどの大御幣をつくり、これを境内で燃やすことで新年の無事平穏を祈る。大御幣は人間の姿を表しており、天狗の面、おかめの面が取りつけられている。江戸時代の中頃、魚津の町で大火が続き、防火意識を高めようとして始

めたことがこの祭りの起源といわれている。

「小川寺の獅子舞」は魚津市小川寺地区にある千光寺観音堂境内で、毎年1月の第四火曜日の「火祭り」、春と秋の祭礼とで奉納される獅子舞である。祭礼は古くからの神仏混淆のかたちを残した行事で、県内では他に類をみない。獅子舞も同様に、古い様式を残したものである。

毎年4月に開催される「魚津しんきろうマラソン」は魚津を舞台に開催され、ハーフマラソンから2km ジョギングまで自分に合ったコースで参加することができ、様々な年代が楽しめる大会となっている。参加者には、魚津の観光スポットである「魚津水族館」や「魚津埋没林博物館」「日本海側最大級観覧車」の招待券や割引券が付与される。また、マラソン後には、魚津の魚介類を使った「しんきろう鍋」を無料で味わうことができる。

「香具師（やし）祭り」ともよばれて親しまれる「魚津神社春季例大祭」は毎年6月の4、5、6日にかけて行われる祭りである。かつては「神明祭り」や「曳山車（ひきやま）祭り」などとも呼ばれたそうで、魚津大火以前には曳山が出ていたそう（『歳時記うおづ』より）。露店が数多く出ることでも有名で、その規模は県東部一であり、市内外の親子連れや学生が露店目当てに数多く訪れる。6月4日、5日には魚津神社の神輿が巡行され、氏子町内の家々が祈祷を受ける。

「じゃんとこい魚津まつり」は、昭和45（1970）年に、第1回魚津観光まつりが開催されたのがはじまりで、昭和62（1987）年から「じゃんとこい魚津まつり」という名称になった。「たてもん祭り」、「海上花火大会」、「せり込み蝶六踊り街流し」をはじめとする様々なイベントが市内各地で行われる。近年では、中央通りから鴨川沿いを通るたてもん祭りの会場までの道を手作りのキャンドルで彩る「キャンドルロード」や海辺のジャズフェス「UO! JAZZ」なども同時開催されている。

メインイベントとなる「たてもん祭り」は毎年8月の第一金曜日・土曜日に開催され、諏訪神社の氏子町内で7基の「たてもん」が曳き回される。祭礼日はこれまでに何度か変更されており、かつては8月17、18日だったが、昭和28（1953）年からは8月7、8日に変更され、さらに平成19（2007）年からは8月の第一金曜日・土曜日に変更となった。昭和45（1970）年からは「魚津観光まつり」（現在の「じゃんとこい魚津まつり」）のメイン行事のひとつになっている。「たてもん」は高さ約16mの柱に90余りの提灯を三角形に吊したものをそり台に立てた船型の万燈である。巨大なたてもんを曳き回す若者のかけ声と囃子は非常に勇壮で迫力がある。とくに、諏訪神社境内でのたてもんの奉納は、若者たちによって巨大なたてもんが回転させられ、観衆がもっとも盛り上がる場面である。また、祭りの二日目には海上花火大会が行われ、光り輝くたてもんと花火をともにみることができ、魅力的である。



写真1—1 たてもん祭りの様子（近藤七茶撮影）

魚津八幡宮では毎年9月の第三土曜日に、「魚津八幡宮献灯みこし祭り」がおこなわれる（かつては9月14日）。氏子町内から12基の神輿と女神輿1基が出され、勇ましいかけ声、笛と太鼓の音とともに町内をまわる。町内巡行を終え、お祓いを受けた神輿を社殿に乗り入れ大きく揺らす「宮上げ」は圧巻だ。神輿巡行が始まるのは19時頃からだが、昼間には近隣の保育園の園児らが担ぐ「園児神輿」が出され、見物の保護者らで境内は賑わう。（詳しくは第2章を参照）

富山県で唯一の遊園地である「ミラージュランド」でのイベントも活発に行われている。イベントでは、遊園地内にキッチンカーなどのショップを設置するのみならず、県内外のアーティストによるフェスやアニメ系イベントを開催するなど、参加者同士で交流できるものも多い。令和元（2019）年に行われた「ハロウィン&よさこい in ミラージュ」ではハロウィンの撮影用キッズ衣装貸し出しやハロウィン用の撮影ブースが設置されると共に、県内15のよさこいチームによる、よさこいイベントも行われた。

また、魚津市では毎週や隔週で特産市や野菜の直売市が行われている。これらの市は、地元住民や観光客たちの「魚津の食材を楽しみたい」「安全で新鮮なものを食べたい」という思いからはじまったもので、地域活性化を目的として各地で行われている。地元住民からも人気で、開店前から行列ができていたこともあるという。

参考文献

魚津市教育委員会、2016 年『魚津の歴史読本シリーズ（6） 「魚津の民俗芸能」』、魚津市教育委員会。

魚津市教育委員会、2017 年『魚津の歴史読本シリーズ（7） 魚津の大地と自然』魚津市教育委員会。

魚津市史編纂委員会、1972 年『魚津市史 下巻 現代の歩み』魚津市。

魚津市史編纂委員会、2012 年『魚津市史 続巻現代編』魚津市教育委員会。

月刊うおづ同人社編、1978 年『歳時記うおづ』月刊うおづ同人社。

土井冬樹、2018 年「たてもん祭り——道を走る提灯の船」阿南透・藤本武編『富山の祭り——一町・人・季節輝く』pp. 151-165、桂書房。

参考ウェブサイト

魚津市「魚津市の概要」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=436&cdkb=ctg&cd=3501&topkb=C>〉（2021/01/07 閲覧）

魚津市「魚津市の統計」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=1490>〉
（2021/02/02 閲覧）

魚津市「魚津の歴史と文化」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=1903>〉
（2021/02/02 閲覧）

魚津市「産業・ビジネス」〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/topBiz.aspx>〉

（2021/02/02 閲覧）

魚津市「令和 2 年度魚津市イベントスケジュール」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=10682>〉
（2021/01/17 閲覧）

魚津市観光協会公式サイト 魚津たびナビ「地場産品・特産品一覧」〈https://uzu-kanko.jp/?page_id=12852〉（2021/02/02 閲覧）

魚津市定住応援サイト “そうだ、魚津に住もう”「各地区紹介&情報」〈<https://uzu-sumitai.jp/areatop>〉（2021/01/07 閲覧）

魚津たびナビ「祭り・イベント一覧」〈https://uzu-kanko.jp/?page_id=205591〉
（2021/01/13 閲覧）

人口・面積・人口密度「魚津市の人口推移及び人口増減率 1920 年～2015 年（大正 9 年～平成 27 年）〈<http://demography.blog.fc2.com/blog-entry-4165.html>〉（2021/02/02 閲覧）

第2章 混ざり合う場としての祭り——変化する魚津八幡宮献灯みこし祭り

早川 勝大

はじめに

私は囃子方¹⁾として、毎年地元（愛知県常滑市大野町）の山車祭りに参加している。この祭りには3基の山車と1艘の巻藁船²⁾が出て、それらは夜になるとたくさんの提灯を纏い、祭りの夜を彩る。

はじめて見た魚津の祭り、たてもん祭り³⁾でも提灯を纏ったたてもんと囃子が夜を彩っていた。たてもんを見に行ったとき、縁あって知り合った方が私に「魚津八幡宮献灯みこし祭り」を紹介してくださり、さらに担ぎ手として参加しないかと誘ってくださった。「はちまんはん」と親しみをこめて呼ばれるこの祭りと私との出会いは、このような偶然によるものであった。

行ってみると、こちらでも夜の闇を神輿と囃子が彩り、さらに「宮上げ」といわれる独特の動作が行なわれる非常に面白い祭りであった。そして、このとき私は気づいたことがある。それは囃子のメロディーがたてもんのときに聴いたものとほとんど一緒だったことである。さらに、神輿の担ぎ手⁴⁾は、そのかなりの割合が氏子町内⁵⁾の外部から来ているということ、それは囃子方についても同様であることも私を驚かせた。私の地元では、担ぎ手も囃子方も氏子町内の出身もしくは在住の人が多く、また囃子は似てはいるが町ごとに違いがあり、担ぎ手や囃子方が他の町や祭りと行き来をするというのはあまり見られなかったことであったからだ。この経験から、少数の氏子と多くの外部の人々によって担われる魚津八幡宮献灯みこし祭りがどのような祭りなのか、という問いが私のなかで生まれ、それをきっかけに私はこの祭りを調べることにした。

調査では、魚津八幡宮氏子青年会の方々や地元住民、外部の担ぎ手の方々やかつて魚津八幡宮献灯みこし祭りに関わった方々、魚津市教育委員会の方への聞き取り調査を行った。令和元（2019）年に続き、令和2（2020）年の祭礼にも参加させていただく予定だったが、コロナ禍のためにそれは叶わなかった。しかし、その代わりに行なわれたいくつかの行事に参加し、見学させていただいた。これらに加えて、複数の文献と資料により、魚津八幡宮氏子町内、魚津八幡宮献灯みこし祭りやそれに関わる出来事の歴史にかんする調査を行なった。

以上の調査を踏まえて、本稿では第1節で魚津八幡宮献灯みこし祭りの概要を述べたうえで氏子10ヵ町とその神輿を紹介し、第2節で祭りの歴史をまとめる。第3節以降は、主に現在の祭りの姿を記述する。第3節では、不足しがちな神輿の担ぎ手を、外部から補っている実情について報告する。第4節では魚津のみこし祭りにおける囃子継承の歴史を紹介したうえで、囃子と囃子方の祭りに果たす役割について、聞き取りと資料から記述する。第5節では数多くの語りをもとに、祭りを支える魚津八幡宮氏子青年会と、彼らが中心となっ

て変化していく祭りを描く。第6節では、氏子町内の住民への聞き取りを中心に、祭りを生
きる人々、そして人々によって生きられる魚津八幡宮献灯みこし祭りについて述べていく。
最後となる第7節では、本章での議論全体を振り返りつつ、私が今回の調査を通して見た魚
津八幡宮献灯みこし祭りについて論じる。

1. 魚津八幡宮献灯みこし祭りの概要

「魚津八幡宮献灯みこし祭り」は、角川沿いの魚津市田地方町にある魚津八幡宮の秋季例
祭として毎年9月の13日と第三土曜日に行なわれる祭りである。13日には魚津八幡宮の宮
司と神輿1基が氏子町内の家々を巡る「御神幸(ごじんこう)」がおこなわれ、第三土曜日に
は氏子10ヵ町のもつ神輿計12基が、夜に^{ぼんぼり}雪洞を灯し、鳴り響く笛⁶⁾と太鼓とともに担ぎ
手の「ヤッサヤーレ」というかけ声を響かせ、それぞれの町内巡りと魚津八幡宮社殿での「宮
上げ」(後述)をおこなう。昨年から各町内の神輿に加え、女性神輿「常磐」が加わり、
計13基の神輿が巡行と宮上げを行い、盛り上がりを見せた。



図2-1 魚津八幡宮とその周辺 (地理院地図より作製)

1-1. 氏子町と神輿

魚津八幡宮の氏子町は旧大町小学校の周辺と角川河口域までが範囲で、現在の魚津市新
角川1、2丁目から上口2丁目にあたる。かつての町割りではその範囲のなかに岡町、角川
町、上新町、紺屋町、下新町、八幡町、橋場町、橋向町、南町、八代町(五十音順)の10ヵ
町が存在する。

10ヵ町のうち9ヵ町は神輿を一基ずつ、南町は3基を所有している。12基の神輿は、魚津八幡宮参道にある「神輿堂」とよばれる建物に、普段は解体された状態で保管されている。

神輿全体の長さは約8メートル、幅は約2メートル、重量は約1トンあり、祭りに関わる人が言うには、担ぐのに大人16人は必要だそうだ。神輿の後方には太鼓が取り付けられている。それぞれの神輿には趣のある名前がつけられ、また飾り付けや形状が少しずつ異なっている。とくに屋根の形状と神輿上部の飾り付けに違いが見られ、屋根は四角、六角、八角のものの3種類、飾り付けにはそれぞれ宝珠、鳳凰、火炎(宝珠)と呼ばれる3種類がある。ここでは、聞き取り調査と資料をもとに、各氏子町とその神輿について紹介する。



図2-2 氏子町内をあらわした地図
(氏子青年会提供資料をもとに地理院地図より作成)

岡町

岡町はかつて上獵師町と呼ばれ、氏子町のなかでは北西に位置し、しんきろうロードに面する海側の町だ。『魚津町誌』⁷⁾によれば、岡町は江戸時代、元禄期の末に浜辺にある新町(後述)から引っ越してできた町で、漁業を営むものが多かったため、当時上獵師町と称したそうだ。また、町内に設置された看板によれば、岡町という町名の由来は、浦方から見て小高い「岡」にあたるからだという。

岡町の所有する神輿は「白帆」と名付けられており、屋根は六角形で、神輿上部の飾りは鳳凰である(魚津八幡宮境内設置の看板、氏子青年会提供資料より)。



写真 2－1 白帆（氏子青年会提供）

角川町

角川町は岡町の東隣にあり、『魚津町誌』によれば、角川がかつて能登地方から鹿が渡ってくる川だったことから、鹿途川(かどがわ)と呼ばれていたのが、元禄 15（1702）年に角川と呼ばれるようになったことが町名の由来だそう。かなり古くからある町らしく、その起こりは定かではない。

角川町の所有する神輿は「桂川」と呼ばれており、屋根は八角で、上部の飾りは火炎（宝珠）である。



写真 2－2 桂川（氏子青年会提供）

上新町 下新町

上新町と下新町は、両町あわせて新町と現在はいわれており、氏子町のなかでは西側、角川の北岸下流に並んで位置する。東が上新町、西が下新町で、いまはそれぞれ新町1区、2区と呼ばれている。氏子青年会の方によれば、上と下の区別は八幡宮から見て近いか遠いかではないか、とのことだ。また、かつては上新町を高町（たかんちょう）、下新町を浦町（うらんちょう）とも呼んでいたそうだ。

かつての魚津城下町をあらわした地図である「越中魚津町惣絵図」⁸⁾を参照すると、新町とよばれるこの範囲を「上新町」と称しており、『魚津町誌』によれば、いつ頃から町ができたかは不明だが、上口に新たに町を立てたため、「上新町」と名付けられたそうだ。

上新町の神輿は「新若」と名付けられており、屋根は六角、上部の飾りは火炎（宝珠）である。下新町の神輿には「湊」という名が付いており、屋根は新若と同じく六角だが、上部の飾りは鳳凰である。



写真2-3 新若（氏子青年会提供）



写真2-4 湊（氏子青年会提供）

紺屋町

紺屋町は氏子町の北東、富山地方鉄道とあいの風富山鉄道の線路が走る高架そばに位置する町である。『魚津町誌』によれば、江戸時代の寛文期の頃、紺屋佐右衛門というものとその同業者が住んでいたということが町名の由来である。

紺屋町の神輿は「名月」と名付けられており、屋根は12基のなかで唯一四角、上部の飾りは鳳凰である。



写真 2－5 名月（氏子青年会提供）

八幡町

八幡町は魚津八幡宮の最もそばに位置する町で、元禄期の末に人が住み始め、魚津八幡宮のすぐそばにあったことが町名の由来である（『魚津町誌』より）。地元住民によれば、町内には商人や職人、漁師など、さまざまな職業の人が住んでいたという。

神輿には「天乃川」という名前がつけられており、屋根は六角、上部の飾りは宝珠である。



写真 2－6 天乃川（氏子青年会提供）

橋場町

橋場町はかつての北陸街道、現在の県道1号の通る角川橋の北側に位置する町である。江戸時代慶長、万治期まで住む人はわずかだったが、元禄15(1702)年に町立てし、角川橋に続く町であることから名付けられた(『魚津町誌』より)。神輿の名前は「高砂」、屋根は八角で、上部の飾りは火炎(宝珠)である。



写真2-7 高砂 (氏子青年会提供)

橋向町

橋向町は、橋場町の川向こうに位置する町で、かつて岡町の西にあったが海水が侵入してきたため、江戸時代元禄期に引っ越してきてできた町である。角川橋の向かいにあるため、橋向町と名付けられた(『魚津町誌』より)。

橋向町の所有する神輿には「松乃江」の名がついており、屋根は八角、上部の飾りは宝珠である。



写真2-8 松乃江 (氏子青年会提供)

八代町

八代町は八幡町と同じく魚津八幡宮のそばに位置している町で、八幡町、橋場町、橋向町に囲まれており、町内を県道 137 号が通っている。八幡宮の^{やしろ}社 続きにある町であることから八代町と呼ばれるようになった（『魚津町誌』より）。

八代町の神輿は「富川」と名付けられており、屋根は八角、上部の飾りは宝珠である。



写真 2－9 富川（氏子青年会提供）

南町

南町は氏子町のなかで南西にあり、富山湾と角川に面し、岡町の対岸にあたる位置に存在する。かつて新上獵師町や、瀬戸町(背戸町)と呼ばれていた。元禄の末に上獵師町(岡町)が火事で類焼し、一部の住民が角川の対岸に引っ越してきたときに南町はできた（町内設置の看板より）。新上獵師町という町名のとおり、漁師が多く住んでいた。

南町は神輿を 3 基所有している。現在は南町 1 区、2 区、3 区それぞれで一基ずつを所有していることになっているが、魚津各地のみこし祭りや、魚津の歴史などに詳しい濱藤浩人さん（58 歳）曰く、もとは職人らで一基、商人らで一基、漁師らで一基、というふうに生業別で神輿を所有していたそうだ。

南町 1 区の神輿は「白菊」、2 区の神輿は「小戸ヶ浦」、3 区は「白梅」と名付けられており、屋根はすべて八角で、上部の飾りは白菊と小戸ヶ浦が火炎(宝珠)で、白梅のみ宝珠である。

第2章 混ざり合う場としての祭り——変化する魚津八幡宮献灯みこし祭り
(早川勝大)



写真 2-10 白菊 (氏子青年会提供)



写真 2-11 小戸ヶ浦 (氏子青年会提供)



写真 2-12 白梅 (氏子青年会提供)

1-2. 祭りの準備、当日の流れ、片付け

本調査を行った令和元（2020）年は、コロナ禍の影響により祭りを行なうことは叶わなかったが、ここでは魚津八幡宮氏子青年会の副会長である住吉英樹さん（46 歳）への聞き取りをもとに、例年の祭りの流れを紹介する。

祭りの準備は、当日の一週間前の日曜日に始まる。この日に氏子町内の人たちで神輿堂から各町の神輿を公民館や倉庫など、神輿を保管できる場所に運び、組み立てと飾り付けをする。組み立てと飾り付けを終えた神輿は祭り当日までそのまま保管場所に置かれる。

同日、氏子青年会のメンバーで宮の飾り付け、照明の設置、注連縄^{しめなわ}を社殿や鳥居の高所に固定する作業（神輿が引っかかることを防ぐため）、社殿階段へのスロープ設置を行う。

9 月 13 日に宮神輿と呼ばれる魚津八幡宮の神輿（氏子町のものではない）を軽トラックの荷台に載せ、一日かけて氏子町内を巡行する。担ぎ手不足により近年はトラックを用いているが、かつての巡行は人力で行なわれていた。このとき囃子は演奏せず、テープに録音された雅楽を流す。この神事を主催しているのは玉串会という組織で、氏子各町から一人ずつ選出された宮総代から構成されている。

そして祭り当日となる 9 月の第三土曜日は、午前 10 時ごろから氏子青年会の三役⁹⁾らが宮司とともに境内の「顕彰碑」（後述）と「首塚」（後述）に参拝をする。参拝を終えると、一旦解散となる。

午後に再度集合し、午後 4 時から 5 時ごろに、法被を着た魚津保育園とにじいろ保育園の園児らによって園児神輿（後述）の巡行と「宮上げ」が行なわれる。園児の保護者らが多く見に来ており、このとき境内は一番の賑わいを見せる。

その後は午後 7 時前後から各町内で巡行が始まり、午後 9 時ごろから巡行を終えた順にそれぞれの神輿が「宮上げ」を行なう。これで祭りは終了となり、神輿堂でその日のうちに神輿の解体をする。町内の保管場所で解体をおこなう町もある。その後は、各町で直会（なおらい）と呼ばれる反省会が開かれ、祭りの疲れを労う。

片付けは翌日の日曜日におこなう。氏子青年会員らは境内のスロープの撤去やゴミ拾い、収入の計算をし、各町内では住民らが神輿を片付ける。

1-3. 宮上げ

魚津八幡宮献灯みこし祭りを特徴付けるのが「宮上げ」とよばれる動作である。宮上げは、八幡騒動（後述）により禁止されていた祭りが復活した喜びを表すものだという（氏子青年会提供資料より）。巡行を終えた神輿が社殿前でお祓いをうけ、かけ声をあげながら社殿に乗り上げ神輿を大きく揺らす。これを 3 回繰り返すのが「宮上げ」だ。しかし、氏子青年会のある人は、かつてから続けられてきた「正しい宮上げ」はこうではないという。現在では、宮上げのさいに神輿が乗り入れやすいようスロープが設置されているが、かつてスロープはなく、階段の段差に轆の前方を引っ掛け、浮いた後方の轆を脚で踏むなどしてシーソーの

ようにして神輿を揺らした。このやり方はけが人が出やすかったため、宮上げに慣れていない外部の担ぎ手が多くなった今では減多に行わないそうだ。

1－4. 近年の祭り運営のしかた

現在の魚津八幡宮献灯みこし祭りは、御神幸が9月13日に、神輿巡行が9月の第三土曜日に行なわれているが、平成15(2003)年以前の神輿巡行は平日休日問わず、御神幸につき9月14日におこなわれていた。第三土曜日に祭礼日を変更したのは、神輿の担ぎ手不足を解消するためである。祭礼日の変更以降、本来の祭礼日である9月14日が土曜日にあたる年には、祭りを「特例祭」としておこなっているそうだ(氏子青年会提供資料より)。

また、現在の祭りを運営している組織「魚津八幡宮氏子青年会」は昭和30年代に祭礼において各町の代表者が連絡をとる場として設けられたが、平成14(2002)年から平成17(2005)年にかけて大幅な組織改革をした。組織改革以前は、各町の代表者が1年ごとに交代して祭り運営を一手に引き受ける「持ち回り会長制」であったが、組織改革に伴いそれを廃止し、氏子青年会組織全体での祭り運営へと転換した(氏子青年会提供資料より)。祭りを取り巻く様々な状況の変化に対応し、祭りの運営もまた変化している。

2. 魚津八幡宮献灯みこし祭りの歴史

この節では、聞き取りといくつかの文献をもとに、魚津八幡宮献灯みこし祭りの歴史を記述していく。12基の神輿が、魚津市内の他の神輿祭りでは見られない「宮上げ」をおこなうこの祭りが、現在のような形で行なわれるようになったのは、八幡騒動の後、明治時代からと言われている。それ以前の祭りでは氏子町内全体で神輿は一基であり、それも現在のような豪華な装飾の施された神輿ではなく、樽神輿¹⁰⁾のようなものだったそうだ。八幡騒動を経て祭りが復活したあとに、当時だと家がひとつ買えるくらいの大金をはたき、氏子各町がそれぞれの神輿を作り、そのうち太鼓も神輿にくくりつけるようになったという。そうして現在のような12基の神輿が生まれた。これら神輿に各町は、趣のある名前をつけようと互いに競っていたそうだ。競っていたのは名前だけではない。神輿の形には八角形や六角形、四角形のものがあるが、この違いは神輿を製作するときに各町が同じ職人には依頼しなかったことからきており、また神輿上部のシンボルや飾り付けもそれぞれの神輿で違いがあり、町同士は競ってより豪華で趣のある神輿を作ることに力を注いでいたそうだ。

魚津八幡宮献灯みこし祭りを論ずるうえで必ず言及しなければならないのが、文政11(1828)年から文政12(1829)年に起きた「八幡騒動」といわれる一連の出来事である。

文政11(1828)年、当時の富山藩主前田淡路守利幹が魚津八幡宮に提灯を寄贈したが、扱いが悪くそれを破損もしくは消失したとして、魚津町奉行岡田八兵衛により魚津八幡宮の神輿は取り上げられ、祭礼が禁止された。また当時、諏訪神社の祭礼は魚津八幡宮と神明社が交互に執り行っていたが、この両社のあいだでしばしばどちらが祭礼を行なうかで争

うことがあり、そこに奉行所が介入した結果としても、魚津八幡宮の祭礼は禁止された。突如自分たちの祭礼を禁止された氏子らは、奉行所に祭礼の許可を願い出たが、次第に事態は大きくなり、67名の逮捕者が出た。そしてそのうち浜屋彦助、獺師市右衛門、市見屋幸助の3人が打ち首となり、また獄死した者も出た。のちに祭礼は許可されたが、神輿をともない本格的に再開されたのは約30年後のことだという¹¹⁾。

現在の祭りの名称には、「献灯」の字が入っているが、これは八幡騒動で命を落とした人々への弔いという意味である。このときの死亡者への慰めとして魚津八幡宮境内には「顕彰碑」が、かつての処刑場であったという蟹江浜には「首塚」が建てられていて、いまでも祭りの日には最初に顕彰碑と首塚を参拝する。

3. 様々な人によって担われる祭り

魚津八幡宮の氏子町内では、現在、人口減少と少子高齢化が進んでおり、とくに、祭りの主な担い手となる10代から50代の減少が著しい。これらの問題に加えて、氏子町内の出身・在住者のなかでも、祭りを自身とは縁遠いものと感じ、あまり関わらないという人も少なくない。そのため、町内の人だけでは祭りを行うのは難しく、それぞれの町が外部から人手を補うことが必須である。とくに人手が不足しがちなのが神輿の担ぎ手である。神輿は祭りの要であるため、それを動かす担ぎ手がいなければ祭りは成立しない。

そこで、この節では魚津八幡宮献灯みこし祭りに欠かせない担ぎ手に焦点を当て、現在の祭りがどのように行われているかについて述べていく。

3-1. 氏子町内における人口減少と少子高齢化の状況

現在の祭りのやり方を述べる前に、まず魚津八幡宮氏子町内の人口減少と少子高齢化の状況について、魚津市の人口統計などのデータを用いて紹介する。また、担い手減少の要因のひとつである「祭り離れ」の状況も、人々の語りから述べていく。

氏子町内の人口減少傾向は、昭和30年ごろから始まったと考えられる。

『魚津市の統計 2017』に記載されている、村木地区および氏子町内が含まれる大町地区の人口推移を参照すると、昭和30（1955）年の時点で大町・村木地区の人口はピークである15,729人に達し、その後は現在までずっと減少し続けている。そして平成27（2015）年にはピーク時の約3分の1にまで減少した。氏子町内における、ここ60年間の人口減少は著しいものであることがわかる。（表2-1を参照）

つぎに、氏子町内における少子高齢化の様子を、『魚津市の統計 2017』に記載されている、大町小学校の生徒数と、氏子青年会がおこなった「氏子年齢別集計結果」から見てみよう。

大町小学校は令和2（2020）年現在では廃校となっているが、『魚津市の統計 2017』に生徒数の記載がある平成29（2017）年時点では、氏子町内を含む大町地区の小学生らが通

う小学校となっていた。平成 29 (2017) 年 5 月 1 日時点での大町小学校では、1 年生から 6 年生すべてで一学年一クラスのみであり、クラスの人数が 20 人を超える学年は存在しない。大町地区の隣にある住吉地区の生徒が通う住吉小学校の生徒数と比べると、大町小学校の生徒の少なさがより際立つだろう (表 2-2)。生徒が少ないということは、すなわち大町地区、および氏子町内で少子化傾向が著しいことを表している。

表 2-1 大町・村木地区の人口推移
(『魚津市の統計 2017』魚津市 (2017) より作成)

	人数 (人)		
年代	魚津市	大町	村木
昭和15年	34,482	12,287	
昭和22年	44,463	15,535	
昭和25年	45,572	15,548	
昭和30年	46,843	15,729	
昭和35年	47,309	14,880	
昭和40年	46,854	14,174	
昭和45年	47,124	13,240	
昭和50年	48,419	12,168	
昭和55年	49,512	11,665	
昭和60年	49,825	10,821	
平成2年	49,514	9,773	
平成7年	48,316	4,313	4,320
平成12年	47,136	3,795	3,823
平成17年	46,331	3,333	3,359
平成22年	44,959	2,963	2,956
平成27年	42,935	2,546	2,683

表 2-2 大町小学校と住吉小学校の学年別児童数と学級数
(『魚津市の統計 2017』より作成)

学校名	学校別児童数 (人)							学級数
	総数	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	
大町小学校	58	6	7	13	7	8	17	6
住吉小学校	186	26	35	28	37	34	26	7

また、氏子青年会が平成 16 (2004) 年に氏子町内の全世帯にたいしておこなったという「氏子年齢別集計結果」(表 2-3) を見てみると、60 代が 156 人、70 代以上が 216 人と他の世代と比べて人口が多い傾向にあり、それとは対照的に若年層は、10 代が 60 人、20 代が

67 人となっており、高齢者の半分以下であることがわかる。この集計から 16 年を経た令和 2（2020）年現在における状況はもっと深刻だと考えられる。

表 2－3 氏子年齢別集計結果（氏子青年会提供資料より作成）

		人数（人）									世帯数（戸）
町名	性別	9 歳以下	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70歳以上	男女別総計	回答世帯数
南町 1 区	男										
	女										
南町 2 区	男	2	2	1	3	6	0	5	4	23	20
	女	2	4	0	2	4	3	6	7	28	
南町 3 区	男	3	3	2	6	3	6	8	4	35	28
	女	3	4	3	3	5	7	9	9	43	
橋向町	男	1	0	1	3	0	4	2	3	14	11
	女	2	0	4	3	1	4	3	7	24	
上新町	男	2	4	4	1	5	8	2	7	33	20
	女	2	3	3	2	6	4	4	9	33	
下新町	男	3	2	4	5	2	6	4	8	34	19
	女	0	1	0	4	2	4	4	7	22	
橋場町	男	2	2	6	5	2	5	6	9	37	24
	女	0	4	2	5	6	7	11	10	45	
角川町	男	1	5	1	7	3	11	5	13	46	37
	女	3	1	4	3	7	9	9	22	58	
岡町	男	3	5	2	3	4	9	5	7	38	27
	女	0	1	2	4	2	8	8	16	41	
紺屋町	男	2	4	3	10	3	7	7	12	48	37
	女	2	1	7	6	4	10	9	23	62	
八代町	男	6	7	6	16	11	12	18	10	86	53
	女	8	2	7	13	6	17	17	13	83	
八幡町	男	2	3	5	4	4	5	8	8	39	23
	女	3	2	0	3	3	5	6	8	30	
年代別総計	男	27	37	35	63	43	73	70	85	433	297
	女	25	23	32	48	46	78	86	131	469	

人口減少と少子高齢化に加えて、「祭り離れ」も人手不足の要因の一つと考えられる。八幡町の担ぎ手集めを担っている K さん（64 歳）が「みんな社会人になると祭りに来なくなる。」と語るように、中学、高校生まで祭りに参加していた人でも、就職や進学、結婚などの理由で、だんだんと参加しなくなってしまう。また、橋向町で祭りにかわり、氏子青年会にも所属する石崎さん（46 歳）も、祭りに参加していた学生の 3 分の 1 が進学でいなくなる、と語っていた。

祭りには、神輿だけでなく、出店（富山県では香具師（やし）と呼ばれる）を楽しみに訪れる人も少なくない。しかし、魚津八幡宮献灯みこし祭りでは出店の数はかつてに比べてかなり減っており、氏子町内に住む 80 歳のある男性は、「昔は（香具師が）十数個は出ていたが、いまは二個に減った。」と語った。また、同じく氏子町内に住む 70 代前後の男性は、これまで祭りにあまり関わってこなかったそうだが、出店だけは好きだったという。子どもの

ころは、出店を楽しみに祭りへ行っていたそう。しかし、今では出店が少なくなったため、「昔は香具師がたくさんあったけど、今は全然ない。」と残念そうに語った。進学や就職、結婚だけでなく、香具師をまわるといふ楽しみが祭りのなかで小さくなったこと、そして祭りに替わる娯楽が多く現れたことも、祭り離れの理由のひとつと考えられる。

3-2. 担ぎ手不足のなかでの祭り継承

約1トンの重さの神輿を動かすためには、最低でも16人の担ぎ手が必要である。祭りの間ずっと担ぐことが体力的に、あるいは時間的に厳しいという人もいるから、実際には16人よりも多くの担ぎ手が必要である。担ぎ手となり得るのは主に10代から50代の男性だが、前項で紹介した「氏子年齢別集計結果」を見ると、その人数は12ヵ町合わせて251人で、一つの町に平均して約21人いることが分かる。この数字だけを見ると、担ぎ手は足りているように思えるが、前述したように仕事などで祭りに参加できない人、そもそも祭りに参加しないという人もいるし、担ぎ手になり得る年齢の人が極端に少ない町もあるため、実際には足りていない。こういった事情により、氏子町内では慢性的な担ぎ手不足が起きているのだ。では、氏子町内の人々は、一体どのようにして担ぎ手不足に対処し、祭りを継承してきたのだろうか。

担ぎ手不足に対して、氏子町内の人々は自身の知り合いや友人・同僚などに声をかけて、祭りに参加してもらう、というやり方でそれを補ってきた。八幡町で祭りにかかわるある男性(60代)によれば、町の外から担ぎ手を集めるようになったのは、約40年前からだそう。彼は、20代から40代まで富山県外に住んでいたが、そのころに何度か、県外で知り合った友人を連れて祭りに参加していたという。また、石崎さんも、彼が学生だった約30年前には、祭りをやっているところを通りがかった同級生に声をかけ、担ぎ手として参加させていたそう。

いまでは、担ぎ手を外部から集め始めた約40年前と比べ、氏子町内の人口はさらに減少し、少子高齢化も進んだ。令和2(2020)年11月15日に行われた園児みこし祭りのとき、氏子青年会員の一人は、「もう本神輿(大人が担ぐ神輿)を担ぐ人の多くは氏子町内の人間じゃない」と語った。現在の祭りでは、担ぎ手の大部分を町の外部から集めているのだ。以下では、現在の祭りにおける担ぎ手集めの状況を、私がとくに詳しく調査することのできた八幡町と橋向町を中心に、述べていこう。

八幡町は、他の氏子町に比べてとくに少子高齢化と人口減少が進んでいると言われている町である。実際、八幡町の神輿「天乃川」の現在の担ぎ手はほとんど町外の人間であり、さらには担ぎ手を集める役割(「世話する人」と呼ばれる)は、市内の他地区の出身で現在は市外に在住するKさんが担っている。Kさんが初めて魚津八幡宮献灯みこし祭りに参加したのは約30年前で、担ぎ手を集めるようになったのは約20年前からだそう。担ぎ手集めは、町内の人から頼まれてやるようになったと語る。現在は、Kさんの知り合いである

Tさん（30代、住吉地区在住）にも担ぎ手集めを手伝ってもらっていて、20人程度必要となる担ぎ手の半分はTさんが集めているそうだ。

担ぎ手として集まるのは、KさんやTさんの友人や、そのまた友人が多いそうだ。といっても、来るのは毎年大体同じ人である。彼らは魚津市内や滑川市、黒部市から参加している。令和元（2019）年の祭りのときに滑川市から参加していた男性（30代）は学生時代からずっと参加しているそうだ。八幡町では担ぎ手の名簿などは作っておらず、Kさんは、「（自分の知り合いではない）担ぎ手のことは顔しか覚えていない。名前まで覚えていない。」と語った。

橋向町では八幡町とは違って、外部から担ぎ手を集めはじめた当初から、担ぎ手の名前や連絡先を記した名簿を作成して、毎年の担ぎ手集めに役立ててきた。この名簿は約30年前から作成しているそうだ。石崎さんは「（名簿によって）交流人口を増やし、長い付き合いを生むと考えている」と語る。橋向町で担ぎ手として集まるのは、町内の人間の知り合いや友人、同僚などで、そのほとんどが魚津市内や滑川市からである。

担ぎ手として参加してもらえばかりでなく、互いに往き来する形の交流も生まれている。橋向町では、南砺市にある井波八幡宮の神輿祭りに関わっている方が参加することがあるそうだが、石崎さんはその方を通して井波八幡宮の神輿祭りに参加したことがある、と語った。こうした交流は魚津市内でもみられ、担ぎ手だけに限定されない。

氏子各町では、祭りに参加してくれた担ぎ手らに、当日は飲食物を振る舞い、その働きを労っている。また、町によってはそれに加え、謝礼として担ぎ手に現金を渡す場合もある。そういった際の費用はすべて氏子町内の人たちで賄うわけであり、祭りをするにはこうした金銭的負担も生じることとなる。そのため、氏子各町では町内会費などとして資金を出しあい、毎年の祭りの費用としている。岡町在住の男性（80歳）は、月に3,000円の町内会費を払っている、と私に教えてくれた。また、住吉さんによれば、氏子青年会では、祭りの運営費用として毎年各町から37,000円ずつ集めているそうだ。

また、祭りの費用とは別に、花代というものがある。これは祭り当日に神輿の巡行にたいして支払う祝儀で、額は決まっていないが、大体2,000円から10,000円の間が相場だそうだ。支払いのやり方は町それぞれで、決まった額を世帯ごとに振り分けて支払うところもある、世帯それぞれで適当な額を出すところもある。

町内会費や花代などを合わせると、毎年の祭りで神輿一基を運営するためにかかる費用は、約30万円になる。

3-3. 町の内外によって支えられる祭り

ここまで述べてきたように、魚津八幡宮献灯みこし祭りは慢性的な人手不足、とくに担ぎ手不足に悩まされながらも、それを補う氏子町外部の人々の参加、そして、それを可能にする氏子町内の人々による尽力によって今日まで支えられ、継承されてきた。この祭りは、も

はや氏子町内の人々だけで行うものではなく、魚津市内の各地、市外の各地から参加する人も含めた、様々な人々がともに行う祭りとなっている。

4. 魚津のみこし祭りにおける囃子と囃子方

笛と太鼓の音が織りなす囃子は、魚津のみこし祭りにおいて必要不可欠なものである。ところで、祭りを彩る大切な部分であるこの囃子は、魚津の多くのみこし祭りとたてもん祭りで、そのメロディーが非常に似通っている。それゆえ、自身の地区で囃子方として祭りに参加する者が他地区の祭りにも囃子方として参加することが比較的容易となっている。

この節では、魚津のみこし祭り、とくに魚津八幡宮献灯みこし祭りにおける囃子の歴史を述べる。そのうえで、祭りの継承において囃子および囃子方が、どのような役割を果たしてきたかについて論じていく。

4-1. 「魚津の祭りの音」

第3節でも登場した石崎さんは、大町公民館で毎月1度行われる囃子の練習会で講師をしている。令和2（2020）年6月のある日、石崎さんに囃子についてお話を伺ったとき、彼はみこし祭りで奏でられる囃子を「魚津の祭りの音」と表現した。これは魚津のみこし祭りにおける囃子の状況を表すのに、非常に的確な表現だといえる。先述した通り、魚津では多くのみこし祭りで囃子のメロディーが、ほぼ同一であると言えるほどに似通っているからだ。たてもん祭りの囃子も、ほぼ同様のメロディーが演奏されている。たてもん祭りが魚津市の観光の目玉となっている現在、この囃子を「たてもんの囃子」と表現する人もいるが、魚津のほとんどのみこし祭りではほとんど同じ囃子が演奏されている、という状況を考慮すれば、それを「魚津の祭りの音」とであると表現するほうが的確ではないだろうか。以下では、「魚津の祭りの音」として多くのみこし祭りで共通して演奏される囃子を、便宜的に「魚津の囃子」と呼んで議論を進めよう。

4-2. 囃子継承の歴史

各地区のみこし祭りで演奏される囃子が似通っているのは、決して偶然ではない。このような魚津の囃子の状況が生まれるには、濱田長藏さん（73歳）と石崎巖さん（故人）という二人の人物の活躍が大きかった。濱田さんは、氏子町内の一つである南町の出身で、60年以上前から囃子方として祭りに関わってきただけでなく、後述するように、戦後の囃子方不足のなかで囃子を復興するために、市内各地で指導を行なった。「魚津で唯一、笛太鼓のリズムを（身体に）刻み込んでいる人」といわれる。

また、石崎巖さんは「石崎さん」として何度も本章に登場している石崎一成さんの父にあたる人物で、濱田さんと同じく魚津の囃子を支えた人物である。彼は、今日の魚津で広く行

なわれている囃子教室の礎を築いた。以下では石崎一成さんと区別するため、彼のことを「巖さん」と呼称する。

令和2（2020）年8月、濱田さんが聞き取り調査に協力してくださった。私はそこでたくさんのお話を伺うことができた。また、このとき石崎一成さんにも同席していただき、興味深いお話をしていただいた。そのときの聞き取りをもとにして、この項では、濱田さんの行ってきたことを中心に、今日まで魚津の囃子がいかに継承されてきたかという歴史的経緯を、濱田さんと石崎さんの語りを交えてまとめている。

戦後の囃子方の状況

魚津市では昔から多くの地区でみこし祭りが行われてきた。しかし、石崎さんによると、魚津では第二次世界大戦のあいだ、祭りの担い手となる男性の多くは兵士として駆り出されたため、祭りができない地区が多くあったという。そのような地区では、祭りの休止中に囃子方が減少してしまい、囃子の継承が上手くいかなかったそうだ。戦後になって祭りが再開されてからも、囃子方が少ないという状況は多くの祭りで変わらず、石崎さんによると「魚津市内では囃子方がとても少なく貴重だった」という。当時の囃子方は、子どものころから毎年祭りに参加するなかで、少しずつ囃子のメロディーを身体に染み込ませることで囃子を習得していった。楽譜などは存在せず、すべて見て聴いて覚えたそうだ。そのため、各地の囃子方の中にはうろ覚えで演奏している人も多く、濱田さんは「聞いてられないような笛（演奏）もあった」と語る。囃子方がほとんどいなくなってしまった地区もあったらしく「祭りに行っても、囃子の音が聞こえたり、聞こえなかったり」という状況だったそうだ。このような状況のなかでは、濱田さんのように囃子のできる人はとても重宝され、いくつもの祭りに助っ人として呼ばれたという。

囃子教室の始まり

濱田さんは戦後における囃子方不足のなかで、市内各地に囃子を伝えた。その教え子の一人が巖さんであった。彼は、今日の魚津で広く行なわれている「笛太鼓教室」（囃子の練習会）を、魚津で初めて行なった人物といえよう。

昭和54（1979）年、魚津八幡宮氏子町内のすぐそばにある大光寺地区では新たに神輿祭りが始められた。巖さんはこの新しい祭りに囃子を教えに行くことになったのだが、このとき、決まった練習場所に先生と生徒が集まって練習をするという指導形式がとられた。これが、今日の笛太鼓教室の萌芽といえる。これ以降、魚津ではこの教室形式の指導が一般的になっていく。そこで囃子を教えたのは、巖さんや、彼の指導を受けた方々であった。第1節で登場した濱藤さんも、巖さんに師事した1人である。巖さんと濱藤さんの二人は、住吉、友道、新宿、末広町、大杉台など、魚津の各地区へ訪れて囃子を指導しており、次世代への囃子継承において、特に尽力した人物だという。彼らの功績に対して濱田さんは、「いまの

魚津には囃子方がとても増えた。濱藤さん、巖さんの頑張りがなければ、今の魚津の祭りはなかった」と語る。

濱田さんが巖さんに教えた囃子が、各地の笛太鼓教室で広がり、教室で教わった人々がさらに下の世代へ囃子を教えるという流れで、魚津の囃子は今日まで継承されてきた。つまり、魚津のみこし祭りの多くでは、濱田さんの囃子を原形としたメロディーが演奏されているといえる。そのため、現在も多くのみこし祭りで囃子が似通っているのだ。

濱田さんによって多くの囃子方が育てられ、その一人である石崎巖さんが笛太鼓教室の基礎を築いた。それから魚津には笛太鼓教室という継承のしかたが生まれ、それが広がることで教室を通して多くの人が魚津の囃子を継承してきた。その成果もあり、かつては囃子の音がほとんど聞こえない祭りもあったが、昭和50年代には各地の祭りで再び笛太鼓が鳴るようになった。今日の魚津の祭りでは「鳴り物（囃子）は困らない」（石崎さん）ほどに、再び賑やかな囃子が響くようになった。

今日の囃子継承

現在は、かつてのような「見て聞いて覚える」式の継承ではなく、先述したような囃子教室が主な継承の場となっている。現在の囃子教室はほとんどの場合、各地区の公民館を使って行われ、数人の囃子に長けた人物が指導者となり、小中学生がおもな生徒となるが、なかには大人が教わる場合もある。笛の指導には楽譜が用いられており、生徒は指導者の笛の音と楽譜とを照らし合わせながら練習する。教室が開かれる頻度は地区それぞれであり、また、必ずしも継続的に行われるわけでない。生徒がほとんど来なくなってしまったなど、様々な事情でしばらく開かれないこともある、

魚津八幡宮の氏子町内では、平成29（2017）年から氏子青年会の主催で月に1度、囃子教室が行われている。場所は、大町公民館を使用しており、氏子10ヵ町から子どもたちが生徒として集まる。また、氏子町内だけでなく、他地区から参加する生徒もいるそうだ。氏子町内に住む子どもが全員参加するわけではなく、興味を持った子どもが参加するのだという。友人と誘い合わせて参加する場合も多いそうだ。指導をしているのは、石崎さんを含め3人の囃子方の男性である。魚津八幡宮献灯みこし祭りでは、神輿12基の担ぎ手は男性だけ（女性神輿除く）であり、囃子方でもかつては女性の参加は禁止されていたが、近年は女性も囃子教室に参加しており、女性の囃子方もいる。実際、令和2（2020）年の園児みこし祭り¹²⁾では、囃子を演奏する数人の小中学生のなかに女の子も見られた。

園児みこし祭りが行われたとき、私は魚津保育園のスタッフの一人に話を伺うことができた。魚津保育園では、魚津八幡宮献灯みこし祭り、たてもん祭りに、園児用の神輿。たてもんを園児たちが担いで参加することが恒例となっており、たてもん祭りでは園児たち自ら太鼓を叩くそうで、保育園ではたてもん祭りの2ヶ月前から太鼓の練習をしているという。そのため、園児たちの多くは囃子のリズムをすでに身体で覚えている。

魚津のみこし祭りでは、囃子教室、そして楽譜を用いた指導という新たな継承の形が広がり、かつてに比べて囃子方は増えた。しかし、囃子の継承は一筋縄ではいかない。Kさんは、笛を教えるなかで「上手くなる子もいるけどみんな途中でやめてしまう」ことを残念そうに語っていた。前節で祭り離れについて記述をしたが、囃子方にもそれは見られるようだ。

4-3. 囃子と囃子方が祭り継承に果たす役割

私が調査した魚津八幡宮献灯みこし祭りでは、町内の人間の知り合い（Kさんなど）が囃子方として、他地区から参加していた。ほかの地区でも状況は似ており、例えば、濱藤さんが「文化町、大光寺、八幡、たてもんに参加したことがある」と語るように、他地区の囃子方が参加することは珍しくない。

また、この濱藤さんの語りからわかるように、一人の囃子方が参加する他地区の祭りは、一つだけではなく複数であることが多い。そして、この事実は、囃子方が依然として不足しているという状況も示している。不足しているのは、囃子方だけではない。石崎さんは今までに、魚津のほぼ全域で囃子指導を行った経験があり、またKさんとその友人のMさん（64歳）は、現在でも本江地区などで指導をしているそうだが、これらが示すのは、囃子の指導者も不足しているということである。つまり、限られた数の囃子方が、いくつもの地区を訪ねて祭りに参加しているだけでなく、さらに数少ない指導者が各地区で囃子の指導を行っているのだ。こういった状況のために、魚津の囃子は、常に指導者や他地区の囃子方に合わせる必要が生じる。そのため、いくつものみこし祭りにおいて、囃子の同一性が保たれやすいと考えられる。

人手不足に悩む魚津のみこし祭りにとって、囃子に同一性があることは、祭りを続けられるかどうか、という問題に直接関わる。地区を問わず似通っている囃子と、それを身につけ各地で演奏する囃子方は、魚津のみこし祭り継承において、重要な役割を担っているのだ。

4-4. 囃子の同一性と多様性について

この節では私は、魚津のみこし祭りで共通して演奏される囃子を、「魚津の囃子」と称し議論を進めているが、地区ごとの演奏に違いが全くないかといえば、そうではない。石崎さんは、「(地区ごとにメロディーの) なまりとかがあるから、どれが正しいかわからなかった」と語っているし、囃子方のあいだで「八幡とたてもんの囃子は少し違う」ということはよく言われる。Kさんはいろんな地区の祭りに参加しているが、「どこも少しずつ（囃子が）違って、どれが本当かわからない。」と語った。すなわち、魚津の囃子には、すべての囃子方の手本となるような「正しい」囃子が存在しない。そもそも囃子方一人ずつに微妙な演奏の違いがあり、そして囃子は太鼓と笛の合奏であるため、そのときの演奏に参加しているのが何人で、それが誰なのかによっても違いが生まれる。また、演奏するときの様々な状況によっても違いが生まれ得る。祭りにおける囃子は、このような一回性のものであるため、やはり完全な「正しい」囃子というのはそもそもありえないと考えられる。

大杉台地区の囃子

Kさんと同じく魚津の数々の神輿祭りに参加しているMさん（64 歳）によれば、かつて参加した大杉台地区の囃子は魚津の囃子と少し違い、「宮津の囃子をアレンジしたようなオリジナル（独特な囃子）」だったそうだ。MさんはKさんと一緒に大杉台のみこし祭りに参加したとき、囃子のメロディーの少し違う部分を“直した”そうだが、その理由を私が尋ねると、「オリジナルでやってもいいけど、俺らの教える囃子を覚えれば、他から来てやってもらえるし、他の所にもいける」からだと言った。このとき、彼らは大杉台地区の囃子を魚津の囃子に“直した”といえる。それは、祭りにかかわる人々にとって、大杉台地区の囃子は魚津の囃子として認識されているようである。

現在の囃子継承の場面においては、囃子を譜面に書き起こしたものが使用される。では、この譜面に起こされたものは「正しい」囃子なのだろうか。

住吉神輿神楽

自由なテンポで

① 自由なテンポで

② J=92

③

④

⑤

⑥

⑦

⑧

⑨

⑩

⑪

⑫

⑬

⑭

⑮

⑯

⑰

⑱

⑲

⑳

㉑

㉒

㉓

㉔

㉕

㉖

㉗

㉘

㉙

㉚

㉛

㉜

㉝

㉞

㉟

㊱

㊲

㊳

㊴

㊵

㊶

㊷

㊸

㊹

㊺

㊻

㊼

㊽

㊾

㊿

左

手

右

手

写真 2-13 「住吉神輿神楽」の楽譜

私が聞き取りをした囃子方の多くは、「正しい」囃子が存在しないこと、譜面が「正しい」わけではないことに自覚的であった。これまでに多くの囃子方を育ててきた石崎さんは、約 20 年前に囃子の譜面を作った。前述したように、石崎さんには「(各地区の囃子の) どれが

正しいかわからなかった」ため、それぞれの囃子方が自分なりにアレンジすることを想定した、音数の少ないシンプルな譜面を作ったそうだ。

石崎さんの譜面以外にも、濱藤さんが制作した「住吉神輿神楽」と題のついた譜面、たてもん祭りをを行う地区で主に使用される譜面など、いくつかが存在する。音の数や記譜法など様々な違いが見られるが、石崎さんいわく「メロディーはほぼ同じ」だそうだ。

4-5. 宮津地区の囃子

魚津のみこし祭りのなかには、魚津の囃子を演奏しないものも存在する。魚津八幡宮から南東方向に2キロメートルほどの場所にある、宮津八幡宮の秋季例祭として宮津地区で行われるみこし祭りの囃子がそれである（以下、「宮津の囃子」と呼ぶ）。しかし、これが魚津の囃子と全く構造が違うかというと、そうではない。濱藤さんは、宮津地区の囃子のメロディーを「少し違うが、似てはいる」と語った。魚津の囃子は、神輿の巡行中に何度も繰り返して演奏する部分と、その繰り返し部分に入るため曲の始めに演奏される前奏部分の2つに大きく分けることができるが、宮津の囃子もこれと同じ構造をしており、違うのは曲のなかでの細かな指使いだそうだ。

宮津の囃子と魚津の囃子とが似通っている理由は、魚津のみこし祭りが宮津八幡宮のみこし祭りから派生したためだと濱藤さんは語る。宮津八幡宮は、魚津八幡宮よりも古くからあり、少なくとも約1200年以上の歴史を持つと考えられる県内有数の古社である（宮津八幡宮境内に設置の看板より）。宮津八幡宮は古くから、現在の魚津市、滑川市、そして上市町の一部を含む加積郷と呼ばれる一帯の総社¹³⁾であり（同看板より）、濱藤さんによれば、むかしは加積郷全域のみこしが宮津八幡宮に集まって祭りをしたそうだ。現在、魚津八幡宮献灯のみこし祭りをはじめとした、魚津の旧市街地で行われているみこし祭りは、この宮津のみこし祭りが魚津八幡宮を起源に広がっていった可能性があるというのだ。囃子も祭りの伝播に伴い、変化しながら広がっていったと考えられる。濱藤さんのこの推論は、宮津八幡宮の歴史の長さ、そして魚津と宮津の囃子の構造を鑑みれば、妥当性のあるものと考えられる。

宮津の囃子は、その違いを含めて文字通り「宮津の囃子」として、魚津の囃子方に捉えられている。実際、魚津の囃子方らは、宮津の囃子を「間違った囃子だ」などと言うことはないし、それを“直そう”とすることはない。宮津の囃子はその正当性を認められている背後には、二つの理由があると私は考える。一つは、前述した宮津のみこし祭りの歴史が長いために、ある種の権威があることである。もう一つは、宮津では囃子が独自に継承されているからである。

令和元（2019）年11月末、私が宮津地区で調査をしたときに宮津の囃子について話してくださったある人によれば、宮津地区では宮津の囃子方による笛の練習会が公民館で行われており、そのことは地区の小中学生にも周知されているそうだ。また、現在の囃子方には「若い人が結構いる」らしく、太鼓であれば「結構誰でも叩ける」と語った。すなわち、宮

津地区における囃子の継承は地区内である程度完結しており、囃子方の「自給自足」のサイクルが成立しているといえる。地区内の人だけで行っているのだから、外の人間がそれに対してあれこれ言うことはない。

5. 変化する祭り

八幡騒動以来、長きにわたり継承されてきた魚津八幡宮献灯みこし祭りだが、この祭りを取り巻く環境は今日にいたるまでに大きく変化してきており、それに伴い祭りそのものも変化している。また、人々の祭りの経験にも大きな変化が生じてきた。そこで、この節では魚津八幡宮献灯みこし祭りの「変化」に注目し、近年における祭りの変化を中心的に担う魚津八幡宮氏子青年会について紹介し、彼らの活動の原動力が何であるか、彼らによって祭りにどのような変化がもたらされているかについて、具体的な事例と語りから述べていく。

5-1. 変化の原動力——「祭りだら」

魚津八幡宮氏子青年会（以下、氏子青年会と呼ぶ）は、その組織自体は昭和30年代から存在しており、かつては氏子10ヵ町に住む成人男性の多くが所属して祭りの運営を行っていたが、平成14（2002）年から平成17（2005）年にかけて、現在の氏子青年会員らが中心となって大幅な組織改革が行われた。先述したように、組織改革にともなって祭りの運営方法も大きく変わり、祭りにおいて指揮をとる「会長」を各氏子町の代表者が一年交替で務め、会長の町が一年の祭り運営を一手に担う「持ち回り会長制」から、各氏子町の代表者のうちから選出された氏子青年会長をトップとして、氏子青年会全体で祭りを運営するという現在の方法になった（氏子青年会提供資料より）。かつては、氏子青年会には氏子町内に在住する成人男性のほとんどが所属したそうだが（岡町在住の男性、80歳）、現在は祭りの担い手が減少しているということもあり、氏子町内在住の「祭りが好きなやつが入る」組織となっている。現在の会員は15名程度で、男性のみだ。

近年では氏子青年会が中心となって、伝統的な祭りに新たな変化がもたらされている。そういう変化は、彼らが熱狂的な祭り好き、「祭りだら¹⁴⁾」と自称する人々であることに由来すると考えられる。ある会員は、「氏子青年会は祭り好きによる、祭りのための組織として、楽しい祭りをやることに全力を注いでおり、自分も周りも、皆が楽しめる祭りを目指している」と語った。また彼らは、楽しい祭りを目指すと同時に、魚津八幡宮献灯みこし祭りがより多くの人に注目され、認められることを願っている。彼らはこのような目標を持って自分たちの祭りをより良くするため活動し、祭りに新たな変化を引き起こしているのだ。そのなかで、園児神輿（後述）や女性神輿（後述）の巡行などが新たに行われるようになった。

祭りにおけるこのような新しい取り組みは、おもに氏子青年会員らの日常的な食事の場や、話し合いのなかでそのアイデアが生まれる。しかし、そのアイデアを実現させるには、いくつもの困難がつきものだ。例えば、令和元（2019）年の祭りでは、富山県道137号の裁

判所入口交差点から住吉町交差点までの通称「22 メートル道路」と呼ばれる区間に、各町12 基の神輿と女性神輿、園児神輿2 基を勢揃いさせる、という初の試みをした。しかし、この試みがアイデアとして提案された当初は、半ば冗談のようなものだったという。なぜなら、22 メートル道路は普段から交通量が多く、通行止めにすることが非常に難しいため、会員の多くは実現不可能だと考えていたからだ。だが、氏子青年会の会長を務める南部和靖さん（53 歳）が中心となっていくつもの困難や課題を乗り越え、ついにこの試みを実現させてしまったのだ。令和元（2019）年9 月14 日の夕方頃、22 メートル道路には計15 基の神輿が並んで雪洞を灯し、薄暗くなった町を美しく彩った。氏子青年会の方々や、祭りにかかわる方に、祭りでの思い出について尋ねたときには、「あれ（神輿を並べたこと）はよかった」、「去年（令和元年）の祭りはよかった」と口々に答え、神輿の勢揃いがかなり印象に残っているようだった。

一見して不可能のように思えるアイデアですら、ときには実現してしまう彼らの活動の原動力となっているのは、一体何なのだろうか。令和2（2020）年8 月のある日、石崎さんの計らいにより、氏子青年会の方4 名と食事を交えながら聞き取り調査をする機会を設けていただいた。この調査では、インタビューのような形式をとらず、自然な会話のなかで様々なことを話していただいた。そうして言葉を交わすなかで、私にとってとくに印象的だったのが、彼らの祭りに対するある種のパワーを強く感じたことだった。

会話の内容は祭りに関することでもちきりで、とくに多かった話題が、祭りの新たな取り組みのアイデアだ。彼らの口からは多くのアイデアが泉のように湧き出す。それらすべてが実現を前提にしているわけではなく、冗談交じりに提案されるものもかなり多い。しかし、彼らの冗談はただの冗談ではない。たとえ冗談として出たアイデアでも、彼らがそれを良いアイデアだと感じれば、一転、その冗談は実現される可能性がある。前述した令和元（2019）年の祭りがその例だ。彼らの冗談は、つねに実現の可能性を秘めたものとして発せられるのだ。このように冗談と本当の間で発せられる彼らの言葉は、彼らの祭りに対する想いとも捉えられる。より楽しい祭りにしたい、という想いがそこには込められている。それが私には、ある種のパワーとして感じられたのだ。

氏子青年会の方々のなかでも、とくに南部さんから感じるパワーは特別強い。南部さんのことを「祭り大好きトップランナー」とであると石崎さんも表現するが、これは、南部さんは祭りに対する想いが人一倍強く、「祭りだら」の集まりである氏子青年会を引っ張っていく存在だということを意味している。南部さんはその想いの強さを原動力に、自らの人脈と交渉手腕を駆使して、当初は不可能といわれていた22 メートル道路での神輿の勢揃いを実現した。このために彼はしばしば、「（八幡騒動でかつて処刑された）あの3 人を超えた」と言われる。氏子青年会、祭りにおける南部さんの存在の大きさが窺える語りといえる。現在の祭りに新たな変化をもたらしてきた氏子青年会の活動は、南部さんをはじめとした「祭りだら」たちの、祭りに対する熱い想いを原動力としているのだ。

5-2. 生きる祭り

氏子青年会の精力的な活動によって、祭りに変化が起きていることは前項で述べた通りだ。そして、この「変化」はより多くの人を祭りに巻き込み、それによって氏子青年会は、「みんなが楽しい祭り」を実現しようとし、祭りに活力を生み出そうとしている。この項では、魚津八幡宮献灯みこし祭りにおいて、「変化」がどのように起きているのかを具体的な事例と語りをもとに紹介する。

最初は「園児神輿」について紹介しよう。魚津八幡宮献灯みこし祭りでは、午後7時頃から神輿の巡行が行われるが、その前の午後4時頃から5時頃のあいだに近隣の保育園から園児神輿が出され、それを園児らが担いで町内を巡行する。今では氏子町内の人々にとっても、そして園児や保護者らにとっても恒例になっている園児神輿だが、始まったのは5年ほど前からである。魚津保育園のスタッフは、「子どもたちは毎年、祭りを楽しみにしている」と語った。また、保護者のなかには、「子どもが園児神輿、たてもんをやれるから」という理由で、魚津保育園を選ぶ人もいるそうだ。

次に紹介するのは、とくに新しい変化といえる「女性神輿」だ。令和元（2019）年の魚津八幡宮献灯みこし祭りでは、初めて女性神輿の巡行が行われた。付けられた名前は「常磐」、神輿本体は他のものより若干小さく、また轆は長めに作られている。担ぎ手は全員が女性であり、担ぎ手代表を務めた倉元さん（64歳）の知人を中心に、出身地、在住地を問わず30人ほどが集まった。倉元さんは、北日本新聞のインタビューで「女性パワーはすごい。勇ましい宮上げできた」（北日本新聞、2019年9月15日地域欄）と語った。女性神輿が祭りに登場したきっかけとして、南部さんは、「女性は祭りのとき、食事や片付けなどいつも裏方だったけど、そのなかで自分らも神輿を担ぎたいという声があがった」と語る。女性神輿は、そういった「祭りに参加したい」という女性の想いから実現したそうだ。富山県の東部では、女性が担ぐ神輿はこの常磐が初めてであるらしい。南部さん、石崎さんの2人は、魚津市内で魚津八幡宮献灯みこし祭りが率先して祭りへの女性参加を目指すことに意義を感じている、と語った。

女性神輿が実施されたのと同じ令和元（2019）年の祭りでは、前項でも紹介した22メートル道路での神輿勢揃いも行われた。このときの光景は多くの人々の印象に残った。また、この年の祭りでは、例年では巡行後におこなう神輿の宮上げが、巡行前におこなわれた。いつもは巡行するあいだに担ぎ手は疲れ、また酔っ払って宮上げが「だらだらになってしまう」（ちゃんとしていない、という意味合い）が、この年は巡行前に行われたため、「（去年は）良い宮上げが見れただろう」と石崎さんは語った。神輿勢揃い、巡行前の宮上げなどを評して、青年会の方々や倉元さんは、「去年の祭りが一番よかった」と語った。

このように、「変化」は子どもや女性など、様々な人々を巻き込みながら展開し、祭りに活力をもたらしている。そして「変化」とそれによる活力は、同じやり方にとらわれない自由さを祭りに与え、祭りを人々の想いや熱狂に応じてかたちを変える「生きた祭り」にしている。

6. 人々によって生きられる祭り

第5節では、祭りに中心的にかかわる人々に焦点を当てて記述をしてきたが、この項ではそのような人々のみならず、祭りにおいて周縁に位置してきた人々にも焦点をあて、彼らの語りをも紹介することを通して、人々によって経験される、生きられる祭りの多様な姿を提示したい。

まず紹介するのは、岡町に住む男性（80歳）の語りだ。彼は毎年、祭りのときには市外に住む自分の子どもや孫、ひ孫を招いて、一緒に食卓を囲んだり、祭りを見たりするそうだ。今ではこの男性のように祭りのときに親戚で集まる家は少なくなったが、かつては他の家でも同じようにしていたという。「祭りは毎年のことだから、やっぱり楽しみ。今年は（コロナで）なくなって寂しい。」と語ってくれた。この男性は、比較的祭りに積極的にかかわってきたといえる。彼にとって祭りは、家族や親戚と集まる機会でもあり、それも含めて年に一度の楽しみであるのだと考えられる。

次に紹介するのは、石川県から嫁いできて、いまは角川町に住む女性（70代）の語りだ。彼女は、「嫁いできてから毎年お祭りを見ているけど、別に楽しみなものではない。毎年やってくるから、祭りが来たなあくらいは思う。」と語った。また、この方の旦那さんは若い頃に担ぎ手をやっていたそうで、「ここらへんの人はみんな（担ぎ手を）やってる。」と語った。祭りは男性がやるもので、女性はあまり深く関わらないもの、という認識のようだった。祭りの様子や雰囲気は昔と変わったか、と尋ねると、「昔と変わらない、今も変わらずやっている。」と語った。彼女にとって祭りは、身近ではあるが少し縁遠いもののようだ。令和元（2019）年には女性神輿が祭りに登場したが、このような変化にも気づいていないかもしれない。祭りは男がやるもの、というかつてからの認識はまだ過去のものではない。

一方で、Kさんは「祭りが近づくとウズウズして、仕事が手につかなくなる」と語った。毎年、祭りの前には大國屋という祭り用品を販売する店に行き、祭りで着る衣装や小物などを揃えるそうだ。祭りが好きで、年に市内のいくつものみこし祭りに参加する彼にとって、祭りはとびきり楽しみなもので、生活における祭りの重要度は高いのだろう。

氏子町内には、男性であっても祭りと距離を置いている人がいる。次に紹介するのは、氏子町内に住む男性（60代後半）の語りである。彼は、数年前まで会社勤めをしており、日中は仕事をしていたため近所付き合いはすべて奥さんに任せていたという。そのため、近所付き合いには疎く、祭りや町のこともあまり知らないそうだ。小さい頃も祭りにはあまり参加していなかった、と語った。彼にとって祭りは、自分の人生から遠い所で起きている出来事なのかもしれない。

最後に紹介するのは、氏子町内に住むある男性（70代）の語りである。彼に祭りのことについて尋ねると、「あんな祭りなんかおもしろい（面白くない）」と語った。幼い頃から祭りにかかわったことがほとんどないそうで、担ぎ手や囃子方はおろか、祭りの様子を観たことすらほとんどないという。彼は自宅近くの海でよく釣りを楽しむそうで、「（祭りより）他

の娯楽のほうが楽しい」と語っていた。このように、彼は祭りから積極的に距離をとる、いわば「祭り嫌い」である。彼にとって祭りは、楽しみなものや、一年のサイクルを刻むものでもなく、「おもしろい」もの、すなわち「つまらない」から関わりたくないもの、なのである。

この項で紹介した人々は、「魚津八幡宮献灯みこし祭り」というひとつの祭りを経験してはいるが、一人として同じように経験してはいない。ひとくちに「祭り」といっても、その経験の仕方は一人一人違っている。「祭りだら」と「祭り嫌い」とでは、人生における祭りの重みは全く違うだろう。このように魚津八幡宮献灯みこし祭りは、それをとりかこむ人々によって、それぞれの仕方で生きられているのだ。

7. 混ざり合う場としての祭り——まとめに代えて

今回の調査では、少数の氏子と多くの外部の人々によって担われる祭りとはどのようなものか、という問いから出発し、魚津八幡宮献灯みこし祭りにおける、外部の担ぎ手の参加、囃子継承の仕方、祭りに活力をもたらす「変化」といったテーマを中心にフィールドワークを行った。最後にそのまとめとして、今回の調査を通して私がこの祭りをどのようにみたかについて述べよう。

私が一言で魚津八幡宮献灯みこし祭りを表すとするならば、それは「混ざり合う場としての祭り」だ。もしかしたら、奇妙な表現に思えるかもしれないが、それなりに妥当性のある表現だと私は考えている。「混ざり合う場」とはどういうことなのか、第2節から第6節を振り返りながら述べていこう。

第2節では、かつて魚津八幡宮の神輿祭りが禁止され、それに抵抗した住民らが命を落とした「八幡騒動」について紹介した。12基の神輿による「宮上げ」という、魚津八幡宮献灯みこし祭りを象徴する光景は、かつての祭りの禁止とそれへの抵抗、そして祭りを熱望する住民らによる、祭りの再興という歴史的経緯なしにはあり得なかった。今日の祭りには、過去の人々の想いや行動の結果が表れており、それは祭りを通して、現代の人々の想いや行動と混ざり合っているのだ。

第3節では、多くの外部の人々が担ぎ手として祭りに参加している実情について述べた。外部の担ぎ手は、魚津市内の各地だけでなく、隣接する滑川市や黒部市からも参加している。祭りは、そういった様々な場所の人々が担ぎ手として一カ所に集まり、氏子町内の人々と一緒になって、すなわち混ざり合ってひとつのことを成し遂げる場として考えられる。祭りという場においては、どこから参加している人でも法被を着て神輿を肩に担げば一人の担ぎ手である。

続く第4節では、戦後に囃子方が不足しており、濱田さんを中心とした人々の尽力によって、囃子継承の輪が広がり、その状況が大きく改善されたこと、そして現在でも囃子方の往来があることを述べた。今日の祭りでは、各地区の囃子方が集まり、彼らの笛と太鼓の音が

合わさって、ともに祭りの音を作り上げている。祭りという場では、囃子の音やそれを奏でる人々が混ざり合っているといえる。

第5節では、氏子青年会の人々が、「皆がより楽しい祭り」を目指して精力的に活動していること、その活動が人々を巻き込んで変化する祭りを作りだしていることを述べた。氏子青年会の人々から発せられるアイデアには冗談もあるが、ときにはそれが実現してしまう。変化する祭りは、冗談と本当や、「祭りだら」たちの想いが混ざり合ったものとして理解できる。また、近年の園児神輿や女性神輿の登場によって、祭りには男性だけでなく、子どもや女性も参加するようになった。男性、女性、大人、子どもなど、多様な人々がともに祭りを作り上げるようになった。祭りという場では、性別や世代も混ざり合っているのだ。

第6節では、祭りの周縁に位置する人々の語りをとりあげた。第6節における記述では、人々の生のなかで経験される祭り、という側面が強調されているが、一方で彼らの語りは、いかなる仕方であれ、氏子町内の人々の生が祭りとは不可分であることも表している。つまり、人々の生は「祭り」という場を通らずにはいられない、ということだ。その意味で、人々の生もまた祭りという場で混ざり合っているのである。このように、いくつもの地域、性別、世代、歴史、想い、冗談、本当など、あらゆるものは魚津八幡宮献灯みこし祭りという場で一同に会し、混ざり合っている。だから、この祭りは「混ざり合う場としての祭り」であると私は感じた。

今回の調査はひとつの問いを出発点として始まったものだが、実際に祭りに参加したり、たくさんの方のお話を伺ったりするなかで、調査開始当初の私の予想を超えて、魚津八幡宮献灯みこし祭りの様々な側面を目の当たりにすることができた。祭りの担い手の減少は、この祭りにとって小さな問題ではなく、これからも向きあっていかなければならないものだろう。しかし、変化する自由を大切に、氏子町内だけに限らない多くの人に支えられるこの祭りには、その問題を越えんとする力が感じられる。これからもあらゆるものとの混ざり合いのなかで、様々な人を巻き込んで少しずつ変化しながら、魚津八幡宮献灯みこし祭りは継承されていくだろう。

謝辞

今回の調査にあたり、ご協力いただいたすべての皆様に心より御礼申し上げます。とくに南部和靖様、住吉英樹様、石崎一成様をはじめとする魚津八幡宮氏子青年会の皆様、濱藤浩人様をはじめとする住吉神輿祭保存会の皆様、濱田長藏様、居酒屋「北の庄」の倉元裕美子様、魚津市教育委員会の的場茂晃様、塩田明弘様には、お忙しいなか時間を割いていただき、貴重なお話を聞かせていただいただけでなく、資料を提供していただいたりしました。魚津八幡宮氏子町内の住民の方々には、突然の訪問にもかかわらず快く対応していただき、聞き取りに協力していただきました。他にも、たくさんの方の協力があって今回この報告書を書きあげることができました。調査にご協力いただいた皆様、本当にありがとうございました。

注

- 1) 囃子および囃子方は、「声や楽器で歌舞を誘いこみ、調子に乗せ、時にはみずからその雰囲気に入ることを指す。のちに囃すための楽器またはそれを奏する人（囃子方）をも指すようになった。」（『精選 日本民俗辞典』p. 440、「囃し」の項より）という記述にあるように、山車祭りや神輿祭りにおいては、笛や太鼓などを用いて奏でられる音楽と、それを奏でる人のことを指す。本章では、祭りにおいて楽器によって奏でられる音楽を「囃子」、それを奏する人々を「囃子方」と呼んで議論を進めていく。
- 2) 山車とは「祭礼にあたって、種々の飾り物をほどこして風流をこらし、曳いたり担いだりして練る屋台の総称。」（『精選 日本民俗辞典』p. 341、「山車」の項より）。筆者の地元では、名古屋型に分類される山車が3基、曳き回される。山車とともに出される巻藁船は、船の上に立てた心棒を軸にしていくつもの提灯を半球型に取り付け、飾り付けられた船であり、筆者の地元を含めた愛知県の一部の祭礼でみられる。愛知県津島神社の祭礼である津島天王祭で出るものがとくに有名だ。
- 3) たてもん祭りは、魚津漁港近くにある諏訪神社の祭礼として行われるもので、「たてもん」といわれる独特のかたちをした山車が曳き回される。詳しくは本書冒頭の地域概要を参照されたい。
- 4) 神輿は、「神幸の際に用いられる輿で、神霊を奉ずる道具。」（『精選 日本民俗辞典』p. 505、「神輿」の項より）で、山車と違い車輪はついておらず、轆（ながえ）と呼ばれる棒状の持ち手を担いで移動する。魚津八幡宮献灯みこし祭りで用いられるものは、氏子青年会の方々の使う表記にならない、本章では「神輿」と表記する。魚津市内の神輿が出る祭りを総称するようときには、ひらがなで「みこし」と表記した。祭りにおいて神輿を担いで動かす役割をする人々のことを、本書では「担ぎ手」と呼んで議論を進めていく。
- 5) 『精選 日本民俗辞典』には、「一定の地域を守護する氏神を、その地域内に居住して奉斎する人たち。古くは同じ氏を名乗る者が、その守護神を氏神として遠隔の地からも祭祀に参加していたが、地域的に区分された祭祀圏を守護の領域とし、この地域内に住む住民をその神の氏子とするようになった。」（『精選 日本民俗辞典』p. 67、「氏子」の項より）と説明されている。本章では、魚津八幡宮の祭祀に参加する人々が長い間住んできた圏内を「氏子町内」と称し、そこの住民らを「氏子」と呼称する。
- 6) 魚津八幡宮献灯みこし祭りで用いられるのは、指孔が6つの横笛である。
- 7) 紹介する町名の由来にかんしては、すべて『魚津町誌』（魚津町役場、1910年）pp50-55を出典としている。
- 8) 「越中魚津町惣絵図」（魚津市立図書館蔵）は、魚津市教育委員会からコピーしたものをいただき、参照した。
- 9) 「三役」は、神輿巡行における「りん持ち」「お神酒出し」「花受け」の三つの役割の総称である。「りん持ち」は、所定の場所で神輿を停止する合図である鈴を鳴らす役割である。「お神酒出し」は花代（祝儀）を出してくれた人に対して、その場で盃に注がれたお

神酒を振る舞う役割である。「花受け」は住民から花代を受け取る役割である。これら「三役」は神輿の先行をするため、「先導」とも呼ばれる。

- 10) 樽神輿は、空になった酒樽で作った神輿のことである（『大辞泉第二版』小学館、2012年より）。
- 11) 『図説 魚津の歴史』（魚津市教育委員会、2012年）と『魚津市史史料編』（魚津市役所、1982年）より。
- 12) 令和2（2020）年はコロナ禍により例年のような祭礼を行うことができなかったが、感染対策を講じた上で、祭礼に代わる行事のひとつとして「園児みこし祭り」が催された。近隣の魚津保育園とにじいろ保育園から1基ずつ、園児らが担げる小さめの神輿が出され魚津八幡宮周辺を巡行し、子どもたちの元気な声が響き渡った。このときは通常の神輿（園児神輿に対し、本神輿とよばれる）は出されなかった。
- 13) 総社は「いくつかの神社の祭神を1か所にまとめて祭った神社。」（『大辞泉第二版』小学館、2012年）である。
- 14) 「だら」は富山県で広く使われている、「ばか」に近い意味の方言だが、氏子青年会の方々が言うには、「祭りだら」というときの「だら」は「ばか」とは少し意味合いが違うそうだ。

参考文献

魚津市、2017年『魚津市の統計 2017』魚津市。
魚津市史編纂委員会、1968年『魚津市史 上巻』魚津市役所。
魚津市史編纂委員会、1982年『魚津市史 史料編』魚津市役所。
魚津市史編纂委員会、2012年『図説 魚津の歴史』魚津市教育委員会。
越中下新川郡魚津町役場、1910年『魚津町誌』魚津町役場。
福田アジオほか編、2006年『精選 日本民俗辞典』吉川弘文館。

参考にしたウェブサイト

魚津市観光協会公式サイト 魚津たびナビ「たてもん祭り」〈<https://uozu-kanko.jp/?p=5589>〉（2021/01/18閲覧）

第3章 魚津における銭湯の今昔——変わらない日常

小野 巧太郎

はじめに

私が魚津の銭湯に興味を持ったきっかけは、令和元（2019）年7月末、2年生だった時のフィールドワーク中に、たまたま車で通りがかった風景の中で、「平成松の湯」という看板を見つけたことである。当時元号が平成から令和に変わって間もないこともあり、「平成」の名を冠したその場所に興味を持った。

10月から本格的に魚津での調査を始めることになったが、当初はどんな報告書をまとめるか方向性が全く見えず、まずは、と軽い気持ちで「平成松の湯」へ足を運んだ。私の住んでいるアパートがユニットバスだったこともあり、調査という名目のはずが、のんびりと湯船に浸かることができたり、こちらの質問に銭湯の皆さんが丁寧に答えていただけたことで、私はすぐに魚津の銭湯が好きになった。「平成松の湯」で市内に他の銭湯があることも教えていただき、それらの銭湯巡りをする中で、銭湯についてさらに知りたいと思うようになった。

かつて魚津市内には15軒の銭湯が営業を行っていたが、本格的な調査を行った令和2（2020）年8月の時点では、営業している銭湯は4軒までその数を減らしている（大型のスーパー銭湯や日帰り温泉などの入浴が可能な施設はここでは除く）。本章では、大雑把に現在と過去に分けて、魚津の銭湯がどのように利用されてきたのか、聞き取りを中心に記述していきたい。この記録が、長きに渡って大切にされてきた魚津の銭湯文化の継承の一助になればと考えている。

1. 魚津市内の銭湯概要

まずは基本情報として、富山県公衆浴場生活衛生協同組合のホームページを参考に、現在魚津市内にある銭湯について紹介を行い、その後聞き取り調査や魚津市立図書館での文献調査などから判明した、かつて魚津にあった銭湯について記述する。

1-1. 現在営業中の銭湯について

以下に示す表3-1は現在営業中の銭湯である。なお、「番号」列と各銭湯の位置は1-2に掲載した、閉業した銭湯も含めた地図および表の番号と連動している。また、入浴料は440円で共通しており、11回回数券を4400円で販売している。タオルや石鹸、シャンプーについては番台で販売している店もあるが、常連客など私物を持ち込む人が多い。

表 3－1 現在営業中の銭湯一覧（富山県公衆浴場生活衛生協同組合ＨＰの表記順）

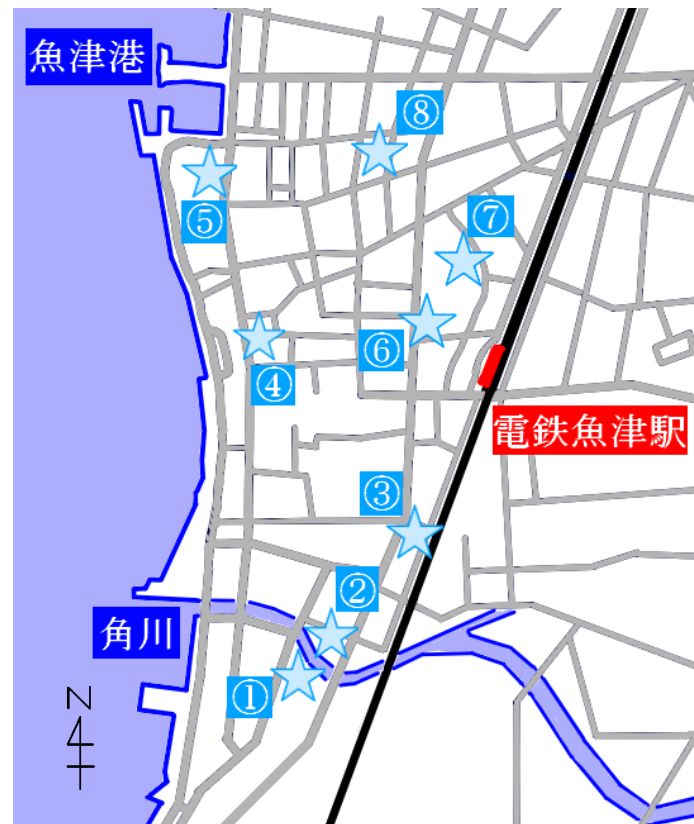
番号	名称	詳細
①	川城鉱泉	角川の河口付近に位置し、昭和 12（1937）年創業の歴史を有する銭湯。元漁師なども多く来訪している。シャンプーやドライヤー、マッサージ機などを備え、新聞やマンガなどもあり、居心地よく入浴できる銭湯である。 営業時間は 13：30～22：00、定休日は日曜
⑮	観音湯	他 4 つの銭湯とは少し距離がある、経田地区に位置する銭湯。脱衣所には昔のポスターなどがそのまま掲示してあり、趣を感じる銭湯である。 営業時間は 14：00～22：00、定休日は土曜
④	下田温泉	旧北陸街道に位置する銭湯。サウナ、水風呂に加え露天風呂を有し、2 階部分で会席料理の提供や、事前注文制の鰯鮭販売なども行っている銭湯である。 営業時間は 14：00～22：00、定休日は木曜
⑪	平成松の湯	旧新金屋商店街に位置している。100 年弱営業を続けており、現在の番台のご主人は 3 代目で、魚津市の銭湯組合の組長をしている。建物の 1 階部分は駐車場となっており、2 階に浴場がある。電気風呂にサウナ、喫煙室などの設備も充実した銭湯である。 営業時間は 13：00～23：00、定休日は月曜
②	八つ橋湯	先述の川城鉱泉の川向かいに位置している。現在は休業中。 ホームページによると営業時間は 14：00～22：00、定休日は金曜

1－2. 公的資料・文献資料に残る、かつての魚津銭湯

魚津市立図書館に保存されていた住宅地図を基に、現在閉業した銭湯を含め、どこに銭湯が位置していたかを表し（地図 3－1、3－2、3－3）、それぞれの銭湯についての情報を表としてまとめる（それぞれ表 3－2、3－3、3－4）。なお、区画整理などで道が変わった場所については推測できる範囲で近い場所を示している。

表については、昭和 39（1964）年と昭和 45（1970）年については魚津市立図書館に所蔵されていた『ゼンリンの住宅地図——観光産業・商工名鑑‘64 年版』（善隣出版社、1964 年）、『魚津・黒部・滑川市宇奈月町住宅明細図』（日興出版信越販売、1970 年）に記載があるものを「○」、平成 16（2004）年についてはウェブサイト「風呂屋の煙突」の情報を転載し営業中のものを「○」、閉業していると考えられるものを「×」としている。また、写真についてはウェブサイト「風呂屋の煙突」で使用されていたものを、サイト運営者からの許可のもと転載を行っている。

電鉄魚津駅周辺（地図3-1、表3-2）



地図3-1 電鉄魚津駅周辺地図

表3-2 電鉄魚津駅周辺の銭湯

番号	名称	昭和39年 (1964年)	昭和45年 (1970年)	平成16年 (2004年)	令和2年 (2020年)	現在の 土地利用
①	川城鉱泉	○	○	○	○	—
②	八つ橋湯	○	○	○	○	—
③	魚津温泉	○	○	○	×	ファミリー マート
④	下田温泉	○	○	○	○	—
⑤	港湯	○	○	○	×	建物が現存
⑥	はたち湯	○	○	○	×	駐車場
⑦	朝日湯	○	×	×	×	月極駐車場
⑧	源平湯	○	○	○	×	コインラン ドリー



写真3-1 川城鉱泉 (①、2004年)



写真3-2 八つ橋湯 (②、2004年)



写真3-3 魚津温泉 (③、2004年)



写真3-4 下田温泉 (④、2004年)



写真3-5 港湯 (⑤、2004年)



写真3-6 はたち湯 (⑥、2004年)



写真3-7 源平湯
(⑧、2004年)

新魚津駅・魚津駅周辺（地図3-2、表3-3）



地図3-2 新魚津駅・魚津駅周辺の地図

表3-3 新魚津駅・魚津駅周辺の銭湯

番号	名称	昭和39年 (1964年)	昭和45年 (1970年)	平成16年 (2004年)	令和2年 (2020年)	現在の 土地利用
⑨	赤川湯	○	○	×	×	別の建物に
⑩	鶴の湯	○	○	○	×	建物は現存
⑪	平成松の湯	○	○	○	○	—
⑫	日之出湯 日の丸湯	○	○	○	×	空き地



写真3—8 鶴の湯 (⑩、2004 年)

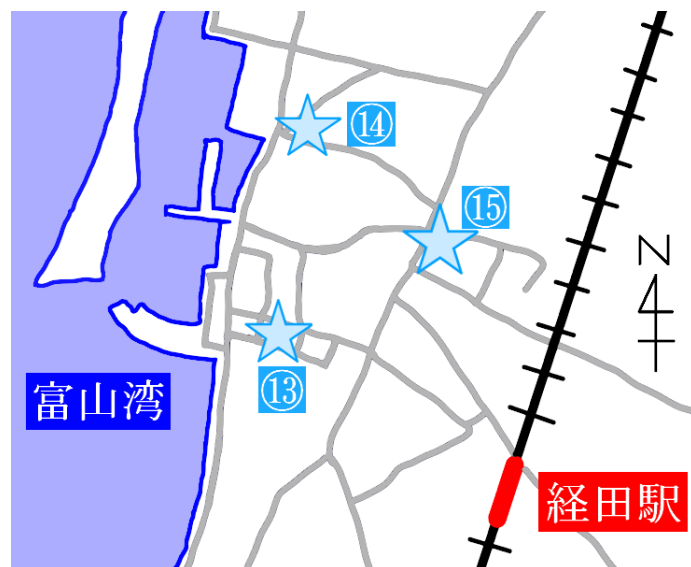


写真3—9 平成松の湯 (⑪、2004 年)



写真3—10
日の丸湯 (日之出湯)
(⑫、2004 年)

経田地区 (地図3—3、表3—4)



地図3—3 経田駅周辺の地図

表3-4 経田地区周辺の銭湯

番号	名称	昭和39年 (1964年)	昭和45年 (1970年)	令和2年 (2020年)	現在の土地利用
⑬	経田鉱泉	○	△(地図から 確認取れず)	×	別の建物に
⑭	からつ湯	○	○	×	別の建物に
⑮	観音湯	○	○	○	—

※ 経田地区のみ平成16年(2004年)のデータを記していない。これは、「風呂屋の煙突」から分かる情報の中で、経田地区に関するデータがなかったためである。

3地区に分け、かつて銭湯があった地域を示した。比較的狭い範囲に集中して銭湯がたくさん営業していたことが分かる。また、平成16(2004)年の時点では最低でも11軒の銭湯が残っていたことから、昭和45(1970)年以後の30年ほどの間は、魚津の銭湯文化は比較的熱が冷めることなく、維持されてきたと考えることができる。一方で、平成16(2004)年から令和2(2020)年までの15年ほどで5軒にまで数を減らしたことから、魚津銭湯が直面する後継者や客数の減少の問題がここ数年で大きく加速したと考えることができる。この点に関しては後述する。

2. 近年の銭湯の様子

本節ではまず、調査で私が観察・聞き取りした、現在も営業を行う銭湯の様子について記述する。具体的には、2-1で番台などとして各銭湯の営業を行っている方々からの聞き取りをもとに、2-2では入浴客からの聞き取りをもとに記述を行う。また、今回の調査では、幸運にも数年前まで銭湯を経営していた方からも聞き取りをすることができた。2-3ではその方からの情報を中心としつつ、閉業していく銭湯の現状について、より詳細に記述していく。2-4で小括を行い、次節へつなげていきたい。

具体的な語りを紹介する前に、前提となる事柄のいくつかを説明する。

まずは、現在営業中の「平成松の湯」「川城鉱泉」「下田温泉」「観音湯」、そして2019年のうちにはまだ営業をしていた「港湯」の5軒における番台の役割である。(番台とは、銭湯の入り口部にある、料金徴収や監視などのため少し高くなった場所のことを指す言葉であるが、本章ではその場所に座り、実際に管理をしている人を指す言葉として使っている。)

番台の仕事は基本的に家族の中で持ち回りで行われているようであった。「平成松の湯」ではご主人が番台の仕事を行っているが、食事休憩などの時間帯は奥さんかお母様と交代している。「川城鉱泉」でも始業時は奥様、15時頃から娘さんに交代し、18時頃再び奥さんに交代している様子を観察できた。

しかし、銭湯の運営に関わる仕事は、番台だけではない。番台以外の仕事も家族内で回されていることがほとんどであるようだ。銭湯によって異なるが、「川城鉱泉」ではお湯を沸かすため実際に火をつけているが、始業前の着火や終業後の火消しなどはご主人が担当していた。また、どの銭湯でも清掃は行われるが、詳細は各銭湯ごとに異なるため、後述する。

2-1. 銭湯で働く人々に見る、銭湯の現状

2020 年 8 月の最終週に、私を含む富山大学文化人類学研究室の学生は、魚津市において集中調査を行った。コロナ渦で難しい状況ではあったが、私はその機会を利用して川城鉱泉に赴き、半日の密着調査を行わせていただいた。まずはそのときの観察を中心に、銭湯の運営のサイクルについて記述する。その後、他の銭湯で聞いた運営などについて記載を行い、補完とする。

川城鉱泉での聞き取りおよび観察から

始業前については、ご主人のお話が参考になる。浴室や脱衣所の清掃を 10：30 頃から始め 11：30 頃から木材などを準備し火付けを行うと、2 時間ほどで湯が沸くので、13：30 の開業にちょうど間に合う。先代から火付けの仕方なども教わってきたが、自分で配線などを改造し、今は半自動で温度調整ができるようになっていると話していた。

開業すると、番台に奥さんが座り、テレビなどを見つつ、入浴客が来れば支払いや回数券の受け取りを行う。日中、入浴客がいなくなった頃を見計らい、番台から立ち上がり浴室内を一度水で流すこともあった。奥さんも娘さんも「常連さんがほとんど」と話す通りで、特に夕方以降の入浴客の中には、私物のシャンプーを銭湯の一角に置きっぱなしにして、タオルだけ持って入浴に来る常連客もいた。棚には私物のシャンプーや石鹸が 5、6 人分ほど置かれたままで、それらは捨てられたりはしない。

終業は 22：00 だが、その前後の様子も紹介したい。21：30 頃を過ぎて常連客がすべて帰ると、番台からバックヤードにいるご主人へ内線電話が入り、ご主人によって火が止められ終業となる。22：00 まで火がつけられていることはそこまで多くない。しかし、火が完全に消えるまでの 1 時間は安全のため近くで待機する必要がある、ご主人が他の別のことをしながら待機している。また、たいいてい浴室の清掃は奥さんが翌日の始業前に行っているが、娘さんが清掃を担当する場合は「翌日の朝のんびりしたいから」という理由で終業後に清掃をしているようだった。

経営面についても、奥さんから若干ではあるがお話いただいた。まず、固定費用（火付けの材料費、施設維持費など）にお金がかかるため、客の数が減った近年の運営は厳しい状態になっている。さらに、ボイラーの修理をすれば 150 万円前後、配管の工事になると浴室のタイルから剥がした工事になるため 1000 万円以上かかってしまう、という話だった。後継者の問題もあることを考えると、魚津の銭湯は「残っても 1、2 軒になるのではないかと、悲観的に語っていた。

また、魚津市では人口流出が進み、行政などで対策が取られているが、魚津の銭湯でも、その様子はいかがうことができる。魚津市の銭湯組合によって、小学生以下の子どもの入浴料は無料と決めて営業を行っているが、どの銭湯でも子どもの来客は少なくなったと聞いた。川城鉦泉のご主人は、旧大町小学校の児童からの感謝状を見せてくださった。小学校が統合される前までは、毎年校外学習の一環で小学生が銭湯の火付けの見学に訪れていたようで、児童が書いた感謝状をすべてファイリングして保存されていた。統合されてからこの習慣がなくなってしまったことを、ご主人は少し寂しそうな様子で話してくださった。

そのほかの銭湯での聞き取りから

他の銭湯についても、実際に見せてもらったわけではないが、1日のスケジュールや運営の状況などについて聞き取りしているので、以下に記述する。

平成松の湯では、始業前の準備は1時間ほど前にボイラーの点火を行っており、ボイラーが自動で湯張りや温度調整をしてくれる。また、清掃は終業後に行うが、それは「床が濡れていた方が汚れが落ちやすい」ためらしい。就寝はだいたい「26時前後」と話していた。

下田温泉では、先述の通り銭湯とは別に家族内で会席料理や鰯鮓の提供を行っている。具体的には、鰯鮓などの料理を息子さん夫婦が担当しており、銭湯の番台には奥さんが座って仕事をしている。しかし、清掃は息子さん夫婦に任せている。奥さんのお話では、常連さんの中には14:00の開業よりも早くに来て、風呂に入っている人もいるとのことだった。

観音湯では、ご主人を亡くされた奥さんが一人で運営をしているとお話しいただいた。11:30頃から廃材を使って火付けを行い、片付けなども一人で行っている。息子さん夫婦にはいつ辞めても構わないと言われていていると、少し寂しげに語っていた様子が印象的だった。

2-2. 銭湯に訪れる人々に見る、銭湯の現状

今回の調査では、川城鉦泉での調査を中心に、実際に銭湯に入りに来ていた入浴客にも聞き取りを行っている。年齢層の割合としては60歳代以上が90%以上を占めているという印象を受けた。まずはそこを中心に、お客さんの銭湯に対する語りを紹介していきたい。

幼少期から通い続けている入浴客の語り

それぞれ15:00、16:00頃川城鉦泉を訪れていたAさん、Bさん（ともに70代以上）は、「幼い頃からずっと通っている」と語った。なかでもBさんは、「テレビを見ながら、他のお客さんとおしゃべりする」と話してくれた。18:00頃訪れていたCさん（70代以上）は「銭湯に入らないと一日が終わらない」と言っており、毎日銭湯に入りに来ると話していた。一方で14:30頃に来たDさん（70代以上）のように、銭湯に来るペースは2日に1回と話す方や、週1回で来るというEさん（詳細は後述）もあり、人によってばらつきがあった。

銭湯が利用されなくなった原因として、改築に伴う家風呂の増加が真っ先に考えられる。18：30頃訪れていたFさん（70代以上）は、家風呂はないと話し、毎日銭湯に来ているようだった。一方のDさんは家風呂を持っているが、銭湯の方が「楽に入れる」として通っているようだった。また、Aさんは「家風呂は女房が使っている」と話していたが、19時以降の入浴客のGさんは女湯に向けて「帰るぞ」と呼びかけていた。番台に聞くと、ご夫婦で銭湯に来ている方もいるとのことだった。銭湯に通う理由については、個人、家庭によって様々であるという印象を持った。

一方で、銭湯を利用する際には小さな共通点が見られた。Aさんは、「みんながよく使うシャワーのところ（端の蛇口）を使った後は、桶をそのままにしている」と話していた。詳しく聞くと、昔は洗い場が人で溢れていたため、使った桶は現在のように山積みに戻すのではなく、そのままその場に置き、次の人も使うという暗黙の了解のようなものがなされていたようで、その名残でしていると話していた。実際、他の数名の入浴客も桶を置きっぱなしにしている様子を観察できた。

銭湯がコミュニケーションの場になっているということは、よく話されている。私も実際にその様子を観察することができたが、時間帯によって、お喋りの様子も異なったように感じている。具体的には、17：00頃を境に、入浴客数が増加したことで変化した。18：00頃、入浴客は浴室内で喋ることもあれば、脱衣所に出てから喋る場合もある。お喋りは3人ほどで行われることが多く、またお喋りに参加しない人もいて、浴室・脱衣所合わせてほしい5人前後（観察では、最大7人）がいる。いつもの時間より遅く来たために、「遅かったね、先に上がったよ」と声をかけられている人もいた。一方で14時、15時台だと、客数もまばら（多くて3人）であることもあり、相対的にお喋りの数は減っている。しかし、この客同士の関係性が銭湯だけで培われたものであるというわけではない。Cさんは「ここ（銭湯）で会って話すし、他でも会って話す」と語っている通り、常連として毎日顔を合わせてからこそのコミュニケーションではあるが、銭湯だけで育まれた文化というよりも、地域のコミュニケーションの一部として捉える方がより現実に近いと思われる。

それ以外の入浴客の語り

一部ではあるが幼少期から通い詰めているという訳ではない銭湯利用者についても、聞き取りを行うことができた。いわゆる常連とは異なる部分もあり、以下にまとめる。

私が調査で訪れている日に、17：00頃来店したEさんは、滑川に居を構えている40代ほどの男性である。車で来ており、家のシャワーでは物足りないので、しっかり温まれるようにと週1回程度銭湯に通っているようだ。また、滑川にも銭湯はあったが、入浴料の高い場所だけになってしまったので、一番近い川城鉾泉に来るようになったと話してくれた。

また、令和2（2020）年7月の調査で平成松の湯に訪れた際には、50代ほどの男性からお話しいただいた。「自分は電気風呂に入りに来ている」、「身体を洗いに来ている他の方とは違う利用をしている」と強調して話していたのが印象的だった。歩いて7分ほどにある住

まいには家風呂もあるが、「疲れがとれる電気風呂目当て」なのだそう。また「車で来た」、と話していた。

2-3. 廃業していく銭湯

魚津市立図書館や商店街の方の協力のおかげで、私は廃業した銭湯についての情報も得ることができた。その一つが「源平湯」である。銭湯の現況をよりよく知るべく、源平湯が以前あったという、現在はコインランドリーになっている場所へ聞き取りに向かった。源平湯の元ご主人によると、銭湯が実際に廃業したときの様子については以下の通りであった。

源平湯は、平成30(2018)年頃に廃業した。現在のコインランドリーは、浴室だった部分をリフォームして運営している。廃業の直前は、入浴客が1日50人程度まで減り(最大は1日400人だった)常連さんにも惜しまれながらの廃業となった。最後までいた50人のお客さんのうち、10~15人ほどは家風呂がない方で、他の銭湯に通うようになった。また、「ここ数年でいくつも(銭湯が)なくなった」と話し、銭湯を営業していた頃を思い出しながら語ってくれた。

また、私が確認し得た範囲では令和元(2019)年の11月には営業を行っており、その後令和2(2020)年6月までに閉業した「港湯」についても、ここで記述しておきたい。港湯は魚津漁港すぐ近くに位置しており、たてもん祭りが行われる諏訪神社のすぐ近くにあった銭湯だ。調査に赴いた際には番台をしていた奥さんともお話ししたことがある。

他の銭湯の番台と港湯の話題になったときには、「子どもたちは会社勤めをしていて担い手がいなかった」と話しており、後継者がいなかったこと以上のことは分からないが、確かに深刻な問題であることは変わらない。

また、銭湯の休業(閉業ではない)については、複数の番台からお話をうかがっているもので、こちらも合わせて記述する。

魚津の銭湯組合長の平成松の湯のご主人に、現在休業中の銭湯について聞いたところでは、それらの銭湯から特に連絡はきておらず「よく分からない」と話し、いつ再開するのかなどについての情報を交換していない様子だった。下田温泉の奥様とご主人はその銭湯について、組合費は払い続けているから再開はできる状態ではあるだろうが、機械の調子がよくないのではないかと話していた。「一度機械を止めてしまうと動きにくくなってしまう」と言い、下田温泉でもそれと似た状況になったことがあると話してくれた。

3-4. 小括——魚津銭湯の今

小括として、現在の魚津銭湯について私の感想を、ここで述べておきたい。

火が完全に消えるまでは目を離せない、清掃などを済ませると就寝が「26時」になるという語りは、銭湯の裏側の苦労をよく表したものだ。どの銭湯も閉業する際には常連客に惜しまれながらなくなっていったとたくさんの人からお話いただき、番台と入浴客の間の信頼関係を強く感じた。苦労も多いが、「銭湯に入らないと一日が終わらない」と話したCさ

んのような、銭湯を楽しみにしている常連客のためにも番台が毎日の営業に心を込めて働いている様子をうかがえた。

一方で深刻な現状も垣間見える。「ここ数年でいくつもなくなった」という源平湯の番台をしていたご主人の発言は、1－2で見た近年の急激な銭湯の営業数減少とリンクしている。これは、ここ近年において急速に銭湯への興味関心が薄れてきたことの現れであるばかりか、銭湯文化が断絶される前触れのような気がしてならない。全国各地で銭湯文化を守るためにイベントなどが行われたりしているが、今のところ魚津では「外」からの客を意識した取り組みは行われていない。しかしそれらが行われず、変わらない日常が提供され続けているからこそ、昔ながらの常連客は今も足繁く通っているというのもまた現状である以上、イベントの不在を一概に悪いと言うことはできない。むしろ、このままの形の営業を強く守り、地元の人に愛され続ける銭湯であってほしいと、私は勝手ながら感じている。

3. かつての銭湯の様子

本節では「過去」をテーマに、かつての銭湯の様子について聞き取りを中心に記述を行い、活気に満ちた銭湯文化があった時代の様子を復元・記述する。3－2にて前述との関連などを踏まえ再び小括を行い、次節につなげていきたい。

3－1. 語りの中に現れるかつての魚津銭湯

川城鉦泉での調査では10名前後の入浴客にお話をいただいたが、「昔はどうだったか」という質問をすると、ほとんどが「漁師をしていた」と回答をいただいた。まずは「入浴客と漁師」の話題を中心に、かつての魚津の銭湯、かつての魚津での暮らしぶりがどのようなものであったのかについて、語りから記述していきたい。また、聞き取りに応じてくださった方のイニシャルは第2節と同一である。

「漁師」から見た、昔の銭湯

Aさん（70代）に「昔はどうだったか」と聞くと、「漁師をしていた」と答え、昔の暮らしぶりについて楽しそうに話してくれた。簡単ではあるが、まずAさんのお話を紹介したい。

漁から帰ってくるとまず、潮でベタベタした身体を流すため、銭湯に向かうことが多かった。個人的な楽しみとして、身をきれいにした後酒屋に向かい、カップのお酒を仲間と飲んでいた。気分がいい日にはタオルを酒屋に預け、タクシーを捕まえて町へ出かけに行くこともあった、と話してくれた。

Aさんの話だけでも、「漁師」というライフスタイルの中に銭湯が組み込まれ、日常の一部になっていることがうかがえる。中央通りで行った聞き取りでは、「昔は漁師が身体を温めに来るのが多かったから、サッと温まれるようにお湯の温度が高めに設定されている」と話してくださった方がいた。現在でも観音湯では「湯船の温度を42℃以下にしないように」

という掲示が浴室に貼ってある。また、私の印象ではあるが、同じく海沿いにある川城鉱泉や下田温泉は湯船が熱く、観音湯にいたっては熱すぎて湯船に入るのを断念したほどであった。

そのほかの入浴客にも「昔」について聞くと、「昔は洗い場待ちの行列ができていた」と多くの人が話していた。特にBさんは、「漁から帰ってくる時間はだいたいみんな同じ時間だから、その時間は集中して混んでしまう」と話していた。また、Fさんは昔の銭湯について、小学校時代のことを思い出し、「親と連れだって来ていた」、「小学校の友達と学校で銭湯に集合することを約束し、銭湯に集まって喋ったりしていた」と話してくれた。

お喋りについては、現在ではテレビなどの話題も多いが、Dさんなど、昔は漁の話と共有していたという話も聞いた。Cさんは特に、「今も昔もお喋りはそんなに変わらない」と話し、昔から変わらず続いている日常に満足している様子がうかがえた。

また、Bさんは「自分が子どもの時の大人は、火鉢を囲んでパイプをふかしていた」と話していた。現在の銭湯では禁煙や分煙が多くそのような姿は見られなくなってしまったが、観音湯では調査に赴いた際、現在でも脱衣所に灰皿があり、たばこを吸う人も見られるなど、当時の趣向を感じる場面に遭遇する機会もあった。

番台から見た、昔の銭湯

番台に「漁師」や「子ども」について聞くと、最近は減ったが昔はたくさんいた、という話が多く上がった。平成松の湯のご主人は入浴客の子どもを別の入浴客が見ていたなど、特にいわゆる「銭湯らしい人付き合い」があったと話してくれた。

下田温泉では、現在会席料理を出していると先述したが、昔は現在のスーパー銭湯のように食事提供と一体となった銭湯の運営を行っていたそう。観音湯の番台をしている奥さんも、観音湯の2階は大昔休憩所として一般に開放していたと話していた。後に奥さんの義父母が住むようになり、亡くなってからは使っていないと話してくれた。

少し異なる視点から見た、昔の銭湯

文化町商店街での聞き取りでは、現在はマイカーでスーパー銭湯に行くことが多いが、近所の朝日湯が閉業するまではそこに通っていたというHさんにお話をうかがうことができた。洗い場待ちや営業前に行列ができていたなどの銭湯の入浴客からも聞いた話の他、なじみ以外の銭湯に行くときよそ者扱いを受けた、などのお話もあったが、「芸者と銭湯」について興味深いお話を聞くことができたので、ここで紹介しておきたい。

漁師は漁の終わりに銭湯に入り、「マチ」（中央通りや文化町商店街のこと）に来て酒を飲みに来ることがよくあったが、その際に芸者が呼ばれて飲み屋に出向くことが多かったそう。芸者は近くの銭湯で身体をきれいにしてから化粧をして、仕事に向かうことが多く、そのため、当時はすっぴんの芸者を町中でたびたび見かけたそう。

先ほど漁師に焦点を当てて銭湯の様子を記述したが、この話に見る芸者のように、他にも

様々な人々の生活の一部として、銭湯は長く利用されてきたことがうかがえる。

3-2. 小括——魚津銭湯の昔

第2節と同様に、私が気になった記述について特に挙げ、小括としたい。

3-1では多くの人の語りを紹介したが、特に「洗い場に行列ができていた」という話は、私の中では特に衝撃的であった。実際に見ていなくとも、今以上の人付き合いや活気があったことが容易に推測できる語りであった。漁師や芸者に限らず、家風呂のなかった時代に銭湯はほぼ全てのの人に必要な施設であり、そうした時代の活気ある銭湯の様子を知ることができ、とても有意義な調査ができたと思っている。

また、下田温泉ではかつて、飲食店のような営業を行っていたという話を紹介した。かつての銭湯は入浴する以上の場所であった。そこでもまた入浴客による「お喋り」が目に見え、かきこえるかのようなのだが、すでにそのような銭湯における入浴以外で育まれた文化は消えてしまったと言わざるを得ない。「スーパー銭湯」という記述は私が書いたものだが、次節では魚津にあるスーパー銭湯を実際に訪れ感じたことなどを記述しながら、考察を深めていきたい。

4. 変わらない銭湯——まとめに代えて

魚津市内では「満天の湯魚津店」が営業を行っている。これはいわゆるスーパー銭湯の典型例であり、銭湯形式の入浴に加え、飲食の提供、岩盤浴、理髪店などのサービスも同施設内で完備されている。入浴料は通常の銭湯が440円であるのと比べると、会員価格でも650円と少し割高である。また、市内には他に「金太郎温泉カルナの館」という日帰り温泉施設があり、それらにマイカーや市内バスなどで通っている人も多いようだ。私は令和2(2020)年7月頃に、調査の一環として「満点の湯」を訪れているが、その帰りに市内バスを利用した際には、同じバス停から乗り込んだ高齢の女性が川城鉱泉近くのバス停で降りていった。その日は木曜日で川城鉱泉も営業していたはずだが、その女性はバスで「満天の湯」まで向かって利用したらしい。また、川城鉱泉でコロナ渦での銭湯の様子について尋ねた時には、近場のスーパー銭湯やスポーツジムなどが一時休業になったために、通常時より入浴客が増えて大変だったとお話しいただいた。具体的な数までは分からないが、近場に銭湯がありながらもスーパー銭湯に通っているというような人が一定数いるのは間違いない。

「満天の湯」ではタッチスクリーンなどを採用し、効率的な商売を行っている。ただ、本章で紹介した銭湯との違いとしては、「家族連れ」の多さが一番に挙げられる。銭湯の調査で小学生や中学生などの子どもたちを入浴客として見かけることは残念ながらなかったが、満点の湯ではその1日だけでも2組ほど、小学生を連れた父親を見ることができた。3-2のDさんの話を鑑みるに、かつて親子で来る場所であった銭湯の役割は、より快適に過ごすことのできる大型のスーパー銭湯に移っていると考えることができる。

また、銭湯とスーパー銭湯で私が気になった点がもうひとつある。銭湯の入浴客は私やスーパー銭湯の入浴客に比べて、自分の身体を洗う時間が長く、湯船に入っている時間が短いように感じた。これは銭湯の入浴客をよく観察してみると、持ち込みのかみそりでヒゲを剃ったり歯を磨いたり、日常生活の延長として利用していることが多いことが分かってきた。それらと比べるとスーパー銭湯では、子どもたちも温かく広い湯船に浸かることをある種の「非日常」として楽しんでいるかのように見られた。スーパー銭湯に入りに来た高齢者の方々も、自分の身体を洗う時間よりも湯船に入っている時間の方が長かった。つまり、スーパー銭湯は銭湯とは違う非日常の場所としての性格が強いように感じられる。

しかし、銭湯が進化したものがスーパー銭湯であるという考え方は間違いだ。スーパー銭湯では非日常の人たちがその場に集まるのみである分、これまで銭湯で見てきた人付き合いなどはめったに発生しないだろうと私は予測する。銭湯で変わらずに「お喋り」がし続けられてきたのは銭湯が日常の延長であり、人々の生活に密着し、それを入浴客が心地いいと思ってきたからこそである。

おわりに

漁師が洗い場に並ぶほど盛況していた昔の銭湯では、家風呂がほとんどないこともあいまって、親と連れだって銭湯に来ることも多く、子どもだけで銭湯を訪れることも珍しいことではなかったようだ。時代が進み、家風呂がほとんどの家庭に設置されるようになると、入浴という日常の行為は家で済むものになってしまったため、相対的に銭湯の役割が縮小している。昔から常連で通い続けている人たちはそのまま残るが、新しい人（若者）の増加がほとんど見込めず、ゆるやかに減少を続けてきたものが、魚津ではこの数年のうちに急激な減り幅を見せ、多くの銭湯の閉業につながったと考えることができる。

銭湯文化の維持のために、新しい取り組みやイベントを行うことで「変化」を模索する動きは全国で見られているが、私はそれだけがすべてだとは思っていない。実際に今いる入浴客の方々にインタビューを行い、昔からずっと続いてきた銭湯の「この感じ」を居心地よく思い、利用している様子を間近で見てきた。スーパー銭湯に「家族」を取られた「銭湯」にも、変わらない日常を求めてやってくる入浴客とそれを提供する番台の方々がおり、その関係性だけでも十分すぎるつながりがあると、私は感じている。

謝辞

本章では魚津に残る銭湯を中心に記述をまとめ、報告書とさせていただいた。つい3年前に富山県に足を踏み入れたばかりの新参者であるにも関わらず、番台の皆様も、入浴客として訪れていた魚津の皆様も皆さん温かくインタビューに応じてくださったこと、厚く御礼申し上げます。特に、集中調査で半日の調査をさせていただいた川城鉦泉の皆様、度々営業中のところ訪問させていただき丁寧に質問に答えてくださった平成松の湯の皆様には、重

ねてお礼申し上げます。

文章の校正にご協力いただいた文化人類学研究室の先生方、また最後までお読みいただいた読者の皆様、稚拙な文章ではありますがご精読いただきありがとうございました。この文章が拙くも、魚津の文化継承の一助になればと存じます。

参考にしたウェブサイト等

富山県公衆浴場生活衛生協同組合「銭湯一覧」〈<http://toyama1010.com/sentou-list.html>〉(2020年12月15日閲覧)

風呂屋の煙突「2004年8月22日「港湯（富山県魚津市諏訪町）」」
〈<http://furoyanoentotsu.com/minatoyuuozu2.html>〉(2020年12月15日閲覧)

風呂屋の煙突「2004年8月22日「鶴の湯（富山県魚津市緑町）」」
〈<http://furoyanoentotsu.com/tsurunoyuuozu.html>〉(2020年12月15日閲覧)

風呂屋の煙突「2004年8月28日「日の丸湯（富山県魚津市上村木）」」
〈<http://furoyanoentotsu.com/hinomaruyuuozu.html>〉(2020年12月15日閲覧)

第4章 魚津大火の記憶と防火建築帯に住む住民の声

大坂 瑞希

はじめに

本章では、魚津市で起きた大災害である魚津大火と、その復興事業によって建てられた防火建築帯について記述する。魚津大火は、昭和 31（1956）年 9 月 10 日に発生した魚津市最大の火災災害である。ここでは、魚津市史と魚津商店街での聞き取り調査に基づいて、魚津大火はどのように魚津商店街の住民たちの心に残っているかについて記述する。

また、その復興事業として建てられ、研究対象としても注目されている防火建築帯に関しても調査を行った。実際にそこで生活する住民たちがどう思っているのかを記述する。防火建築帯は、現代に残る歴史的な建造物として大学の研究者から注目されている。その一方で、実際に防火建築帯で生活している住民たちがどう思っているのかが気になった。防火建築帯が建てられて 50 年ほど経過しているが、建てられた当時の思いや生活はどうだったか、逆に、現在はどう思っているか、建てられてから年数が経ったが、不便な点や問題点はあるのか、などについてである。それらについて住民の声を聞き取り調査によって明らかにすることを目指した。

本章ではまず、第 1 節で魚津大火の概要と復興事業について、主に文献に残っている記録をまとめる。第 2 節では、大火を経験した住民から伺った話を記述する。第 3 節では、防火建築帯の概要と、防火建築帯が建てられた当時にお店を営んでいた住民から伺った話を記述する。第 4 節では、現在も防火建築帯で生活している住民から伺った話を記述する。

1. 魚津大火

本節では『魚津市史』（魚津市史編纂委員会、1972 年）をもとにして、魚津大火の概要を述べる。

1-1. 魚津大火の概要

まず魚津大火の概要を述べる。昭和 31（1956）年 9 月 10 日の宵、市内真成寺町一角から火の手があがり、おりからの強い南風によって燃え広がった。火は市街中心部の繁華街を燃やし、翌日未明まで燃え続けた。被害は、焼失戸数 1,500 戸、罹災者 7,200 余人、損害見積り 75 億円だった。

火災が発生した場所は、市内の目抜き通りで、その付近には映画館・寺院などの木造の大建築物が多かった、火災の発見が遅れたために、延焼を食い止めることができないまま火勢は増大した。台風による強風にあおられていたため飛び火が激しく、火災発生地点から風下

1,500 メートルの範囲は短時間のあいだに焼き尽くされた。風向きや風速が激しく変化し、それにつれて延焼方向も刻々と変わり、一段と被害が大きくなった。

火災当初は南南西 12 メートルの風があり、出火後 4～5 分たった午後 8 時 30 分ごろには、500 メートル離れた村木小学校（現在の魚津市立村木小学校〔魚津市村木町 1-21〕）に、さらに 15 分後には、火元から 880 メートルのカーバイド病院および 1,100 メートルの村木・本新にもそれぞれ飛び火し、新たな火災が発生した。無数の火の粉が飛び散って延焼を広め、そのあいだの地域は火の海と化し、出火から 2 時間 30 分のあいだに、750 戸ほどを焼き尽くした。

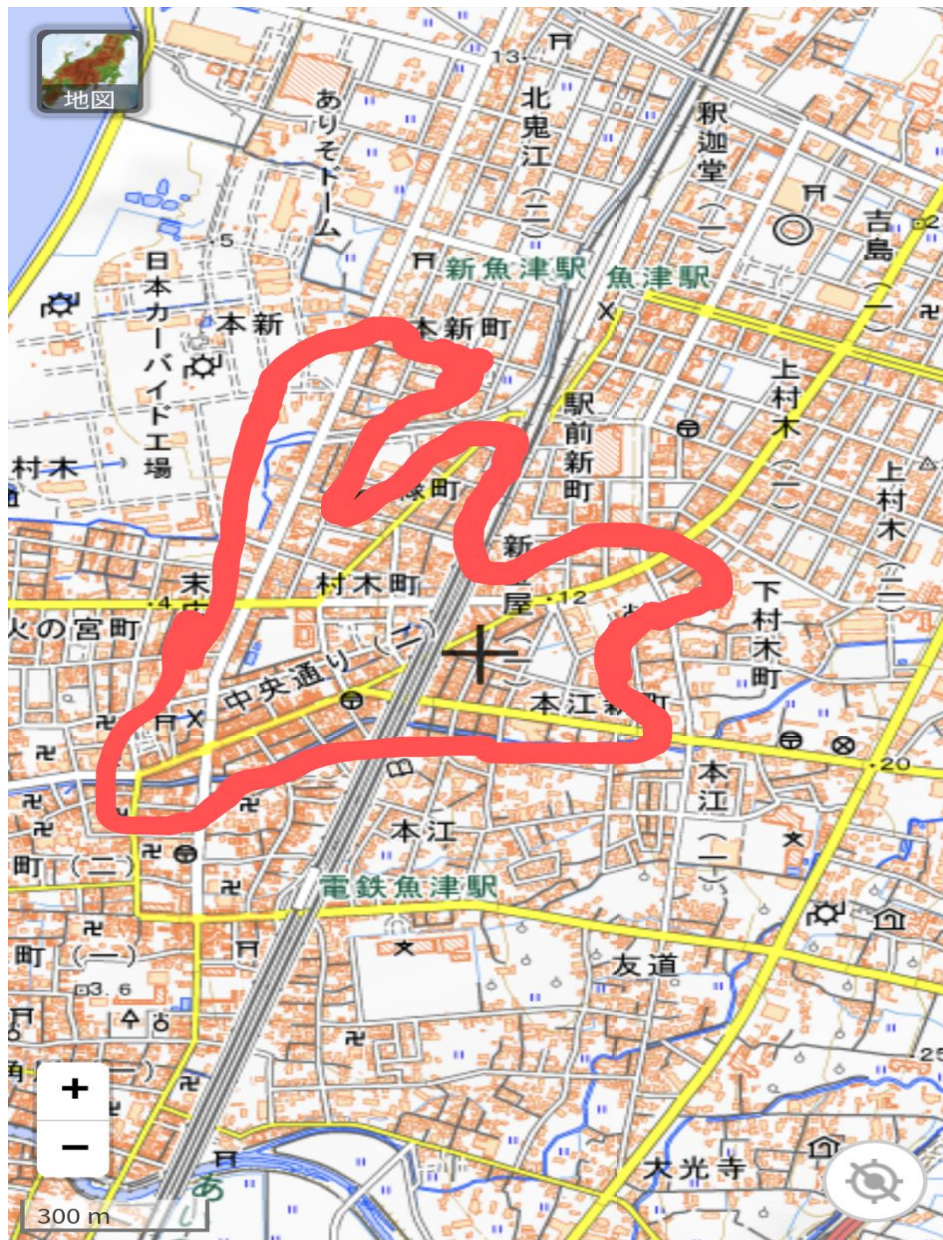
午後 10 時過ぎ、風向きが西に変わったおかげで、危険にさらされていた日本カーバイド魚津工場は延焼を免れたが、その風を横から受けた金屋町方面に燃え広がった。午後 11 時 30 分ごろ、風向きが北西に変わると、最後の延焼阻止線とみられていた北陸本線をも超えて燃え広がった。新金屋町の大半も焼き尽くした翌朝 1 時、ふたたび南西の風に変わるころ、風速も弱まり、消防隊の活躍によって、午前 2 時 10 分鎮火された。

以下は、大火による主な被害をまとめたものである。

焼失区域の町のうち、8 割以上焼失した町は、真成寺町、神明町、金屋町、金浦町、上村木町、下村木町、川原町、鴨川町、村木である。一部焼失した町は、餌指町・諏訪町・本新・日本カーバイド社宅・本江である。焼失したおもな建物のうち、全焼したものは、村木小学校・安成寺・照善寺・常泉寺山門・神明社・北陸銀行神明支店・富山産業銀行魚津支店・金屋郵便局・大劇・第一劇場・吉田工業上村木工場・魚津製作所・本江酒造・日本カーバイド病院である。一部焼失したものは、日本カーバイド魚津工場、小坂機業場である。

死傷者数のうち、死者は 4 人（他に親戚の家財搬出を手伝い、帰宅後の就寝中に死亡した者 1 人あり）、重症者は 5 人、軽傷者は 165 人である。

被害見積総額は、合計 75 億 8000 万（罹災建物の損害額とその他含む）であった。



地図4-1 現在の地図に置き換えた延焼範囲地図（国土地理院地図より引用）

表 4－1 罹災建物数と損害額

種別	棟数	建坪	延坪	平均 1 戸あたり面積	損害額 (千円)
総 数	1,561	39,889.01	50,162.78	32.7	4,239,497
専 用 住 宅	871	20,454.38	27,743.68	29.5	1,415,902
商業併用住宅	228	6,745.53	8,688.14	38.0	1,042,577
工業併用住宅	13	299.36	387.86	29.8	50,422
その他併用住宅	8	463.21	741.25	92.7	51,887
官 公 署		768.50	1069.50	118.5	96,255
商 業	9	415.09	618.36	68.5	86,570
工 場	104	5,816.16	6,565.93	63.0	787,917
倉 庫	194	1,841.59	2,907.83	15.0	436,175
銀 行 会 社	1	14.00	14.00	14.0	1,960
そ の 他	124	3,071.19	3,426.24	27.5	239,837
北陸電力、電電 公社関係	—	—	—	—	30,000

(損害保険料率算定会発行「魚津市大火実態調査報告書」による)

大火の要因については、県の消防課がいくつかを指摘している。そのなかから、主なものを以下にあげる。

まず第一に、気象状況があげられる。当時被災地は、9月2日以来、一週間以上のあいだ乾燥状態が続いていた。そのうえ、出火当日はフェーン現象による南の強風が吹き、出火当時の魚津市では風向きがたびたび変化したために、消火活動にも支障をきたし、被害を大きくしたと考えられている。

第二に、出火地点付近は、市内の最も繁華な魚津銀座と呼ばれた商店街であり、近くに大きな寺院も連立し、その間に小住宅がびっしりと建て込んでいた。3割程度が板葺屋根で、外壁もほとんどが板張りであったため、それが延焼を促した。

第三は、道路の状況である。市内の道路のほとんどは、自動車がすれ違うのも難しいほどに狭く、さらに曲折部も多かった。消防車の一台が水利部署につくと、他の消防車は通行もできないような狭さであり、火災の拡大によって、主要道路の通行は不可能な状態だった。

第四は、水利である。ただ1つの自然水利であった鴨川の水は、当時田圃への灌水のため流量が少なく、出火時には、消防車5台分の水が流れていたにすぎなかったといわれている。大火時には、分水はせき止められて、田圃への灌漑用水はすべて鴨川へ流入されたが、10台分程度の流れになったのは、午前1時30分ごろであり、通常の流れに戻ったのは、午前4時だった。

その他、出火場所が家屋の裏側にあった火の気のない納屋とみられ、発見が遅れたことや、当時の消防力が不十分だったことも指摘されている。

この未曾有の大火のきっかけとなった出火原因については、自然発火・煙突の飛び火・取り灰の不始末などの線から、いろいろ調査が進められ、検討が加えられたが、結局決め手となるものは発見されずに終わった。このことにより、市民は割り切れない思いをした。

1-2. 魚津大火後の復興の様子

魚津市は、翌9月11日に緊急市議会を召集して、2000万円の範囲で見舞金の支出などの応急の措置を講じた。また、この大火がテレビ・ラジオ・新聞などに報道されると、全国各地から続々と救援物資が送られてきた。義^{ぎえん}捐金も、富山をはじめ43都道府県、あるいは個人・団体などから寄せられ、その総額は4893万3842円に達した。市当局は、区長を通じてこの救援物資（衣類・什器・食料品など）と義捐金を罹災者に配分した。これにより多くの罹災者は一時の急場をしのぐことができた。

罹災者の多くは、親戚・知己を頼って間借りしたり、市内の学校や寺院に宿泊したりしていたが、県当局も、早月川の下流右岸に100戸の仮設住宅を建設し、そこに92世帯・275人が入居することができた。他方、魚津西部中学校の講堂を罹災者に開放して自炊を始めるなどすることで、罹災者の一応の生活の場を保った。

焼けた村木小学校の児童は、大町小学校や本江小学校で分散授業をうけることになった。焼け跡整理は、市連合青年団を中心に市民の協力で進められ、婦人会は炊き出しに努めた。

この災害を受けての、その後の国および富山県による支援は次のようなものであった。政府は魚津市大火復興対策連絡協議会を設けた。そして、9月26日建設省告示第1497号で当市が「魚津市都市計画火災復興土地区画事業施行区域」に決定した。この決定が、その後の魚津市の都市形態形成の基盤となった。

大火前、魚津市の市街地を形成していた旧魚津町は、県内有数の過密地帯であり、町並みも雑然としていて、一朝有事の場合は大災害をもたらす危険があると指摘されていた。そこで、この復興を罹災者に任せておけば、またもとどおりの雑然たる町並みになる可能性もあった。市はこの大火を転機として、国や県の協力のもとに、復興計画の基本的な方針を打ち出した。それは、このような大火災害にふたたび見舞われないように、いわゆる不燃都市の造成を第一の目標として、交通・防火・宅地・水利・公衆衛生などの総合的な新しい近代的都市計画の構想であった。その具体的な方針は、①土地区画整理事業で設定する幹線道路および区画道路の計画をすみやかに市民に明示する、②この事業区域を急速に実測し、公共用地面積の増大にともなう宅地の減歩率をできるだけ小さくする、③仮換地はできるだけすみやかに指定する、④下水道事業を実地する、⑤神社を合併する、⑥公園墓地を造成する、であった。

昭和31(1956)年9月26日建設省の告示で「魚津市都市計画火災復興土地区画事業施行区域」があり、焼失区域とこれに関係ある隣接地を含み、地積18万5000坪の区域をもって復

興区域が決定された。

復興区域に含まれる地域として、神明町・金屋町・鴨川町・川原町の全部と、真成寺町・餌指町・下村木町・上村木町・本新・本江町・田方町・村木・荒町・寺町・本江・田地方町・北鬼江・東小路の各一部が指定された。また、焼失地域外の部分約 1,000 坪も新たに追加された。その事業内容は、街路（補助街路を含む）・水路・小公園の新築改廃・宅地造成・各種の保証（建物・電柱・墓地・私設水道・井戸・その他）・上水道管の移設などだった。

そこで 9 月 28 日の定例市議会で、魚津市役所内に「魚津市火災復興部」を設置することを決め、そのなかに区画整理課と建築課（課長・係長など 3 人は県から派遣）の二課を置き、火災復興に関するいっさいの仕事をすることにした。

これに関連して県も、魚津市の要請で昭和 32（1957）年 1 月 1 日付けで「魚津市復興都市計画事務所」（県の出先機関）を置き、おもに魚津市が委託した調査・設計・幹線道路の築造・建物の移転などの事業を行うことになり、市と県とが一体となってこの復興事業に努めた。

また、昭和 31（1956）年 10 月 24 日に臨時市議会が開かれて「魚津市都市計画火災復興土地区画事業施行の区域決定の規定」を設定した。市議会内にも「魚津市大火復興委員会」を設置することを決め、その後の市議会で、この事業でとくに難問題と目される寺院墓地の移転・神社の統合・災害農地などの問題に自主的に取り組む姿勢をとって、寺院委員会・神社委員会と災害農地委員会の 3 つの委員会をつくり、復興事業に大いに貢献した。このようにして、同年 11 月 22 日に、その事業認可を得て実地の段階に進んだ。

事業費総額は、当初 1 億 8798 万円であったが、その後の物価の変動、事業の一部変更などから、2 億 1345 万円の変更事業費で、昭和 31（1956）年度から同 34（1959）年度にいたる 3 か年の継続事業として、公共団体（市）が執行に当たることになったが、実際は同 36（1961）年度まで継続されて完成した。

魚津市は、大火災の復興を機に近代的都市づくりをするには、土地区画整理事業がもっとも適当な対策であるとしてこれに踏み切り、昭和 31（1956）年 9 月 26 日に、建設省（現在の国土交通省）からその決定を受けた。この事業の施行地区として、焼失区域約 15 万坪と、これに密接な関連のある非災害地区約 3 万 5000 坪の計約 18 万 5000 坪（約 60 万平方メートル）が昭和 31（1956）年 10 月 26 日付けで決定され、同年 11 月 22 日に事業認可がなされ、実地される段階に入った。復興事業に取り組み、6 年が経ったころ、焼失した市街地は昔の面影をとどめるところがないほどに変化した。全国でも有数な延長 1,519 メートルにおよぶ防火建築帯、街を横断する 22 メートル幹線街路¹⁾を始め、大火以前の魚津の街を知っている人にとっては「全く別な街」と思われるほどの近代都市に変化した。

2. 住民の記憶に残る大火

調査では、文献資料だけでなく、魚津大火を自身で経験した方の声を聞きたいと思い、8

月末に聞き取り調査を行った。65 年近くも前の大火を物心ついた年齢で経験し、記憶に残している方は少なかったが、詳しく話してくださった方がわずかながらいた。それは、中央通り商店街にある「鮮魚の山崎」の山崎定さんと銀座通り商店街にある「沢泉呉服店」の沢泉良子さんである。

「鮮魚の山崎」の山崎定さん（73 歳）からの聞き取り

「鮮魚の山崎」は中央通りの端に位置する鮮魚店である。山崎さんのお宅は大火当時も魚屋を営んでいた。お店は山崎さんの母親から始め、現在の店主である山崎定さんで 2 代目であるが、跡継ぎはいない。

大火が起きた当時は、山崎さんは小学一年生だった。大火の火元は、ここ、そこ、と噂されているが定かではない。第 1 節でも記述したが、当時は台風の影響で強風が吹いていたこと、当時は木造建築の家屋がほとんどであったことから、火元から広範囲に燃え広がった。その範囲は、現在の北陸電力新川支店²⁾がある場所まで（距離にして約 1.3 キロメートル）である。大火当時の「鮮魚の山崎」はツケ払い方式であったため、顧客情報や販売状況、売上が書かれた台帳がとても大事なものだ。山崎さんのお母さんは迫ってくる火から逃げる際、その台帳と自分の家族を連れて逃げたそう。山崎さんの家族が避難したのは、海のそばにあり、「鮮魚の山崎」から徒歩 10 分ほどの距離に位置する魚津丸食堂である。山崎さん一家はそこに避難したが、親戚の家に避難する人も多かったそう。また、山崎さん一家が避難している際、山崎さんの父親は消火活動にあたっていた。

広範囲に燃え広がった火が鎮火された後、大火が起こった翌日から、営業を続けていたそう。建物は燃えてなくなってしまったので、バラックのようなもので商売を行った。山崎さんからは、その後に復興事業の一環として建てられた防火建築帯の当時の様子についても伺うことができた。防火建築帯の外壁は、当時はレンガ風のタイルで統一されていたそう。その理由としては、経費を安く抑えながら、見栄えを良くすることができるからというもの。しかし、外壁は建物の所有者が自由に変えてよかった。意識して現在の外壁の様子を見ると、レンガ風のタイルが継続して使われている家もあるが、トタン等に張り替えている家もあり、個々の家で異なっていることが分かる。

「沢泉呉服店」の沢泉良子さん（86 歳）からの聞き取り

「沢泉呉服店」は銀座通り商店街の中央にある呉服店である。お店は 50 年ほど営んでいる。お話を伺った沢泉良子さんは、20 歳くらいの時に諏訪町から嫁いで来られたそう。

沢泉さんには息子が 2 人いるが、大火が起きた当時は、沢泉さんは 20 代後半で、息子 2 人も年長～小学校低学年ほどの年齢だった。逃げる際、沢泉さんと長男は一緒に逃げる事ができ、近くの真成寺に避難することができた。しかし、次男とははぐれてしまったため、次男はもう助からないと思ったそう。しかし、後から次男は小姑娘さんと避難していたことが分かった。その 2 人は、火から逃れるために夢中で逃げたら、気づくと天神山にある金

太郎温泉付近まで来ていた。（銀座通り商店街から金太郎温泉までは4.7キロメートルの距離がある。徒歩で1時間11分以上もかかる。）逃げた先に避難所などは無かったが、その時は、吉島（きちじま）という地域のりんご農家である富居（ふごう）さんの家に泊めてもらったそうだ。大火が落ち着いた後、沢泉さんは、「次男と小姑さんは吉島の方に避難している」という情報を聞き、合流できた。今でも富居さんとは交友関係を続けており、りんごが旬の時期を迎えると、富居さんから購入しているそうだ。

以上のおふたり以外にも聞き取りを行ったが、お寺や、親戚の家に避難したという方が多かった。現在は避難することになれば、市区町村が決めた避難所に避難することが一般的だが、大火当時は避難場所というよりも、親戚の家やお寺、山に逃げ近隣住民の家に泊めてもらうという場合が多いと感じた。このお話を伺ったときは、人間関係のつながりの深さを感じることができた。また、広範囲において燃え広がり、明け方まで鎮火しなかったほどの大火災にも関わらず、死者がそれほど多くなかったのは、お互いに助け合って避難していたからだろうと感じた。

3. 防火建築帯の昔

3-1. 防火建築帯とは

魚津大火のような都市部の火災延焼を防ぐため、昭和27年5月施行に耐火建築促進法³⁾が施行された。それにもとづき国が地域を指定し、地上3階建て以上の耐火建築物を带状に建てて防火帯にしたものを「防火建築帯」と呼ぶ。ただし、権利者が複数に及ぶため、老朽化しても建て替えに難航しているところが多い。

耐火建築促進法では、防火建築帯は3階建て以上のものと定められているが、住民の話によると、当時は2階建てにするか、3階建てにするか選ぶことができたそうだ。

また、防火建築帯は「芸術不動産」としての価値も認められつつある。横浜市では、平成29（2017）年に、市中心部に相次いで建築された防火建築帯を、民間主導で「芸術不動産」として活用しようと、市が建物所有者とアーティストらをつなぐモデル事業がスタートした。⁴⁾

魚津商店街の防火建築帯も空き家にするのではなく、新たに利用されているところがある。中央通り商店街の端の、銀座通り商店街につながる橋の近くにある防火建築帯の建物の一つは、神奈川大学の教授が買い取り、その学生がリフォームを行っている。将来的には、その場所で店を開くそうだ。また、魚津市出身で関東の方からUターンをして防火建築帯の建物の1つにお店を開いた原さんのように、活性化のために新しくお店を開く方もいる。

よって、防火建築帯は、ただの古くなった建築物ではなく、「芸術不動産」や新たなビジネスを行うことができる場所として見直されていることが分かる。



写真4-1 建築された当時の防火建築帯（『図説 魚津の歴史』より引用）

3-2. 防火建築帯ができた当時のお店

防火建築帯ができた当時からお店を営む方に、当時の様子や、どんな客が来ていたかを知るために聞き取り調査を行った。特に詳しくお話を伺うことができたのは「純喫茶 Fuji」の経営者である、前田喜子さん（81歳）である。

前田さんは50年近くお店を続けられており、ご本人曰く、そのことが「ボケ防止に繋がっている」のだそうだ。

店を始めた当初は喫茶店ではなく、自転車屋を営んでいた。しかし、だんだんと自動車社会になったことで経営不振になり、自転車屋を閉めた。店を閉めたことで収入が減ったが、子供もいたので自営業でもできる仕事を探し、新しく喫茶店を始めた。当時はUCCから派遣された社員から、喫茶店経営のノウハウを教えてもらったそうだ。始めた当初の営業時間は8:00~24:00で、4、5人の従業員を雇い、年中無休で営業していた。20年ほど前が最も忙しく、当時3交代制勤務だったカーバイド工業の勤務者がよく来ていた。また、漁師のお客も多く、朝に一度お店に来て、その後も同じ日に何回も来る人もいたそうだ。喫茶店を始めて10年ほど経ち、子供が小学生になった頃から、日曜日を休みにして、営業時間を9:00~20:00に変更した。以前は、徒歩や自転車で来るお客さんが多かったが、自動車が普及してからは、駐車場が無いなどの関係でお客さんが減った。現在は9:00~16:30までの営業となっており、お客さんも常連さんが一日に10人ほど来るだけである。女性客は家

事が終わってからの午前中に来ることが多く、男性客は 15 : 00 ごろが多い。

他のお店にも聞き取り調査を行ったところ、防火建築帯ができた当時のお店のお客さんは、漁師やカーバイド工業で働く方が多いことが分かった。当時は、今よりも漁や工業が盛んであったことから、当時は漁師やカーバイド工業のお客さんが商店街の経済を回している部分があると感じた。



写真 4－2 現在の防火建築帯（2021 年 11 月 21 日、筆者撮影）

4. 防火建築帯の今

4－1. 防火建築帯に住む人々

魚津商店街に、64 年程前に建てられた防火建築帯だが、住民たちが修復などを行い続けることにより、現在でも住居や店舗として残って生活の拠点となっている。そこに住む住人は、防火建築帯の住居に住むことに対してどう思っているのか、何か不便な点や不満に思うことはないのか、などが気になった。そこで、今も防火建築帯の住居で商売を行ったり、生活を続ける人にお話を伺った。お話を伺ったのは、銀座通り商店街にある「ヘアーサロン オオタ」の太田栄信さんと、中央通り商店街にある「じんぼ」の関口りつさんである。

「ヘアーサロン オオタ」の太田栄信さん（73 歳）からの聞き取り

「ヘアーサロン オオタ」は、中央通り商店街に行くことができる橋のそばにあり、銀座通り商店街の最も端に位置する。開店したのは 60 年ほど前で、現在の店主である太田栄信さんは 3 代目にあたる。太田さんは、大火当時は小学生くらいだったこともあり、大火当時の事はあまり記憶にないそうだ。しかし、現在も防火建築帯でお店を経営されているので、防火建築帯に住んでいて何か不便なことや気になることはないかと尋ねたところ、いくつかあげてくださった。

一つ目は、雨漏りの問題である。建った当初のお店は、2階建てであったそう。しかし、雨漏りが起きるようになったため、40年ほど前（防火建築帯ができて20年ほど建った頃）に3階を建て増したという。雨漏りを防ぐための蓋をするようなイメージである。しばらくはそれで事足りていたが、そこも老朽化が進み、4、5年ほど前に再び雨漏りが起きるようになってしまった。その雨漏りも防がなくてはいけないため、また屋根を修理したそうである。

二つ目は、隣家の物音や声がよく聞こえてしまうことである。防火建築帯は、長い長方形の建物を一枚の壁で区切った、長屋のような造りである。隣家との境は壁一枚で隙間が無く、音が響くそう。このため、隣家の人が階段を上り下りする足音や話し声などが聞こえるそう。よく聞こうとすると、何を話しているのか分かるほどであるという。しかし、子供の頃からのことであるため、それほど気にならないそう。

太田さんは、住み続けていて、防火建築帯の建物自体にも寿命が来ているように感じているという。鉄骨と鉄筋が組み合わさっているため、もしかすると、ズレが生じているかもしれないと仰っていた。

「じんぼ」の関口りつさん（67歳）からの聞き取り

「じんぼ」は、銀座通りと中央通りをつなぐ橋の近くにあり、中央通り商店街の端に位置する、布、糸、毛糸などを販売する手芸用品専門店である。販売だけでなく、手芸教室や己書の教室も開いている。営業時間は、10時～17時である。以前は卸売と小売を行っていたが、現在は小売のみである。客層は、60代のお客が多い。現在の経営者である関口さんは3代目であり、関口さん一人で切り盛りしている。

関口さんに、防火建築帯に住んでいて、不便に思うことや問題に思うことがないか伺ったところ、いくつかあげてくださった。一つ目は、「ヘアーサロン オオタ」の太田さんから伺ったのと同じ、雨漏りの問題である。太田さんからこの問題を伺ったときは、太田さんの家だけ、もしくは一部の家だけかと思っていた。しかし、関口さんによると、建物の老朽化が進んだことにより、ほぼ全部の家が雨漏りの被害にあっているそう。もともと2階建てか3階建ての家屋が何十年か前から雨漏りし始めた。修理しても何年か経つとまた雨漏りし始めて、また修理する、というパターンがどこにでもあるのだそう。

二つ目は、空き家の問題である。この問題は、親の代が店を営んでいても、子供が就職や結婚で魚津市外に出てしまうと、親が亡くなったときに家屋の持ち主がいなくなり空き家化する、というものである。「じんぼ」の隣家（写真4-3）も空き家であるが、それによる影響が出てきている。その隣家の前の道はもともと通学路だったが、老朽化により、窓ガラスや外壁が道に落ちて危険であるため、車道を挟んだ反対側の歩道に通学路を変更せざるを得なくなった。現在の持ち主は市が調べても分からなかった。また、権利問題が発生するため工事をすることもできない。このように、単に空き家があること以上の、具体的な問題も起きている。

今回の調査では上の2軒以外でも聞き取りを行ったが、老朽化による雨漏りの問題は共通していた。どの家も雨漏りに悩んでおり、対処するために増築を行っていることが分かった。一般的な家であれば、リフォーム、あるいは取り壊して新たに建て直すことも可能である。しかし、防火建築帯の場合は、隣家と壁一枚で繋がっているため、そうすることができない。老朽化によって、雨漏りや空き家問題に加えてさらに問題が発生すると考えられるが、それにどのように対処していくかが、今後の課題であるように考えられる。



写真4-3 空き家化した「じんぼ」隣家の2、3階部分
(2021年11月21日、筆者撮影)

おわりに

この章では、魚津大火や防火建築帯についての調査報告を行った。大火を実際に経験した住民に当時の話を伺ったが、人間力や、住民同士のつながりの強さを感じた。最も印象に残っている話は、「鮮魚の山崎」の山崎さんから聞いた、大火の次の日には商売を再開していたという話だ。歴史的な災害が起きた後でも動揺するのではなく、どんな状況でもお客の事を考えて商売を再開できることに驚いた。また、魚津大火の延焼範囲は広範囲であったにも関わらず、死者は4人であったという。これは、住民同士が臨機応変に対応して協力し合い、避難できたからだろうと思った。

防火建築帯は、単なる魚津大火の復興事業として建てられた建物というだけでなく、大火の記憶を後世に繋ぐ遺産であるように感じた。当時は防火建築帯完成のパレードなどが行

われ、もの珍しく感じられたことだろう。しかし、現在その建物で生活している住民の声を聞いたが、防火建築帯が重荷になっているように感じているようであった。

その一方で、その建築帯の利用価値がだんだんと高まってきている様子も見られた。自分のお店を持ちたいという思いを持つ人たちによって、空き家となっている部分が店舗に生まれ変わっているからだ。例えば、bel tempo という焼き菓子のお店や、MCR STORE というカルチャーストアは、中央通り商店街の防火建築帯で商売を行っている。このように、防火建築帯の空き家化しているスペースが利用されることで、空き家化防止になり、年齢が若いお客の集客も見込める。空き家問題が深刻化していく中、このように利用されることで防火建築帯の活用法として再注目されるのではないだろうかと感じた

調査を行った魚津商店街だが、空き屋化しつつある家屋がお店になれば、今以上の集客を望むことができる。1つのお店の集客率をアップさせることは、商店街にある他のお店の集客にもつながる。空き家は商店街の重荷であるように捉えがちだが、その空き家となっている部分に新たなお店を開くことができれば、強みに変わらと思う。このようにしてお店が少しずつ増やす事ができれば、商店街全体も廃れることなく賑わいを保つことができると思った。

注

- 1) 現在、商店街に住む方たちはこの道路のことを「22メートル道路」と呼ぶ。
- 2) 北陸電力 新川支店（魚津市新江口 504 番地）
- 3) この法律は、都市における耐火建築物の建築を促進し、防火建築帯の造成を図り、火災その他の災害の防止、土地の合理的利用の増進及び木材の消費の節約に役立て、公共の福祉に寄与することを目的とする。防火建築帯は、都市の枢要地帯にあつて、地上階数3以上の耐火建築物が帯状に建築された防火帯となるように造られなければならない。
- 4) 横浜みなと新聞 | 神奈川新聞 | 2017年2月6日のネット記事を参考
- 5) 完成した防火建築帯（中央通り）をパレードする魚高野球部（昭和33〔1959〕年8月）
- 6) 己書とは、書き方にルールはなく、自由に書いて自分の世界観を表現する書法のこと

参考文献

魚津市史編纂委員会、1972年『魚津市史』魚津市。
魚津市史編纂委員会、2012年『図説 魚津の歴史』魚津市。

参考にした新聞記事およびウェブサイト

カナロコ——他にはない神奈川のニュースを！「「芸術不動産」で街活性化 横浜の防火建築再生」『神奈川新聞』2017年2月6日

〈<https://www.kanaloco.jp/special/kikaku/minato/entry-8019.html>〉 (2020/12/19 閲覧)

コトバンク「防火建築帯とは」

〈<https://kotobank.jp/word/%E9%98%B2%E7%81%AB%E5%BB%BA%E7%AF%89%E5%B8%AF-888244>〉 (2020/12/19 閲覧)

衆議院「法律第百六十号 (昭二十七・五・三一)」

〈http://www.shugiin.go.jp/internet/itdb_housei.nsf/html/houritsu/01319520531160.htm〉 (2020/12/19 閲覧)

日本己書道場「己書って何？」

〈<https://www.onoresho.jp/information/what.html>〉 (2020/12/05 閲覧)

わが町 魚津市「「魚津大火復興 50 周年記念誌 魚津大火の記録」を読んで」

〈<http://osamabin.web.fc2.com/taikakiroku.html>〉 (2020/11/11 閲覧)

第5章 文化町通りの記憶

小林 一世

はじめに

現在、魚津市中心部の商店街は人通りが少なく、シャッターが閉まっている店も少なくない。だが、調査を進めるなかで、昔は人がよく集まり、店も繁盛していたというお話を聞いた。そこで当時、町はどんな様子だったのか、またどのようにして繁盛していたのか知りたくなった。実際に商店街に足を運んでみると、衰退傾向にあるという当初の印象とは違って、若者が集まるようなお店があることや再び商店街を盛り上げようと取り組んでいる人たちがいることが分かった。そうした「現在」の取り組みにも関心はあるが、それについては第6章（太田担当）に譲ることにして、本章では商店街の中でも「文化町通り」の過去の記憶に焦点を当て、まとめていきたいと思う。

今回、文化町通りに関する調査を行ってみて、文化町通りについて書かれている本が後述する『文化町小史』だけと、きわめて少ないことが分かった。そこで、人びとが実際に話してくださるエピソードをまとめていくことが大切だと思った。今回の調査では、文化町商店街にお店を構える、ないしかつて構えていた、井田商店の井田さん、楽器店を営む川上信さん、ハリウッド化粧品の方に主にお話を伺った。文字として残らないエピソードと同時に、『文化町小史』に記録されていることもまとめて考察していきたい。商店街は私を含め3人で調査をしているので、情報を共有し、商店街の繋がりについてもまとめたい。

1. 文化町の概要

文化町とは、新宿通りと中央通りの間にある商店街で、その長さは約 300 メートルである。すぐ隣には電鉄魚津駅やバスも通っており、アクセスが良い。現在の道幅はそれほど狭くはないが、一方通行となっているため自動車では中央通り側からしか通行することができない。かつてはもっと道幅が狭く、広くなったのは昭和 55（1990）年だそうだ。魚津大火の経験から消防車が通ることができないような道幅では危険だという判断から道路の整備が行われた。楽器店を営む川上信さん（70 代）によると、「キャデラック、今で言うリムジンでピアノを買いに来たお客さんがいたが、道が狭すぎて通ることができなかった。」と語った。

魚津中心部の商店街には中央通り・新宿通り・銀座通り・文化町通りの4つの通りがあるが、その中でも文化町通りは最も新しい通りである。文化町という名前の由来としては、洋館が多かったからという説と、先生や画家、エッセイストなどの文化人が多かったからという説を聞いた（「文化町」の名称の由来に関しては、次節で後述するように、さらに異説も

ある)。魚津城跡にかつてあった遊郭が、そこに尋常小学校が出来るという理由で文化町通りに移ったのだというお話も聞いた。この真偽は不明だが、文化町が夜の町として華やかだったことも、この話からうかがえる。飲み屋・八百屋・魚屋は豊富だったが、肉屋と自転車屋が無くて不便だったそう。



写真 5－1 現在の文化町通り（筆者撮影）

井田さんによると、魚津は浜町から荒町・銀座という順に栄えて、順に廃れていったという。かつて、魚津駅からは大阪行き汽車が発着していた。このため、大阪等の県外から魚津に出張に来る人が当時は多く、文化町には旅館も多かったという。しかし、新幹線が導入されて大阪便がなくなると、旅館も廃業に追い込まれた。

商店街はまた、車社会への移行とともに変化していった。商店街には駐車場がないため、サンプラザなどの郊外の大型店舗が昭和 53（1978）年以降に出来始めると、多大な影響を受けた。現在でも商店街には無料の駐車場が 5、6 台分しかない。かつては現在と違い、買いだめができない時代だったため商店街に行く人たちが多かった。しかし現在では買いだめができる時代なので、人々は車で大型店舗にいき大量の商品を買うようになった。また、昭和 41（1966）年には、新宿（電鉄魚津駅近く）にあった市役所が釈迦堂（新魚津駅近く）に移動した。この変化は、文化町だけではなく、商店街全体の人の流れを変えるほどのインパクトをもった。

現在文化町通りを歩いて住宅地を見てみると、以前はお店をやっていたような家が多い。店が住宅地が変わっていった時期を聞くと、平成 5（1993）年から平成 10（1998）年の間だという。ちょうどその時期に土地が安くなってきたそう。昭和 60（1985）年頃はまだお店が多かったそう。

文化町は商店街の中でも最も新しい通りなので、できた当時は他の通りから下に見られることはあったかもしれないと、川上さんはおっしゃっていた。その一方で、通り同士の対

立はなかった。その理由として川上さんは、「みんな儲けていて気分が良かったからだろう」と語った。

昭和 31 (1956) 年 9 月 10 日に起こった魚津大火は、中央通りを中心に町を焼き尽くしたが、文化町通りは風向きと近くにある川の影響で火災が起こることはなかった。大火は夕方から次の日の朝まで燃え続けた。蔵が燃えることが多かった。燃えていない蔵を火事が収まった後に開け、酸素が入って燃えたケースもあったそうだ。避難先は親戚の家が多かった。(詳しくは本報告書の第 4 章〔大坂担当〕を参照)

2. 記録に残る文化町

文化町通りに関する数少ない文献の一つに、広田健太郎著『文化町小史』(1959 年)がある。著者の広田は、以前満州の官吏として開拓地の農地計画をし、理想的な農村を作ることが仕事であった。その経験を生かし、幼少期を過ごしたこの地の開発を独力で計画した。莫大な私財を投じるなど文化町の繁栄に大きな影響を与えた。本節では、『文化町小史』をもとに、文化町が繁栄していく様子を記述する。



写真 5-2 昭和 30 年頃の文化町通り (『新川の昭和』より)

2-1. 文化町という名称について

文化町という名称がつく前は、まだ家も5、6軒しかなく、通りになるほど立派な町になるとは誰も予想していなかった。著者である広田が上京した時（大正9〔1920〕年頃）、日本経済は膨張期に入っており、郊外に和洋折衷様式の「文化住宅」がめざましい勢いで建てられつつあった。当時、世界大戦終結後の平和を記念して平和記念東京博覧会が上野公園で行われていた。その博覧会に「文化村」という会場があり、そこには時代の先を行く設計がされた見本建築が並べられた。広田はこの「文化村」に大変感銘を受け、頭から離れなくなったそうだ。そこで広田が春の祝宴会で、この地域の名称を「文化町」としてはどうかと提案したところ、満場一致でその名に決まったという。

2-2. 劇場新設の話

建設業で各地を回っていた山田何某という人物が、魚津を気に入って、余生を過ごしたいと考えていた。また、劇場のように、その日のうちに収入が分かる仕事にも興味があったことから、魚津で劇場を新設したいと考えた。文化町の発展を願っていた広田は劇場の新設に賛成し、土地を手配する協力をした。県庁や既設の劇場からの許可などスムーズに計画が実行されないという問題もあり、すぐに建設はできなかったが、友人である大城氏の協力もあり、何とか魚津劇場を建設した。当初は劇場としてのみ、運営を行う予定であったが、映画の鑑賞も可能になった。その後、この劇場は魚津で最初にトーキー（映像と音声同期した映画）を鑑賞できる劇場として有名になった。この地を文化町という名称にした頃は閑静な地帯を目指していたが、劇場を建設したことによって飲食店や歓楽施設が次第に増えていったため、広田らは、この町を歓楽地帯として盛り上げていくことを考えるようになっていったという。

劇場に関しては井田さんからもお話を聞くことが出来た。劇場は今も文化町通りに建物を残している。井田商店と魚津劇場は、20メートル程しか離れていなかった。そのため、当時映画館の音が井田さんの住まいにまる聞こえだったという。井田さんは小学生の頃から店番をおこなっており、映画館が近かったので、ナイトショーがあった日はたばこがよく売れ、当時魚津で一番たばこが売れたそうだ。

2-3. 電鉄魚津駅の完成

かつて、現在の電鉄魚津駅付近にはほとんど家がなく、湿田や沼地が広がっていた。魚津にまだ鉄道が繋がっていなかった頃は、電鉄の資本は少なく、業態が危ぶまれることがあった。そのため、電鉄が魚津まで延長したいという意向が噂になったときは誰一人と信じることはなかった。完成までには問題があり、時間がかかった。特に土地の問題では、電鉄側と地主の間での価格交渉や条件の食い違いによって、交渉が難航した。その際に広田をはじめとする文化町の人々によって土地の提供などが行われ、その結果ようやく電鉄魚津駅が完成した。文化町の人々の協力がなければ、電鉄魚津駅の完成と、のちの歓楽地帯としての発

展はなかったと言っても過言ではない。文化町がのちに歓楽地帯として発展した大きな理由として、電鉄魚津駅の建設が欠かせなかった。

2-4. 料理屋等指定地の指定

当時は、芸妓置屋や料理屋は指定された地域でないと営業することができなかった。教育上の配慮からか、女子校と一定の距離をとることも、建築のためには必要だった。文化町は、指定地にされる前から飲み屋に似た建物が増加していたため、指定地の許可をいち早く取ることが求められた。劇場ができてから、文化町に対する関心が高まり、このように画策する人が増加した。劇場の建設や電鉄の延長の時のように、住民の許可を取ることは簡単ではなかったが、許可取得後は急速に料理屋や芸妓置屋の経営者が増えていった。こうして町に歓楽的な雰囲気が漂った。文化町のような小さな町が急速に繁栄していく姿は異様なものであり、話題になった。広田は、「意味の無いことにお金をかけてしまったこともあったが、これも文化町の繁栄に繋がっている。」と記している。

3. 「あの頃」の文化町通りにまつわる記憶

本節では川上楽器店を営む川上さん、井田商店を営んでいた井田さんの語りを中心に、主に昭和40（1965）年から昭和60（1985）年にかけて、文化町通りに活気があった頃の「記憶」を記述する。

3-1. 当時の文化町の様子

聞き取り調査に応じてくださった方々の記憶によると、文化町通りにもっとも活気があったのは、昭和40（1965）年から昭和60（1985）年にかけての頃だったようだ。当時は魚津市中心部も活気と人口にあふれていた頃で、真偽のほどは不明ながら、戦後ベビーブーマーが進学する頃には、魚津にある中学校の全校生徒が2,500人もいたくらいだったという。そのなかでも文化町は特別なエネルギーを放っていたようだ。約300メートルの通りに150軒ものお店が並んでいたという。1軒あたりの幅は、わずか5メートルだった。道路幅が狭いにも関わらず人通りが非常に多かったので、夕方3時から夜の8時までは通行止めにし、歩行者天国にしていた。当時の文化町の人混は大変なものだったらしく、川上さんは、東京の上野にある「アメ横」に初めて旅行で訪れたときに、「（文化町通りよりも）人が少ない」と感じたと話した。

3-2. 「飲み屋横丁」

お話を聞いたところ、文化町通りにおける人口に対する飲み屋の数が全国でもかなり上位だったということを、多くの人が語っていた。昭和40（1965）年頃に高架線の工事で他の地域から労働者が集まった。これを機に居酒屋が増えていき、40軒ほどまでになったの

だという。文化町の中でも特に、鴨川の通りに喫茶店や飲み屋が多かった。そのため、「飲み屋横丁」と呼ばれていた。大きなステージがついたキャバレーもあり、そこで演奏するバンドは売れるとよく言われていた。当時中学生だった川上さんは、毎晩通りが賑やかでうるさかったので、夜は早めに睡眠をとり、明け方に勉強をするようにしていたそうだ。その方が勉強に身が入ったからだという。

文化町には芸者を呼び宴会をおこなう高級料亭が3軒あり、稼ぎの良かった漁師らが利用することが多かった。調査では、踊りや鳴物で客をもてなした芸者にまつわるお話も多く聞くことができた。芸者を呼ぶには1時間2万円ほど、高級料亭は1席3万円ほどだった。川上さんは「芸者は14時頃に銭湯に行き、つやつやのすっぴん顔で戻ってくる。夜になると化けるんだ。」と語った。当時は「蜃気楼音頭」という、地区同士で踊りを競い合う祭りがあり、文化町通りは踊りのプロである芸者に直接指導してもらえていたので、よく優勝していたそうだ。化粧品店で伺ったお話では、昭和40（1965）年頃は、夜10時頃まで店を開けていても芸者さんたちが化粧品を購入しに来たそうだ。タバコ屋を営んでいた井田商店の井田さんによると、たばこが飲み屋によく売れたそうで、現在では馴染みが少ないツケ払いが主流で月末に支払いがおこなわれていたそうだ。

「赤ちょうちん」と呼ばれる店もあり、そこは少人数で飲めて、気軽に芸者が呼べる店だった。料理はその店で作ったものではなく、別の店から運ばれてきたという。川上さんが20代だった50年ほど前は、飲みに行くとき7軒ほどハシゴすることは当たり前だった。飲み代は全部あわせても1万円かからなかった。「いまとは違って昔は飲み代が安かった。」という。

家や店の前ではよく喧嘩が起こっていて、川上さんの同級生が喧嘩をしていることもあったそうだ。家の前で喧嘩をしている人たちが多かったが、彼らは家主が電気を付けると、人が観ていると気づいて別の場所に移動していったという。ただ、ガラス張りの家の前ではガラスを割ってしまうと迷惑だという理由のため、喧嘩は起らなかった。また、警察が来ても捕まる前に逃げてしまうというのがわかっているため、警察は呼ばれてもなかなか来なかった。

3-3. 労働者たち

「企業城下町」と呼ばれるほどだった魚津とあって、カーバイド工業は魚津の経済の中心だった。当時、カーバイドに就職すれば将来は安定だと考えられていた。そのカーバイド工業に出勤する人たちは、電鉄魚津駅を利用していたので文化町通りをよく通っていた。

また、昭和40（1965）年頃には電鉄魚津駅の高架線が完成したが、建設作業には多くの労働者が携わっていた。完成までの約2年半のあいだ、約2,000人の労働者が魚津にやってきて寝泊まりしていたという。当時は魚津という地方に高架線ができたことは話題になったそうだ。

この労働者と魚津の漁師たちの間で、喧嘩が頻繁に起った。漁師は仕事終わりにそのまま

銭湯に行き、その後よく飲みに行っていた。そこで、高架線の工事をする労働者と出会ったのである。特に、飲み屋で喧嘩になることが多かったので、店の外には喧嘩に使うための竹刀やバットが置かれていたりもした。川上さんは当時を思い出して、「死人はでなかったが、激しい喧嘩が絶えなかった。」と話した。現在では喧嘩を目の当たりにすることは少ないが、その当時は喧嘩が日常茶飯事だったことが、この語りからもうかがえた。他にも、他の地域から半年から1年ほどのあいだ遠洋漁業のために文化町にやってくる漁師とカーバイドで働く社員とのあいだでも、喧嘩があったという話も聞くことができた。

3-4. 道幅とアーケード

かつての文化町の道幅は 3.8 メートルであり、その頃は田んぼや農道が多かった。昭和 55 (1980) 年にアーケードを作ることを視野に入れて、道幅を 4.4 メートルに広げた。当時、新築を建てる時は、道路から 1 メートル距離を取らなければならなかった。現在でも新規加入店は 1 メートルの間をあけて建築しなければならない。

しかし計画とは裏腹に、文化町では結局、中央通りのようなアーケードを作らなかった。その理由としては、住宅の工事とアーケードの建築あわせて、一軒あたり 800 万円もの費用がかかることと、アーケードの耐用年数が 40 年しかないことがある。費用がこれだけ莫大だったのは、アーケード内で火事が起こったときに煙を逃がす構造（オープンカーのように天井を開ける構造）にしなければならなかったからである。富山市にある中央通りのアーケードはこの構造になっておらず、現在取り壊す工事がおこなわれているが、費用がかかりすぎて全てを取り壊すことができていないそうだ。

3-5. 祭り

「夜店祭り」という祭りが、昭和 60 (1985) 年頃から開催されていた。時期は 8 月の第 1 および第 2 の土日で、4 つの通りを一周できる構造になっていたそうだ。商工会から通りごとに 100 万円の援助があった。商店街に最も活気があった昭和 40 (1965) 年頃には開催していなかったが、川上さんはその理由を、当時は「人多すぎてできなかった」のではないかと推測する。このような出店のある祭りでは、別の地域から出店すると地元の店が嫌がらせをすることが多かったが、文化町にはそうした行動が起こらないように、出店を取り仕切っていた人が睨みを利かせていたので、嫌がらせはなかったらしい。ある年、夜店が開催される日に大雨が降り、電車で落雷して火事が起きるといった出来事があった。これがきっかけで、天気が崩れることが多いこの時期に開催できるかどうかを判断することは難しいということで、夜店祭りが開催されることはなくなった。

調査中、「香具師祭り」という名称の別の祭りのことも耳にしたが、これは中央通りが中心となって開催される祭りで、文化町通りはあまり関係が無かったようである。中央通りにある神明社（現在の魚津神社）の祭りで、中央通りには食べ物やおもちゃ、22 メートル道路には植木や陶器、農耕具、中央通りの交差点には射的やゲームなど、全部で約 300 軒の香

具師が出店していた。この時に、わざわざ山から下りてきて農耕具を買っていく人たちもいたそうだ。川上さんは「出店でその時の流行が分かる。」とか、祭りでは「衝動買いをしよう。」と語っていた。

神輿祭りについても聞くことができた。神輿は、かつては本江社に 10 基ほど、八幡社に 6 基あった。昔はお金の代わりに野菜や米が集まることもあったそうだ。祭りの時に神輿を本江地内に移動すると必ず喧嘩になった。昭和 50（1975）年より前の話で、15 年から 20 年ほど続いた。現在は本江社の神輿が大・中・小の 3 基神輿がある。

祭りを開催する際には、人々の交流を一番大切にしていたそうだ。井田さんは、「昔は仕事をしている人でも時間的に自由が利いた。だから平日に祭りを開催しても人手が足りた。」と語っていた。しかし、時代が変わっていくと自由が利かなくなり、それと共に祭りが衰退していったという。

3-6. ファッションの町

「飲み屋横丁」の異名をもち喧嘩で知られた文化町だが、未成年の若者に縁遠い存在だったわけではない。魚津で生まれ育った女性（推定 50 歳前後）は、中学生・高校生当時を思い出しながら、「昔は、文化町に行かなければ流行の洋服が手に入らなかった。」と語った。魚津の他の商店街と比べても、文化町は流行に敏感な場所だったようだ。川上さんも、「当時は、1 日 1 回は文化町通りを歩くことが当たり前だった。」と語った。この 2 つの話を聞いたとき、お二人の口調や話の内容から、当時の文化町通りは粋であり、文化町通りに憧れを抱いている若者が多かったのではないかと考えた。

この語りを踏まえ、文化町ではどのような服屋があったのか聞き取りをおこなってみた。文化町には洋服を販売している店が多かったという。売り上げはかなり良かったそうだ。客層は幅広く、いろんな年代の方が着られる服があった。オーダーメイドができる店があったり、農家向けの作業服を販売している店もあった。経営者は黒部や滑川、富山など別の地域から来た人が多かった。洋服屋に限らず、商店街で勢いがついた店は富山市に出店することも多かった。

おわりに

聞き取り調査をしたり文献を読んだことで、かつての文化町は歓楽地帯として繁栄していた町ということが分かったが、それは現在の文化町の姿から想像できるものではない。初めて川上さんとお話をして、かつての文化町通りについて教わった時は、あまりに現在の文化町通りからかけ離れていて、作り話のように感じてしまったほどである。しかし、お話を聞いた後に町を歩いてみると、かつては商店を営んでいたことが分かるような住居があったり、潰れたスナックがそのままの形で残っていたりしていることに気づいた。地元の人の語りを通じて、以前は何十軒も店が並び、夜は歓楽地として賑わっていたことが想像できる

ようになった。その想像力を手がかりに『文化町小史』を読むと、劇場が新設されたことがきっかけに飲み屋が急増したという、町の歴史の記述に気が付いた。記述を読み進めていくうちに、本当に文化町は歓楽地帯として繁栄し、人が集まる場所だったということをはじめて実感できた。

調査をしてみて興味深かったことは、記憶としての文化町と記録としての文化町のあいだに違いがあったことである。例えば、川上さんの記憶では文化町に遊郭は存在しなかったが、『文化町小史』では、鴨川付近に遊郭が存在しており、遊女がきれいな姿で銭湯に行く姿が見られたと記述されている。また、文化町という名称になった由来についても違いが見られた。川上さんによると、文化町に（教師や画家、エッセイスト）文化人が多かったことがその由来であり、井田さんによると、洋風の建物が多かったというのがその理由であるということだった。

聞き取り調査をしている時に「漁師」という言葉が何度も出てきたことも印象的であった。私の生まれ育った三重県志摩市も魚津や文化町と同じように漁師の多い土地柄である。文化町の漁師と同じように、私の地元の漁師も金遣いが荒く、血気盛んな人たちという印象がある。今回の聞き取り調査では、漁師が町にお金を落としていくことが、町の繁栄に大きな影響を与えるということがよくわかった。また、芸者や遊郭があったことの背景にも漁師の存在が大きく影響しているはずだ。

文化町が一番活気のある頃の話を知っていると、羨ましいと思った。夜の町としての文化町も楽しいだろうし、服屋で賑わっていた文化町も粋で良いと思った。近くには劇場もあり、馴染みのある友達もいるから、文化町という小さな町のなかには楽しめるものがそろっていると思った。私が育った三重県志摩市の越賀という地区は文化町のように賑わってはいなかったが、文化町と同じく小さな町で、そのためか、近所付き合いが盛んで、町の多くの人を知り合いだという共通点がある。これは私が文化町を調査地として選んだ理由の一つでもある。

何よりも、川上さんが文化町での昔の思い出を楽しそうに語っている姿から、川上さんにとって文化町は大切な場所であるということが伝わってきた。確かに、文献に記された情報の方が思い出話より正確かもしれない。しかし、思い出話を聞くことで、文献を読んだときには想像できなかった町の雰囲気を感じることができたり、文献には書かれていないことを聞くことができ、より当時の様子を理解することが出来た。私にとっても地元は大切な場所なので、川上さんのような方からお話が聞けたことは大きな収穫だった。

参考文献

いき出版（企画・制作）、2012年『写真アルバム 新川の昭和』いき出版。

広田健太郎、1959年『文化町小史』広田健太郎（私家版）。

第6章 魚津商店街の変遷——新しい商店と商売の在り方の変化

太田 彩葉

はじめに

現在、各都道府県が把握している商店街は全国で14,035件あり老朽化や後継者問題、消費スタイルの変化や大型店の出現などにより様々な問題を抱えている。昭和45(1970)年から3年ごとに行われている中小企業庁によるアンケート調査では、平成30(2018)年度の結果として商店街の平均店舗数が50.7店舗、1商店街あたりの空き店舗率は13.77%(前回調査より0.6%増加)である。これは平成21(2009)年から連続して10%を超えており、全国の商店街の約4割で、空き家率10%を超えているのだという。さらに過去3年間に退店した店舗数の平均は1商店街あたり4店舗で、店主の高齢化や後継者の不在といった理由が74%を占めた。空き家は今後も増加するだろうと回答した商店街も53.7%と過去最高値であったという。

かつての魚津は、北陸街道の宿場町、魚津城の城下町として産業、商業の中心地であり、商業の中心であった。現在の商店街は4つの通り(図5-1)に分かれていて、それぞれ通りごとの特徴がある。初めて魚津の商店街を訪れたときに閑散としており空き店舗が目立っていた。この印象は、先述の全国的な傾向と同じものである。しかし、歴史を感じさせる店に混じって新しい店もいくつかあり、商店街全体として新しい形を目指す雰囲気を感じられた。これは先の調査結果からはわからない現象である。

この章では昔から商店街で店を経営する方々による語りから、商店街をめぐるかつての思い出や商店の人々同士の関わり方について記す。また商店街の変化の過程とその結果として生まれた新しい店について、魚津市の取り組みや商店街を活性化させるべく新しい店を始めた方々へのインタビューをもとに記述する。

1. 魚津商店街の歴史

本節では『魚津市史 下巻 現代の歩み』(1972年)および『魚津市史 続巻現代編』(2012年)に基づいて魚津にある商店街についてまとめる。

現在ある魚津市の主要商店街は、昭和31(1956)年9月10日に起こった魚津大火(本報告書第3章を参照)によって焼失しその後再興した銀座通り商店街・中央通り商店街と、大火後に非商店街地域に新しく形成された文化町商店街・新宿通り商店街に二分される。旧商店街は自然発生的であり、旧国道沿いに町屋を並べて発展していった。

太平洋戦争前の近代における魚津商業の中心は大町通りにあり、荒町がそれに続いた。一方で小売店を中心とする通りとして門前町的色彩を有する真成寺町(銀座通り)・神明町(中

中央通り）があり、小売り、製造を行う最も大きな通りの金屋町（中央通り）とその裏手の金浦町がすそ野を広げ、北陸街道沿いに東進しながら発展したのが旧魚津町である。

全国的に戦前に都市の中心部が商店街化される傾向があり、戦後に強化され、昭和 20 年代後半、30 年代に全国的な取り組みとなった。以下ではそれぞれの通りの歴史について記述する。



図 5 - 1 魚津商店街の地図

銀座通り商店街

真成寺町にある商店街でかつては魚津銀座と呼ばれていた。この地域には、真成寺の他に常泉寺、長教寺など多くの寺院があり、寺院参詣の人々や買い物客でにぎわっていた。さらに昭和期の大衆娯楽である映画を上映する「帝国館」があったこともあって、昭和 20 年代には魚津地域の中心的な商店街となり魚津中からお客を集めた。魚津大火による焼失後は中央商店街と同様に防火建築帯の商店街となった。（防火建築帯については第 4 章を参照）

中央通り商店街（旧神明町、金屋町通り）

古くからの有力な商人の町屋・店舗が並び、一本の北陸街道筋にできた大きな通りから成る中央通り商店街は、魚津市街地のほぼ中央に位置している。昭和 31（1956）年の魚津大火前は道幅が非常に狭く、道路の真ん中から両側の店で買い物ができるくらいの道幅しかなかったが、大火で全ての店舗が焼失した。その後の復興工事の元、昭和 33（1958）年に近代的装いの商店が出来上がっていった。その後、昭和 34（1959）年までには街長 500 メートル、車道の幅員が 9 メートル、両側に幅員 3 メートルの歩道（アーケード）を有する防火

建築帯の商店街となった。

文化町商店街

文化町商店街は、大火を契機に仮店舗や新参の商店が自然発生した結果、急速な成長を見せ、その後10年ほどで魚津の中核を担う商店街へと発展した。文化町の誕生・発展の要因は大火だけではなく、昭和27(1952)年に鴨川橋が完成し交通が便利になり、電鉄魚津駅から中央通り商店街へ流れる客足や日本カーバイドなどの通勤人が急増したことも理由の一つである。道幅が非常に狭く、自動車は簡単に通行できなかった。文化町商店街では、将来の共同事業や資金活動を行うために「文化町商店街振興組合」という組合を発足し、魚津市で初めて商店街の法人化を図った。商店街発足当初は夜の街として栄えていたが、現在は文化町通りの店舗のほとんどが住宅地と化し、商店街としては機能していない。(文化町商店街に関しては第4章を参照)

新宿通り商店街

電鉄魚津駅から西に向けて伸びる県道沿いに形成された商店街であり、戦後の闇市から始まった。魚津唯一のバスターミナルによって隣村地域の人口を魚津町に運び、町の商店街化を支えた。昭和11(1936)年の電鉄魚津駅完成後は「電鉄魚津駅前通り」と呼ばれた。昭和30年代に道幅が拡張した後、昭和45(1970)年ごろには都市計画事業により現在の県道拡張工事と同時にアーケード設置運動が盛んになり、昭和48(1973)年にアーケードが完成した。この商店街は電鉄魚津駅と共に発展していたが、ステーションデパートと呼ばれる、駅の構内に展開する商業施設の閉店後は客足が少なくなったため、閉店する店舗が相次いだ。

2. 商店街の思い出——聞き取り調査から

本章では、銀座、中央、新宿の三つの通りのなかでそれぞれ古くからある商店に聞き取り調査を行い、そのお話をもとにそれぞれの通りの歴史について述べる。

2-1. 柿沢呉服店(銀座通り)

魚津で一番古い店といわれる、柿沢呉服店は、明治の初めから創業しており、現在の店主は5代目柿沢玲子さんである。現在は、呉服だけでなく着物や針、糸、毛糸、洋服生地、下着などを扱う呉服店である。聞き取り調査では柿沢玲子さん(79歳)にご協力いただいた。

柿沢さんに過去の店や商店街の様子を尋ねたところ、昔は従業員が多く在籍し、独身の番頭さんは住み込みで所帯持ちは通いで働いていたと話す。「口減らし」として小学校を卒業してすぐに働く者もあり、昔は中間問屋がなかったため直接京都に仕入れに行き水橋、朝日、滑川などから修行に来る者もいたそうだ。番頭さんのなかには、滑川や魚津市内の別の場所

に独立していく者もいた。

店を始めた頃は現在と同じく着物や針、糸、毛糸、洋服生地、下着などを扱っており、2代目柿沢亀太郎の時代（戦前）が一番繁盛していた。その当時は嫁に行く時に着物を持って行くという習慣があり、戦後も旅行に行くのに毎回違う着物を持って行ったり、PTAに着物で出席するという習慣があったため着物がよく売れるようになったそうだ。その結果店で扱う商品を段々と呉服のみに専門化していった。

バブル崩壊後は生活様式の変化によりタンスが売れなくなり、それに伴い着物の売り上げも減少していったと話す。普段使いされていた着物が段々と茶道や華道、成人式といった用途でしか使われなくなり、平成10（1998）年あたりから売り上げは大幅に減少した。

コロナウイルスの影響については、「こんなに出るとは思わなかった」というほど大きな被害をうけ、お客さんが減るのに加えて京都や金沢、関西、加賀からの仕入れを行っているため、問屋さんにしばらくは来ないでくれと伝えたそうだ。

現在は、お客さんのほとんどがお得意さんであり、新規のお客さんは展示会を通じて少ししかないと話されていた。

2-2. YOSHIDAYA（中央通り）

中央通りの鉄道側に位置するYOSHIDAYAは、明治35年創業の商店で、靴やカバンを扱っている。聞き取り調査では、現在の店主で4代目の吉田ゆうこさん（62歳）にご協力をいただいた。

YOSHIDAYAは、創業時から2代目までは下駄職人であり、またかつては現在の店舗の半分の広さで店を営業していた。3代目から履物を扱うようになった。4代目（吉田ゆうこさんの父親の代）の時に、隣にあった住居の持ち主に土地を買ってほしいと頼まれ、土地を購入し、店を増築した。

吉田さんによると、中央商店街にアーケードができたのは北陸では富山市総曲輪に次ぐ早さであったため、全国からアーケードを見学するために訪れる人がいたという。

30年位前までは子供が多く、商売が忙しいときはご近所の家で子供を預かってもらい、ご飯を食べさせてもらうこともあったと話されていた。

吉田さんはまた、祭りにまつわる思い出も話してくださった。なかでも、魚津神社の祭りの日には中央通りに毎年120軒を超える露天商がやってきたという。この祭りは現在も盛況で、令和元（2019）年6月もおおよそ100軒の露天商が軒を連ねた。

吉田さんに商店街のなかでの人間関係について尋ねたところ、近年のイベントの減少から同じ商店街にいても知らない顔が増えたと話された。特に、イベントや公民館活動がコロナ禍で中止になっただけでなく、ゴミ出しや買い物の際の立ち話も減り、人との関りがなくなっているという。さらに、東京や大阪、名古屋、九州などの取引先とテレワークでのやりとりになり、足型測定やセールスを3月頃から中止したそうだ。様々な書類のサインがタブレットに指で書いて入力する形からハンコに戻ったなど、至るところでコロナウイルスの

影響を受けたそうだ。

2-3. うらやま鮮魚店（新宿通り）

新宿通りの中央部分に位置するうらやま鮮魚店は昭和 27（1952）年創業の商店で、創業時から魚屋を営んでおり今年で 62 年目を迎える。現在は夫婦二人で商店を営んでいて聞き取り調査では浦山富男さん（80 歳）と廣子さん（78 歳）ご協力いただいた。

魚津市街地の商店街付近は魚津一の高齢者地区と言われており、そのためか魚を食べる人が多い。常連客のほかに郊外から一週間に一度訪れるお客さんや電話注文で注文だけを受けることもある。コロナ禍では客層である高齢者の外出が減り、近くの駅も閑散としており売り上げに大きな影響があったという。

浦山さんにも商店街の昔話を伺った。商店街が賑わいを見せた頃は、ヒラメの昆布巻きを毎年の正月を迎える前に三日三晩寝ずに準備するほど忙しかったとのことだ。現在は冷凍で保管するため前もって作ることができるが、当時は生の状態で 1 月 1 日に食べられるよう、直前に 100 本以上巻いていたと言う。その後サンプラザなどの大型店ができてから町が変わり、スーパーで魚以外の食品と一括で買い物をする人が増えて現在の客層に変化した。

組合や祭りによる商店街の方々同士の繋がりについてお話を聞いたところ、商店街にはいくつもの組合があり、現在浦山さんが所属しているのは「商店街振興組合」と呼ばれるものだ。現在はあまり活発に活動していない。

祭りについては、5 年ほど前まで行われていた「新宿商店街夜店祭り」が一番の盛り上がりを見せたという。祭り当日は人がすれ違うのが大変なほど通りが人で埋め尽くされるほどの盛況をみせていたそうで、毎年 8 月の第一土曜日に新宿通りのみで行われ、お寿司屋さんは巻き寿司を、餅屋さんは餅を店の前に出して販売していたと話す。浦山さんは魚を売ることはなく、店の前で自らの店の商品を出さない場合は町内の若い衆（新参会）が焼きそばや生ビールを売り、銀行ではビアガーデンが行われた。さらに、近くにある薬局の駐車場には舞台が設けられ芸人や歌手によるパフォーマンスが披露され盛り上がりを見せたという。その夜店祭りも理事長が亡くなってしまい、2 代目が魚津を離れている家が多いために世話する人がおらず、20 年ほど続いたが 5 年ほど前に終了してしまった。

3. 魚津市の取り組みと新しい商店について

本節では魚津市が取り組む制度について魚津市のホームページと魚津市役所の企画総務部、産業建設部の方のお話をもとに記述する。そして商店街と魚津市が協力しているチャレンジショップ制度を利用し開業された人たちの語りとチャレンジショップ制度を利用せずに店を始めた人々の語りをもとに新しい商店について記述する。

3-1. 魚津市の助成制度について

魚津市には事業展開・推進支援制度、雇用促進・育成支援制度、創業支援制度、就業支援制度など様々な制度があり、働く人々を支えている。

魚津市のホームページによると、現在創業を考えている人を支援する制度は、「創業支援制度」と呼ばれ、下記の要件¹⁾を満たすことで店の改装助成金（上限 50 万円の対象経費の 3 分の 1）または奨励金（10 万円）の支援を受けることができるというものである。

3-2. 魚津中央通り商店街チャレンジショップ支援事業

「魚津中央通り商店街チャレンジショップ支援事業」とは、新規開業を目指す事業主を中央通り名店街と魚津市が支援する制度である。これは魚津市ではない別の商店街で似たような取り組みがあったところからヒントを得て、中央通り商店街が市役所に依頼して始まった。出店にあたり市役所の面接などはなく、出店者は商店街に申し込み商店街が指定した場所で始める。出店者の負担は家賃の月額 1 万円（最長 12 か月）、共益費、改装費であり、もともとの家賃と負担額の差額は商店街と市役所が半額ずつ負担する。出店の要件としては二つ挙げられ、一つ目はチャレンジショップ事業終了後に引き続き中央商店街で開業すること、二つ目は魚津中小企業相談所の指導を受けることである。

この制度は魚津市と商店街の予算に余裕があるときに随時募集しており、現在は終了している。制度が始まった平成 13（2001）年から平成 28（2016）年までのあいだに、11 店舗がチャレンジショップ支援事業を利用し、現在 5 店舗（表 5-1）が中央商店街内で営業しているほか、今回は調査していないが自宅や別の地域に拠点を移して営業をしている店もある。本節では、このうちで詳しく聞き取り調査を実施することのできた二つの店舗について記述する。

表 5-1. チャレンジショップ

店 名	業種（売っているもの）	チャレンジショップ期間
はろういん	ネイルサロン・古着・雑貨	2001/9/1～2002/8/31
MY CLOSET	オーダーメイド・リサイクル古着	2002/10/1～2003/9/30
Chocolat	婦人服（ブティック）	2003/11/1～2004/10/31
（有）タカラ福祉企画	福祉用具販売	2005/12/1～2006/11/30
KOMRADO DESIGN	シルバーアクセサリ メンズ服の販売	2014/9/1～2015/8/31

はろういん（チャレンジショップ第一号店）

「はろういん」は銀座通りに近い中央通り位置するチャレンジショップ事業の第一号店である。ネイルサロン、古着、雑貨を扱う店であり、平成 13（2001）年 9 月から平成 14（2002）年 8 月までチャレンジショップ制度を利用し、現在も同じ場所で営業されている。

お話を伺った店主は富山市に嫁ぎ、現在は富山市から通いながら営業している。

チャレンジショップ制度を利用して魚津市に店を出した理由を伺ったところ、「人通りが多い場所に店を出すと小さな店はすぐ潰れ、おしゃれでないといけないというプレッシャーがある。魚津はその点では気楽に営業でき、さらに魚津で営業することで唯一商店になれるため魚津を選んだ。」と話された。さらに、営業を始めた当初はテレビや雑誌の取材による宣伝が売り上げにつながり、制度の恩恵を受けたが、家賃が安いだけでリフォームの費用は自己負担なので、現在の制度（創業支援制度）の方が出店者の負担が少ないだろうとおっしゃった。

昔の商店街の様子と横のつながりについては、毎年8月に行われていた夜店祭りで屋台を共同で出すことによる交流や、月に1回行われる商店街デーなどのイベントにより賑いがあったという。商店街が賑わうお祭りは主に二つあり、一つ目は6月に行われる魚津神社のお祭りである。ここでは自分の店を開け、お祭りに来るお客さんが多く買い物にきたという。しかし、色々な人が店に訪れることや祭りによって店舗が汚れることをよく思わない場合、その日は閉める店舗もあったとのことだ。8月の夜店祭りでは、自らの店を閉めてボランティアとして焼きそばなどを出していた。この役割は商店街連盟から割り振られるもので、売り上げは連盟のお金となる。お祭りなどのイベントによる交流で商店の人同士は仲良くしている様子であったが、商店街に駐車場がないため、他の店舗の前に車を止めてしまうことによる駐車場問題は度々あったと話す。

コロナウイルスの影響については、外出自粛により家で断捨離をする人が増え、リサイクルという分野では売り上げが一時期上がったが、魚津市内で感染者が出てからはお客さんたちの外出がさらに減り、売り上げが下がったそうだ。

最後に今後の店について尋ねると、自分の子供に継いでほしいという思いはなく、もしこの店舗を閉めるとしても魚津で他の店を出したいと話す。

COMRADE DESIGN（チャレンジショップ第六号店）

「COMRADE DESIGN」は中央通りのメインストリートから少し外れたところに位置する、チャレンジショップ制度を利用した最後の店舗である。シルバーアクセサリー・メンズ服を主に扱い、なかでもシルバーアクセサリーは店主自らが修理、オーダーメイド品の製作、販売をしている。メンズ衣料は、友人に製作を依頼している。

店主の奥田竜一さん（41歳）に店を始めたきっかけについて尋ねると、「もともと店を持ちたいと考えており、探していた時にチャレンジショップ制度を見つけた。魚津の前は総曲輪にチャレンジショップ制度があり、人通りの多い総曲輪で参加したかったが開業当時は魚津市しかなかったため、魚津で始めた。」と話す。35歳から商店を始めたということもあり遅いスタートであったがどうしてもやってみたいという気持ちが強くはじめられたそうだ。営業スタイルに関しては、主にInstagramを利用して商品の宣伝しており、Instagramからのお客さんと県内、県外問わずの常連客がほとんどを占める。

コロナウイルスの影響については、子供の学校の休校に合わせて店も2ヶ月ほど休業し、オーダーメイドアクセサリーの製作に取り組んでいたそう。調査で訪れた2020年8月の時点では、オーダーがかなり詰まっていた制作に追われており、売り上げへの影響は少ないということだった。

商店街内の交流について尋ねると、「藤吉」の大野さんに相談や経営上のアドバイスをもらっていると話し、アドバイスや考え方が自分に100%吸収されることはないが自分の考え方と照らし合わせて答えを出すようにしていると、アドバイスをもらう関係に年齢は関係ないと言われた。

3-3. その他の新しい商店

魚津の商店街には、チャレンジショップを利用せずに賑わいを見せる新しい商店が多く見受けられる。本節ではその中でも中心的な役割を担い、商店街の方々と親交が深い二つの店について記述する。

藤吉

中央通りの商店の中でもひと際賑わいを見せる「藤吉」は、今年で8年目を迎える食品卸売業・小売販売・だんご生産を行う商店である。外から店内を見渡すことができるほど開放的でおしゃれな店内には、食料品、手作りのお惣菜、人と環境にやさしい日用品が置かれている。

店主の大野慎太郎さんは銀座通りにある「大野砂糖店」の息子さんであり、明治30(1897)年に創業した「大野商店」の初代と2代目、「大野藤吉」に敬意を払い、原点回帰の意味を込めて店名に「藤吉」をつけた。6代目に当たる大野さんは、平成24年(2012)年7月に「藤吉」を開店し、令和2(2020)年に富山市に2号店を出すにあたり魚津市の店舗を「水だんご」をメインとしたカフェにリニューアルした。聞き取り調査では、店主の大野慎太郎さん(35歳)にご協力いただいた。

大野さんは商店街の活気を取り戻したいという気持ちと家業を継ぐという目的で、大学卒業後に楽器販売に3年間携わったのちに魚津にUターンし、現在の店を始めた。10年前には商店街全体に目を引くものがなく、地域のために店を開こうという気持ちも強かったと話す。店を始めるにあたり行った市内調査により憩いの場や惣菜店が求められているという結果から、本当においしいものを業者に会いに行き調達するというスタイルでこだわった商品のみを店頭に並べている。この商品は富山県のものに限定しておらず、魚津の人が欲しいと思う商品を心掛けていたそう。調達においては、基本的には大野さんや大野さんの奥さんが旅行や出先で見つけることが多いが、全従業員の合意を得て初めて商品として並ぶ。

大野さんが仕事をしていく上での根底となる動機は「食べ物で面白くなれば」という気持ちであるというが、様々な分野の人々と関わりながら自身の活動のヒントを得ているそう

だ。例えば、若手社長が集まる会に参加し、パートの方々のシフトは絶対に間違いがないような病院のシフトを参考にするなど、食品以外の分野で活躍される人からヒントを得ることが多いと話された。

お客さんに向けた思いはもちろんのこと生産者に対する思いも強く、リンゴ農家の方からの依頼により傷がついてしまって商品として売れないリンゴを加工して販売を行ったり、向かいにあるドーナツ屋「ベルテンポ」の開業にあたり力を貸したりと、多方面から頼りにされているのだと感じた。町おこしという観点では、地元の人あまり理解していない地元の商品を違う地域で売り、客観的に見たときに価値を理解できるように知名度を上げるという方法をとっていると話す。

今後の活動については防火建築帯を生かした町づくりや、空き家と事業を始めたいと思っている人とのマッチング役などを目指しているとのことだ。新しいことを始めるハードルが低い商店街という地で、自分と周りが面白くなるような事業を続けていきたいと話す。

MCR store

「MCR store」は中央通り商店街にある店の中で最も新しく、令和2（2020）年6月に本格的にオープンした、スケートボードと、雑貨を扱う店である。調査では店主の原誠さん（32歳）にお話を伺った。原さんは市内にある設計事務所で代表を務める傍ら、副業としてこの店を始めた。店舗は、藤吉の大野さんの紹介で見つけた。その後、友人たちと半年かけて古い空き店舗を自ら改修し、現在の店が完成した。

原さんは出身が魚津市であり、また祖母の家が商店街の近くであったため、昔から商店街によく遊びにきていたと話す。大学および大学院で建築を専攻し、魚津の商店街の防火建築帯を調査していた。そうした縁もあり、馴染みのある土地を活性化したいという思いから、店の拠点を魚津の商店街に定めた。

副業として営業しているので、土日のみ開店し、オンラインショップも開設している。ハンドメイドアクセサリ作家の奥さんの作品も販売する他、アーティストの個展やイベントを店内のスペースで行うことも可能である。3階建てのこの建物は1階が商店であるほか、2階は富山大学都市デザイン学部に貸出を行っており、3階が貸し出し可能のアトリエになっている。

原さんに商店街の人たちの横のつながりについて尋ねると、大学在学中から8～9年間商店街の調査、研究を行っていたこともあり、総会への参加や各種イベントの手伝いなど町づくりに大きく貢献してきたと話す。平成30（2018）年9月に開店した「ベルテンポ」の店舗改修にも協力し、デザインの手伝いなどを行った。他にも空き家を借りてもらうための手伝いを様々な場所で行っている。

今後の商店街について尋ねると、原さんは専門の「建物」という観点から話された。現在残っている商店街内の建物は、昭和30年代に国がお金を出した復興事業の一環として建てられ、商売を行う店と住居が一緒になっているものが多い。建物自体の寿命は100年と言わ

れているためあと 30 年は保つが、建物の個々の部分は店主の所有物であるため、商売をやめたあとの建物の直され方が違う。例えば、シャッターを下ろして裏からの出入りにする建物もあれば、かつては店であった一階部分に玄関を取り付ける店舗もある。さまざまな景観の中で建物という観点からもう一度活性化させていきたいという思いを持たれていた。

4. まとめ

今回の調査では、商店街の今日に至る変遷や、新しい商店の出現による展望と影響に注目して多くの人にお話を伺った。商店街の昔話では、かつての盛り上がりについて語る人が多く、特に祭りについての記憶が鮮明であるという印象を持った。夜店祭りで店先に普段の半額から半額以下の値段で商品を出し、在庫処分も兼ねて売り捌くことや、子供神輿や出店のためにあった組合活動における交流など、祭りにも様々な側面があることがわかった。

他方で、時が経つにつれて少子化による人口減や、組合内で「若手」とよばれた人たちが実家に戻ってこなくなることで、車社会への変化、大型店の進出などの原因により、商店街の利用客は大幅に減少した。かつての賑わいを取り戻そうと催し物を行うものの、それでも人が来なければコストだけがかかる。なかには、何のために祭りを行うのかという疑問をもったと話す人いた。コロナウイルスのためにそれらのイベントも中止が相次いでいるが、商店街に属する商店同士の繋がりがさらに希薄になっているのかもしれない。

昔からある店は、時代の流れにしたがって扱う商品を少しずつ変えている店が多かったが「営業する人とお客さんは一緒に歳を取り、同じような年齢層のお客さんが集まる」と話す人がおり、商店街の店は常連客がほとんどを占める。調査の折にお客さんが来た時にその人の名前はもちろんのこと、住所や家族構成なども知っている場面に遭遇することがあったが、そこからも昔ながらの商店街らしさを感じた。呉服店で聞き取り調査の際にはコーヒーを出してもらい、ご近所同士で買い物するわけでもなく集まってコーヒーを飲み、会話を楽しんでいるという話も聞かせてもらった。ここからも、今の大型店ではないような憩いの場としての商店街という一面を垣間見ることができる。ただし、「店主と客が一緒に年を取る」ということは、若い世代の客層をなかなか獲得できないことも意味する。多くの店で新規のお客さんはほとんどいないという話を聞いたことから、新しい人の波を作ることの難しさを強く感じた。

お話を聞いた昔からある商店のほとんどは、自分たちの代で店を閉めると言われた。子供たちに継いで欲しいという気持ちはあるが、商売の苦勞をよくわかっているためこのままの商店街では継がせられないと話す人が多かった。また、新しい商店や制度のことも、たとえ同じ商店街だったとしてもよく知らない人もいた。商店街の組合としての活動は若い人たちに任せる、自分は組合の活動にあまり参加していないという人もいて、世代交代の時期にあるのだろうということが感じられた。

新しい商店の出現に関しては、魚津市と商店街の様々な制度によって支えられており、商

店街をどうにかしたいという思いが強く感じられる。魚津という場所にこだわる人や商売の内容そのものにこだわる人など、始める理由は様々であったが、新しい商店同士の繋がりは深い。ほとんどの人が魚津市という土地と店を始める前からの関係があり、魚津市という場所への愛着の強さを感じた。商店街内の新しい店のほとんどは、単に商売として店を開きたい、趣味を仕事にするために店を開きたいという思いだけではなく、かつての盛り上がりをもう一度復活させようとする店主の姿が見られた。

おわりに

今回の調査で最も強く感じたことは、商売をすることに対する思いが、かつてと現在で異なることである。商店街が賑わいを見せたころは、業種や場所にこだわることなく、その時の人々のニーズにこたえるという形態で商売が行われていたことが多い。他方で、近年になって商店街で商売を始めた人たちにとっては、仕事やお金を稼ぐ手段というよりそれ以上のこだわりが感じられた。それは、魚津のために、商店街全体のためにという気持ちであり、自分の店だけでなく商店街全体のことを考えた経営の形などがあった。

だが、古くから商店を営んでいる人びとが魚津に愛着がないというわけではない。むしろその逆である。商店街はかつての姿をとどめてはいないが、多くの人の思い出話からこの土地に対する愛着は非常によく分かる。昔は当たり前であった、すれ違うことが難しいほど人でいっぱいになる文化町通りや、客と出店の両方が様々な場所から集まり一大イベントとなっていた商店街での祭りなどの様子を、私自身も人々の生き生きとした語りからよく知ることができた。

この先もこれまでの後継者や駐車場問題のような様々な問題が時代を重ねるごとに発生すると思われる。しかし、今回多くの方々にお話を伺い、かつて商店街を支えていた人々の次には現在の新しい店の人々が続いているように、自分たちで商店街を作り上げたいという志を持った人々がいなくなることはないだろうと感じた。魚津という土地や商店街にこだわる理由を持つ人々、期待を持つ人々の手により、今後も時代に沿った新たな商店街へと形を変えていくと思われるが、かつての商店街やそこでの思い出は人々の記憶の中で生き続けるだろう。

注

- 1) 条件は次のとおりである。①魚津市内で新規創業、またはその予定であり、かつ3年以上事業を継続する見込みがあること。②魚津中小企業相談所の指導を受けていること。③国、県、団体などから助成金の交付を受けていないこと。④市税等を滞納していないこと。

参考文献

魚津市史編纂委員会、1972 年『魚津市史 下巻 現代の歩み』魚津市役所。
魚津市史編纂委員会、2002 年『魚津市史 続巻現代編』魚津市教育委員会。

参考ウェブサイト

魚津市「市内で事業をされる方、働かれる方に対する助成制度のご案内」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=9825>〉

(2020/11/23 閲覧)

魚津市「魚津の商店街」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=1166>〉

(2020/12/04 閲覧)

魚津市観光協会公式サイト 魚津たびナビ「魚津市商店街 由来・概要」〈<https://uzu-kanko.jp/?p=287>〉 (2020/11/28 閲覧)

魚津市定住応援サイト「助成制度 そうだ！魚津に住もう」〈<https://uzu-sumitai.jp/grant>〉 (2020/10/11 閲覧)

第7章 加積りんご栽培における女性の役割について

小野 菜摘

はじめに

毎年11月になると、入善町に住む私の両親は必ず魚津の「加積りんご」を買いに直売所へ向かう。数多くある直売所の中から美味しいと評判のところを訪れ、そこで購入したりんごを家で食べたり離れた場所で暮らす親戚に送ったりしている。直売所には必ず年配の女性が接客しており、気さくで話やすく、購入したりんごとは別の種類のりんごをおまけしてくれることもよくあった。幼い頃からその光景を見てきたため、りんごを買うなら魚津だと思っていたが、実習で魚津市を回った翌週に、大学の研究室で行った報告会で「どうして魚津のりんごは有名なのか」「直売所では女性の方が主に接客しているのが印象的だった」という意見を、魚津市内で調査を共にしている同級生から聞いた。そしてりんご農家の方々にお話を伺っていく中で、魚津のりんごが有名になったのは女性たちの活躍があったということを知った。魚津の「加積りんご」はどのような変遷を辿って有名になったのか、その発展に女性たちはどのように関わっているのか、そしてその流れを踏まえ、現在りんご農家として働く女性はどのようにりんごを育てて販売しているのかということに興味を持ったのが、今回の調査のきっかけとなった。

調査は、魚津市加積地区の女性のりんご農家の方々への聞き取りをもとに、『加積りんご九十年の歩み』（加積りんご組合、1996年）や『加積りんごの成立と近年の変貌』（山田時夫著、1979年）といった文献や資料、魚津市のホームページを参考に行った。

本章では、第1節で加積地区の概要、第2節に加積りんごについての説明、第3節に加積地区のりんご農家として働く女性の方々から伺ったお話について記述し、第4節でりんご栽培における女性の立場や役割とはどういったものなのかについて、まとめと考察を述べていく。

1. 加積地区の概要

加積地区の概要については、『魚津区域郷土誌 魚津区域郷土誌物』（魚津区域小学校長会、1983年）及び魚津市のホームページに記載されている統計データを参考にして記述する。

1-1. 加積地区について

加積地区は猫又山が源の片貝川の下流、片貝谷の西北に位置しており、南および西は上野方地区の石垣および下野方地区に接し、東北は片貝川を隔てて天神地区と相対している。北は経田地区の西尾崎および江口に接し、西北は道下地区および上村木に連なる細長い地域

だ。あいの風とやま鉄道の魚津駅から南東に広がっており、加積地区の集落である吉島と相ノ木には西の滑川市と東の黒部市をつなぐ主要幹線道路の国道8号線が通っている。水田や用水も数多く、灌漑施設も豊かである。

明治22(1889)年に国が施行した町村制が施行され、吉島村、上村木村、相ノ木村、六郎丸村、袋村、横枕村、魚津田地方村の一部、本江村の一部、西尾村の一部、青柳村の一部が合併して加積村が成立した。昭和27(1952)年に魚津にある全町村が合併し、市制が施行されると加積村は加積地区へと名称を変えた。現在の加積地区は、吉島、上村木、相ノ木、横枕、袋、六郎丸の六つの集落に区分されている。

吉島、相ノ木、横枕、袋の名前の起こりは定かではないが、六郎丸という地域は天正年間(1573~1591)の中頃、六郎丸に住んでいた武隈右衛門という人が建立した鎮座若宮八幡宮を、一般に六郎丸様と呼んだことから名付けられたと伝えられている。



図7-1 加積地区の地図（国土地理院地図より作成）

加積地区の生業、人口

旧加積村における昭和2(1927)年の生業は農業、特に稲作を中心としており、他にも大豆や小豆、じゃがいも、大根、里芋、葱などが栽培され、果樹類はりんご、柿、いちじく、ぶどうが主に栽培されていた。農家の戸数は定かではないが、当時の世帯数は昭和元(1926)年には270軒あり、人口は男女合わせて1,750人だった。

現在の加積地区も農業が続けられており、魚津市ホームページの統計を見ると、平成27(2015)年の農家の戸数は118戸であり、専業農家の数は12戸、兼業農家の数は79戸とな

っている。人口は 6,278 人となっており、本江地区の 7,605 人に次いで二番目に多い人口数となっている。

2. りんご栽培について

本節は、『加積りんご九十年の歩み』（加積りんご組合、1996 年）と『加積りんごの成立と近年の変貌』（山田時夫著、1979 年）を参考にして富山県におけるりんご栽培、加積りんごについて概説する。

2-1. 富山県におけるりんご栽培について

富山県にりんごが初めて導入されたのは明治 7（1874）年とされていて、本格的な栽培は明治 30（1897）年頃、黒部川扇状地の扇央部で開始された。その後、各扇状地扇央部を中心に一部丘陵地帯で、水田と果樹といった形で農家の副業として導入されていった。

明治 39（1906）年から栽培されているりんごの樹の本数が統計されるようになったが、この年は中新川郡が 130 本、下新川郡が 133 本、婦負郡¹⁾が 20 本、氷見郡²⁾が 20 本、東砺波郡³⁾が 66 本、西砺波郡⁴⁾が 10 本となっており、計 379 本の樹が栽培されていたとされる。

大正時代に入ると、婦負郡が最もりんごを栽培している地域となり、次いで下新川郡、射水郡が多く、三大生産地を形成していた。大正 6（1917）年には栽培されているりんごの本数は 12,000 本以上で、婦負郡は約 5,000 本と全体の 40%近くを占めていた。下新川郡では 3,000 本以上、射水郡では 2,400 本以上りんごが栽培されていた。大正 14（1925）年頃になると婦負郡は 330 本ほど、射水郡は 160 本という数にまで減少し、全体でも 5,000 本という数字だった。昭和 2（1927）年になると、全体の本数は 12,000 本以上と著しい回復を見せた。下新川郡が 3,000 本近い本数に対して、氷見郡では 8,000 本近く栽培されている。しかし、昭和 10 年代になると、全体として退潮傾向に入り、昭和 2 年と比較するとりんごの本数は 40%ほど減少した。やがて、第二次世界大戦が始まるに及んで昭和 16（1941）年に農地作付統制令⁵⁾が出され、果樹の新植が禁止された。食糧増産体制が強化されていく中、りんごの樹がまだ育ちきれておらず、実がなっていないりんご園は田畑へ切り替えをするように強行され、りんご栽培は壊滅的打撃を受けることとなった。この影響によって、富山県のりんご栽培面積は大きく変化し、現在は魚津市の加積地区などといった一部の地域で、りんご栽培が続けられている。富山市や射水市などといった魚津市以外の地域で多くのりんごが栽培されていたものの、だんだんとその面積が減少していったことの原因として、土質が合わなかったことと思うように育たなかったり、味の品質が良くならなかったり、りんごは米と同じで毎日欠かさず世話をしていかなければいけないため、体力的な面から栽培を止める人が多かったのではないかということが考えられる。

2-2. 加積りんごの始まり

魚津市は富山県内を代表するりんごの産地の一つで、特に生産量の多い加積地区で作られたりんごは「加積りんご」という名前で販売されている。この加積りんごは、明治 38 (1905) 年に魚津市旧加積村吉島出身の富居太次郎が初めてりんご樹を導入し、植栽したのが始まりとされている。加積地区の土地は水持ちが悪く、用排水路も整っていなかったため、住民は干害や水害に苦しめられていた。その時に、農作物の代わりになるものはないかと試しにりんごを植栽したところ、当時の気候風土と適合したと思われる。そうしてりんご栽培を開始し、旧加積村吉島を中心に、片貝川扇状地左岸の扇央部から扇端部にかけて、散居村の農業の宅地の周りからその周辺の内へと拡散していった。やがて太次郎の孫の庄作は、縁故者や近隣の住民にもりんご栽培を勧めていったため、加積地区一帯がりんごの栽培村として形成されていった。その後、長い年月を経て栽培面積の規模は拡大し、各農家は栽培技術の向上に努めていった。魚津市は、りんご生産地として比較的南に位置すると言われており、東北と比べると春が早いため、開花の時期が二週間ほど遅く、実が熟すには寒さも必要なため、収穫も二週間ほど遅い。そのため比較的長く育てることが出来るとされている。

明治～大正時代のりんご栽培

明治 44 (1911) 年に発行された「下新川統計書」によると、当時栽培されていたりんごの樹の本数は、加積地区 60 本、天神地区 45 本、西布施地区 22 本となっている。大正 2 年の調査では天神・下野方地区で急激に増殖され、大正 10 (1921) 年には合計 750 本となっている。当時は紅魁、祝、紅玉、倭錦という品種が主として栽培され、新川生産組合を利用して魚津、富山方面へ売り出されていた。

昭和時代のりんご栽培

戦後の果樹増殖ブームによって富山県でもりんごが増殖し、農薬の普及・撒布により、結実の割合は高かった。当時は食糧難と食料統制によって多くの人々が栄養失調となっており、物不足の時代でもあったため、りんごは高値で取引された。闇市でりんごを購入したい人や病人に食べさせたい人が訪れ、ノート一冊とりんご一個の物々交換や魚や薪炭、衣類とも交換されることもあり、りんごは貴重品扱いされていた。

昭和 12 (1937) 年から昭和 20 (1945) 年にかけて、栽培面積は増加して約 20ha までになったが、第二次世界大戦が始まると、8 年生以下の若木が強制伐採されることとなり、面積は減少した。しかし、昭和 12 年 4 月には、富居庄作が初代組合長となった加積りんご組合という組織が確立されていたため、戦後の需要に対応して生産を拡大していくことができた。昭和 26 (1951) 年には、栽培技術の研究、向上を目的としたりんごの栽培者 9 名による「加積りんご研究会」が発足し、講師を招いて研修会を開催するとともに、先進地の視察を毎年行うなどして栽培技術の向上に努めてきた。

加積地区におけるりんご栽培面積は昭和 30 年代に入るとだんだんと変化していった。昭

和 31(1956)年には魚津大火が起こったことによって都心部の再開発が行われ、昭和 38(1963)年には国鉄魚津駅の上村木、釈迦堂地区の国道 8 号線以西が都市計画区域に指定され、昭和 52(1977)年度にかけて開発整備が行われていった。更に昭和 35(1960)年、36(1961)年、39(1964)年、40(1965)年にはそれぞれ雪害、台風、降雹があり、落果、落葉、樹木の折損、倒伏の大きな被害を受けた。このように魚津市の都市化や自然災害により、栽培面積が減少して経営意欲を失ってしまう農家が増えた。

その後、高度経済成長期に入ると、りんご栽培だけでは生活が困難になったため、会社員になる人や大きな農家でも出稼ぎに行く人が増えるなどして、第一次産業は疲弊した。さらに、第二次、第三次産業に従事する勤労者の所得が増え、格差が大きくなった農業や漁業は次第に衰退し始めていった。りんご農家の女性たちは自らの生活を守るためリヤカーを引き、市場に出せないキズものを町へ売り歩くなどの苦労を重ねた。

りんごの需要、嗜好にも変化があった。昭和 38(1963)年にバナナの輸入自由化、昭和 43(1968)年にはみかんの大豊作により、様々な品種のりんごの価格が暴落し、りんごの需要が停滞していった。そのため、「スターキング」や「つがる」、「ふじ」、「陸奥」など甘味が多く、収益の高い品種に更新されていった。加積地区も昭和 36(1961)年に「ふじ」の導入試作が行われ、昭和 40 年代には既存のりんごの品種を「つがる」や「ふじ」に切り替える取り組みや積極的な新しい品種の更新が行われるようになった。

昭和 40(1965)年頃の魚津市内の栽培面積は約 48ha となっており、同年に当時の農林水産省が実施した農業構造改善事業⁶⁾では、この栽培面積を 10 年後に 100ha にするという目標が掲げられた。昭和 41(1966)年には六郎丸の一部と袋地区の大型圃場整備が完成し、同 42 年には六郎丸全地区が、同 46(1971)年には吉島地区と 30a の水田に基盤整備が行われ、曲がりくねった水路や小さな水田はきちんと基盤の目のように整えられた。しかし、りんごの生産過剰の影響で価格は低迷し、実ったりんごを捨てたり、栽培面積を大幅に減らしたりする農家が増加した。こうしてりんご栽培は当初の目標とは裏腹に、米価との格差、一部栽培者の兼業、高齢化、技術不足と自然災害の多発があったことにより、零細農家では意欲を失う人も現れ、畑や水田に隣接し、基盤整備が行われていた横枕・六郎丸地区においては急激に水田転換が図られていった。

昭和 50(1975)年代は比較的気象条件の安定した年が続き、昭和 56(1981)年には 1.8 メートルの積雪があったものの、枝折れの被害があった以外は台風の来襲もなく、安定したりんご栽培が出来るようになっていった。「つがる」の出荷が盛んになり、価格も安定していたが、梨の人気品種「幸水」が現れると、「つがる」の消費が落ちてきた。「幸水」が出回る時期は 8 月下旬から 9 月上旬であり、「つがる」も大体同じ時期に流通しているので、この影響だと思われる。魚津の友道地区や呉羽でも幸水の出荷量が増えたため、「つがる」は盆前だけ高価格で取引されるようになった。長野から大量の「つがる」が市場へ流入したこともあって価格は次第に下がり、市場出荷への意欲もだんだんと低下した。

一方の「ふじ」は状態が良いものが多く生産され、消費者の人気も高かった。リヤカー販

売による自販で消費者の需要に応えるため増殖に努めたことにより、生産量が増大していた。しかし、市場に出荷する前に大きさや形などを調べる共同選果場で、魚津産のりんごは長野産のものと比較すると着色の色づきが悪いとされ、市場に出荷したとしても低価格に抑えられてしまったことから、生産者の間では市場に出荷してはりんご栽培が成り立たなくなってしまうのではという危機感が広がった。

この影響から、市場に出荷するのではなく、自分で販売する道を選択する農家が現れ始めた。長野産や青森産のものと比較すると見栄えの良さや大きさは劣るものの、他の地方よりも長い時間をかけて育てているため、蜜がたっぷりと入っていて甘みが強く、シャキシャキとした歯ごたえを楽しめるということをアピールしようと、リヤカーで販売を行っていた生産農家の婦人たちの販売網を活用して各地へ売り込み、次第に市内や近郊市町村へ販売を展開した。同時に顧客も増えたことにより、やがて市場を通さない庭先販売での流通体系が整えられていった。このような流れを踏まえて、現在の直売所でのりんご販売がある。

昭和 57（1982）年になると、高所作業車のリフトや土壌改良機が導入されたり、昭和 60（1985）年にはトラクター牽引による大型草刈り機が導入され、その後乗用草刈り機が導入されたりと機械化が進むことによって、作業の効率化が進んでいった。昭和 50 年代の栽培面積は約 33ha ほどであり、昭和 60 年代もほぼ変わらない栽培面積となっていた。

平成～現在のりんご栽培

平成 2（1990）年、3（1991）年と続けて魚津市は大型台風の被害を受けた。特に平成 3（1991）年の台風は経験したことのないほどのものであり、落果、倒木、10 年生くらいの若木も将棋倒しのようにになっていた。共済職員や評価員による被害調査は難航したが、共済金の支払いが被害の一助となった。富山県への陳情はもちろん、魚津市当局に対しても果樹振興会とりんご組合が一丸となって融資・助成の要請を行った。その結果、各機関から特別処置の配慮を受けることが出来た。

また、県の特産事業としてジュース事業に乗り出したりんご組合では、平成 2（1990）年より長野県の小布施酒造にジュースの製造を依頼し、魚津産ふじジュース「ふじだけ」として販売した。平成 20（2008）年には、「加積りんご」が地域団体商標登録され、地域ブランドとして確立したことによって、魚津市を代表する果実となった。

現在は、主に加積地区、市街地から少し離れた魚津市西部の高台に広がる上野方地区、魚津市東部の山間に広がる西布施地区の三つの地区で栽培が行われており、各りんご組合合わせて約 35ha という規模で栽培されている。加積地区では主に吉島、六郎丸、相ノ木で栽培されており、国道沿いに広がるりんご畑の中に農家が点在している形となっている。上野方地区では大海寺新、友道の地域で、西布施地区は長引野で栽培されており、この二つの地区は加積地区と比較するとりんご栽培の歴史は浅いが、色付きも味も良い良質なりんごを栽培しており、梨やぶどう、桃といった他の果樹栽培にも力を入れている。

加積地区でりんごを栽培している農家は、全て加積りんご組合に加入している。現在は 44

戸が加入しており、計約 27ha でりんごを栽培している。その中の 19ha ではふじを作っている。各農家のほとんどは収穫したりんごを庭先で販売しており、りんご園と直売所が直結している形となっている。⁷⁾

魚津市観光協会サイト「魚津のりんご農家さん MAP」では、りんごを栽培して販売している直売所が 28 軒あり、りんご農家の所在地が地図として記載され、どの時期にどのような種類のりんごを販売しているのかが分かるようになっている。このりんご園の紹介ページや地図は、平成 23 (2011) 年頃に作成されてウェブサイト上で公開されている。それまでにりんご園を紹介する媒体はほとんどなかったことや、魚津のりんごはどこで買えるのか、どうやって買えばいいのかという問い合わせがあったため、魚津のりんごを観光資源として楽しんでもらうため、観光協会の方で紹介を希望するりんご園の詳細を記載することになった。

加積地区のりんごの販売形式は基本的に直売所で販売したり、電話などで注文を受けて遠方の地域に配達したりする形式がある。農家によっては、富山市や朝日町など魚津以外の地域から依頼を受けて、農産物の直売所にりんごを届けて販売しているところもある。販売時期も様々で、早くて夏のお盆から数種類のりんごを売り始め、全てのりんごを販売しきってしまうために、翌年の 2 月頃までりんごを販売している農家もいる。りんごの標準価格は加積りんご組合によって決められており、一袋 500 円のもの、1,000 円、1,500 円のものがある。この値段は据え置きなので、台風などの気候の影響があったとしても変わることはないが、枝に引っかかってキズがついてしまったりんごを少しだけ安く販売することもある。

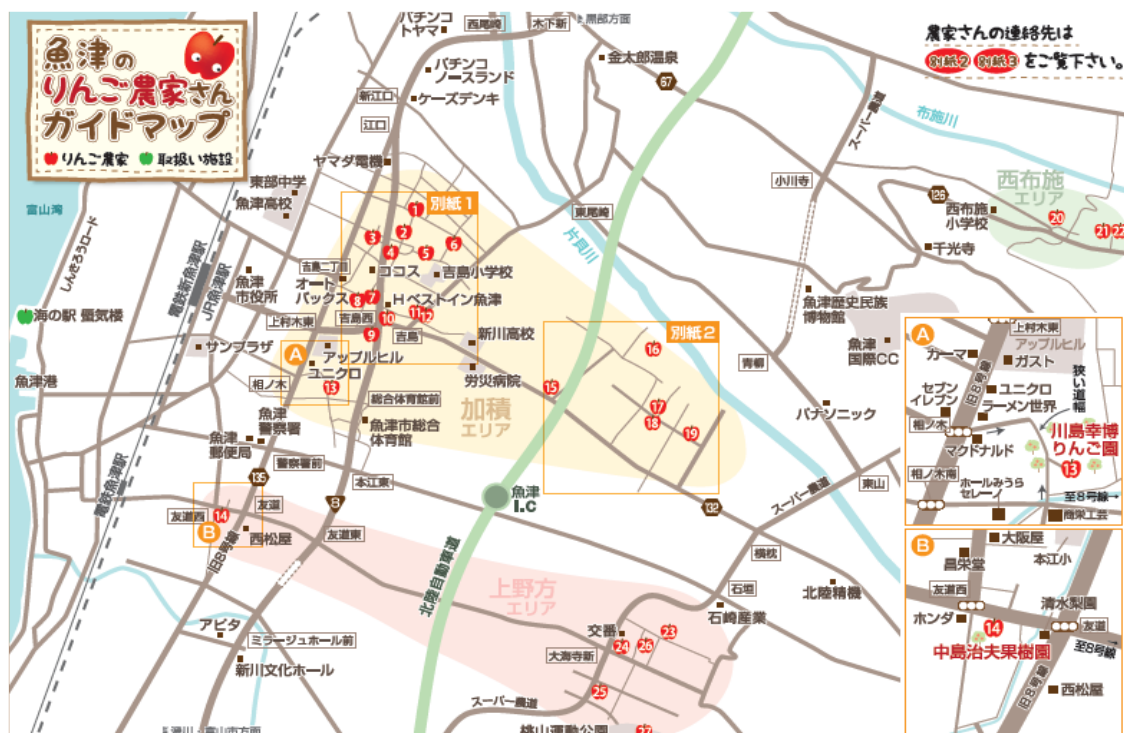


図 7-2 (上)、7-3 (下) 魚津のりんご農家の所在地 (魚津市観光協会サイトより)

2-3. 加積りんごの品種の変遷

昭和 30 (1955) 年頃に栽培された品種は、8 月下旬から 9 月中旬までの早い時期に収穫される早生種で、酸味の強い「祝」「旭」が多く、その後 9 月下旬から 10 月中旬までに収穫される中生種の「紅玉」、「倭錦」、「紅魅」、「ゴールデン・デリシャス」といった品種も少しずつ栽培されるようになり、新しい品種の導入が増加していった。この中生種の一つの「紅玉」は甘酸っぱいことが特徴で、現在ではジュースやお菓子などによく使用されている。

その他に、「ゴールデン」、「スターキング」という品種も栽培量が増加し、新しい品種の栽培研究も行われ、「王鈴」「陸奥」「恵」「東北 7 号」等が取り入れられ、「国光」という品種も増加していった。「王鈴」は黄青色の小玉で、酸味がなく独特の良い香りがするのが特徴で、現在も栽培しているところがある。「東北 7 号」は、「ふじ」が「ふじ」と命名される前のりんごの品種のことで、味は良いが国光よりも収穫時期が非常に遅く、また着色も困難で不評だった。そのため、肥料の量を調整したり、試験や研究を重ねたりして栽培方法を工夫していったことにより、甘みと酸味のバランスが良く、シャキシャキとした食感の真っ赤な、現在の「ふじ」に繋がっている。昭和 40 (1965) 年頃からは、果汁が豊富で甘みの強い「つがる」と「ふじ」が栽培され始める。その後、消費者の「ふじ」の人气が徐々に高まっていったため、「ふじ」を中心に栽培、販売するりんご農家が増加した。

現在、加積地区で主に栽培されている品種は「ふじ」、「シナノゴールド」、「シナノスイート」、「陽光」、「秋映」、「こうたろう」などが挙げられる。各農家によって多少の違いがあり、「祝」や「さんさ」、「つがる」、「王鈴」を栽培しているところもある。

2-4. 一年間のりんごの管理作業

りんごを育てるための作業は一年間を通して行われており、図 7-4 は「ふじ」を育てる場合の作業について示している。

1 月～3 月のりんごは眠っている状態だが、農家の方はこの時期に剪定という作業を行っている。剪定とは、りんごの木の内側まで太陽の光が届くように不要とされる枝を切り落として、枝の配置を整えていく作業のことだ。これが一番難しく大変な作業だと言われていて、りんご栽培の知識やある程度の経験、センスが問われる。そのため、果樹研究センターや農協による剪定講習会が定期的に行われている。

その後、適切な量の肥料を使用したり、4 月～10 月には病虫害防除として殺虫剤や葉が腐らないようにする殺菌剤などの薬剤撒布をしたりする。この薬剤撒布は、どのりんご園でも大体年に 15 回以上行っている。そして、土の水分の蒸発や土壌の浸食を防ぎ、有機物を補給するために草はある程度生やしておかなければいけないが、伸びすぎるとりんごの木の栄養と水分を奪い合うことになり、虫も発生してしまうので、草刈りも年に 5、6 回行っている。

3 月～4 月頃にかけて発芽し、4 月頃になると開花の時期になるので、人工受粉という作業を行っていく。りんごは同じ品種の花粉を雌しべに付けても受精しない性質を持ってお

り、そのため開花すると、別の品種の花粉を人の手で受粉させる必要がある。機械を使ったり、蜂を育ててその蜂に受粉を行わせたりする農家もいる。やがて花の萼^{がく}から5、6つのりんごの花が放射状にまとまって咲くので、最初に咲く中心の花を残して、周りの不要な花を摘み取る摘花という作業を行う。全ての花が実になると、樹に負担がかかって味の良いりんごができないため、一つの花を残すことで集中的に養分が届くようにする。そして、受粉や摘花を終えた樹には幼果がだんだんと膨らみ始める。一株に5個ほどの幼果が実るため、摘花と同じ要領で、今度はその中から丈夫で形の良い幼果を一つだけ残し、他は摘み取ってしまふ摘果の作業を5月から8月にかけて行う。一つ一つ手作業で行うため時間はかかるが、りんご栽培の中でも重要な作業となる。

9月に入るとりんごの着色期に入る。この時期になると行われるのは、葉摘みという作業だ。果実に光を多く当てて、着色を良くするために日陰を作る葉を摘み取るというものだが、これもまた手作業で非常に時間がかかるために、現在は人の手を借りずに落葉させることができる薬剤もあるのだという。

そのような作業を経て、11月頃に「ふじ」は成熟期に入る。ここでようやく収穫されて、直売所などを通して私たちの手元へとやってくることになる。収穫するとき、高所作業車を用いて高い場所に実っているりんごをもぎ取ったり、手が届きにくい場所にりんごがあるときは、長い棒状のものをを用いてりんごを掴んで収穫したりする。

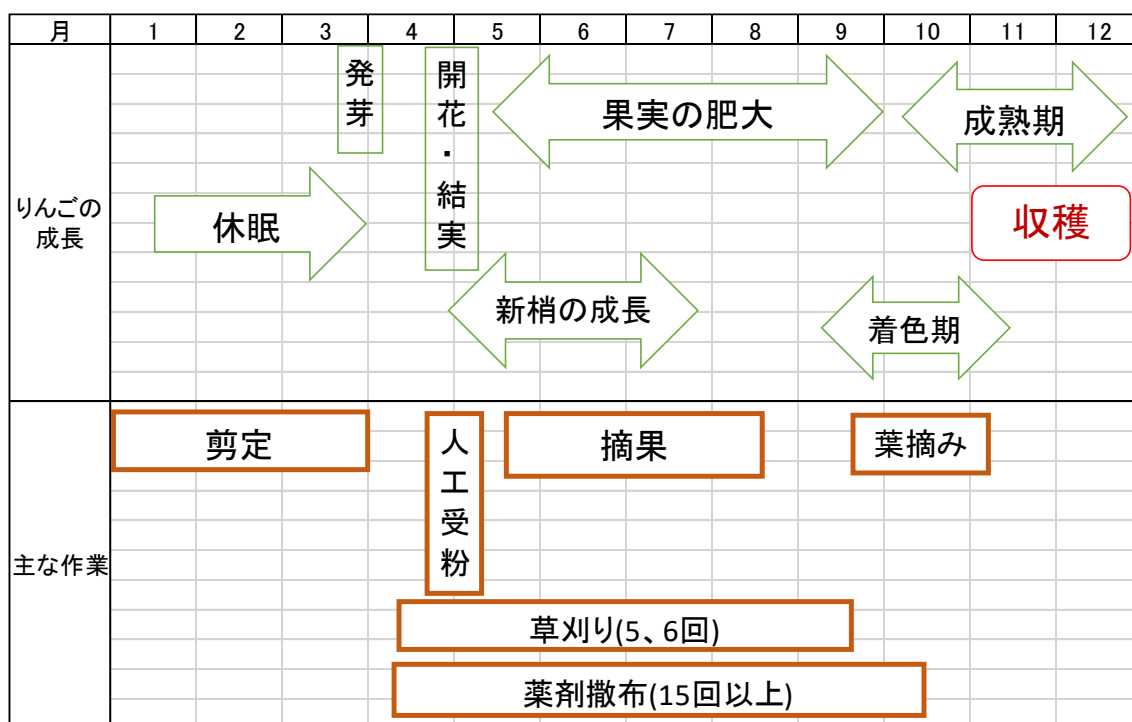


図 7-4 一年間のふじの状態と主な作業

(富山県農林水産総合技術センター/果樹研究センターの資料より作成)



写真 7-1 (左)、7-2 (右) 南章(あきら)りんご園の収穫の様子

3. 加積地区のりんご農家として働く女性たち

今回の調査では、国道8号線沿いでりんご栽培を行い、直売所を構えて販売している南章りんご園さん(図7-2、7-3の⑨)と、北日本新聞社のすぐ山手側で栽培と直売を行っている田林りんご園さん(図7-3の⑳)を訪れ、そこでお話を伺った。本節の記述は基本的にそのインタビューに基づいている。

3-1. 南^{きょうこ}恭子さんのお話

南章りんご園の南恭子さんは現在80代の女性で、昭和35(1960)年頃に南家に嫁いできた。その頃から南家には田んぼとりんごの樹があったので、恭子さんはお舅さんと共に少しずつ栽培していた。現在のりんご園の栽培面積は約8haで、家のすぐ隣にあるりんご園と8号線を挟んだところにあるりんご園で主に栽培している。旦那さんと恭子さん、息子夫婦の4人で農作業を行い、直売所での販売は主に恭子さんとお嫁さんの照乃さんが行っている。11月～2月の繁忙期にはパートを雇って収穫作業の手伝いをしてもらっている。りんごは直売所で販売したり、電話で注文を請け負って配達したり、依頼されて魚津市以外の農産物直売所で販売を委託したりという販売形式をとっている。りんごは全て売り切るために3月まで直売所を開けていることもあり、捨てないようにしているという。

現在は10種類以上のりんごを栽培しているが、恭子さんが嫁いできた当初はほんの数種類しかなく、生活していくために栽培したりんごを毎日1軒1軒売り歩いていて、その日買ってくれた人がいたとしても、「魚だったら毎日いるけどりんごなら毎日来られてもいらんわ」と断られ、10軒回って1軒だけしか買ってくれないこともあったという。現在りんごを購入してくれる人の中には、その時から顔なじみの人もいるのだそうだ。

昭和45(1970)年頃、国の減反政策が施行されたときに、田んぼの土地を埋めてりんごの樹を植えるようになった。「ふじ」が本格的に栽培されるまでは、「旭」という酸味の強い

品種をお盆頃に販売していたが、高度経済成長期後はだんだんと売れなくなっていったため、「ふじ」を「旭」に接ぎ木することによって、育てる品種を変更していったという。接ぎ木とは、人為的に作られた切断面がある二種類以上の植物を繋げて、一つの植物にするという方法だ。

りんごを中心に栽培することになったことで、高齢のお舅さんや働きに出ている旦那さんの代わりに恭子さんがりんご園を主に守っていかなければならなくなり、栽培の仕方、剪定の仕方といった勉強会に参加することになった。しかし、その当時女性は一步下がって男についていくということが当たり前で、勉強会では男性が参加することが普通だった。そのため、「女がこんなところに顔を出す必要があるのか」と反感や非難の目を向けられ、心無い言葉を言われたこともあり、投げ出したくなったこともあったという。それでも自分のために勉強したいという思いと、お舅さんから「勉強してこい」と背中を押してもらえたから参加し続けることが出来た。何度も参加し続けることで周りの男性からも認められるようになり、恭子さんの他にも女性が勉強会に参加するようになったという。

「ふじグループ」について

恭子さんによると、勉強会に参加してりんご栽培に携わる女性が増えた頃に、当時男性を中心に結成されていた加積りんご組合の他に、女性だけで結成された「ふじグループ」というものがあったという。ふじグループとは、30年程前に女性のみで構成されたグループで、恭子さんと同年代の16人ほどの女性が定期的に集まって、枝の剪定の仕方や摘果のことについてなど、りんご栽培に関する技術の情報交換を主な目的として結成されたものだったという。現在はほぼ解散しているような状態であり、年に一度集まって温泉旅行に行くという程度の交流のみとなっている。

恭子さんはそのグループに参加しており、りんご農家として生活している女性たちと交流を深めていったのだそう。ふじグループは魚津のりんごをPRするために、様々なイベントに参加した。富山の県民会館でイベントが行われた時は、自分たちのりんご園の枝を含めた樹の一部を大きくカットして、会場の外に設置し、その中でりんごを300個ほど販売していた。しかしそれらのりんごはすぐに売り切れて、恭子さんの旦那さんを始めとする男性陣は、トラックで何度も魚津と富山を往復してりんごを運んだという。1袋1,000円のりんごに「器量は悪いけど、中身はおいしいりんご」と書いた紙を一緒に入れて販売したところ、イベント終了後に「器量悪いけど中身がおいしいりんごを下さい」という電話がかかってきたこともあった。

他にも、全国果樹研究連合会が主催し、産地の視察や技術交流を図るための「全国りんご研究大会」というイベントにもふじグループは富山県代表として参加したことがあった。周りに男性しかいない中で、「富山県はこんな大事な大会に女性を参加させるのか」という人もいた。しかし、りんご栽培が行われている産地の視察に行った際に、木や枝の様子を観察して意見交換していたふじグループの様子を見た周りの人々は、女性もりんご栽培の事を

しっかり理解しているのだと称賛したのだという。これをきっかけに、次の全国りんご研究大会から女性が参加することが増えた。このように精力的なふじグループの活動から、りんご栽培に携わる人々に影響を与えていったのではないかと思われる。

現在の販売方法、お客さんについて

現在、ほとんどのりんご農家が直売という形態をとっているが、これが始まったのは、昭和40（1965）年以降のことだ。それまではリヤカーを引いたり、トラックを運転したりして富山県の各地を回って販売していた。スーパーマーケットなどができ始め、そこで県外のお客さんが安く売られるようになると、物珍しさでお客さんがスーパーのりんごを買うようになってりんごが売るのが難しくなった時期もあった。しかし、以前から買ってくれていた人が、スーパーのりんごはまずかったと言って、もう一度恭子さんのところで作るりんごをまた買いにきてくれたという。さらに、友人たちが宣伝してくれたこともあって、恭子さんのところへ足を運んでりんごを買ってくれるお客さんが増えた。その影響によってトラックで売りに行く必要がなくなり、庭先で販売する直売の形式をとるようになったのだという。

直売所を訪れるお客さんは大体が常連の年配の方で、魚津市の方だけでなく、黒部市や滑川市、時には県外からやってきたお客さんが訪れることもあるという。30代の子連れの方や40代、50代のお客さんが訪れることもある。

お客さんのなかには恭子さんと話すことを楽しみに来ている方もいるようだ。調査中に恭子さんからお話を伺っている際にも、近所に住む80代ほどの男性や女性が直売所を訪れて、りんごを買うついでに、恭子さんとの会話を楽しんでいる場面を見かけることが何度もあった。恭子さんによると、直売所に自分やお嫁さんの照乃さんが立っていないときは残念そうに帰ってしまうお客さんもいるから、直売所でりんごを販売するのは女性の方がいいのだと思っているそうだ。

直売所のりんごは、近所に住んでいる常連の以外に、家の前にある「りんご直売所」の看板を見て立ち寄る客にも販売しているが、電話による注文は、昔から付き合いのある客に限られている。このような昔からの固定客用のりんごを確保するために、インターネット上で情報を得て、南さんのりんごを買いたいという注文を断ることもあるという。

直売所での販売について、恭子さんは直売所ならではのお客さんとの対話する時間を大切にしているのだという。わざわざ足を運んでくださって「恭子さんの顔が見たい」と言ってくれるお客さんがいるからこそ、「お客さんに喜んでもらえるような、買っていただけるようなりんごを作っていくことが大事だね」と語った。

りんご栽培に対しての思い

恭子さんにとってりんごを育てることは、子育てのようなものでもあり、自分に与えられた使命でもあるという。りんご作りは100年以上の歴史があるため、続けていかななくてはな

らない、守っていかなくてはいけないという思いはあるが、後継者である息子夫婦には強要したくないのだと、恭子さんは語る。強要することですりんご作りに対してやる気をなくしてしまったら、今まで守ってきたりんご園がなくなってしまうかもしれないためだ。息子夫婦に対して、昔はこうだったと語ることにはあるが、恭子さんの方から「こうした方がいい」ということは言わないのだという。あくまでも自分たちの目を見て、考えていってほしいと恭子さんは語った。

最近では温暖化の影響で、りんごの管理をすることが更に大変になってきているという。気温が高い状態が続く、その直射日光がりんごの皮の部分に当たり続けると、皮の色が白色や橙色、褐色に変化してしまうことがある。これは「日焼け」や「火傷」と呼ばれ、この状態になったりんごは果肉も変質し、品質も下がってしまう。こういった日焼けや火傷を防ぐために、スプリンクラーを使ってりんごの表面温度を下げる方法もあるそうだが、莫大なお金がかかってしまうため、その方法はとっていない。暑さに負けないような品種に更新したり、他の品種を育てたりした方がいいかもしれないと考えているが、そういった問題については、次の世代に任せようと考えているそうだ。

加積りんごは様々な種類があり、現在はジュースや加工品などが生み出されているが、恭子さんは生のりんごに勝るものはないと考えており、「だからこそ色々な人にもっと魚津のりんごを食べてほしいし、これからももっとおいしいりんごを作っていきたい」と述べた。



写真 7-3 (左) 南章りんご園直売所での販売の様子



写真 7-4 (右) 直売所内にある選果機（りんごの大きさ、重さを量る機械のこと）

3-2. 南照乃^{のぶえ}さんのお話

南照乃さんは現在 40 代の女性で、15 年程前に南さんの家に嫁いでこられた。りんご栽培に携わるようになったのは 1～2 年程前からで、それまでは前職の仕事を中心に行っていた。作業は、主に恭子さんが行っている様子を見様見真似で覚えていっており、摘花、摘果、葉摘み、収穫、販売などを行っているという。恭子さんがりんご栽培から退いたあとはご主

人と二人で栽培していく予定で、照乃さんが手伝う作業はどんどん増えており、事務作業も任されているそう。去年行われた剪定講習会に初めて参加し、枝の切り方、接ぎ木の方法などを中心に勉強した。その時に見た接ぎ木や剪定の作業は、その時の樹の状態を見ながら慎重に行わなければならない作業のため、経験が足りない自分にはまだ早い作業だと感じたそう。

また、照乃さんは加積りんご組合やふじグループのように、同業者や同年代の女性たちと交流をする機会はないのだと語った。恭子さんのりんご栽培の仕方を自分の目で見、疑問に思ったことはすぐに聞いて技術を吸収したり、現在ではインターネット上に載っているりんご栽培についての情報を見たりして、ほぼ独学のような形で勉強しているのだという。他にも、これまでどれくらいの量のりんごを購入しているのかという情報などが書いてある伝票をデータ化し、それを基にしてお客さんの顔や名前を覚えているそう。

照乃さんは前の職場では動物と関わることが多かった。その際、言葉が通じない中で動物たちがどういう行動をとるのかという部分に注目することがあった。これはりんご栽培にも通じていて、動物と木は同じ生き物という点で似ている部分があると、照乃さんは考えている。りんごの木は品種ごと、樹齢ごと、一本ごとにそれぞれ違った特徴や個性が見られ、毎日状態が違っている。仕事の内容は全く違うが、生き物と向き合うという根本的な姿勢は前の仕事と変わらないと感じたことが発見だったという。

りんご栽培を行う上で大切なことは、健康第一で過ごすことだと照乃さんは語った。りんご栽培は食に関わる仕事であり、りんごの樹の様子を毎日確認するだけでなく、お客さんと直接対話したり、電話注文を受けたりといった販売の仕事もあるため、身体が一番大事な資本となってくる。だから、本格的にりんご栽培に携わるようになってからは、体調管理には特に気を付けている。それまでは特に食事にはこだわりを持つことは無かったが、仕事をしていくうえで食べることの大切さを改めて感じたという。

さらに、「りんごの需要は変わりやすいから、直売所でお客さんの生の声を聞きながら販売していくことが大切だと思う」と照乃さんは述べた。そう思ったのは、新型コロナウイルスの影響で自粛生活が続き、家にいる時間が長くなるなかで、料理にこだわる人が増えたからだという。アップルパイやケーキ、カレーなどりんごを使った料理はいくつもあるが、その際に使われるりんごは酸味の強いものが多く、りんご園では栽培していないものが多い。「アップルパイとかに使える酸味の強いりんごはないか」というお客さんからの問い合わせをきっかけに、照乃さんは従来育てていた品種だけでなく、お客さんからのそうした需要に応えることも大切なのだと思うという。現在はインターネットで多くの情報を取り入れることが出来るので、今はどんな味が好まれているのかということを知ることも大切だと考えているそう。

3-3. 田林^{ひろこ}廣子さんのお話

田林りんご園の田林廣子さんは現在 70 代の女性で、昭和 45 年頃に田林家に嫁いできた。

その頃から家のすぐ隣に 4.5ha のりんご園があり、当時働きに出ていた旦那さんに代わって、お舅さんとお姑さんにりんごの栽培方法を教わるようになって以来、50 年ほどりんご栽培に携わってきた。旦那さんは定年後に廣子さんと作業を行うようになったが、現在は廣子さんが中心となって、娘の愛子さんと二人で主に農作業を行っている。廣子さんが嫁いできた当時、栽培していたりんごの品種は、「祝」や「ゴールデン」などの数種類のみだったが、現在は 10 種類ほどのりんごを栽培している。愛子さんは、廣子さんの手伝いと直売所での販売を主に行っており、息子さんは働きに出ているが、仕事が休みの時はスプレアーと呼ばれる薬剤噴霧器を動かすこともあるのだそうだ。

りんごは、家のすぐ隣にある直売所（倉庫を兼ねている）で販売したり、電話注文を受けて配達したり、廣子さんが自らお願いして魚津市以外の地場産直売所で販売してもらっている。直売所は、およそ 8 月頃から 2 月まで開いており、3 月中には全てのりんごを売り切るようにしているのだという。

直売所ができる前は、リヤカーにりんごを積んだ箱を乗せて近所を回って売り歩いていたという。売れる日もあれば売れなかったときもあり、なかなか大変だったと廣子さんは語った。かつては「祝」という品種を栽培し、選果場で色や大きさなどを判別してから市場に出していたが、「ふじ」が出回るようになると、「祝」より綺麗な赤色で甘みも強い「ふじ」の方が多く市場に出されるようになった。そのうち、お歳暮などでも送られるようになっていったと廣子さんは話した。選果場を通して市場に出す販売方法は、味は良くても見た目が悪いと市場に出せないことが何度もあったため、出来上がったりんごをそのまま販売できる直売所と比べると、利益が少なかったように感じるということも述べていた。

また、廣子さんは「ふじグループ」の一員であり、グループのメンバーと一緒に、魚津のりんごを多くの人に知ってもらおうと活動を行っていたそうだ。農協婦人部が主催するイベントや県民会館などで行われたイベントに参加し、魚津のりんごを積極的に宣伝していたのだという。元々はりんごの栽培方法をお互いに教え合い、情報を共有するために作られたグループで、現在は各自が培ったノウハウを生かして栽培しているため、集まる必要はなくなったという。

いつから直売所で販売するようになったのかを尋ねたところ、いつ頃だったか定かではないけれども、選果場がなくなったことによって、直売所で直接お客さんに販売するようになったのではないかと廣子さんは話した。

現在の販売方法は、直売所での販売、電話注文が主となっていて、直売所を訪れる常連のお客さんは、昔から付き合いのある年配の方が多く、県内から訪れるお客さんだけでなく、石川県といった県外からりんごを買いに来るお客さんもいるのだという。

最近は魚津観光協会のホームページを見て、直売所を訪れたり電話で注文をしたりする人が増えたそうで、より忙しくなったそうだ。「直売所の出会いだけでなく、インターネットを通しての出会いもあって、たくさん良いご縁を結ばせてもらっていると感じる」と廣子さんは語った。

廣子さんにとって、りんごは生活の一部となっており、りんごがあるから今の生活があると語った。「ふじ」を栽培するまでは収入が少なかったが、「ふじ」がりんごの代名詞として売れるようになると、他の品種も売れるようになった。その影響によって、りんご栽培の作業効率を上げるための機械を購入することができたり、栽培する品種を増やしたりすることができた。さらに、魚津のりんごが「加積りんご」として有名になったことで、多くの客が訪れるようになったことはとても有難いことだと考えているようだ。

長い間りんご栽培を行っているため、先代から育てているりんごの樹は残していきたいし、これからも健康に気を付けて頑張っていきたいと思っているが、自分がいつどうなるか分からないので、今後のことは不透明な状態だという。まだ本格的なりんご栽培を手伝い始めた愛子さんに全てを任せるのは大変で、なるようにしかならないと思っているようだ。

3-4. 田林^{あいこ}愛子さんのお話

田林愛子さんは現在30代の女性で、8年程前に田林さんの家に嫁いでこられた。りんご栽培を本格的に手伝うようになったのはつい最近のことで、それまでは摘果や葉摘みなどの作業を少しずつ手伝っていたそうだ。作業は廣子さんが中心に行うので、その様子を見ながら見様見真似で作業を行い、接客をしているのだという。それだけでなく、りんごのそれぞれの品種がどういった時期に旬となるのかということ調べて、自分なりに紙にまとめるといったことも行っているのだそうだ。同年代の女性のりんご農家さんの繋がりや交流をするといったことはなく、毎日手伝いをしながら、自力でりんご栽培について学んでいるのだという。

「昔からりんごは好きだったけれど、りんご農家に嫁ぐことになった時は、りんご農家って大変なのだろうなという認識しかしていなかった。こんなに大変だとは思わなかった」と愛子さんは語った。りんごを作るためには、一年中その様子を見守っていく必要があり、体力と気力がある仕事なので大変だけれども、直売所でお客さんと話すのは楽しいのだという。接客をしているときに大変なことは、お客さんの名前とどれくらいの量のりんごを買っていったかを覚えていくことで、情報が書かれている伝票を見ながら、メモを書いて覚えていっているそうだ。そういった部分は大変だと感じるが、お客さんと直接話せることはとても楽しくて、一日があっという間だと感じることもあるのだという。

嫁いできた当初はあまり深く考えてはいなかったが、最近りんご栽培に本格的に関わっていくようになったことで、これからのことを考えるようになったと愛子さんは述べた。廣子さんが引退されたら、次は自分たちが引き継ぐことになると思うが、そう考えるとプレッシャーを感じることもあるのだという。廣子さんが毎日熱心に、愛情を込めてりんごを育てている姿を見ていることもあり、「自分たちの代に変わったときに、お客さんに美味しくないと言われるのが嫌だな」と思っている。でも、定年になったらりんご園を継ぐ予定だと夫が言ってくれているので、それまで頑張らなきゃいけないなと思っている」と語っていた。



写真 7-5 (左) 田林りんご園直売所での販売の様子



写真 7-6 (右) 品種や大きさごとに仕分けられたりんご

4. まとめと考察

これまでの節で、加積りんごにおける歴史や、その発展に携わった女性たちの活躍、現在りんご園で働いている女性たちは、どのような思いを持ってりんごを栽培しているのかということについて紹介してきた。以下では、それらをまとめる。

100 年以上前の明治 38 (1905) 年に魚津市でりんごが植栽されてから、加積りんごとして有名になるまで、魚津のりんご作りには多くの人が携わり、発展を遂げてきた。中でも今回の調査では、女性たちが加積りんごの発展に大きく関わっていたことが分かった。第 3 節で、「ふじグループ」のことについて述べているが、文献には「ふじグループ」のことについてほとんど語られておらず、グループの活躍は聞き取りを行っていく中で発見したものだ。

それまでの栽培方法の勉強会や全国りんご研究大会などは、男性が中心に行うものという意識があった中で、女性たちは自分の家のりんごを守るために勉強し、もっと多くの人に魚津のりんごを知ってもらおうと意欲的に活動を行ってきた。活動の例として、リヤカーを引いてりんごを売り歩いたり、イベントに参加してりんごの宣伝をしたりというものがあり、これらの活動も加積りんごの発展に一役買ったのではないかと考える。その後直売所を開くようになると、友人や近所の方だけでなく、ふじグループが参加したイベントで出会ったお客さんや、そのお客さんの口コミで魚津のりんごを知ったという人も、直売所でりんごを買うようになった。このことから、人と人の繋がりや縁によっても、加積りんごは支えられてきたということがうかがえる。

また、調査を行っていると、女性には主に、直売所でお客さんと交流を図りながらりんごの販売を行っている姿を見ることができた。それに対して、男性は主に栽培や力仕事、生産技術の方を中心に行うという役割があるようにも感じた。昔の日本は、男性が外に働きに出て、

女性は家の中で家事や育児を行うという生活形態で成り立っていたが、直売所という家のすぐ傍でりんごを販売するという仕事も、家で行う仕事の延長線上にあるものだと思われる。男女で完全に分業されているわけではなく、男性が直売所に立ったり、女性も栽培には携わったりしているが、女性の方がお客さんと接する機会が多いように感じるのは、女性がリヤカーなどでりんごを売り歩いてきた歴史や、イベントなどで、多くの人と関わってきたこととも関係していると思う。物を販売するためには、話し方や態度、言葉の選び方が重要となってくる。女性たちが、各地でりんごを販売していく中で磨いた話術は、現在の直売所でも生かされているのではないだろうか。直売所にいる女性と話すことを目的に訪れるお客さんもいるということを考えると、販売を行う中での女性の役割や活躍は、とても重要なのではないかと考えられる。それに対して男性たちは、加積りんご組合などで栽培技術を向上させ、品種更新や研究といった生産面に関わるところで、加積りんごの発展に尽力しているように思える。このように、男女それぞれが違った役割を担いながら、加積りんごを支えている。

ただし、女性の活躍の在り方にも世代によって違いはある。第3節で明らかになったのは、南恭子さんや田林廣子さんの世代は、ふじグループを始めとする同世代の人と協力して、栽培方法の情報共有を行って技術を高め合っていたことから、横のつながりが重要となっていたことがわかる。一方、南照乃さんや田林愛子さんのようなひとつ下の世代は、恭子さんたちが確立させてきたりんごの栽培方法を、直接見て学ぶことで体に覚えさせていたり、インターネットを使って独学で学んだりなど、個人で栽培を学んでいく姿が印象的だった。このことから、かつて横のつながりで得られていた栽培技術は、世代間で継承されるものへとなっていったと考えられる。

りんご園で働く方々は技術の継承を進めながら、更に美味しいりんごを作るために日々力を注いでいる。しかし、最近は温暖化の影響によって、りんごの管理が難しくなっているという。魚津でりんご栽培が始まった当初は昼と夜で寒暖差があり、りんごを育てやすい環境だったが、現在は気温が高くなりすぎて、日焼けや火傷の状態になってしまったり、傷みやすくなったりしてしまうことがあるそうだ。りんご栽培にはマニュアルのようなものはないため、環境の変化やりんごが今どのような状態にあるのかを観察しながら、手探りで栽培方法を検討していかなければいけない。これまで通りの栽培方法だと通用しない部分が出てきている中で、どのようにりんごを栽培していくのが、今後重要な課題となっていくのではないだろうか。

おわりに

現在加積りんごは、魚津ブランドの一つとなっている。その加積りんごがどのように栽培され、これまでどのような軌跡を辿ってきたのかということを、今回の調査で知ることが出来た。また、美味しいりんごを人々に届けるために尽力している人々のお話を伺うことで、

もっと多くの人にこのりんごのことを知ってもらいたいと思った。調査を行う中で、私は葉摘みの作業を夏の間に少しだけ体験させて頂いたことがある。敷地が広いりんご園の中、強い日差しを浴びながらりんごの状態を見て、葉を摘み取っていく作業はとても大変だと感じた。この作業だけでなく、りんごは一年を通して様々な作業があり、体力と根気のいる仕事だと思った。調査前の加積りんごの印象は、昔から食べている美味しいりんごというものにすぎなかったが、実際に作業を体験し、直売所の歴史などを知った後に、加積りんごを食べると、さらにその美味しさを噛み締めることができた。りんごはそれぞれ色や形、味が違っているが、りんご農家の方々は深い愛情を持って、それらのりんご一つ一つを大事に育てている。このようなたくさんの思いと歴史が詰まった加積りんごの魅力と味が、一人でも多くの人に伝わっていくことを心から願っている。

謝辞

今回の調査にご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げます。お忙しい中、度重なる訪問にも快く応じていただいた、南章りんご園の南恭子様、南照乃様、南章様、田林りんご園の田林廣子様、田林愛子様、加積りんご組合の方々にはこの場を借りて厚く御礼申し上げます。特に、南恭子様には調査の初期から大変お世話になりました。皆様から貴重なお話を提供していただいたおかげで、この報告書を執筆することが出来ました。誠にありがとうございました。

注

- 1) 婦負郡とは現在の富山市と射水市の一部の地域を合わせた、富山県南部の山間部を中心とした郡のことで、平成 17 (2005) 年に全ての地域が富山市と射水市に編入されたことにより消滅した。
- 2) 氷見郡は、現在の氷見市と高岡市の一部の地域で構成された郡のことで、昭和 26 (1954) 年に全ての地域が氷見市と高岡市に編入されたことにより消滅した。
- 3) 東砺波郡は高岡市、砺波市、南砺市の一部の地域で構成された郡のことで、平成 16 (2004) 年に編入されたことにより消滅した。
- 4) 西砺波郡は高岡市、砺波市、小矢部市、南砺市の一部で構成された郡のことで、平成 17 (2005) 年に、他の三郡と同様の理由で消滅した。
- 5) 太平洋戦争が始まる直前の昭和 16 (1941) 年に国によって実施されたもので、平地に栽培されている果樹類を伐採し、米・麦・芋などの主要食糧作物を育てるよう指導した。
- 6) 昭和 36 (1961) 年に制定された農業基本法の中の事業の一つ。農業経営規模の拡大等を通じ、生産性を高め、農家所得の向上をはかることを目的としていて、農業の生産基盤の整備開発や大型農業機械の導入、農畜産物の主産地の形成など農業近代化対策を実施した。
- 7) 「主力「ふじ」赤く甘〜く 台風なく収量も回復」『北日本新聞』2020 年 11 月 17 日朝

刊、p. 18 より

参考文献

魚津区域小学校長会 魚津区域国語教育研究会部編、1983 年。

『魚津区域郷土誌 魚津区域郷土誌物』新興出版社。

魚津市史編纂委員会編、2012 年『魚津市史 続巻現代編』魚津市教育委員会。

加積りんご組合編、1996 年『加積りんご九十年の歩み』加積りんご組合。

山田時夫著、1979 年『加積りんごの成立と近年の変貌』

参考にした新聞記事およびウェブサイト

「主力「ふじ」赤く甘〜く 台風なく収量も回復」『北日本新聞』2020 年 11 月 17 日朝刊、p. 18

魚津市「平成 27 年度刊行 魚津市の統計

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/attach/EDIT/024/024897.pdf>〉(2020/12/13 閲覧)

魚津観光協会公式サイト 魚津たびナビ「魚津のリンゴ園ガイド」〈<https://www.uzu-kanko.jp/basic/lingo-guide.html>〉(2020/12/13 閲覧)

第8章 加積地区におけるりんご栽培と人々のつながり

荻原 実穂

はじめに

私が魚津市を訪れたのは、今回の実習の調査が初めてだった。さまざまな所を歩き、興味関心をひくものを探していたところ、魚津ではりんごなどの果樹栽培が盛んであることを知った。そして、直売所がたくさんあるということを教えてもらい、実際にそのエリアに行ってみると、本当にたくさんの直売所があった。歩いていく先々に「〇〇果樹園」という看板が立ち、果樹畑が並んでいた。特に加積地区のりんごが有名なようで、「加積りんご」という名前を掲げた看板が多くあった。私はその様子を見て、なぜこんなにも直売所が多いのだろうか疑問に思い、魚津の果樹栽培について調査する事に決めた。調査をする中で、りんご栽培においては加積地区で昔から栽培が続けられていることを知り、今日までどのようにして継続されてきたのか興味を持ったため、加積地区でのりんご栽培について調査をする事にした。

調査では、りんご農家や農林水産総合技術センター園芸研究所果樹研究センターの職員からの聞き取りを行い、またりんご園での作業の様子や、畑回りの様子を見学させていただいた。また、複数の文献や資料より、加積地区でのりんご栽培の歴史についての調査を行った。

本章では、加積地区でのりんご栽培の実態と人々のつながりについて明らかにする。第1節では加積地区におけるりんご栽培の歴史についてまとめる。第2節では現在の加積りんご組合・研究会について記す。第3節では農家同士のつながりやノウハウの形成・継承について、「畑回り」という行事において観察したことを基に記す。さらに、第4節では直売所の形態が確立されていった様子をインタビュー調査に基づき記述する。第5節では加積地区でりんごを栽培し続ける思いを、主にインタビュー調査を基に記述する。

1. 魚津市加積地区におけるりんご栽培の歴史

この節では、『加積りんご九十年のあゆみ』（加積りんご組合、1996年）に基づき、魚津の主なりんご産地である加積地区におけるりんご栽培の歴史について記述する。

1-1. 加積地区でのりんご栽培の始まり

りんご栽培は、明治38（1905）年に魚津市の旧加積村吉島の富居太次郎氏が初めてりんご樹を植えたことが始まりとされている。

加積地区は片貝川の下流の扇状地に位置する。片貝川の氾濫はこの地区の農作物に大き

な被害を与え、用排水路が整備されていなかった時代は干害と水害に住民は苦しめられていた。地区の土地は砂質で痩せており、水持ちが悪かったことから稲作にはあまり適していなかった。しかし、柿はよく育つことが知られていたもので、富居太次郎氏はそこからヒントを得てりんご樹を植えてみたところ、この地区の気候風土にうまく適合したと考えられている。

こうして土地にあった作物であるりんごの栽培を始め努力を重ねた富居太次郎氏から、その孫である富居庄作氏の3代に渡って栽培面積を拡大させていった。同時に縁故者や近隣の人々にもりんご栽培を勧めたため、加積地区一帯でりんごの栽培が行われるようになった。

1-2. 加積りんご組合の設立

昭和12(1937)年4月、加積りんご組合が設立され、加積地区に初めてりんご樹を導入した富居太次郎氏の孫である庄作氏が初代組合長に就任した。当初の組合員は20名であった。この頃のりんごの栽培面積は約16haまで拡大していた。しかし、昭和16(1941)年に農地作付け統制規則¹⁾が施行され、果樹の伐採・間伐が強制された結果、8年生以下の若木が伐採され、栽培面積は急激に減少した。

1-3. 加積りんご研究会の発足

昭和24(1949)年11月、東北農業試験場の園芸試験場東北支部(青森県藤崎町)を退任後、東砺波郡出身の農業試験場出町分場(砺波園芸分場)に着任した小竹礪氏が加積地区のりんご園を視察する為に来園した。その際に東北と比べあまりに加積地区のりんご栽培技術が遅れている事が判明したため、小竹氏は少しでもそれを改善しようと加積地区に頻繁に通い、熱心に指導を始めた。また、小竹氏からりんごの大手生産地である青森県のりんご栽培の様子を見学してくるよう勧められた本庄長一氏らの栽培農家は、昭和25(1950)年と26(1951)年の2ヵ年にわたり現地を視察し、先進地の栽培状況に驚いたという。このときの経験から、栽培技術の研究および向上のため、昭和26(1951)年10月、栽培者9名により「加積りんご研究会」が発足した。

1-4. 病虫害防除の取り組み

昭和28(1953)年、病虫害の一斉防除の必要性(各農家がバラバラに防除を行っても、害虫が移ってしまうだけだった)を感じた加積りんご研究会では、独自に防除暦を作成し、これに基づく一斉防除をすることを示し、実施した。この頃は人力噴霧機による防除が主体だったが、栽培面積の大きい農家では次第に動力噴霧機を採用するようになってきていた。

また、各農家の都合で撒布日が一定せず、撒布に適した時期を逃してしまうところも多かった。そうすると薬剤撒布の効果は上がらず、病虫害の被害はかえって多くなってしまいうような状況も見られた。そこで、りんご組合は病虫害防除を徹底するには共同防除が最も適し

ているという結論に至り、昭和 31 (1956) 年、加積地区全体における共同防除が検討された。当時、共同防除の主流は定置配管方式²⁾だったため、ここでもこの方法を取り入れることになった。

ところが昭和 32 (1957) 年冬、長野園芸試験場より後澤憲志氏を講師に招いて剪定講習会を開催した折、病虫害の防除方法が、従来の定置式から今後は移動式SS機（スピード・スプレーヤー）³⁾に移行していく傾向が見られる事や、移動式の利点についての説明があった。定置式に比べ移動式は効率が良く、そちらが重要視されたのだが、防除配管に多額の経費がかかる上に、新たに移動式SS機を導入するのは負担が大きすぎたため、先に移動式共立SS1号機を導入している長野県小布施町押羽へ視察に行き、再度検討することとなった。その後りんご組合から何名かが視察に出向き、効率・経済的な面の検討も重ねた上で、共立SS3号機が導入されることになった。

1-5. 共同選果の実施

昭和 24 (1949) 年には食料統制が撤廃され、資材も少しずつ手に入るようになり、生産もようやく軌道に乗り始めた。新川青果⁴⁾への出荷が開始されると、だんだんと販路が拡大されていった。はじめは新川青果の境末治氏がオート三輪（トラック型の三輪自動車）で各農家へ集荷に回っていたが、販路が拡大されるにつれてこのやり方（戸別集荷）では限界を迎えるようになった。そこでいかに効率よく集荷するかについて話し合った結果、昭和 25 (1950) 年頃より加積農協倉庫で一括集荷が行われることになった。しかし、小さな農家では荷不足から玉（りんごの果実のこと）の大きさが一定せず、価格も安かったため不満が出るようになり、共同選果の必要に迫られた。そこで昭和 31 (1956) 年から共同選果事業に着手した。選果方法や基準については新川青果の境末治氏が取引先の農協から講師を招いて指導を受けた。

共同選果にはいろいろな取り決めがあるが、出荷の際に箱の横に氏名を書くと長くなるので、屋号を地区別印の中に書くことにしたのも、その一つだった。横枕・袋地区は□、六郎丸地区は「ヤマ」、吉島地区は「カネ」、相木・上村木地区は○となり、その中に頭文字の一字を記入することに決めた。図8-1は、『加積りんご九十年のあゆみ』資料 p. 103 の加積りんご組合員一覧表より抜粋し、筆者が手書きしたものである。左から二番目の図が、六郎丸地区の川西清則さんの屋号である。六郎丸の地区別印である「ヤマ」の下に、川西の「川」が記されている。この屋号は現在でも使われており、重宝している。選果にかかる人手は、栽培農家の婦人たちやアルバイトでまかなった。

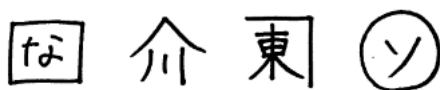


図8-1 左から順に横枕・袋地区、六郎丸地区、吉島地区、相木・上村木地区の屋号

1－6．果樹分場の設置

昭和 35（1960）年頃になると富山県の果樹面積は増大し、柿 430ha、なし 110ha、りんご 83ha のほか、ぶどう、桃などの栽培も盛んになり、新しい産地も生まれてきた。このような果樹栽培の規模の増加に伴い、栽培農家の育成・さらなる技術の進展のためには、加積りんご研究会だけでは厳しいものがあつた。そこで、国や県などの行政機関に呼びかけて、果樹試験研究機関を設置するべきだという声が上がった。りんご研究会では加積地区に果樹分場を誘致しようとりんご組合に呼びかけ、富居庄作組合長らが県・市に陳情に出向くなど、加積地区への果樹分場誘致運動を積極的に展開した。

その甲斐あって、用地に悩んだものの六郎丸地区の土地所有者の配慮で 5 ha の土地提供を承諾してもらい、ここに設置が決定した。この果樹分場が後に改称され、果樹試験場になった。そして後にさらに改称されて、農林水産総合技術センター園芸研究所果樹研究センターとなる。（名称が変わった現在でも農家達は「果樹試験場」と呼んでいる。そのため、以下では「果樹試験場」の名称を用いて述べていくことにする。）

1－7．災害との戦い

昭和 30 年代は災害が多く、栽培面積の増加にもかかわらず収量はほとんど伸びなかった。雪害による樹木の損害や台風、降雹、薬害が連続したためである。

なかでも昭和 35（1960）年の雪害の被害は大きく、毎日約 30～50 cm の積雪が続いた。翌 1 月に入ると、積雪は 2.5m にまで達し、雪の重みで枝が引っ張られたりして、樹木が裂けてしまった。

その傷も癒えぬまま、翌昭和 36（1961）年 9 月には大型台風の来襲を受け大量に落果し、大きな減収となった。そのため、農業関係資金を次々に受けることになった。

昭和 39（1964）年には降雹、翌 40（1965）年にはまたも大型台風の被害を受けた。このときの台風には日本海側特有のフェーン現象も加わり、「祝」の葉が一面に褐変し、りんご園が茶色に変色した。落葉した樹木が 10 月の温暖な気候に促されて新しい若芽を吹き、花が咲き、小さなりんごが実するという、次年度の不作が決まってしまうような状態となった。

また、平成に入ってからでも気象災害にたびたび遭遇し、特に台風の被害を多く受けた。平成 3（1991）年 9 月の台風 19 号では「ふじ」の 70% が落果し、倒木も多かった。平成 16（2004）年 9、10 月に訪れた台風 18 号、23 号では加積りんごは落果 85～95% となり、甚大な被害を受けた。

1－8．高度経済成長期におけるりんご栽培の不利状況

昭和 30 年代は災害の被害が多く、加積地区でもりんご栽培を諦める農家が多く出た。昭和 40 年代には日本経済が高度経済成長期に入り、農業は厳しい時代を迎えることとなった。りんご栽培だけでは生活が困難になり、会社員になったりアルバイトに出たりする成人男性が増えて、工業へと労働力が流れていった。このため、りんご生産農家の婦人たちは生活

のため、リヤカーを引き、市場へ出せないキズ品を町に売りに歩くなどした。町での馴染み客ができるまでは、かなり辛い思いをしていたと思われる。

昭和 40（1965）年に実施された農業構造改善事業では大型ほ場整備が行われ、水田は基盤の目のように整えられた。りんご栽培においては栽培面積の拡大が目指されたが、生産過剰によりりんごの価格は低迷し、米価との格差もあり当初の目標とは裏腹に一部栽培者は兼業になったり、高齢化・技術不足・自然災害によって意欲を失ったりした人も現れた。そして基盤整備で水田に隣接したりんご園などでは急激に水田への転換が行われるようになった。

1－9. ふじ栽培の基礎形成

昭和 39（1964）年にはりんご研究会が県の委託を受けて苗木の増殖を行い、「東北 7 号（ふじ）」などの新品種の育苗を行った。農業構造改善事業によるりんご園の減反などで、「ふじ」などを増反する者はいなかったのだが、昭和 47（1972）年に米余りから稲作の転換が進められ、苗木作成事業が国の補助を受けるようになり「ふじ」や「つがる」の増殖が行われた。

「ふじ」は初め有袋⁵⁾での栽培で良品が生産され、消費者人気も高かった。生産農家の婦人たちによるリヤカー販売で消費者からの声が直接届いたこともあって、需要に応えるために増殖するなどして生産量が増加していった。ただし、長野県産等と比較すると色づきが悪いため買いたたかれてしまい、市場に出荷することは断念することになった。

昭和 54（1979）年には、伊東喜悦氏という六郎丸地区の農家が「ふじ」の無袋⁶⁾栽培に挑戦し始めた。手間がかかる反面「味が良い」と消費者からは好評で、見た目の良さが無くても自家販売ルートがあれば販売できると考えられた。昭和 40 年代から始まった生産農家の婦人たちの販売網もあり、市場に頼らずに販売を展開していった。同時に顧客のロコミで、無袋でも味が良ければ売れるようになり、「ふじ」の無袋は急速に生産者の間で広まっていた。

肥料の問題や、剪定方法でも研究を重ね、りんご研究会を通じてそれを普及させるなど、現在の「ふじ」栽培における基礎が築かれていった。

2. 現在の加積りんご組合、加積りんご研究会について

本節では主に、令和 2（2020）年現在の加積りんご組合の組合長である川西清則さん（61 歳）への聞き取りに基づいて記述していく。川西さんは父親のりんご畑⁷⁾を継いで、りんご農家を始めてから 23 年目となる。

加積りんご組合は、加積地区のりんご農家 44 軒全てが参加している組織である。44 軒の組合員から集金を行い、PR や防除、花見会、剪定講習会などを行っている。年に 6 回行われる組合の役員会でこれからの行事をどのように行っていくか等を話し合う。昔は組合に参加するのは基本的に男性ばかりだったのだが、現在では女性も参加している。

防除は組合員が協力して行っており、防除の2、3日後にはその結果の調査会も行っている。年間に計15～16回の防除を行っているのだが、防除を行うごとに毎回その調査会も行われている。調査会のメンバーは、組合の中から選抜される。基本は、りんご組合長と副組合長、りんご研究会長と副会長の4役と、若い組合員数人の8～10人で構成される。これにより、若い人が農業について勉強することも狙っている。年間の防除暦で予定は立てているものの、実際に防除が終わった後の状況を見て、予定通りにこのまま行うのか、何か変更を加えた方が良いのかということを検討して予定を修正する。

加積りんご研究会は、加積りんご組合の中にある組織であるが、りんご組合とりんご研究会は同一のものというわけではない。組合員のほとんどが加入しているが、加入していない人も4、5人いる。また、組合と同じく研究会も男性だけが加入している訳ではなく、女性も参加している。農家の奥さんが中心になってりんご栽培を行っている家では、その奥さんが研究会に加入する。男女を問わず各家を代表して誰かが会員になるという考え方である。りんご組合は加積地区のりんご農家である組合員をとりまとめる役割を持つとともに、市や県などの外部とのやりとりを行う、対外的な性格を持つ。一方で、りんご研究会は農家同士が切磋琢磨して栽培技術を向上するための活動を主に行っているといえる。

加積りんご研究会は特に栽培技術、とりわけ剪定技術や摘果技術について研究している。ただし防除の研究はりんご組合が行っていて、調査会が主にその役目を担っている。また研究会は、畑回り、土壌分析、新しい情報の入手・共有も行っている。「畑回り」とは参加した組合員のりんご畑を、果樹試験場の職員なども交えて皆で見て回る事である。2月の剪定後の時期と、6月後半の摘果作業が大体終わった時期、10月後半の「ふじ」の収穫の時期と、年に計3回行っている。いろいろな農家の畑を実際に見て回ることで、勉強になる場であるそうだ。土壌分析では木の下の方の土を採取し、それを乾かす。新川農林振興センター⁸⁾に提出して分析するためだ。分析結果は翌年の肥料の参考にしている。

3. 農家同士のつながり、ノウハウの形成・継承

本節では個人の農家を対象に行った聞き取り調査に基づいて記述していく。畑回りについては、同行させてもらって実際に見た様子や伺った話に基づいて記述する。

3-1. 川西清則さんへの聞き取りから

加積りんご組合長の川西清則さんに、ノウハウの形成について伺ってみたところ、一番にあげられるのは、やはり「畑回り」であるようだった。年3回の畑回りでは、まず果樹試験場に参加者全員が集合し、畑を回り終わったら果樹試験場に戻って、講評を受ける。果樹試験場からは、他にも県外の情報をもらったり、自分の園での病気を調べてもらったりしている。また、農家から「こうした方が良いのではないか？」という提案をして、それを試してもらったりもしている。また、りんご組合が主催している剪定講習会の講師を選ぶのはりん

ご研究会だが、その講師を頼む県外の農家さんとの間をつなぐ役割を担っているのは、果樹試験場であるらしい。

畑回りでは、自分の経験に基づいて、「あれは、自分はああした。」「自分はこうした。」「あのやり方はないと思う。」というように意見を言い合い、お互いに学んでいるという。しかし、農家にもいろいろな人がいて、自分のりんご栽培のやり方に対して「主観的な人（自分の栽培方法が一番正しいのだと、周りの意見を気にしない人）」もいれば、「客観的な人（自分のやり方のみではなく、周囲のアドバイスも聞き入れ、より良い栽培方法を模索している人）」もいると川西さんは感じているようだ。りんご栽培に対して言えば、主観的な人よりも客観的な人の方が良いりんごを作れると川西さんは考えている。

また、りんご組合主催の剪定講習会でもノウハウの形成は行われている。1月から行われる剪定作業は特に難しく、経験と技術が必要になってくるらしい。そのため、初心者向けの若手剪定講習会というものもあって、J A青壮年部加積支部が中心となって勉強をしているという。年に2回、2月には剪定についての、6月には摘果作業などについての勉強を行っている。畑回りなどに出てくるのは基本的にベテランの専業農家が多く、基本中の基本も知らない若手の人たちは少し質問しづらい場合もあるのだが、分からない者同士なら気兼ねなく質問し合えるので、貴重な勉強の場になっているという。若手剪定講習会について川西さんは、「りんご栽培を行っている親に『もしも』のことがあった時に、少しでもりんごの知識を持っていたら、りんご栽培を継ごうと思ってくれやすいのではないか」とも話していた。

川西さんには、りんご栽培のノウハウの継承についても伺ってみた。川西さんはお父さんが最初に関りんご栽培を始めて、ご自身は2代目なのだという。川西さん自身は38歳からりんご栽培をやり始めたのだが、それまでは会社勤めをしており、カーバイド工業で勤務していた。お父さんからりんご栽培の本当に基本的なこと、剪定の仕方や肥料、支柱の立て方などを教わったが、あとは自分で剪定講習会に参加したりして勉強していったらしい。トライ&エラーでいろいろと試しながら自分の技術を確立していったそうだ。先代から教わったことをそのまま受け継ぐのでは駄目なのかと聞いてみたところ、親の時代と今の時代では気象条件が異なっていて、親の時代には上手くいっていたやり方でも、今ではそのやり方が合わなかったりするらしい、ということが分かった。昔は今よりも気候がりんご栽培に適していたので、「手抜きをされていてもりんごができる状態」だったそうだ。今は温暖化の影響で気温が高くなっており、剪定や肥料の具合をしっかり見てやらないといけな。また、温暖化で雪が降らなくなっていてカメムシが増えたり、暖かい雨が続いて病気が発生したりするため、防除にも気を遣わなければならない。親のやり方をただそのままやっていたら、これからまた気候が変化して木が弱ったりした時に臨機応変に対応することができない。そのため、自分自身で勉強して技術を身につけていくことが必要だと川西さんは感じているらしい。

3-2. 南恭子さんへの聞き取りから

御年 80 歳のベテラン農家である南恭子さん（南章りんご園）にも、ノウハウの形成・継承について伺ってみた。南さんは嫁いできてからりんご栽培を始めたのだが、お舅さんからりんご栽培について何かを教わることは特になかったという。お舅さんは商売人気質ではあったけれど、自分で頑張っている人ではなかったためか、研修会や会合も南さんに「行ってこい！」と言って行かせていたという。当時の会合などは男性が主体で、女性として参加していたのは南さんが初めてだったので、「女が（会合に）入ってきて！」と非難めいたこともよく言われていたそう。それでも南さんは勉強したいから、嫌な思いをしながらでも参加していた。また、お舅さんの従兄弟が専業でりんご栽培を行っていたため、その人の所に行き行って教えて貰ったりもしていた。他にも技術があつて上手な人のところに聞きに行ったり、講習会にも沢山行ったりして、自分で勉強をしてノウハウを形成していったそう。

最近では南さんの息子夫婦がりんご栽培をやり始めたということなので、どのようにノウハウの継承をしているのか聞いてみたところ、南さんが全て手取り足取り教えるということはないのだという。まずは息子さん達が自分なりに考えて行った作業の様子を見て、質問を受けたり的確なアドバイスをしあげているそう。「親からああだと言われるとやる気もそがれるだろうし、自分で勉強していくことが大切」と思っているそう。

3-3. 畑回り

畑回りとは、加積りんご研究会主催の行事で、年に 3 回行っている。剪定が終わった 2 月～3 月の畑回りでは剪定がしっかり行われているかを見て回る。摘果作業が大体終わった 6 月後半の畑回りでは摘果が正しく行われているか、樹勢の様子、実がなっているかを見て回る。「ふじ」の収穫前の 10 月後半に行う畑回りでは「ふじ」の着色の状況や収穫直前の実のなり方を見て回る。また、すべての畑回りにおいて、害虫や病気の有無も確認している。

畑回りでは、（組合員全員の畑ではなく）参加した農家さんの畑を、果樹試験場の職員なども交えた一行が順に見て回る。まず果樹試験場に全員が集合し、挨拶などを行ってから果樹試験場の畑の様子を見て、各農家の畑を見に行く。その後果樹試験場に戻ってきて、講評を受ける。以下では、令和 2（2020）年 10 月 29 日に見学した畑回りの様子を記述する。

畑回りは果樹試験場で開始される。13 時 30 分の開始時刻に先立って、りんご農家の方々は続々と果樹試験場に集まってきていた。参加者は男性が多くを占めていたものの、女性も数人参加されていた。当日は天気が良かったため、いつもよりも多くの人が集まっていたらしく、計 21 組の農家が参加していた。それぞれ挨拶しに歩きまわったり、たばこを吸いながら雑談したりと和やかな雰囲気だった。農家の方々とは様子の違う、白いつなぎを着た人たちもいて全員果樹試験場の方々かと思ったが、それだけではなく新川農林振興センターなどの県職員の人たちのユニフォームなのだという。

13 時 30 分になると代表者の挨拶などが行われた。りんご研究会長の富居（カネ重）さん

が、今年は長雨の影響で褐斑病やカメムシの発生が相次いでいることの説明や、今回の畑回りで他の園地を見て回る際に「ここは色づきが良いな、実が大きいな」と思うだけでなく、自分の園地との比較を行うようにと話された。挨拶が終わると、いよいよ畑回りである。なお、私はりんごの木を見てもその善し悪しが分からないので、主にりんご組合長の川西清則さんから解説していただきながら畑回りについて行った。以下の記述は川西さんに教えて頂いたことを交えてある。

まず、果樹試験場の「ふじ」畑へ移動し、果樹試験場の副主幹研究員である大城克明さんが今年の「ふじ」の育成状況の説明を行った。大城さんによると、「ふじ」畑では今年も「さび果」が出てしまったという。「さび」というのはりんごの実に見られる黄色い網目状の模様のこと、特に「ふじ」に出やすく、原因はまだ不明らしい。去年さびが出ていた枝にチェックをつけて、今年はそれを全部切ってみたけれどさびは広がってしまっているということだった。また、農家の皆さんに向けて、さびに関わらず他にも病気や農薬がかかりづらい位置にある枝などを剪定するときに、葉や果実など目印がない状態で切るのを忘れないように、この枝はもう駄目だという印をあらかじめつけておくことを勧めていた。他方で、それを聞いていたりんご農家のなかには、さびが出た枝を切るとさびが他の枝に移ってきてしまうから、さび枝は切ってはいけないのだと話合っている人もいた。

果樹試験場の畑を見終わったら、参加している各農家の畑を順に回っていく。職員の方が名簿を見ながら次に向かう農家の屋号を呼び、「次、●●行きまーす！」と合図して、移動を開始するという流れだった。それぞれの車で一斉に移動し、近くの公民館の駐車場などに車を停めて、農家のりんご園へと向かう。見学する園の持ち主が畑回りの中心で、基本的にはその人の周囲に県の職員が集まっていた。他方で、参加者の多くはそれぞれ自分の好きなところを見ていて、畑のあちこちで気楽なお喋りが行われていた。以下では、畑回りを行った中で印象的だった所の様子を記述していく。



写真 8－1 畑回りの様子

一つめは、褐斑病が発生した畑での一コマである。褐斑病というのは葉や果実に褐色の斑点が出る病気らしい。この畑は、いつもはもっと良い畑だが、今年は「玉」がまばらで少ないそうだ。「去年にりんごを採り過ぎて木が疲れているように見える」と川西さんは話した。どのりんごの木にも、適切な果実の量というものがある。しかし、摘果作業の際に良い感じに大きくなっている実があると「(このまま育てても) いけるかも」と、つい適量を超えた実を木に残してしまうことがある。そうすると、翌年の収穫に「リバウンドが来る」、つまり何らかの不具合が生じるということだった。

次に、秋田県の「ふじ」が多い畑でのやりとりを取り上げる。「ふじ」にも系統があり、種類によって色づきや蜜の入り方に違いが出てくる。在来品種の「東北7号」から、「一系」と「二系」に分かれるのだという。一系(長野県の「ふじ」)は実がベタッと赤くなり、色づきは良いものの外から見てちゃんと熟しているのか分かりにくい。二系(秋田県の「ふじ」)は実に縦縞模様が見られる品種で、一系のようにベタッと赤くはならない。この二つのうち、二系が主力になりつつあるのだという話だった。また、ここでは農家の方々は一本の木の周りに集まって、触ったりしながらいろいろと話し合っていた。木は葉などが全体的に赤くなっていて、枯れてしまいそうな様子だった。病気のために、根元の外側の部分、つまり養分が通るところがボロボロになってしまったのだという。そのため養分が行き渡らずに葉が赤くなり、枯れそうになっている。「この木はもう駄目で、植え替えになるかな」という話だった。他にも接ぎ木して、バイパスを通すように養分を送るようにする事もできるが、ここまでひどい状態になってしまった木を残して回復させるように努力するよりも、植え替えてしまった方が楽なのだそうだ。

三つめに、最近になって本格的にりんご栽培を両親から引き継いだという農家の畑でのやりとりを取り上げる。ここの園でもまた皆さん一本の木を囲んでお話されていたのだが、主語などが省略されていて私には何のことを話しているのか分からず、近くをさまよっていたら、果樹試験場の方が「何の話題で盛り上がっているか分かる？」と話しかけて下さった。正直に全く理解できていないことを伝えると、「あれは褐斑病が出た木で、何が原因で病気になってしまったのかを皆で検討して、意見を言い合っているんだよ」と教えて下さった。くだんの木の周りは支柱(りんごの枝が実の重みで折れないように支えるための柱)の位置が少し悪くて、SS(スピードスプレーヤー)がうまく通れなかったために農薬のまきむらが出てしまい、病気になってしまったというのが皆さんの見解らしい。見ただけで分かるものなのかと私は驚いてしまった。この園の農家は、今回のベテランたちからの指摘を活かし、改善していくようだった。この農園の方には直前の移動中に少しお話を聞いていて、「りんご栽培はまだ始めたばかりで分からない事が多いから、初心者向けの講習会や畑回りに参加して勉強している」と話していた。実際のやりとりを見ることができて、このようにして学んでいくのだということが分かった。

四つめは、畑回りに参加していない農家の畑の様子についてのやりとりを取り上げる。ある農家の畑を見回っているとき、何人かの人が隣接している別の畑の様子をうかがってい

ることに気がついた。その畑を見てみると、植えてある木の数も、立っている支柱の数も今まで見てきた畑よりかなり多くて日当たりが悪く、薄暗い様子だった。その畑を見ていた人の話によると、このように畑が混み合っていると、撒布しなくてはいけない農薬の量が増えるためにコストが余計にかかるし、畑が混み合っているとSSがうまく通れるところが少なく、まきむらも出てきてしまうのだという。また、畑の中まで日が当たらないので、日が当たる外側にしか実がならずロスも多いらしい。しかし、それでも隣の人はこのやり方で良いと思っているらしく、「自分たちとは（りんご栽培の）流派が違うのだ」と、その人は話していた。私はこれを聞いて、りんご栽培に対する考え方、思いにも違いがあるのだと感じた。

参加した農家たち全ての畑を見終わったら、果樹試験場に戻って講評を受ける。広い倉庫のようなところで、パイプ椅子を出して全員が着席して資料を受け取ってから講評が始まった。

まず新川農林振興センターの方からお話があった。今年は台風がなく、本当の意味で園地の収量を把握できる年であることや、きちんと収量をチェックして、これから育てていく品種のことについても考えて欲しいということが伝えられていた。

次に果樹試験場の方から、今年は台風がなく、今回の畑回りでは今年一年の集大成を確認できたというお話があり、着果・肥大は概ね良好であるが着色はかなり園ごとに差が見られたので、今年の反省として剪定や肥料を見直す機会として欲しいということだった。また、今年は加積地区で褐斑病が多発していたので、褐斑病の原因と考えられる「SSがきちんと通っていない」「枝が重なって奥の枝に薬剤がかかっていない」ということがないように確認することを提言していた。



写真 8－2 講評の様子

最後が加積りんご組合員からのお話で、りんご研究会長の富居さんは「もうじきふじの収穫に入るといことで、春からの作業の成果が分かってくると思う。失敗もいろいろあると思うが、それには原因があるので、収穫作業をしつつもその原因を探って行って欲しい」と話していた。りんご組合長の川西さんは、りんご作りは一年間のトライ＆エラーであること、褐斑病対策としてSSのスピードを落としてゆっくりと農薬を撒布することで葉のまきむらが出ないように徹底して欲しいことを話していた。

その後少し連絡事項を伝えられた後、解散となり今回の畑回りは終了した。

4. 直売所について

現在、加積地区でのリンゴの販売はほとんどが庭先販売、いわゆる直売所の形態である。自宅やりんご園の近くにある納屋などの建物を直売所として利用しており、注文を受け付けて商品を発送したり、直売所に置いてある袋詰めのにんごを販売したりしている。

ただ、直売所とひとくくりに呼んでも、その内容は各農家でさまざまである。ほとんどの直売所では袋売りを行っている中で、「ふじ」の繁忙期以外は量り売りを行っている所もある。また、生のりんごだけでなく、ジャムやキャンディといった加工品を作って販売している所もある。店先に代金箱を置いて無人状態の所もあるが、繁忙期である「ふじ」の時期になるとほとんどの直売所には常に人がいて、お客さんの対応に当たっている。店先に立つのは大体が女性たちで、お客さんとの会話もはずんでいる。常連客は馴染みのお母さんと会うために顔を出す人も多いという。



写真 8－3 無人の直売所での袋売りの様子

加積地区のりんご直売所のなかには、「一見さんお断り」の状態になることもある。それぞれの直売所の客はほとんどが常連で、昔ながらの常連客を大事にしているからだ。台風などで収穫量が少ないときは、常連客の分だけ確保したら直売所に張り紙をして店を閉めてしまうこともある。農家としてはできるだけ沢山の人にりんごを食べて貰いたいという気持ちはある一方で、自分の畑で採れるりんごの量は決まっているし、常連客をないがしろにはしたくないため、そのような対応を取るのだという。しかし、台風などが無く、りんごの量が十分にあるときは新規のお客さんも大歓迎だそうだ。

第1節の中でも少し触れたが、加積りんごの販売の仕方は変化してきた。第二次世界大戦後、食糧統制が撤廃された昭和24(1949)年以降は新川青果への出荷が開始された。昭和40年代の高度経済成長期には栽培農家の婦人たちがリヤカーを引いて町へ売り歩き、昭和54(1979)年に「ふじ」の無袋栽培が始まると、自家販売ルートを形成し、市場に頼らない販売が展開されていった。このように、はじめから今のような直売所での販売方法が形成されていたわけではなかったのだ。

以下では、直売所ができるまでのことを、南章りんご園の南恭子さん(80歳)から伺った具体的ないきさつに基づいて記述する。南さんは昭和35(1960)年に嫁いできてからりんご栽培を始め、以来60年間りんご栽培を続けている。

直売所ができるまで

栽培農家の婦人たちがリヤカーを引いて町へ売りに歩いていったというのは、南さんより先代の人たちの時代で、売っていたのは「ふじ」ではなく「旭」などの品種であつたらしい。当時は量り売りで、棒秤で量って売ってあげていた。ビニール袋もない時代なので、お客さんはみんなお鍋を持って豆腐を買うときのように、籠を持って買いに来ていた。

南さんは、リヤカーを引くのではなくトラックに乗り、一軒一軒家を回ってりんごを売りに行っていた。しかし、売りに行っても「魚なら毎日必要だから、毎日来てもらっても買うけれど、りんごはいらない」と言ってすげなく断られることも多かった。10軒回っても1軒だけしか買ってくれなかったり、一つも売れなかったりしたこともあった。若い女性が一人でその家を一軒一軒回るということがまずとても辛くて、それでも頑張って勇気を振り絞って行っても全然売れなくて、情けなくて大変だったと語っていた。全然売れない日は、りんごを川に投げ捨てて、売れたことにして帰ってしまおうかと思ったこともあったくらいだった。しかし、南さんのお舅さんが商売に厳しい人で、きちんと売り上げを出さなければならなかったのですんなりそんなこともできなかった。

青果市場にりんごを売りに出すと、見た目が悪いために買ったたかれてしまう上に、マージンを取られてしまう。そこで、お舅さんが指示を出し、トラックで回るなどして個人販売を行っていた。南さん自身は行きたくなくてもお舅さんが厳しかったので行かざるを得なかった。トラックに乗って回る販売は1、2年ほど行っていたが、県民会館でのPR等のおかげでお客さんもつくようになってからはやめてしまった。しかし、このトラック販売時代

に築いたお客さんとのつながりが、現在の常連客の基盤になっているという。

南さんが嫁いできて、りんご栽培を始めた当時は直売所というものは全くなく、農作物の販売およびPR活動は県民会館で行っていたらしい。テントの前には、りんご園から切ってきたりんごの木の枝をぶら下げて、りんごの実も机に置いてPRをしていた。店先に立って宣伝するのは南さんを筆頭に農家の奥さんたちで、男性たちはりんご園で作業をしていたそう。また、当時りんごを栽培していたのは富山県内で魚津くらいしかなかったのも、何かの催し物があるとそこに呼ばれて、りんごを販売・宣伝することもあったそう。市場に出すと見目が悪く買ったたかれていたことを踏まえ、逆に「器量は悪くてもおいしいりんご」というキャッチフレーズでPRした。りんごにもそのキャッチフレーズが書かれたステッカーを貼って販売したので、後に「器量が悪いけどおいしいりんごをください。」と連絡が来ることもあったという。

しかし、そのうちスーパーマーケットができ始めると、そこで県外のりんごが安く売られるようになり、物珍しさもあってお客さんがそちらに行くようになってしまった。そのため自分たちのりんごが売りにくくなってしまったという。ところが、南さんのりんごを買ってくれていた人が、「スーパーのりんごはまずかったわ!」と言って、また南さんのりんごを買ってくれるようになった。その人は友人たちにも宣伝してくれたらしく、その結果、南さんの家までりんごを買いに来てくれる人たちも現れるようになった。また、県民会館やイベントでの販売の際に、商品に張っていたステッカーを見て買いに来てくれるようになった人もおり、南さん自身がトラックで売りに行かなくても良いようになった。こうして南さんはトラック販売から直売の形態へと移行し、現在も直売所での販売を続けている。

5. りんごを作り続ける思い

富山県では、魚津以外にもりんご栽培が行われていた所はある。なかでも、呉羽や氷見では一時期かなりの本数のりんご樹が植栽されていたという。しかし、それらの地域は今ではほとんどがりんご栽培をやめてしまっている。他の県内産地がりんご栽培を続けられているのに、なぜ魚津、特に加積地区では今に至るまでりんご栽培を続けられているのだろうか。インタビュー調査の中でそうした疑問について尋ねていくと、農家の方々のりんご栽培への思いを聞くことができた。本節では、最後にそれらをまとめる。

まず、富山県内の多くの土地でりんご栽培が継続されなかったことの原因として、昭和40～50年代に行われたほ場整備をあげる人が多かった。水稻作業の機械化により、歪な形の農地を機械での作業が行いやすいように整備していたのだが、さまざまな畑や田んぼが隣り合う状態だったものを、きれいに整えるには集落全体で取り組まなければならなかった。整備は10aを一つの単位にしてドット絵を埋めるようにして行われていった。その際、10aの範囲に果樹園の畑が重なっていると、その果樹は伐採されてしまうことが多かったらしい。そうして集落全体が田んぼになり、多くの果樹が伐採されていった結果、昔から続いて

いたりんご農家がほとんどなくなってしまった。一方で、加積地区は土地が痩せており、稲作にはあまり適していなかった。そのため田んぼを整備しても大きな価値はなく、また地元農家はりんご栽培で十分利益を出せていたため、「加積地区はりんご栽培でやっていくんだ！」と集落全体でりんご栽培の方針を採ったので、昔から現在までりんご栽培が続けられているという。

その一方で、りんご栽培が儲かるらしいと知って、後からりんご栽培に参入した人のなかには、稲作のように機械での作業が中心だろうと考えた人もいたらしい。しかし、ほとんど全ての作業が機械ではなく一つ一つ人の手で行われているという現実打ちのめされ、やめてしまう人も多かったという意見もあった。りんご栽培を40代で始めたとなると、りんごの木が大きくなり収穫が軌道に乗り始める時期にはその人は60代になってしまっている。すると、肉体的に作業が辛くなりやめてしまうというケースもあったようだ。

では、加積地区でりんご栽培が続けられているのはなぜなのだろうか。土地が痩せており、稲作にあまり適していなかったという理由は分かるが、それでも現在加積地区に田んぼが全くないわけではないし、作業の辛さは皆一緒であるだろう。

加積りんご組合長の川西清則さんは、現在主力になっている品種「ふじ」が安定したおかげで、りんご栽培が続けられているのではないかと語っていた。「ふじ」という品種が出てくる前は、思うようなおいしいりんごが作れず、それならば田んぼにしておもうという人もいたのではないかということだった。りんご栽培技術の確立と、「ふじ」という主力品種ができたことで、現在の農家はやっていけているのだという。また、「加積りんご」は平成20（2008）年に地域団体商標の登録を果たし、ブランド認定された。これは、全国のリんご産地で2件目の快挙であった。「皆様に認められたそのブランドの名前に恥じないように、農家たちは頑張ってりんご栽培を続けていると思う」と川西さんは語っていた。

南章りんご園の南恭子さんは、加積りんごには100年以上続く歴史があり、自分の代でそれを終わりにしたくない、続けていかなくちや、という気持ちがあると話した。加積りんごの長い歴史に、誇りとある種のこだわりを持っているかのようだった。また、りんごの木は育てるのに大変手間と時間がかかる一方で、りんご栽培をやめる際にはその木をすぐに切らなければならない。栽培をやめて農薬撒布をやめると、途端に木が病気に罹ったり害虫がわいたりするのだが、それを放置すると周囲に病気や虫が移って迷惑をかけてしまうからだ。南さんは、今まで自分が手間暇かけて、丹精込めて育ててきたりんごの木を、そんなあっけなく切り倒してしまうのは忍びないと話した。これも、りんご栽培を思い切ってやめることができない理由のひとつであるようだった。

おわりに

今回の調査では、りんご栽培における様々な人々のつながりを知ることができた。加積地区のりんご農家全てが加入する加積りんご組合では農家をとりまとめ、防除を皆で協力し

て行っていることが分かった。また、加積りんご研究会では剪定技術や摘果技術を研究し、畑回りを行っていることが分かった。畑回りでは果樹試験場の職員などを交えながら、参加した農家の畑を見て回り、病気の原因を探り意見を言い合ったり、この品種が「美味しい」か、あるいは「微妙だ」と情報交換をしたりするなど、農家同士が横のつながりのなかでお互いに学び合う姿勢を見ることができた。

それに加え、魚津の果樹園での主な販売方法である直売所では、農家と消費者である客のつながりも見ることができた。それぞれの直売所には常連客がついており、昔からその関係を保っていた。農家は常連客を大切にしているし、常連客は馴染みの農家に会うために直売所に訪れる人も多い。直接会って顔を見て話すことができるという、直売所ならではの強い関係性を感じた。調査のため直売所でお話を伺っている最中に、お客さんが来たことも何度かあった。その際はお客さんの対応を優先して頂いて、やりとりの様子を見ていた。常連らしきお客さんに対しては、顔を見ただけで誰だかを把握していつもの注文内容を確認したり、初めてのお客さんに対しては丁寧に質問に答えたり、おすすめの品種を紹介したりと、綿密にやりとりしていた。農家と消費者の距離の近さを感じることができた。

お話を伺うなかで、りんご園の土地やりんごの木を通じた世代の関係性や、近隣の農家との関係性があるということも分かった。加積地区でのりんご栽培は昔から続いており、それは土地や木を継承しているということだ。これらの共通のものがあることで、先代とのつながりが意識される。加積地区では隣接した畑も多く、虫や病気が発生したら周囲の畑にも移ってしまう可能性がある。そのため、農家は自分の畑で虫や病気をださないようにするのはもちろん、周囲に虫や病気を移してしまわないように配慮が必要になる。りんご栽培をやめる際に、すぐりんごの木をすべて切らなければならないというのも、この配慮に基づいている。

今回の調査で魚津のりんご栽培に関わる人々からの聞き取り及び作業の見学・体験や、畑回りに同行する中で、りんご栽培の大変さや苦勞を感じるとともに、りんご栽培への思いを伺うことができた。加積りんごの歴史に対する誇りや、今まで自分が努力して身につけた技術や経験に基づいた、りんご栽培への矜持があった。りんご栽培に対する思いの違いで、作られるりんごのできも変わってくるのだと話す人が何人もいたので、それはとても印象に残っている。同じ「魚津のりんご」だとしても本当に美味しいものが食べたいならぜひ自分の所のりんごを買ってみて欲しいと語った人もいた。お互いに学び合い切磋琢磨する農家同士の横のつながりや直売所での農家と客とのつながりなど、様々なつながりを作った加積りんごの栽培がこれからも永く続いていくことを願っている。

謝辞

今回の調査に当たって、ご協力頂いたすべての皆様に厚くお礼申し上げます。加積りんご組合長の川西清則様、南章りんご園の南恭子様をはじめとする加積りんご組合の方々、農林水産総合技術センター園芸研究所果樹研究センター・副主幹研究員の大城克明様をはじめ

とする職員の方々には大変お世話になりました。そのほか突然の訪問であったにもかかわらず聞き取りに応じてくださった方々など、皆様のご厚意により無事調査を終えることができました。この場を借りまして再度お礼申し上げます。本当にありがとうございました。

注

- 1) 農地を耕作以外の目的に使用する場合は知事の許可が必要になり、米などの食糧作物の作付けを確保するために果樹や桑などを新植する事が禁じられた。
- 2) 農地を巡らせる配管を設置し、上流から農薬を流して行き渡らせる方法。
- 3) 主に果樹園で用いられる薬剤噴霧機。トラクターなどで牽引するものと自走式のものがある。自走式の場合はゴーカートのような形状をしている。加積地区では自走式のものが用いられている。
- 4) 現在GUがある魚津市相木 3603 番 1 にあった市場。仲買を行っていた。平成 25 (2013) 年に倒産。
- 5) りんごの実が小さいうちに袋を被せて栽培する方法。害虫から実を守る効果がある。また、りんごの皮がなめらかになり見た目も良くなる。
- 6) 袋を被せずによりんごを栽培する方法。有袋のものと比べると見た目は良くないが、太陽の光を直接浴びて育つため糖度が高く、香りが良い。
- 7) りんご園と意味合いは同じ。地元の農家達はりんご栽培を行っている園地を「畑」と呼ぶことが多い。
- 8) 富山県魚津市新宿 10-7 魚津総合庁舎 3 階

参考文献

魚津市史編纂委員会編、2012 年『図説 魚津の歴史』魚津市教育委員会。
加積りんご組合編、1996 年『加積りんご九十年のあゆみ』加積りんご組合。

第9章 魚津漆器の過去と現在

出上 岳

はじめに

本章では魚津市を代表する伝統工芸品である魚津漆器について述べる。魚津漆器の歴史は古い。記録には室町時代末期に起源を持つとの記述が見られ、それ以降魚津漆器は発展と変化を繰り返し魚津市の一大産業にまで成長した。そんな魚津漆器を筆者は初めて知っていたというわけではなかった。事前調査のために魚津市歴史民俗博物館を訪れた際、魚津の歴史に関する様々な資料が展示されていた中で、最も興味を持ったのが魚津漆器だった。そこで魚津漆器について少し調べてみると、かつては魚津の一大産業だったということ、そして現在まで残っている漆器専門店が魚津市内に一つしかないということがわかった。かつて一大産業とまで呼ばれるほどに栄えた魚津漆器が、なぜ現在は製造しているお店が一つしか残っていない状況まで衰退してしまったのか。これに疑問を持ったことが今回魚津漆器を調べるに至った動機である。

調査方法は聞き取りを主とした。初めに現在魚津市に残っている唯一の漆器店である鷹休漆器店を訪ね、魚津漆器の現状について聞き取りを行った。その際得た情報を元に、現在も魚津漆器を所持しているお寺を巡り魚津漆器にまつわるエピソードを収集した。また魚津市街から山間部へ 10km ほど離れた場所に位置する東蔵地区^{とうぞう}に漆器を所持している家があると聞き、そこでも聞き取り調査を行った（東蔵地区については第 10 章を参照）。

1. 魚津漆器

本節では、主に『魚津市史（下）』（pp. 221～233）を参考にして、魚津漆器の歴史をまとめる。魚津漆器にはとても古い歴史がある。それすべてを記述することはできないが節目となる部分や重要な部分を簡潔に記す。

1-1. 前史

魚津漆器の起源は室町時代末期に、渡り^{き ぢし}木地師の集団が漆器の木地となる良材を求めて現在の松倉のあたりに移住してきたことから始まる。木地師とは盆、椀、杓、そのほか日常生活における円形雑器を作る工人のことを指す。松倉に移住してきた渡り木地師達は元々近江国（現在の滋賀県あたり）の出身らしいが、より良質な用材を求めて大永から永禄のころ（1558－1569）飛騨国（現在の岐阜県北部あたり）^{すごろくだに}双六谷に入り、さらに松倉に移住してきたと考えられている。しかし松倉でも用材が伐り尽くされ次第に減

ったため、江戸時代前期に片貝谷の平沢に移住している。現在の奥平沢集落の上流 1 km ほどのあたりに移住し 30 軒ほどの住居を構え集落を形成した。この木地師集落と奥平沢集落との交流は頻繁に行われており、交婚も行われていたとされ血族的にもかなり往来があったものと考察されている。現在も木地師集落があった場所を木地平^{きちだいら}と呼称し、当時の屋敷跡や氏神の社跡などが残されている。写真 9－1 は現在の木地平跡地であり、東蔵地域から 1 km 程上流に道なりに進んだ先の道沿いに位置している。

その後、片貝谷でも平沢でも用材が尽きたのか江戸時代末期に数人が平沢から棚山（現在の入善町あたり）に木地を求めて移住し、その数年後、また数人が木地を求めて棚山へと移住した。その後は農家となって生活している。また平沢に残った人たちも木地師から農家へと職を変えて生活を続けている、もしくは魚津の町に移住をしている。



写真 9－1 木地平跡地（筆者撮影）

1－2. 江戸の漆器界

魚津および下新川郡内の山地に、木地が多く産出されたため魚津の漆器商はこれに漆を塗り、生活用品として役立たせていた。その産出も少なくなかったが、特に魚津碗の評判は三河国（現在の愛知県のあたり）にまでその名が届くほど高まっていた。当時の技術はまだ拙かったものの魚津が前田侯の統治下に入るとともに足軽 40 人、奉行付 10 人ほどが仕事の合間に漆器製作に従事し、一閑張^{いっかんばり}¹⁾のような物を製作したりしていた。

さらに魚津城代を務めた青山氏²⁾は漆器業に資金を提供し、積極的な保護を加えてその振興に力を注いだことが、魚津塗りの確固たる基盤を作り上げる元となった。江戸時代末期までに魚津塗りは盛況を極め、塗師の 1 人である屋次郎四郎と言う人が漆器の輪郭に金線を描いた非常に古雅なものを作り上げるようになった。この作品が漆器界に新風を巻き起こし、その後魚津漆器の真価が次第に認められるようになったのである。

1-3. 明治の漆器界

明治15～16(1882～83)年までは魚津漆器は衰えを見せ始めてはいたものの、市史が書かれた時点と比べるとまだまだ盛んと言える時期であった。当時の漆器製造戸数は40戸ほど存在しており、その頃の漆器の販路で代表的な地域としては、富山県内はもちろん、佐渡・越後・能登・加賀などが挙げられる。

しかし、明治19(1886)年になると状況は一変する。かつては40戸ほど残っていた漆器製造戸数はこの年に3戸ばかりへと激減し、魚津の漆器業界は存亡の危機を迎えた。製造戸数が激減した理由として、安物の陶器が登場したことが挙げられる。かつて生活の一部として大事に使われていた漆器よりも陶器は頑丈で扱いやすく、何よりも値段が漆器よりも格段に安かったため陶器は人々の間に一気に浸透し、その結果佐渡や越後、能登、加賀と言った代表的な販売ルートで漆器が売れなくなってしまったことが、当時の漆器業界が衰退した一つの大きな要因になっていると考えられる。

この状況に危機感を覚えた漆器業者達は新たな販売ルートを模索することなどに努めた。その結果翌年の明治20(1887)年には漆器製造戸数は7戸へと増加し、さらに翌年の明治21(1888)年には9戸へと増加した。しかしまだまだ予断を許さない状況であることには変わりは無かった。

このような状況が数年間続くなか、明治28(1895)年に開かれた富山県工業品評会に魚津漆器が出品されたことが大きな転機となった。品評会に漆器を出品するのはこの時が初めてであったため、漆器の出来が悪く特に評価もされることはなかった。この結果を受けた魚津の漆器職人達は富山県内だけでなく、他県の博覧会や共進会に何度も出品を重ねるようになり、それが漆器製造の技術と評価を高めていった。その結果明治30(1897)年に神戸で開かれた第6回関西二府十六県連合共進会で、大久保嘉七郎が出品した「金膳椀」が6等に入賞した。その翌年の明治31(1898)年には、朝田新兵衛を会長として魚津漆工会が結成された。

1-4. 大正の漆器界

大正3(1914)年に当時の漆工会会長だった高野清七郎が従来の宗和膳³⁾を一寸高くした一寸高宗和膳を考案し魚津特有の技法と仕上げによる新製品を生産すると、これに越前の商人が目をつけた。越前の商人らがこの新商品を近畿以南に売り込んだところ、大正5(1916)年ごろから続々と注文が入るようになった。その結果魚津の漆器業界は非常に活発となり弟子の育成も進み、大正6(1917)年には製造戸数59戸、職工数105名に増加。さらに翌年の大正7(1918)年には製造戸数69戸、職工数125名にまで増加した。また大正7(1918)年以降数年間に、輪島から漆工・蒔絵師・沈金師などが40～50名ほど輪島から来訪し新しい技術を伝えたので、魚津漆器は一層改良されることとなりその名声を上げた。

大正 12 (1923) 年頃に魚津漆器は最も盛んな時期を迎えた。漆器製造業・板物生地業・蒔絵業など関連業者を含めて 306 もの業者があり、当時の魚津の第一の産業へと成長した。漆器業の勢いは衰えず、大正 13 (1924) 年には後の昭和天皇である東宮殿下が富山を訪れ魚津漆器を購入されて、近いところでは石川や福井、遠いところでは東京や北海道などへも出かけて販路の拡大に努めた。同時に、各地の共進会や品評会、博覧会にも出品し、各市場において名声を得た。

1－5. 昭和の漆器界

大正期の盛り上がりとは対照的に昭和期の漆器界は徐々に衰退していった。不景気の原因で業者も次第に減っていったことに加えて、盛況だった一寸高宗和膳も全く売れなくなり転業者が続出してしまった。そのような状況下でも残った業者達は各地での博覧会、共進会に出品を続け、研鑽を積んだ。

しかし昭和 12 (1937) 年に日中戦争で物資の配給統制が始まると漆の購入すら難しくなり、漆器界の衰退に拍車をかけた。漆を購入するために購入券を使用したり、組合を結成して年数回漆の配給を行ったりしてなんとか生産を続けていたが、戦火の拡大とともに漆の配給は少なくなった。さらに職人達が徴兵で軍務についたりしたことで、昭和 19 (1944) 年には漆器の生産はほとんどされず業界は火の消えたような状態になった。

1－6. 戦後の漆器界

戦争で業者が減少してしまい、数十戸あった製造戸数は昭和 21 (1946) 年には 14 戸に減ってしまった。これを受けその再興を図ることを目的として昭和 24 (1949) 年に魚津漆器企業組合が組織された。しかしその 7 年後の昭和 31 (1956) 年に魚津大火にあい魚津漆器の業績のほとんどが消失した。またこの頃から、中国に頼っていた漆の輸入が次第に途絶えてしまい、漆を購入することができなくなってしまった。

2. 魚津漆器の現在と過去——住民の語りから

本節では魚津漆器の扱われ方について、現在と過去に分けて述べる。時代の変化に合わせて漆器の扱われ方も変化してきたが、その様子を具体例や語りによって明らかにする。

2－1. 漆器の現状

魚津漆器の話を最初に伺ったのが鷹休漆器店の 4 代目店主であり、現在魚津市に残っている唯一の漆器職人である鷹休雅人さん (51 歳、男性) である。

鷹休さんに魚津漆器について聞き取りを続けていく中で、漆器はプラスチックや陶器類に取って代わられたため現在も漆器を持っている家は少ないという旨のお話を伺っ

た。そのお話を受けて、現在もまだ漆器を所持している可能性がある所はどこだろうか
と疑問に思い尋ねてみたところ、昔ながらの大きな蔵が残っている家、もしくはお寺に
ならまだ残っているかもしれないという返答をいただいた。そこで蔵が残っている家
を探してみたがその数はあまり多くなく、インターホンを押してみても返事がない家も
あった。これはお寺を訪ねてみた方がいいかもしれないと思い魚津市内のお寺を回っ
てみると、いくつかのお寺で漆器についてお話を聞くことができた。

最初に訪ねてみたお寺は真成寺という日蓮宗のお寺で、住職の奥さんらしき女性がお
話をしてくれた。魚津漆器はありますかと尋ねたところ、「漆器はたくさんあるが砺波や
いろいろな地域の漆器がごちゃまぜになって保管してあるため、どれが魚津漆器なの
かはちょっとわからない」とのことだった。漆器を見せてもらうことができるかどうか聞
くと快く見せてくれた。

漆器は台所の押し入れのようなところに保管されていた。透明なプラスチックの収納
箱に入れてある漆器と、押し入れの中にそのまま積んである漆器（写真9-2）の2パ
ターンがあった。この保管方法の違いに意味があるのか尋ねたところ、「プラスチックの
箱に入れてある漆器は古くて傷んでいるので大勢の人が集まったときの食事で出し
たりしている物で、積んである漆器は仏様のお供えをするときに使っている」と教え
てくれた。漆器を収納箱から取り出しているときに、これは魚津漆器ですかねと何度か聞
いてみたがよくわからないという返事しか返ってこなかった。



写真9-2 真成寺の漆器（筆者撮影）

先ほども少し述べたが、現在漆器は普段の食事用と本堂にある仏様のお供え用とで使
い分けているようだ。大勢の人が集まったときの食事で使っている方の漆器は古い物や
傷んでいる物ばかりで、もう特別に手入れする必要もないそうだ。ほぼ毎月日蓮宗で定
められた特定の日（2月15日の仏舎利や4月8日の花祭など）に人が集まって食事をす
るらしく、そのときに使われているとのことだ。お供え用として使っている漆器は、年

に5、6回本堂にある仏様にお供えをするときに使う機会があるらしく、また仏様にお出しするものであるのである程度は手入れも施しているそう。しかしどうしてもなく壊れてしまった漆器は処分してしまうと話してくれた。

次に伺った長教寺（日蓮宗）では現在は漆器を所持しておらず、お膳などで使うのはプラスチックや陶器など最近のものとのことだった。また西願寺（浄土宗）にも後日伺ってみたが、漆器は数年前に処分しプラスチック製のものに変えたとのことだった。なぜ処分してしまったのかを尋ねてみると、「収納スペースがなくなったから」という答えをいただいた。またそれ以外にも「明治とか大正とかのすごい昔に作られたもので、価値があるようなものだったら残しておいたが、戦時中や戦後などにどこからか集めてきたような中途半端に古い物だったため処分した」という返答も聞くことができた。

最後に照顕寺（浄土真宗）に伺った。このお寺はとても大きい浄土真宗のお寺で、そのこともあってか漆器を大量に保管していた。筆者が尋ねた時は午後2時過ぎだったのだが、その日の午前中にお茶会か何かの集まりがあったらしく、その集まりに参加されていた方が数名お寺に残っておりその方達からもいくつかお話を聞くことができた。主にお話を聞かせてくださったのは住職の奥さんの眞門^{まかど}さん（40代、女性）で漆器についてとても詳しい方だった。

まず漆器があるかどうかを聞くと、「たくさんあるし、みたいなら持ってきてあげる」とおっしゃって漆器をたくさん持ってきてくださった。最初に持ってきてくださったのはお膳が入った箱だった（写真9-3）。箱は丈夫な桐の木で作られていた。箱の蓋の部分には「皆朱高惣輪 照顕寺用」と書かれており、照顕寺のために作られた漆器だということうかがえる。

次に持ってきてくださったのは黒色のお椀が入った箱で、この箱は特別なものなどではなく、スーパーに売っているような普通のプラスチック製の箱だった。その箱にお椀が8、9個ほど入っており、その一つ一つに照顕寺の「顕」の文字が朱色で描かれていた。またそのほかにも特別なときのみを使い、お菓子をのせる「銘々皿」という漆器や、眞門さんの先々代の奥さんが照顕寺に嫁いできた際に持ってきた重箱、漆を塗ったお箸など様々な漆器を見せてくれた。これらの漆器は現在でも使っているのか尋ねると、「お膳は最後に使ったのは17年ほど前の結婚式」と答えてくれた。

お椀とお箸は今でも報恩講などの人が集まって食事する際に使用することがあるらしく、どちらかと言えばお椀よりもお箸のほうが身近に感じられるそう。また定期的にお茶会を開いているらしく、その際漆器を使う機会があるらしい。

昔は結婚式など冠婚葬祭の類いはお寺で行ったため、そういったことがあるたびに眞門さんは漆器を使っていたので身近に感じられる物だったが、今は式場を借りて行うことがほとんどのため漆器を使う機会が激減し身近な物ではなくなってしまったと話してくれた。

他のお寺は漆器を使わなくなって処分してしまうところがほとんどだったが、なぜ照頭寺は処分せずにたくさん保管してあるのかと尋ねたところ、「照頭寺は大きいお寺なので収納スペースもたくさんあるし、貴重な漆器ばかりで大切な物なので捨てたりはしない」と答えてくれた。実際壊れてしまった漆器は処分して新しく買い換えたりせず、修理に出して何度も使っているらしい。

眞門さんは漆器関連の家出身というわけでもないのだが、とても漆器に詳しい方で漆器に関して質問したことにはほとんど答えてくださった。眞門さんいわく、「お寺に嫁いでくるときに漆器の扱い方を学ぶ必要があったため勉強した」ということらしい。眞門さんと話していると筆者が知らない単語がたくさん出てきて、その単語を初めて聞いたと言うと驚かれることが多かった。「昔は当たり前という言葉だったのに今の若い人は知らないというのは、漆器だけに関わらず昔のものがどんどん身近な存在ではなくなっていくことを実感する」と眞門さんは話していた。



写真9-3 照頭寺の漆器（筆者撮影）

お寺が所有する漆器の現状はよくわかったが、やはり一般家庭に所有されている漆器の話も聞く必要があると思い、魚津市街から10kmほど山の方に位置する平沢・東蔵地域でも調査を行った。平沢・東蔵地域は過疎化と高齢化が非常に進行しており、話を聞いた方々の年齢層は50代から80代である。

東蔵地域のUさん（70代後半、女性）はかつてお椀や膳などの漆器をおよそ20人分所有していたが最近になって処分したという。処分する際は村のゴミ捨て場に捨てたという。なぜ捨てたのかと尋ねてみると、「いらなくなってしまった物は置いてあっても邪

魔なので捨てた」と理由を教えてくれた。また同じ地域に住む女性は6、7年前に蔵の中のものを整理したときに漆器も捨ててしまったらしい。かつては人がたくさん集まる家だったらしく、そのため漆器もたくさん持っていたらしい。捨てるときは漆器がたくさんで大変だったため廃品回収の業者を呼んだとおっしゃっていた。

ただすべて捨ててしまったわけではなく、一度蔵の中の物を全て外に出してトラックの荷台に積んでから残しておく物と捨ててしまう物を自分で取り分けたと話してくださった。持っていた漆器には二種類あったらしく、結婚式や結納などめでたいときや何か特別なときに使う「赤御膳」と普段の食器として使われていた「黒御膳」があったそう。だ。「赤御膳」のほうはめでたいときなどに使われていたため、なにか価値がある物かもしれないと思ってとっておいたが、「黒御膳」のほうはそのまま捨ててしまったらしい。捨てるときはどのような心境だったのかを尋ねると「先祖代々受け継いできたものだったから迷いはあった」と答えられた。

対して東蔵^{とうぞう}地域の竹山信美さん（70代、男性）は漆器をまだ捨てていないとのことだった。竹山さんは東蔵地域出身だが現在は魚津の街でお母さんと暮らしており、週に3回ほど東蔵地域にあるかつて暮らしていた家の手入れをしに東蔵地域に戻ってくるそう。だ。竹山さん自身は実際に漆器を使った記憶はなく、昔見たことがある程度ということだが、母方の祖父が漆器職人だったらしく家にたくさん漆器があると聞いたので、見せてもらえないかとお願して、実際にいくつかを見せてもらうことができた。

保管されていた場所は家の二階である。木製の大きな箱に4セットほど保管しており、漆器それぞれが紙で包まれていた。漆器を包んでいた紙も相当古い物で、長い間取り出していなかったことがうかがえた。保管してあった漆器はお椀や御膳などよく見るようなものの他に、お箸や蒔絵と思われるものも保管してあった。

興味深かったのが、蓋に「K. B」、漆器の裏に「開業記念黒田ベーカリー」と書かれた漆器である（写真9-4）。どのように使用されていた物かは竹山さんに聞いてもわからなかったが、おそらく竹山さんのお母さんが昔経営していたパン屋さんで使われていた物だろうとのことだった。それ以外の漆器を取り出して、これはどのように使われていたのと竹山さんに尋ねたところ、「全然使ったこともないし詳しくないからわからない」という返事が返ってきた。また取り出すときも特に大事なものとして扱っていると言うわけでもなく、普通の食器と同じような感じで扱っているのが印象的だった。

竹山さんに漆器を捨てたりはしないのかと尋ねると「捨てるかどうか迷っている」と話された。なぜ迷っているのかを聞くと「この家自体が相当古いのでいずれ取り壊さなければならない時が来るのは確かなので家具などを処分しておかないと困るが、ただ家を壊すにもお金がかかるためなかなか手が出せないでいる」とのことであった。



写真9-4 竹山さんのお母さんが働いていたパン屋「黒田ベーカリー」の文字が書かれた漆器（筆者撮影）

2-2. 過去の記憶

魚津漆器が日常生活で頻繁に使われていたのは、代わりとなる陶器やプラスチックの食器が登場する明治から大正までである。それらの食器が登場してからは少なくとも報恩講や冠婚葬祭など何か特別な会食があるとき以外はほとんど使われることは無くなった。魚津漆器についてお話を伺っている中で、昔実際に自分が使ったことがあるという人はほとんどおらず、子供の頃に使っていたところを見たことがあるという人がいればまだいい方で、家の奥にしまってあるのは知っているが出したことがないという人や以前は持っていたが捨てたという人がとても多かった。そのなかで、わずかながら魚津漆器にまつわる過去の記憶を語ってくださった方々もいる。次にそれらの語りから紹介しよう。

まずお話を伺ったのはUさん（70代後半、女性）である。Uさんは、子供の頃に何かの会合で漆器を使っているところを見た記憶があるという。その会合が行われたのが何年前のことかは覚えていないとのことだったが、Uさんがまだ子供だったと言うところから、だいたい70年程前のことだったのではないかとと思われる。その会合が法事だったか結婚式だったかは覚えていないが、Uさんの家に村から人が大勢集まり会食する機会があったらしくそのときに漆器を使っていたと話してくれた。

何かその会合で印象に残っていることがあるかと尋ねると、その会合が終わって片付けをしているときに、漆器を片付けている様子が印象深かったと話してくれた。今は食後に食器を片付ける時は水と洗剤とスポンジで食器を洗った後に水を拭いたり乾かしたりするか、もしくは食洗機にかけるなどして比較的簡単に行うが、漆器の場合は違うそうだ。漆器の場合はまずぬるいお湯を用意して漆器を洗う。その際漆器を傷つけないように細心の注意を払う。洗った後も漆器を傷つけないように綿のような柔らかい布で

漆器を拭くそうだ。また、当時冠婚葬祭の時の会食は数十人など多くの人が集まるため使われる漆器の数もとても多い。そのため片付けも1人でやっていたは大変なので数人で漆器を片付けていたそうだ。何人で片付けるかというのは各家によってまちまちと思われるが、Uさんの家では3人がかりで片付けを行っていたという。また漆器を片付ける人のことを順に「一番拭き、二番拭き、三番拭き」と呼んでいたそうだ。片付けを行う人は必ず大人の女性で、男の人や子供は漆器を片付けることはしなかったという。そのため当時子供だったUさんは見ているだけで手伝いはしなかったと話してくれた。

また同じく東蔵地域の大江修子さん（78歳、女性）も昔漆器を使っているのを見たことがあると話してくれた。大江さんの場合は法事の時に使ったらしい。大江さんの家はとても大きく、一階に8畳くらいの広さの和室が6部屋ほどありそれらの部屋が襖で仕切られている。法事など何か会合があるときはそれらの部屋を区切っている襖をすべて外して、一つの大きな部屋にして使っていたらしい。

法事の際は仏壇の前に仏様専用の御膳を置いていたとのことだ。仏様専用の御膳は朱色の立派な御膳で、他の御膳よりも高さが少し高かったそうだ。また仏様専用御膳はどの家にもあったというわけではなく、屋号に「どん」が付く、それなりに裕福な家しか持っていなかったため、御膳を持たない家で会合が行われる際にはお寺からお金を払って借りてきて使っていたそうだ。

大江さんのお宅でも、漆器の片付けをUさんの語りと同じような形式で行っていたという。大人の女性のみで片付けを行っていて大人の男性や子供は漆器の片付けには参加しないという点や、漆器を傷つけないようにぬるま湯で洗って木綿などの柔らかい布で拭くといった点はUさんのお話と共通しているが、異なっている点や出てこなかった話がいくつかある。

一つは漆器を拭く人数である。Uさんのお話では3人だったが大江さんのお話では8人ほどで片付けていたそうだ。また漆器を洗うときは少なくとも3回は木綿の布でから拭きをしていたとのことだ。全て大人の女性だったが一人立場の強い女性がいて、その女性が他の女性の漆器の洗い方や拭き方をみて「もっと丁寧に洗え」とか「その漆器から拭きが足りない」などといった指示を出していたそうだ。その女性がどのような立場の人物だったかは覚えていないが、おそらく東蔵地域の有力な（おそらく「どん」が付く）家の主人の奥さんだったのではないかと話してくれた。

二つ目は漆器を洗うときの状況である。内生蔵さんの場合とは違って人数がとても多いので、廊下に長い桶を設置しそこにぬるま湯を入れて洗っていたそうだ。桶の最後の方は廊下に収まりきらず勝手口から外に出ていたらしい。その様子を大江さんはバケツリレーをしているようでとても印象深かったと話してくれた。

3. 新しい魚津漆器

現在、魚津漆器を製造しているのは鷹休漆器店と辻佛壇の2軒のみであり、そのうちで魚津漆器を専門に扱うのは鷹休漆器店だけである。この節では現在残っているその2軒が現在どのような漆器の生産・振興活動を行っているのかを述べる。

3-1. 鷹休漆器店

鷹休漆器店は現在魚津に残っている唯一の魚津漆器専門店である。鷹休漆器店は魚津市中央通りに位置し、大正10年(1921)から続く由緒正しい漆器店である。現在店主の鷹休雅人さんは鷹休漆器店の4代目店主である。

鷹休さんは18~19歳のころ石川県輪島市にある石川県立輪島漆芸技術研修所に入学し、卒業後も26歳くらいまで輪島で漆器の勉強をしていた。店を継いだのは30歳くらいの頃で、ちょうどバブルがはじけた頃だったそうだ。当時すでに漆器業は下火だったらしくバブルがはじけた頃にお店を継ぐのは大変だったのではないかと聞くと「父親から何の予告もなく継いだので、当初はお店を経営するためのノウハウなども一切知らなかったから大変だった」と答えてくれた。ではなぜお店を継いで漆器職人の道を進んだのかと聞くと「漆器業を営む家に生まれたが、当初は特に継ごうという考えや漆器職人になろうといった思いはなかった。しかし漆芸学校に行ってみると漆器製作が楽しく、また先輩や同期などの人や環境に恵まれたのでお店を継いでここまで続けてくることができた」と話してくれた。

現在鷹休漆器店では魚津漆器の販売、取り扱いの他にいろいろな事業を展開している。魚津市で平成25(2013)年から開催されている「よっしゃ来い! CHOUROKUまつり」で、踊りの最優秀グランプリチームに送られる盾も鷹休漆器店で制作している(写真9-5)。この盾は漆器技術を用いて制作されており非常に美しい仕上がりとなっている。

また富山市の総曲輪にある懐石料理店「来人喜人はぎ原」からの依頼で、「富山らしさを感じられる」オリジナルのお椀を作っている。お椀は立山連峰をイメージしたデザインで、お椀の底に「富」の文字が、蓋の裏には「山」の文字が書かれている。食べ終わると「富」「山」が現れるという趣向である。このお椀は鷹休さんだけでなく漆芸学校の後輩などのこれまで縁があった人と共同で制作されている。さらに黒部市役所からの依頼で、100歳を迎えた方に記念に贈呈するためのオリジナルの盃も制作している(写真9-6)。この活動はすでに30年以上続けているという。

こうした活動は鷹休漆器店のFacebookで紹介されている。Facebookにはその他にも漆器にフルーツを盛り付けるなどの、およそ従来の漆器の使い方とは違う使い方をした写真を載せたりしている。

鷹休さんはこれらの活動を通して「漆器の使い方はもっと自由だということを伝えたい」と語ってくれた。今の若い人は漆器というものになじみがなく、高級でどこか近寄りがたいイメージを持っているが、本当はそんなことは無いのだという。漆器の使い方はもっと

自由で、こうやって使いなさいという決まりなどはない。そうしたことが伝わって、今の若い人たちが漆器の使い方をだんだんわかってくれればそれでいいと話してくれた。



写真 9-5 盾（筆者撮影）



写真 9-6 盃（筆者撮影）

3-2. 辻佛壇店

辻佛壇店は仏壇・仏具・神具・神棚・寺社仏閣の製造販売を行っている仏壇店である。その歴史は古く、少なくとも大正 2（1913）年以前から 3 代続いている。仏壇・神棚の製造販売の他に、壊れた漆器や陶器の修復作業も行っている。仏壇に施された彫刻は全て手彫りで制作されたものであり、その技術の高さがうかがえる。

辻佛壇店では代表取締役の辻悟さんにお話を伺った。辻さんは塗師であり、主に木地に漆を塗ることを専門としている。辻さんは仕事にとっても熱心な方で、工房を案内させていただいたうえで、さらに仕事の一端を体験させていただいた。体験させていただいたのは漆を塗る際に使う木製のへらを作る作業である。へらは一本一本自らの手で作られており、漆を塗る木地に合わせてへらを新しく作るそうだ。へらは薄い木の板をさらに薄く削っていったって作るのだが、これがとても難しかった。対して辻さんは流れるように木を削っていったって、5 分もしないうちに一本作っていた。

こうした工房の見学は予約をすれば誰でもできるそうだ。筆者が伺った少し前にも市内の中学生が体験学習で訪ねてきて工房を見学して回ったらしい。また県外から職人になるために漆器を学びたいという人が訪ねてきて、辻さんがいろいろ教えてあげたとおっしゃっていた。こうしてみると辻さんはとても外向的な方のように思われるが、そうなったのはここ数年と非常に最近のことで、昔は外からとやかく言われることがとてもいやだったという。なぜ外からの声にも耳を傾けるようになったのかと聞くと「外からの声を無視し続けてもいいことがないことに気がついた。発展のためには外からの声を聞く耳を持つことが大事」と話された。

辻さんは魚津漆器を発展させようと様々な試みをしている。例えばいろいろな染料を組み合わせて新しい色の漆を作っている。かつては漆を染めるのには水銀を使うのが一般的だったが、それを染料に替えたことで水銀では出せない特殊な色の漆を作ることができるようになるという。実際に見せてもらった新しい漆の色は、赤や黒といった一般的にイメージされる色とはかけ離れた、緑の蛍光色のような色だった。また新しい漆器の形としてステンレス製の木地に漆を塗った物を提案している。漆もステンレスと同じくさびることがないので相性が良く、実用的だという。

辻さんは魚津漆器の振興と発展にとっても精力的な方である。魚津市の要請で海外に行つて漆器の勉強をしたり、品評会に出向いて他の人が制作した漆器を見に行ったりしている。辻さんは「たとえ 10 割教えてもらったとしても実際にできるのはせいぜい 2 割か 3 割程度。だから他の部分でたくさん吸収して、自らにプラスしていく必要がある。」と語る。また「なにか話をいただいたらチャンスと思って積極的に行ったり、受け身だけではなくて自分から行動したりすることも大事。」とも語る。辻さんがこの仕事をする上で大事にしているのは新しい定義を自分で作ることであり、既存の枠組みにとらわれたままでは新しいことは何も生まれないのだと教えてくれた。

おわりに

室町時代に平沢の木地師から始まった魚津漆器は、時代の変化に合わせてその姿や使い方を少しずつ変容させてきた。江戸時代では主に日常生活で使われる食器としての役割を担い、明治時代になって安価な陶器類が流行しかつての役割を取って代わられた後は、一時存亡の危機を迎えた。だがその状況に危機感を覚えた数人の漆器職人によって、芸術的な価値を与えられた魚津漆器はブランド化することに成功し、存亡の危機を乗り越えた。しかしその後勃発した第2次世界大戦、戦後の高度経済成長、魚津の街を襲った魚津大火などによって、再び魚津漆器は徐々に衰退し現在を迎える。

魚津漆器がこうした歴史をたどるにつれて人々の漆器に対する意識も変化してきた。調査でわかったのは、かつて魚津漆器は魚津の人々の生活になくてはならない物であり、とても大事に扱われてきたこと、そして安価な陶器類やプラスチック製の食器などが主流になってからはその役割を奪われ、いつしか物置の奥や蔵の中にしまわれて長い間使われなくなってしまったこと、さらに収納の邪魔になるという理由で処分され始めたことである。このような流れで魚津漆器は新しくて安い物に淘汰されつつあると言えるだろう。

しかし、魚津漆器はただ淘汰されているだけでは終わらない。かつて明治時代に漆器職人達が魚津漆器存亡の危機を乗り越えたように、今も鷹休さんや辻さんといった職人達がSNSなどを通じて漆器の新しい形を提案し続けている。こうした活動が続いていく限り魚津漆器はこれからも魚津の街の伝統工芸品として残されていくだろう。

私は今回この調査を通して初めて日本の伝統工芸品に真剣に向き合った。その結果わか

ったことは伝統工芸品の危うさである。日本の伝統工芸が衰退しつつあるのは本を読んだり、テレビ番組などのメディアを見たりして知識としては知っていた。しかしこの報告書を書くにあたって初めて日本の伝統工芸品と呼ばれるものを自分で調査したことで、これまでどこか他人事だった危機感とも呼びうる感覚が、ようやく自分の世界とつながったような気がした。なんとかこの伝統を絶やさないようにしようという職人さんたちの努力と、そういった努力があるとは知らずにとっても単純な理由で漆器を捨ててしまう人々とのギャップに戸惑いが絶えなかった。かといって漆器を捨てる人々が悪いというわけでもなく、時代に合わなくなってしまったものはいずれ途絶えてしまうのは仕方のないことでもある。

この調査を終えて、これからは漆器を使っていこうとか周りの人にも漆器を広めようなどと思った訳ではないが、せめて最新技術の恩恵を受けている人々がいる裏で、その最新技術とどう向き合うかを必死に努力して考えている職人さんたちがいることは忘れずにいようと思う。

最後になったが、鷹休さんや辻さんをはじめとした調査に協力してくださった魚津市の皆さんに感謝を述べて、この章を締めくくりたい。

注

- 1) 竹や木で組んだ骨組みに和紙を何度も張り重ねて形を作り、形が完成したら柿渋や漆を塗って色をつけたり防水加工や補強にしたりする。食器や笠、机などの日用品に使われたが現在はあまり一般的に使われていない。
- 2) 前田家の家臣。青山吉次以降、魚津城代を4代務める。
- 3) 飛騨高山の2代目城主金盛宗和が発案した、三寸八分の高さの膳。明治末期まで一般家庭で使用されていた。

参考文献

魚津市史編纂委員会、1972年『魚津市史 下巻 近代のひかり』魚津市。

参考にしたウェブサイト

Wikipedia「一閑張」〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%80%E9%96%91%E5%BC%B5>〉
(2020年11月24日閲覧)

Wikipedia「加賀藩」〈<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8A%A0%E8%B3%80%E8%97%A9>〉
(2021年1月5日閲覧)

第 10 章 山村の人々の暮らしと伝承——東蔵を中心に

加藤 耀大

はじめに

魚津市の調査をすることになってから、調査テーマを決めるために興味のそそられる物を探して神社やお寺を回ってみたが、特に興味を惹かれる物もなく困っていた。そんな時、富山県の祭りの一覧を眺めていると「^{りゅうせき}龍石祭り」の項目に目が留まった。特に興味をひかれたのは、企業である北陸電力がこの祭りを実施しているという点である。北陸電力の担当社員に話を聞いたところ、かつて片貝川に発電所を建設した際に川が氾濫し発電所が壊されてしまい、当時の社員からやはり神事を行った方がいいのではないかという声上がり、龍石神社の建設、および龍石祭りが始まったそうだ。祭りの調査に行く前に「龍石」なるものを一目見てみたくなり、車で山道を登って見に行くことにした。カーナビに住所を設定し車を走らせると、平野出身の私は立ち入ったことのないような森の中に入っていった。車にビシバシと木の枝や葉が当たり、先の見えないようなカーブを超え、クマや落石に注意するよう警告する看板を見て興奮したことをよく覚えている。

しかし、龍石に通じる道には柵があって進むことはできなかった。それでもあきらめることができなかった私は、向かう途中で見かけた集落の人に話を聞くことにした。すると集落のそばの川辺に大きな祠のようなモノを見つけた。気になって写真を撮るなどしていると集落の人に声をかけていただいた。その成り行きで集落を案内していただいていると、とても面白いいくつかのモノ出会うことができた。集落の中央の木にたたずむ「マンドサマ」や、道端に並ぶ地蔵たち、それぞれの家の敷地内にある墓など、興味を惹かれるモノがいくつもあった。それらについて尋ねると、見ず知らずの私に快く教えてくれた。東蔵に住んでいる人々のやさしさ、温かさのに魅力を感じ、私はこの山村を調査してみたいと思った。

本章では聞き取り調査によって得られた情報をもとに東蔵の歴史やそこで暮らすための工夫、そして信仰について記述する。第 1 節では東蔵集落の概要について、第 2 節では東蔵で行われている生活の工夫について、第 3 節では東蔵にまつわる伝承について述べ、第 4 節では調査で分かったことをもとに考察を述べる。

なお、東蔵に住んでいる人は集落のことを「部落」と呼んでいるが、この報告書では「集落」と書くことにする。

1. 東蔵集落の概要

東蔵集落は魚津市の北東に位置する山村である。魚津駅からは車で 20 分ほどの場所にある。すぐそばに片貝川という非常に水がきれいな川が流れている。アユやイワナが釣れ、川

には時折釣り人の姿が見られる。片貝川の上流にはキャンプ場や発電所、龍石神社、^{どうすぎ}洞杉がある。

東蔵集落が現在のように開墾されたのは正長元（1428）年である。もともとは森だったのだが、現在の東蔵の下流に位置する平沢、山女^{あけび}¹⁾、黒谷という周囲の集落にかつて住んでいた人々の次男や三男が開墾した場所である。その為、当初は山女二区、黒谷二区という名称で呼ばれていた。また定期的に各世帯の代表者が話しあい、集落のことを決める常会も別々で開催されていた。昭和 50（1975）年に田んぼの区画整理をしたことを期に合併して「東蔵川原村」という名称になった。しかし、住民は主に「東蔵部落」と呼んでいる。

当時の人口を調べるために明治 41（1908）年の神社明細帳を見ると、氏子は 45 戸、その人数は 92 人であったが、平成 9（1997）年の調査では 39 戸 137 人となっている。その後、令和 2 年（2020 年）11 月に行われた魚津市の行政区別人口調査によると東蔵区の世帯数は 25 戸、人口は 51 人と約半分ほどに減ってしまっている。現在、多くの住民は高齢の夫婦 2 人で暮らしているか、独居状態である。私が調査している間も「あそこのおとっちゃんぎっくり腰で先週から入院しちゃったよ」などと話を聞くことが多く、高齢化の影響を感じることが多かった。空き家状態になってしまっている家も多くあるように感じた。また普段は街中に暮らし、特定の季節や週末だけ東蔵に来て、畑を耕作している人もいる。

人口減少がみられる東蔵だが、年中行事は存在している。東蔵中心部に位置する東蔵神社では季節ごとに祭りが行われている。1 月 1 日には初詣の会があり、1 月 29 日には元始祭り、3 月 17 日には春祭り、7 月 18 日には虫祭り、9 月 17 日には秋祭りが行われる。かつては出店が出されることもあったが、現在では公民館に集まってスルメ、昆布、かまぼこを肴に酒を飲む会として開催されている。また火祭り（後述）という祭りも行われている。

2. 東蔵の暮らし——環境とのかかわりから

東蔵は自然に囲まれた集落である。住民たちはその恩恵を受け取ったり、厳しさにさらされたりしながらも工夫しながら暮らしている。

住民らは一年を通して、様々な自然の恵みを享受している。春は山菜を採集する。東蔵周辺では 40 種類ほどの山菜が採集できる。そのなかで代表的な物はコゴミ、フキ、ゼンマイ、ワラビ、ウド、コシアブラ、ヨモギなどである。これらはそのまま調理して、春のあいだに食べることもあるが、塩漬けにしたりして冬まで保存することもできる。大量の塩を使うので、2、3 年は保存することができるという。また、ゼンマイとワラビは乾燥させることでも保存できる。夏になると川でイワナやアユをとったり、秋になると栗やアケビ、山ぶどうなどを採集したりできる。冬にはスキーをして遊ぶこともできたという。

しかし自然がもたらすのは恵みだけではない。東蔵の周辺ではクマやサルやイノシシがよく出る。実際に私も東蔵に向かう途中で何度もサルに出会った。サルはかなり大きく、遭遇したときには少し恐怖を感じたこともある。趣味で野菜を育てている人は畑を荒らされ

たり、作物を盗まれたりして困っているという。

以下では、自然に囲まれた環境における、暮らしのなかでの工夫を紹介する。

2-1. 生業

生業について集落の人たちに聞くと、かつては炭焼きをやっていたという人が多かった。炭焼きとは、中世以降、暖房や調理、製鉄などに大量の炭が使われるようになったために生まれた職業である。日本の多くの他の地域では農家が冬の間の副業として行ってきたそうだが、東蔵集落では炭焼きを主な仕事としてきた人が多かった。東蔵は川の氾濫の被害にあうことが多く、田畑を作るのが難しかったためと考えられる。春、雪が溶けてから冬に雪が降るまでは炭焼きを行い、冬の間には炭俵用の俵を編んでいたという。

東蔵に住む山本夏枝さん（88 歳）の家は祖父母の代、親の代と続けて炭焼きを行っていた、山本さんとそのご主人も昭和 40（1965）年くらいまで炭焼きを続けていたという。山本さんの家は 30 近くの山を持っていた。ひとつの山で木を伐り、炭を焼いた後は 30 年くらい間をあけないといけないため、毎年場所を換えて炭焼きを行っていた。また、土地を持っていない人は山を借りてその木を伐り、炭を焼いていた。これを「受け山」という。炭にはナラ、モミジなどの固い木が適している。

同じく東蔵に住む山本重成さん（80 代）の家でも昭和 25 年（1950）年ごろまで炭焼きを行っていたそうだ。山に入ると、まず「炭焼き小屋」と呼ばれる小屋を建てる。小屋を建てる場所にはいくつかの条件がある。一つ目は小さな谷の底の方であること、二つ目は水が近くにあること、三つ目は近くから粘土がとれることである。大量の木を運ぶため、拠点には谷にある必要がある（後述）。谷では飲み水として利用したり消火するために必要な湧き水も得られやすい。粘土は窯を作ったり、炭を焼くときにも使う。

炭焼き小屋では窯出しをしたり、煙を見たりしなければいけないため、泊りがけの作業をすることになる。長い時は五日間ほど家に帰らなかったこともあるという。炭焼き小屋に泊まるときは食事もそこで用意することになる。そこで、小屋に泊まりがけの作業をするときには、食材として、米、みそ、しょうゆ、ナスやキュウリなどの野菜、干鰯^{ひだら}、マスの塩漬けなどを持ち込んだという。干した鰯である干鰯やマスの塩漬けはかなり保存が効き、3 年たっても食べることができた。天井から針金で鍋をつるし、火にかけてご飯を炊いて食べていた。また、小屋の隣でカブを育てて食べたりすることもあった。

作業は夫婦で分担していた。窯を作るのは夫の役割で、大きな石を積み上げて隙間を粘土でふさいで窯を作っていた。その間、妻は「木をまくる」と呼ばれる作業をしていた。山に登り、木を伐ってそれを蹴落とし、小屋の近くに炭にするための材木を集める作業である。続いて木を窯で焼いて炭にしていく工程になる。この段階から妻は集落に戻り、夫だけで作業を続ける。まず窯の中に炭にする木を立てて並べ、その上に雑木をかぶせてアーチ状にする。さらにその上から粘土と小石を合わせたものを塗り、乾くまで木の棒でたたき、水分を飛ばす。その後乾燥してできたひび割れを粘土でふさいでいく。ひび割れをそのままにして

おくと焼いている段階で窯が壊れてしまうそうさ（図 10－1）。

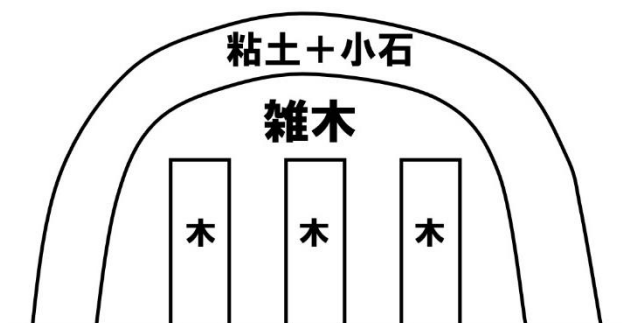


図 10－1 窯の断面図

ひび割れをふさいだら、窯に火をつけて材木を焼く。生木の状態から焼き始めるのでなかなか火が通らず、焼けるまで一週間はかかったという。そのうえ窯を作って最初の焼き作業では、大抵の場合失敗してしまい、本当に売れる炭ができるのは2回目以降に焼いた物が多い。焼いている間は目視で色や煙の色を確認し、焼け具合を判断する。温度が高くなりすぎてあまりに高温になると、窯が壊れてしまうこともあるそうさ。焼け具合を見極めるには経験と勘が必要だという。このような作業工程を経て、最終的に炭が出来上がる。

出来上がった炭は決まった大きさに切り、秤を使って4貫（1貫は約3キログラム）ごとに俵に包む。写真 10－1 は山本夏枝さんに見せてもらった、実際に使用されていた秤である。片方に分銅をつけ、反対側に炭をつるすことで重さをはかることができる。

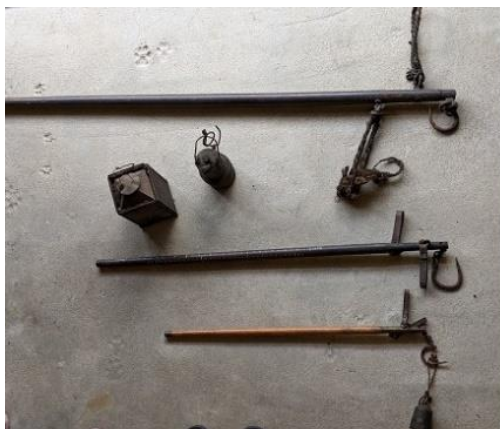


写真 10－1 秤

焼きあがった炭は焼いた本人が売りに出るのではなく、農協の職員や個人の商人が家に買いに来たため、商人とのつながりはとても大切だった。外側の見える部分だけを良い炭にして、内側に質の悪い炭を入れてごまかしたりすると、商人からの信頼を失ってしまい、翌

年から買ってくれないこともあったという。質の良い炭を毎年売っていると信頼関係が生まれ、高く買い取ってくれることもあった。炭はできの善し悪しを確認し、「並み」と「上」という階級に分けられた。山本さんの家では、質の悪い炭や大きさの小さい炭は丸い俵に入れ、質の良い炭は四角い須賀俵に入れていた。山本さん曰く、質の悪い炭はバサバサしてすぐに燃え尽きてしまうことに対して、良い炭は固く、長持ちし焼くときに金属のような音がしたという。また、炭には二種類あり、白炭（しろずみ）と黒炭（くろずみ）と呼ばれていた。白炭は熱いうちに窯から取り出して灰をかぶせることによって作ることができる。白炭のほうが良い時間火をつけることができ、高値で取引されていた。

炭焼き以外の仕事としては、土方をしている人がいた。土方とは、川の土手などを整備する仕事である。東蔵集落では特に川の氾濫を防ぐ仕事と、発電所の建設に関する仕事が多かったという。発電所の建設が始まったのは約80年前からで、主な作業は砂防堰堤の建設であった。川の石を台形に切り出し、川のカーブに沿って並べてコンクリートで固めるという作業だった。また、林業も広く行われていた。山の木を伐りだして売っていたのだが、当時は材木が高値で売れ、木を売るだけで普通に生活することができたという。

東蔵が最も人で賑わっていたのは片貝発電所に関する仕事が多かった時代である。発電所の建設が始まった時には土建業や建設業の従業員が泊りがけで作業していた。建設が完了した後も発電所には社宅があり、東蔵以外の地域からも多くの人が出稼ぎに来て暮らし、昼夜問わず発電所の稼働管理をしていた。稼働管理では、発電機を修理や油を刺す作業、水門を手動で開ける作業などをおこなっていたという。発電所の社宅は電気を無料で使うことができたため、ニクロム線に電気を通して発熱させ、それを風呂に入れて一気に風呂を沸かしていた。

この頃は人が多かったため、片貝分校の運動会で2チーム作ることができた。また、東蔵にも市街地にあるようなスーパーマーケットがあり、町に降りなくても買い物をすることができた。スーパーマーケットの他にも、トラックで魚屋が魚を売りに来たり、豆腐やシジミを自転車で売りに来る人もいた。このように賑やかだった東蔵だが、発電所の管理技術が向上し、人が発電所に駐在する必要がなくなったため、かつてのような賑わいは失われてしまった。

現在では主な住民の仕事のひとつにキャンプ場の管理がある。東蔵の少し南、片貝川の上流には「片貝山ノ守キャンプ場」という魚津市が作ったキャンプ場がある。平成21(2009)年10月24日にオープンし、毎年5月から11月末にかけて営業している。オートキャンプが8区画、フリーキャンプが25区画利用可能である。季節ごとに植樹祭や紅葉祭などのイベントを開催している。市から委託される形で東蔵、黒谷、山女、平沢の人で構成される三ヶ^{さん}村森林組合^{そん}で運営している。もともとは組合員のうちの10人で二人一組を5組つくり仕事を回していたが、亡くなったり、年齢を理由にやめてしまったりした人があったため、現在は少ない人数で回している。作業は主に草刈と掃除、そして会計業務である。組合員によってキャンプ場は大変きれいに掃除、草刈がされているため、利用者からは、綺麗でうれしい

という声を聴くことが多いという。片貝山ノ守キャンプ場が人気の理由はそこにあると考えられる。夏は草を刈るのに 12～13 時間かかり、かなり大変だという。週末は 2 人体制で平日は 1 人で仕事をしなくてはならない。給料は時給換算すると約 880 円であり、「割に合わない」と嘆いている人もいた。SNS では、隠れた人気スポットとなっており利用者は多い。また、県外から利用しに来る人もいるという。収益は近年増え続けており、平成 30 (2018) 年に 50 万円を超えて、令和 2 (2020) 年は新型コロナウイルスの対策のため例年より営業開始が一か月遅れたにも関わらず 190 万円を超えた。



写真 10-2 キャンプ場のようす

東蔵集落の住民の多くは、趣味で野菜を育てている。育てているのはスイカや白菜やナスなどである。採れた野菜は売ったりすることはなく、友達同士で「食べられ、食べられ」といって分け合ったりしているそうだ。しかし家によっては、趣味とは思えないほど立派な畑を持っているところもある。集落の人達は、写真 10-3 のような手製のカバンを使っている。セメントを入れる用の袋を切り貼りして袋を作り、そこに紐をつけて作る。カバンには小さめの鎌などの道具や、ナスなどの収穫した野菜をいれて運んでいる。これは山本夏枝さんが考案したもので、友人の間で広まり、今では村人の多くが同じようなものを作って、使っているという。軽いうえに乾きやすく、使いやすいそうだ。



写真 10－3 手作りのカバン

2－2. 雪とともに生きる工夫

東蔵集落は大変雪の多い地域である。かつて、東蔵から魚津の街中まで働きに出ていた人は、雪で村が閉ざされる季節になると街中にアパートを借りて暮らすこともあった。東蔵の人々は、このように積雪量の多いこの地で冬を過ごすために、いくつかの工夫をしている。

写真 10－4 は「雪つり」という、雪の重みで木やその枝が折れないようにするための工夫である。私は偶然この作業を見せていただくことができた。そのときの作業は次のようなものであった。まず、木を囲うように何本かの杭を刺し、円錐状にして杭の頂点を組む。(杭は森林組合からもらうことができる。) この時脚立の上にのぼって、上から杭を槌でたたいて地面に打ち込む。次にロープで頂点から地面のほうにかけて杭を結んでいく。このように文章にすると簡単そうだが、実際にはなかなか大変な作業である。森林組合に加入していない人はまず杭を用意しなくてはならない。杭は単なる木ではなく、皮をはぎ、地面にさす部分を削ってとがらせなければならない。またロープで縛るにもある程度の技術と力が必要で、人によっては縛り方にこだわりがあるようだ。

写真 10－5 は山本夏枝さんのお庭で撮らせていただいた杭である。山本さんは令和 2 (2020) 年当時、農作業をしている時に転んで腰を怪我してしまったため、雪つりをするのが難しい状況であった。そのため、ある朝、同じく東蔵に住む 79 歳女性である U さんに自分の畑の木に雪つりを施してもらうよう頼んだそう。するとその日の午後には、U さんは雪つりを完成させていた (写真 10－4)。このとき U さんは、特に断りを入れずに作業を始めたようで、山本さんは耳が遠いという事もあり、私が「なにをしているのか見せてほしい」と言うまで作業が始まっていることに気が付かなかったそう。山本さんが言うには、U さんはとても器用で、雪つりも大変しっかりやってくれたという。「用意の大変な杭も持ってきてくれてとても助かる」とうれしそうに話していた。U さんの旦那さんはかつて森林組合に加入していて、その時にたくさんの杭をもらったため、気にすることなく杭を使っている

そうだ。私たちの感覚では約束していたとはいえ、無断で人の土地に入ることや、自分の物である杭を人のために使うことはなんとなく抵抗のあることである。Uさんの抵抗なく土地に入っていく所や、自分で用意した杭を使って雪つりを施しているところを見ると、二人がいかに気を許し合ってともに生きるために協力しているかという事を感じることができた。

集落の人々は庭の手入れにかなり力をいれているが、雪つりの出来もまた冬の庭の重要な要素なのかもしれない。



写真 10－4（左）、10－5（右） 雪つり（左）およびそれに使用する杭（右）

雪対策をするのは庭の木だけではない。家自体も雪の重みからまもらなくてはならない。

写真 10－6 は「雪囲い^{ゆきがこい}」という工夫である。また、古い言い方で「雪垣^{ゆきがき}」とも呼ばれている。80 歳以上くらいの方にとっては「雪垣」のほうがなじみ深いようだ。



写真 10－6 雪囲い（雪垣）

雪囲いは壁、特に窓があるところに施すことで雪の重みで家が壊れることを防ぐ。木を格子状に組み、ロープで結んで作る。そこに上から細い枝を編んで作った茅^{かや}をかぶせる。雪囲いがあることで家が守られるだけではなく、雪の壁と家の壁の間に空気の層が出来るため防寒効果もある。Uさんは茅を自分で編んでいるというが、まるで機械で作ったようにきれいで細かい編まれ方がされていた。写真 10-7 は「つちのこ」といって茅を編むために使う道具である。山から茅をとってきて同じ大きさに切り、つちのこを使って編み上げるという。茅を編む技術はかつて炭焼きをやっていた時に俵を編むために身に着けたものだという。



写真 10-7 つちのこ

茅をのせるやり方だと、除雪のためにブルドーザーが通った時、そこから出る雪が当たって壊れてしまうことがあるという。そこでベニヤ板を使うようになった人もいるのだが、また別の問題が発生してしまった。茅を使う場合は枝の細かな隙間からある程度の光が入ってきて、室内が明るかったが、板にしてしまうと隙間がなくなって部屋のなかが暗くなってしまい、一長一短である。また最近では、ホームセンターで買ってきた透明なビニールでできた板やビニールシートを張ったりすることも増えてきたという。

「雪どめ」という工夫もある。屋根瓦をでこぼこさせることで雪が自然落下しなくなる。これによって瓦が痛まないようにすることができる。一方で、雪が落ちないということは自分で屋根上に上がって雪を下ろさなくてはならないということでもある。屋根上に上がるのは手間がかかるし、転落する危険がある。雪を下ろすときには「ママさんダンプ（スノーダンプ）」を使用する。

それとは逆に、雪を自然落下させることで雪の重みを軽減するという工夫もある。屋根瓦にあらかじめブルーシートを張っておいて、雪を滑りやすくしておくのである。しかし、すべての屋根雪が落ちるわけではないため、回数は減るとはいえ屋根上に上らなければならない。しかもブルーシートで足元はさらに滑りやすい。そこで、ブルーシートの端と足をロープで結んで滑っても落ちないように工夫する。

2-3. 脅威のカメムシ

東蔵では春と秋になるとカメムシが大量発生する。シーズンになるとどこを向いても必ず一匹は発見できるほどのカメムシが東蔵を覆う。私が秋の時期にキャンプ場を訪れた時、壁一面に黒い影が見え、木の節目だと思っていたら全部カメムシだったという事もあった。東蔵周辺は、全国でも有数のカメムシ発生地域であるらしく、広島から研究者が来て、キャンプ場にカメムシのいなくなる作用のある煙の出る缶を置いて行ってくれたこともあったという。それを使った時は確かにカメムシが消えて問題は解決したかに思えた。しかし、翌シーズンになると再び発生してしまい、結局意味はなかったという。カメムシは杉の木に発生するため、材木を得るために大量に植えられた杉の木が原因であると考えられる。

カメムシは不快なおいを出すだけでなく、固い体で障子を破ってしまうこともあるという。また幼少期の子どもにとってはさらにつらいことがある。東蔵に住む大江修子さんの娘さんは小学生の遠足で学校のみんなどとともに家のある山を登ったそう。途中、家の前を通った時、友達に「家に臭い虫がいっぱいいる」と言われ、とてもショックで現在でも忘れられないという。大江さんは娘と孫が出ていったのはカメムシのせいではないかと語っていた。さらには、東蔵集落は少子高齢化が著しく進行しているが、その原因の一つがカメムシなのではないかと語る住民もいた。

東蔵の人たちは家の中に入ってしまったカメムシに対抗するための便利な道具を作っていた。それはペットボトルを半分に切り離し、飲み口のある方を内側に入れて返しをつくり、割りばしを飲み口につけた道具である（写真 10-8）。割りばしで壁についたカメムシをはがすと、カメムシは転がるようにして飲み口から中に入る。そのあと飛んで逃げようとしても返し構造になっているためカメムシは逃げるできない。日常にあるものを使って問題を解決するブリコラージュ的²⁾なアイデアである。



写真 10-8 カメムシを捕まえるための道具

3. 東蔵にまつわる伝説、信仰

東蔵周辺にはいくつかのとても興味深い伝説や信仰が残っている。本節ではそれぞれの伝説や信仰について紹介することにする。

3-1. 蛇石

東蔵集落の隣に流れる片貝川の上流域には蛇石^{へびいし}と呼ばれる石がある。大きな石にその名の通り蛇のような模様が入ったものである。すぐそばにはこれを祭った龍石^{りゅうせき}神社という神社もある。龍石神社は北陸電力が、かつて片貝第四発電所が片貝川の氾濫によって壊された時に建てたものである。現在でも春と秋に龍石祭りという祭りを開き、発電所の安全を願っている。私は当初、龍石祭りに関する調査も実施しようと考えていたのだが、令和2(2020)年に流行した新型コロナウイルス感染症のため、祭りへの参加・取材は叶わなかった。そこで、電話での聞き取り調査で祭りの主催者である北陸電力に由来や実施方法について尋ねてみたところ、現在ではなぜこの祭り北陸電力が開催しているかわからないという回答をいただいた。



写真 10-9 蛇石

この蛇石には「三太の伝説」と呼ばれる伝説がある。龍石神社の看板には次のように記されている。

「昔三太という狩人がこの谷で道に迷い巨岩を抱いた龍を発見し 金と銀の弾を撃ちこめたところ 大雷鳴と共に石にからみついて死に絶えその恨みが大洪水をおこした」

「今でも片貝川に洪水があるとその祟りと人々は恐れ また干ばつの時にはこの石を打ちたたけば必ず雷鳴を伴う」

『富山の伝説』（日本標準、1981 年）にも同じものと思われる話が掲載されている。しかし話の大筋は同じといえるが、いくつかの相違点も存在する。上記の神社の看板に記されている話では殺された龍の恨みによって雷鳴が起こっているが、『富山の伝説』に掲載されている話では、人々が樹齢 100 年の杉の木を切ったことによって龍が怒って雷鳴を降らし、三太が竜を撃つことでそれが晴らされている。ほかにも『富山の伝説』では龍が火を吹いたり、三太がヒロイックに描かれていたりして物語としての面白さを重視した描き方がされているようだ。どちらが正しいかはわからないが、神社の看板にはわかりやすい物語が、『富山の伝説』には親しみやすい物語が掲載されているといえる。

東蔵の住民の間では、「三太の伝説」について知っている人は少ない一方で、「たたくと雨がふる」という言い伝えは知られている。私は、現在でもこの信仰が生きていると思わせる場面に出会った。8 月のある暑い日、住民同士の会話のなかである人が、冗談交じりに、「最近雨降ってないから蛇石たたきにいかんとね」と話していたのだ。なお、この伝説は東蔵よりもさらに下流の地域で主に信じられていたそうである。というのも、川の上流に住んでいる東蔵の人々は水不足に悩まされることは少なかったからである。しばしば水不足が起こった下流の地域に住む農民たちが、昔はわざわざ遠くから蛇石をたたきに來ていたという。

3-2. 地藏群

集落の中心を通る道路のすぐ脇に、地藏がたくさん集まっている。それぞれの大きさは約 50 cm で、よく見ると同じ物も何個かあることから、一時期にたくさん作られたことや、同じ石屋に頼んで作られたであろうことがわかる。裏に文字のようなへこみが見られるが、風化してしまっており読むことはできない。



写真 10-10 地藏群

この地藏群の由来について村の人々から聞いた話を総合すると、次のようになる。昔、東蔵集落では食糧難の時期があり、北海道や魚津の街中にたくさんの人が出稼ぎに出た。そう

でなくとも集落のそばを流れる片貝川は「暴れ川」と呼ばれるほどよく氾濫したので犠牲者が出ることもあり、さまざまな理由で集落を去る人は少なくなかった。そうしたときに集落の人々はこの地蔵をたてた。同じ悲しみを共有するために建てたのではないかという人もいた。また地蔵を持っている人が集落を去るときには、集落に残る人に土地とその森林資源を与える代わりに、この地蔵を守ってもらうように頼んだという。

現在ではお参りをする習慣はほとんど残っていない。その為、寂しがらうからといって自分の家の地蔵を先祖の墓の横に移した人もいる。今残っている地蔵の所有者が誰かということを知っている人は一人もいない。この地蔵群のある道の先に住む竹山敏夫さんは、毎年お盆になると自分の家の墓を掃除するついでにこの地蔵を掃除し造花を供えている。また頭が取れてしまったときは、コンクリートを使って修復していたこともあるという。確かに、よく見ると頭の形が違うものや首のあたりをコンクリートでつないであるものがいくつもあって、竹山さんが熱心に管理されていることがうかがえる。竹山さんは自分以外の人が世話をしないので自分がいなくなった後この地蔵の世話をする人がいないことを心配していた。しかし、竹山さんはこの地蔵の由来などに特に詳しいというわけではなかった。

3-3. マンドサマ

マンドサマ（万堂様）とは富山県の川沿いに存在する、水神様を祭った小さな祠である。東蔵集落のなかでは川沿いに一つと集落の中心地に一つある。この節では特に集落の中心地にあるマンドサマについて記述することとする。



写真 10-11 東蔵中心に位置するマンドサマ

かつて集落のすぐそばに流れる片貝川は3-2でも触れたように、暴れ川と呼ばれるほど何度も氾濫しており、犠牲者が出ることも多かった。そこで川や亡くなった人の魂を鎮めるために建てられたのがマンドサマである。マンドサマが立っているところは昔「あおどろい（水が溜まっていて濁った）」ところだったという。『片貝郷土史』（片貝郷土史編纂委員会、1997年）によると最初は竜眼石³⁾が中に入っていたそうだが、盗まれてしまったのか、なかは空っぽである。また、かつて片貝川が氾濫したとき、一人の住民が保護のため竜岩石を持って避難したが、誰が持って行ったか分からなくなってしまったままである、という説もある。以前はローソクが建てられていてお参りが続いていたそうだが、現在ではその習慣はなくなってしまっている。しかし完全に信仰が途絶えてしまったわけではなく、平成31（2019）年の春にマンドサマの向かいの家に住んでいる山本夏枝さんが、ボロボロになってしまった布を取り換えている。山本さんは、布は新しいものでないといけないと語っており、わざわざ魚津の町まで出て布屋で新しいものを購入したそう。なお、その際初めて中身を確認したという山本さんは、そこが空なのを知ってとても驚いたそう。

毎年1月26日には集落で「火祭り」という祭りが行われており、マンドサマの前の道に集落の男性が集まり、みなでお神酒を飲むという。水神様なのに火祭りを行うのは不思議なように感じるが、火祭りは火事が起きないように願う祭りであり火を消すのは水であるためだといわれている。

木の陰に隠れていて通りから見えづらいためか、マンドサマの存在を知らない人も村のなかにはいる。マンドサマの真横に住んでいる方や集落の端の方に住んでいる人は存在を知らなかった。逆に存在を知っている人は高い割合でその謂れも知っていた。

3-4. 墓

東蔵（およびその周辺の集落）にある墓はとにかく立派で、高さは大きいもので2.5mほどある。また多くはそれぞれの家の敷地内にあり、家によっては先祖代々の墓と、戦没者の墓とで二つある家もある。

かつて集落が開墾されたばかりの頃は、土地も金もなかったため、墓は山の中に遺骨を囲うように石を置いただけの集合墓地であった。しかし、そのままだと中に水がたまり、遺骨が浮いてしまったため、それではよくないと感じた集落の人たちは墓を作り直すことにした。杉の木で作った板に遺骨をのせ移動させそれぞれの家が引き取り墓を作ったという。この頃炭焼きによって資金に余裕があった家もあって墓は立派に作られた。また雪が多い地帯でもあるため雪が降っても見えるように立派に作るようになった、と語る人や、一人が大きく作ると他の人も競うように大きく作り始めたと語る人もいた。昔は集落ごとに焼き場があり、そこから煙が上がっていると誰が死んだかと噂したという。



写真 10-12 (左)、10-13 (右) いずれも東蔵の大きなお墓

4. 考察

東蔵に伝わる民間伝承を調べていて気が付いたことが四つある。以下で順に述べる。

第一は、伝承の記憶のされ方についてである。東蔵の伝承はその多くが忘れ去られつつある。そんな中でも覚えている人・知っている人は、昔から東蔵に住んでいる、高齢の方であるように感じる。しかし実際にはそれほど高齢でなく、外から嫁入りしてきたという人でも伝承を知っている人はいるし、逆に昔から住んでいる人であっても話を聞いたことがないという人もいる。この差はいったいどこから生じてくるのだろうか。

私は最初、マンドサマや地蔵群がある場所の近くに住んでいる方のほうが、それらを頻繁に目にする分だけ関心も高いだろうという仮説を立てて、マンドサマや地蔵群の近くに住んでいる人に話を聞いた。しかし、それらのモノと居住地との距離と本人の知識のあいだには、たいした相関関係がないらしいことがわかってきた。実際に、マンドサマの隣に住んでいるある方は、それについての伝承を知らないどころかマンドサマの存在すら知らなかった。地蔵群の隣に住んでいる方も存在は知っているが関心は薄く、それについての謂れを一切知らなかった。反対に、少し遠くに住んでいる方のなかにも、それぞれについての詳しい話を知っている方もいた。

聞き取り調査を続けていると、東蔵という集落のなかでもコミュニケーションの疎密があるということ、特定の人々の間に、特につなぐりの深い集まりがあることがわかってきた。野菜を分け合ったり雪つりなどの作業を手伝いあったりする中で、時に冗談交じりに伝承にまつわる会話がなされる。つまり、ある集まりの中に昔から住んでいる伝承に詳しい方がいると、そこで伝承が伝播し記憶される。逆に、集まりの中に詳しい人がいない、または知っているても関心が薄く伝承についての話をしなければ、伝承は忘れさられてしまうことになるだろう。また単純に本人の興味、関心の深さによっても知識の深さは変わってくる。

第二に、文字化された伝承と実際に人々の記憶に残っている伝承は同じではないという事である。蛇石についての伝承は他の伝承と異なり、集落の外の団体によって記録され、他

の地域に伝えられている。具体的には北陸電力によって龍石神社とその看板が作られ、富山県児童文学研究会によって『富山の伝説』という本が作られ、その中に「三太の伝説」という形で語られている。さらに言えば、「龍^{りゅうせき}石神社」の名前自体にも少し不思議なところがある。集落の人々からは「蛇石^{へびいし}」という名前しか聞いたことがない。

龍石神社の看板や『富山の伝説』では、よそからやってきた狩人の三太が大蛇を石に封じ込めるというエピソードが主な筋で、石を触ると雨が降るからといって、雨が少なくなると農民が雨ごいに使っているという話はおまけのように語られている。それに対して、住民から主に聞いたのは雨ごいの話のほうで、三太の伝説についてはかつて演劇で演じたことがあるという程度しか聞くことがなかった。三太の伝説の方が雨ごいの話と比べて物語として面白いため、児童文学として本に載せるとしたらこちらが選ばれるというのは納得がいくが、集落において三太の伝説があまり知られていないのは何故だろうか。

反対に、雨ごいの話がなぜ覚えられているのかと考えると、一つの仮説を立てることができる。それは、普段の会話に登場しやすい内容だからという説である。雨は野菜作りを趣味にしている人にとって重要な生活の一部なので、天気の話は会話にも登場しやすい。3-1の蛇石についての項でも述べたように、実際に住民同士が冗談のように「(蛇石を)叩きにいかなくては」と話しているところにも遭遇したことがある。このように会話によく登場することによって人々の間でよく記憶されるようになったのではないだろうか。それと比べると、三太の伝説の方は立ち話で話すような内容ではないと判断され、話されなかった(=伝承されなかった)のかもしれない。

第三に、モノが残っていることによって伝承が人々の記憶に残ったり、外から来た私のような人の興味を引くきっかけになるという事である。おそらくこの章で紹介した伝承以外にもたくさんの伝承が東蔵にはあっただろうと考えられる。実際に、Uさんから霧の中から女神が現れたという話を聞いたことがあったが、Uさん以外からこの話を聞くことはなかったため本章には詳しく書かなかった。これは、現在残っている集落内のモノとは一切関係のない伝承である。そういった伝承は忘れ去られてしまっていて、思い出されることも、私のように外からやってきた人がそれについて知ることともなくなってしまったのだらうと考えられる。それに対して第4節で紹介してきた伝承群は集落の内外にそれにまつわるモノが残っており、住む人や外の人に視覚的イメージを送っている。それによって集落の人も生活の中で存在を感じ続けることができ、伝承を覚えていられる。また私のようにやってきた人も疑問を感じ、集落の人にそれについて尋ねたりすることができる。質問を受けた集落の人がそのモノについて考えなおすきっかけにもなるだろう。モノが残っていることによって伝承が存在し続けることにもつながるのではないだろうか。

第四に、東蔵では私たちの社会ほどそれぞれの所有にこだわらない共有主義のような考え方が根付いていてためらうことなく助け合いが行われているのではないかという事である。2-2でも紹介した通り、私はUさんが無断で山本さんの庭の木に雪つりを施しているところに遭遇した。他人の土地に勝手に入り、杭や労働力を惜しみなく提供するところは

私たちの考え方からすると異質に感じる。東蔵にはほかの人の土地であろう場所を経由しないといけない場所に家が建っていることがよくある。住民たちの様子もふまえると、東蔵では私たちほど、どこが誰の土地だから勝手に入ってはいけない、という暗黙の了解はないのかもしれない。ほかにも、作った野菜を分けあったり、町で買ってきたカーペットを分け合っているところを見たことがある。土地だけでなく物についても所有の感覚が薄く、共有することが多いように感じた。雪に降られたり、バスで移動しないと買い物ができないような不便な環境のなかだからこそ、喜びを分かち合っでともに生きる考え方が根付いているのかもしれないと感じた。

おわりに

人の暮らしているところには、必ずその歴史や自然、そしてそれをもとにする生活文化にいくらかの差異がある。私の故郷は平野部の工業地帯で太平洋側に位置しているため、雪が降ることも少なかった。それに対して東蔵は、山に囲まれた場所にある炭焼きによって生計を立てていた歴史のある場所で、冬になると大雪に閉ざされる地であった。全く聞いたことのない歴史や想像したこともなかった困難と工夫に私が驚き、引き込まれたのは、その差異に由来するのだろう。

なかでも一番心を惹かれるのは前節の考察で第四番目に述べた、東蔵の共有主義ともいえる考え方である。労働力や野菜などの物、知識や技術を分け合う姿を見て驚くことも多かった。しかし、考えてみるとなぜ私たちがこんなにも所有にこだわっているのかかえって疑問に感じてきた。私が小学生の頃、携帯で家へ電話をするには車道にいるのは危ないと感じ、アパートの駐車場の中に入ったことがある。すると女性の方が出てきて「何やってるの、私有地だよ、勝手に入らないで」と怒られたことがある。それ以来私は他人の土地に勝手に入ることになんとなく抵抗を感じるようになってしまった。そのため、東蔵での聞き取り調査のため行きたい家に訪問するのにも、関係ない家の敷地を歩くことに戸惑いを感じた。というのも前述の通り、東蔵の家はしばしばほかの家の敷地を通らないと行くことができないからである。また耳の悪い方に聞き取りをするためにその方の敷地に無断で入ることに躊躇した。しかし東蔵の人々はかなり自由に家の敷地や、場合によっては家の中にまで勝手に入ることがあった。土地だけでなく物についても同じことがいえる。住民同士で野菜やお菓子などをやり取りしているところを何度も見た。それだけでなく、集落にほとんど関係がない私にまで、夏の暑い時期には飲み物やタオルと保冷剤をくれたりした。

私たちの生活の中では公と私をはっきりと分かれている。アパートでは廊下までは誰がはいっても良い空間だが、各自の部屋の中に知らない人を入れたりすることはなく、隣に誰が住んでいるかも知らない。それに対して東蔵では公と私が、私たちの社会ほどはっきり分かれてはいない。その為、自分の土地であっても誰でも通過してもいい場所があったり、玄関や縁側に座って知り合った人と話したりもする。そういった混じり合いのなかで助け合

いや、物の貸し借りなどの交流が生まれているのではないだろうか。

謝辞

今回の調査にあたって協力していただいた方々に心よりお礼申し上げます。東蔵の方々には、無礼にも外からやってきた私に大変興味深い話をしていただきました。それだけではなく、夏の調査の時には熱中症になりそうになっていたところを保冷剤やタオル、お茶の差し入れなどで助けていただきました。冬にはお手製の魔よけのお守りをたくさんいただいたり、私の車を見かけて話しかけていただいたりして大変うれしかったです。世間では新型コロナウイルスの影響で人と人の距離が離れ寂しい雰囲気が漂っていますが、東蔵に行くと人の心の温かさに触れることができました。本当にありがとうございました。

注

- 1) 片貝郷土史によると山女という漢字をアケビと読む地域は他になく、かなり珍しいという。また地名の由来は植物のアケビがよくとれたから、集落に女性が多かったからといわれている
- 2) 人類学者レヴィ＝ストロースが著書『野生の思考』の中で用いた人類学用語である。身近なありあわせの物でやりくりする工夫や思考様式を意味する。
- 3) 『片貝郷土史』（1997 年、片貝郷土史編纂委員会発行）に記述されているが竜眼石について詳しい説明はなく、また集落の人に聞いてもそれがどんなものなのか詳しく知っている人はいなかった。ただ石のような物があったことは確からしい。

参考文献

片貝郷土史編纂委員会、1997 年『片貝郷土史』魚津市片貝公民館。

富山県児童文学研究会、1981 年『富山の伝説』日本標準。

和田雄剛、2006 年『もくちくりんの静岡県木炭史』静岡郷土史研究会。

参考にしたウェブサイト

魚津市「行政区別人口統計表」

〈<https://www.city.uzu.toyama.jp/guide/svGuideDtl.aspx?servno=551&cdkb=ctg&cd=&topkb=>〉（2020/12/17 閲覧）

第 11 章 松倉地区で消えつつある記憶と受け継がれてきたもの ——古鹿熊の分校と金山谷・松倉小学校の獅子舞

近藤 七茶

はじめに

私が松倉地区を初めて訪れたのは令和元（2019）年 12 月だった。聞き取り調査の中で松倉地区小菅沼集落に位置する「ヤギの杜」についてのお話を伺い、実際に訪れることになったのがきっかけである。ヤギの杜は、鳥獣害対策・耕作放棄地の解消・地域の活性化・歴史遺産の保護を目指し、ヤギの舌刈り¹⁾能力を生かしながら、棚田の法面や耕作放棄地の除草を試み、野生動物の侵入を防ぐ管理の実施を行っている屋外施設である。耕作放棄地が次第に増えてきた小菅沼の棚田を守っていきたいという地元住民の思いから平成 20（2008）年に発足した。

初めて訪れる冬場の松倉地区は、富山市で過ごしている私には肌寒く感じられ、ヤギの杜へ向かう道も大学付近では見かけないような細い山道だった。（地元の人にとっては大したことはない道だということをその後、知ることになる…。）この先に本当に目的地があるのか、車を運転する先生がハンドルを切り間違えてしまったら死んでしまうのではないかと考えたのを覚えている。

しかし、いざヤギの杜につくと、そんな心配事をしていたことをすっかり忘れてしまうかのような景色が待っていた。棚田の向こうに、夕日で朱く染まりかかった魚津市の街並みと日本海が広がっていたのだ。ヤギの杜代表の金森喜保さん^{かなもり きほ}曰く、この景色を見るためだけにこの場所に来る人もいるというほどだ。金森さんが見せてくれた数枚の写真には四季折々に表情を変える棚田と小菅沼の景色が写されていた。私はこの場所にはこんなに素敵な風景と共に暮らしている人々がいるのかと、この時から小菅沼、そして松倉地区に興味を惹かれていくようになった。その後は、小菅沼や古鹿熊、鉢、虎谷といった山間部をはじめ、鹿熊、金山谷、北山、坪野、稗畠^{ひえはたけ}など、松倉地区の各所で、今年の 11 月まで聞き取り調査を行った。

この報告書では様々な聞き取りの中から、現在まで残され、語り継がれてきたものとして古鹿熊分校の「黒板」、そして平成 31（2019）年に、廃校となった松倉小学校で行われていた子ども獅子舞について取り上げる。さらに、鉢・北山の獅子舞や坪野小学校の人形劇など現在ではもう行われていない行事についての当時の人々の記憶を、聞き取り調査をもとにまとめ、それらがどのようなものだったのか考察する。

1. 松倉地区について²⁾

松倉地区は魚津市の南部に位置し、令和 2（2020）年 7 月現在、381 世帯 1,029 人の住民が暮らしている。建武 2（1335）年ごろに松倉城が築城されてからは約 200 年余り、松倉金山の繁栄と共に、越中東部の政治・軍事の中心として栄え、近年では昭和 53（1978）年に角川ダムが建設されるなど、水資源の豊かな地域でもある。

角川と富川を中心とした 2 つの谷によって形成されるこの地区は、ヤギの杜が位置する小菅沼、北山鉱泉で有名な北山、刀踊りで知られる鹿熊など、廃村になった古鹿熊を合わせると 12 の集落から構成される。以下は松倉地区のそれぞれの集落の大まかな位置を記した地図である。

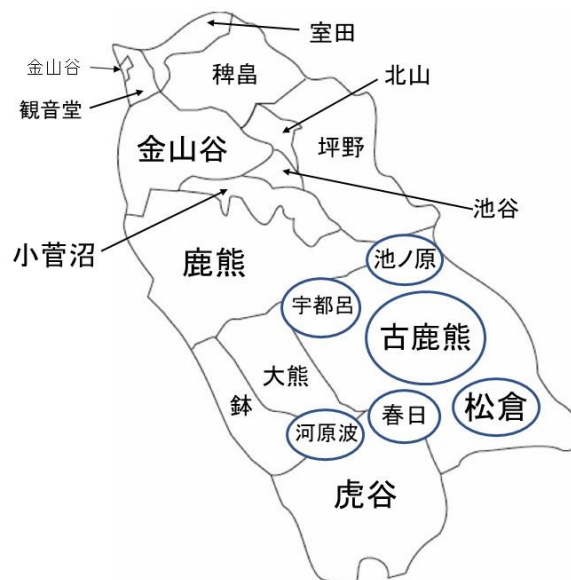


図 11-1 松倉地区地図（○で囲んだ地名はすでに廃村となった集落）

かつてはいくつかの小学校、分校も存在した。明治 18（1885）年頃から「授業所」という勉強ができる施設が設置され、以後、松倉小学校を本校とする鉢分校、古鹿熊分校、坪野分校ができた。その後、鉢分校は東加積小学校の分校と合併して昭和 28（1953）年に白倉小学校となり、古鹿熊分校は昭和 47（1972）年、古鹿熊の廃村と共に廃校、坪野分校は昭和 52（1977）年に魚津市立坪野小学校となった。その後、白倉小学校は平成 17（2005）年に廃校、平成 24（2012）年に坪野小学校は松倉小学校と統合されるが、平成 31（2019）年松倉小学校は上中島小学校、住吉小学校と統合され星の杜小学校となり、松倉小学校は閉校となった。

様々な祭りや伝統芸能も残っており、鹿熊の刀踊りや金山谷の獅子舞、春祭り、戦国のろし祭り、七夕祭りなどがある。また、廃村になった古鹿熊の不動明王や古鹿熊分校に残され

た黒板など、現在まで大切に受け継がれてきたものも多く存在する。その一方で、小学校の廃校や人口減少によって、今はもう見られなくなってしまった祭りや行事も存在する地区である。

2. 廃村古鹿熊分校の黒板

2-1. 廃村となった古鹿熊

古鹿熊は松倉地区、角川ダムよりさらに南に位置する昭和 47（1972）年に廃村となった集落だ。南北朝時代から松倉金山と共に栄えたという歴史をもつ。大正のはじめ（1910 年代）には 43 世帯ほどが生活しており、かやぶき屋根の住居が砂利道沿いにいくつか並んだ景色が見られた。しかし、その後は年々、村を出る住人が増え、廃村前には 11 世帯ほどとなった。



写真 11-1 廃村前の古鹿熊の様子（『魚津発祥の地 松倉 小学校沿革史』より）

住居の他に、神宮寺や春日社、不動明王の祠、古鹿熊分校などもあった。また、神宮寺には十一面観音像も祀られていた。この観音像は行基の作と伝えられており、元は松倉城内の本丸に安置して、信仰されていた。しかし、天正年間（1573-1593 年）の兵乱による松倉城落城の際、松倉城主がこの観音像を急いで神宮寺へ投げ込んだという経緯で、神宮寺に安置されるようになったそうだ。今では、この観音像は天神山の魚津市歴史民俗資料館に縁起書とともに安置され、富山県の指定文化財の仏像となっている。

なお、現在の古鹿熊は、古鹿熊廃村後に建てられた当時の資料などが保存されている建物と、「ふるさとの館」という名がついた木製の屋根がついた屋外休憩所のようなもの、春日

社の鳥居、不動明王の祠のみが残っている。これらは、古鹿熊元住民を中心に手入れが行われている。私は8月下旬に2、3回ほど訪れたが、基本的には人の出入りはなく、猿やウリ坊らしき動物が駆けていくのを見かけた。

2-2. 古鹿熊とその周辺の人々

聞き取り調査の中で私は古鹿熊についての語りを聞くことができた。ここでは古鹿熊の周辺住民と古鹿熊の元住民の2つに分けて語りの記述を行う。

古鹿熊周辺の人物の語り

1人目は金山谷に住んでいる雛形^{ひながた}逸夫^{いつお}さん（76歳）だ。雛形さんの家は昔炭焼きをやっており、古鹿熊周辺でスギの木の植林なども行っていた。また、酒・雑貨などを売る「よろづや」も営んでおり、逸夫さんのお父さんは販売のために昭和45（1970）年ごろまで商品を背に担いで古鹿熊に配達作業をしていたそうだ。現在角川ダムとなっている場所は、かつては道路で、ダムができてから周辺の道も舗装されたという。古鹿熊に住んでいる人々の生業について尋ねると、クズの木の花からとれ、お菓子の材料になるくず粉をとって売っていたと思うと逸夫さんは話した。また、古鹿熊の中学生は松倉小学校の隣にあった西部中学校の分校に通っていたため交流がなかったわけではないという。

2人目は朝日町在住の80代の男性だ。偶然古鹿熊を訪れていたところ、お話を伺った。彼は元々教師だったこともあり、古鹿熊分校を訪問するために古鹿熊に来たことがあるそうだ。道沿いに並ぶかやぶき屋根の家が印象的だったという。また古鹿熊分校の教員用宿舎は廃校後も、何年間か自由に出入りできていたそうで、宿舎の中に残されていた黒板をよく覚えていると話していた。

2人目の男性が話していた黒板と共によく語られていたのが、古鹿熊に移住し、古鹿熊分校で教員をしていた夫婦のことである。当時、古鹿熊にあった教員用宿舎を利用して住みこみで児童たちを教えていたそうで、これについては鹿熊の木下正良さんをはじめ、他にも4、5人の語りでお話を聞いた。古鹿熊といえば「古鹿熊分校の黒板」と住みこみで教えていた「教員夫婦」、この2つが人々の記憶の中に象徴的な意味合いで刻まれているのではないかと思った。

古鹿熊元住民の語り

今回の調査では古鹿熊の元住民の2名にお話を聞くことができた。1人目が川平和夫さん（72歳）だ。川平さんは「古鹿熊ふるさとを守る会」の会長として日ごろから古鹿熊の管理を行っている。生まれは春日で、古鹿熊には小学校3年生の時から中学校3年生まで暮らしており、実家は昭和47（1972）年に廃村を迎えるまで古鹿熊にあったという。中学生からは松倉小学校横にあった西部中学校の分校に通っていたそうだが、12月20日から3月までの間の冬場は雪がひどく、古鹿熊には2回しか帰ることができなかったと話していた。

川平さんによると、古鹿熊の人々の主な生業は炭焼きや土方で、くず粉を北山で売ったりしていたそうだ。冬場は雪に覆われる環境にあるため、生活には工夫が必要で、食糧は干しだらなどあらかじめ貯蓄しておいたもので賄っていたそうだ。

川平さんが暮らしていた頃の古鹿熊には12世帯ほどが暮らしており、田圃も多かった。現在杉の木が生えているところは、その昔全て田圃だったので、川平さんの生まれた春日も古鹿熊から眺めることができたという。

黒板については古鹿熊分校が廃校になるときに、当時勤めていた松原先生夫婦が書き残したもので、今でも大切に保存されているということだった。おそらく、松原先生は廃校になる直前の3、4年間、古鹿熊分校で教えられていたのではないかと話していた。

かつての住人の2人目は吉崎貞重さん（86歳）である。吉崎さんは離村するまでの約40年間、古鹿熊で暮らしており、古鹿熊分校で6年間学んだ。6年生の時の児童数は、全学年合わせて35人で同級生は7人だったそうだ。当時は春日、池之原から古鹿熊分校へ通っていた児童もいて、吉崎さんが入学するより前の時期には河原波、松倉の子供たちも来ていたそうだ³⁾。授業の日は、学校が始まる5分前には先生に鐘を鳴らしてもらって、そのタイミングで走って学校に行き間に合うようにしていたと話していた。

古鹿熊ではその地名の通り、クマやシカに遭遇することもあった。その一方で、動物たちに襲われることは少なかったそうだ。古鹿熊元住人の記憶の中で、唯一クマに襲われたとされる先生がいたのが、吉崎さんが分校に通っていた時だった。その先生は池之原から酔って帰ってくる途中で黒豚がいて、近づいたらそれがクマで、襲われてしまったという。当時はクマで怪我した人は少なく、クマに対してこわいというイメージはあまりなかったそうで、どこをどんな風に怪我したのか吉崎さんは覚えていない。それよりも先生の療養のおかげで授業が休みになることがうれしかったと語っていた。

吉崎さんが25歳ぐらいになったときには、古鹿熊でおそらくはじめて、吉崎さんの家にテレビが設置された。その後も、古鹿熊でテレビがある家は、吉崎さんの家ともう一軒のみだった。川平さんが小学生の時には、学校が終わって晩御飯を食べた後に、吉崎さんの家にテレビを見に行っていたそうだ。吉崎さんの両親たちが寝た後も、子供だけでテレビを見続けていたという。深夜11時過ぎごろ、NHKの番組で「本日の放送は終了します。」というアナウンスと共に「蛍の光」の音楽が流れたら、テレビのスイッチを切って勝手に帰っていたそうだ。

吉崎さんはその後も38歳になるまで古鹿熊で暮らし続けるが、古鹿熊元住人の中で、吉崎さんの世代が、炭焼きをはじめ、山で様々な仕事を行っていた最後の世代だという。吉崎さんの家では炭焼き、米、くず堀りを行っていたそうだ⁴⁾。

くず堀りは雪解けと同時に始まり、村中の人は近くのくずがとれる山へ行って採集をしていた。この時期のくずはまだ葉っぱがでておらず、地上にある蔓^{つる}を見てどこにはえているのかを確認する。くずの葉っぱが出てくる時期になると、くず粉の材料となるでんぷんが葉にとられてしまうので、作業はくずから葉っぱが出てくるまでの期間に限られていた。当

時、くずの根から作られるくず粉は需要が高く、薬屋をはじめ様々な人たちに高値で売れた。くず粉はでんぷん質があるくずの根からしか作れないので、採集をする際にはでんぷんがあるかどうかを見分ける必要があった。くずの根は大きいからといってでんぷんがあるわけではなく、色で見分けなければいけない。たいていの場合は採集を行っている父親からその技術を教えてもらい、あとは感覚をつかんでいくそうだ。くず堀りがうまい人は5升(1.8ℓ×5本)くらいとってきたそうだ。炭焼きをする場合は様々な約束事があり、山の所有者にお酒やお金を渡すことが通例だったが、くず粉の場合は、村中の誰でも、どこの山でも許可なく、掘ってよかったそうだ。もちろん山の所有者は存在したが、その人も村の人間であったからか、くずを掘ることにに関して何も文句を言うことはなかったという。吉崎さん曰く「(くず)を外部の人が来てとって何も言わんし、とったもん勝ちだった。」売り上げはすべて掘った人のものだった。吉崎さんの親世代は、くず堀りに石川県の能登の方まで出向き、出稼ぎをすることもあったそうだ。

このようにして、くずを採ってくるのは夫の仕事だが、それをつぶして洗い、でんぷんを取り出す作業を経て、くず粉自体をつくるのは妻の仕事だった。作業は小屋でやる人もいたが、量が少なければ平らな石の上において筒でたたいてつぶす人もいたそうだ。竹を編んだもののうえにすりつぶしたくずを置いて、その下に桶を置く。くずの上から水を流すと、最初は泥水のような色の液体がたまるが、これを数日間かけ、何度も行くと次第に水が白くなっていく。この際に、くず粉となるでんぷんの部分は液体下部に沈殿するが、液体の上部には赤花とよばれる餅のような形状のあくがたまる。これは煮れば非常食にはなるが売りものにはならないそうだ。たいていの場合、赤花は捨てるが、庭の横などに捨てるのを繰り返すので、そこの土がよい土になるという。これらの過程を経て、液体下部にたまった白い液体を乾燥させるとくず粉ができる。これらの作業は2月から4月頃の田植えが始まるまでの期間に、家ごとで行われた。

くず粉は米より高く売れたそうで、たいていの場合は近隣の薬屋に売りに行った。胃腸薬などの薬にくず粉が重宝されていたからである。わざわざ古鹿熊まで足を運んで買いに来る薬屋や仲買人も多く、とにかく人気があり、高値で売れたそうだ。

米の収穫時期になり、11月15日あたりを過ぎると古鹿熊では冬支度がはじまる。吉崎さん曰く、「この時期に冬支度をはじめなければ、古鹿熊にはおれん」そうだ。冬支度には、家の周りをかやで囲う雪囲いや薪の用意、わらじづくりなどがある。これらはすべて夫の仕事だった。わらかかやで炭俵もつくっていた。大根などの食料も、この時期に近くの畑から採ってくる。冬場に向け、これらの野菜は塩漬けしたり、藁に包んで雪に埋めたりした。このようにしておく、春になっても野菜は腐らずにとっておけたそうだ。

稲はあらかじめ刈っておいて、雪が降るまでは炭焼きをしていたそうだ。そして雪が降りだす時期になると、庭や田んぼにおいて乾燥させておいた稲を脱穀する。当時はまだ千歯こきも残っていたが、足ふみの脱穀機を使っている家庭が多かったという。米作業は2月頃まで続いたため、1月に正月をすることはなく、旧正月の2月、作業が落ち着いて雪が解けて

から正月行事を行った。古鹿熊では、12月半ばから3月までは雪の影響で下の村への道が閉ざされるため、その年に採れた米は5月ごろにならないと、売りに行くことができなかった。

雪が降っている間に、どうしても野菜以外のものが食べたいとなると、村から出てウサギやアナグマ、イノシシやカモシカを狩りに行ったり、魚を買いに行ったりしていたという。魚を買いに行く場合、村から続く道は閉ざされていたので、電柱沿いに足場を確保し、川まで降りて、買いに行ったそうだ。

吉崎さんが離村したのは昭和47（1972）年春だった。吉崎さんの3人いる子供のうち、真ん中の子供が小学生に上がるタイミングで、集団離村よりも早くに離村したそうだ。廃村後も古鹿熊の元住人たちは集団で弥源寺（富山地方鉄道本線西魚津駅から南東へ800mほどに位置する）という地域に移住したこともあり、獅子舞などの行事は数年間だけ続いていた。しかし、その獅子舞も昭和50年代の後半に坂本九が総司会を務める「日本の祭り」（フジテレビ）というテレビ番組に出たのを最後に終わってしまったという。田畑の作業で手いっぱい、古鹿熊にくずを採りに行くこともなかったという。

古鹿熊に残された黒板については、古鹿熊の元住人みんなが懐かしいと思うものであり、読んでない人はいないと話していた。吉崎さん自身も古鹿熊にたまに訪れるたびに見て読んでいたという。黒板の文字はチョークで書かれているので消えかかったこともあったが、元住人が上から文字をなぞり、書き直していたのではないかと話していた。

2-3. 古鹿熊分校と残された黒板

廃村からまもなく半世紀を迎える古鹿熊だが、一軒だけ、廃村後に建てられ、写真をはじめとする、古鹿熊の資料などが保存されてある建物がある。その建物の中にあるのが多くの聞き取りで語られていた先生夫婦が詩を書き残した黒板である。私は川平さんにお話し、実際に黒板を見せていただくことができた。

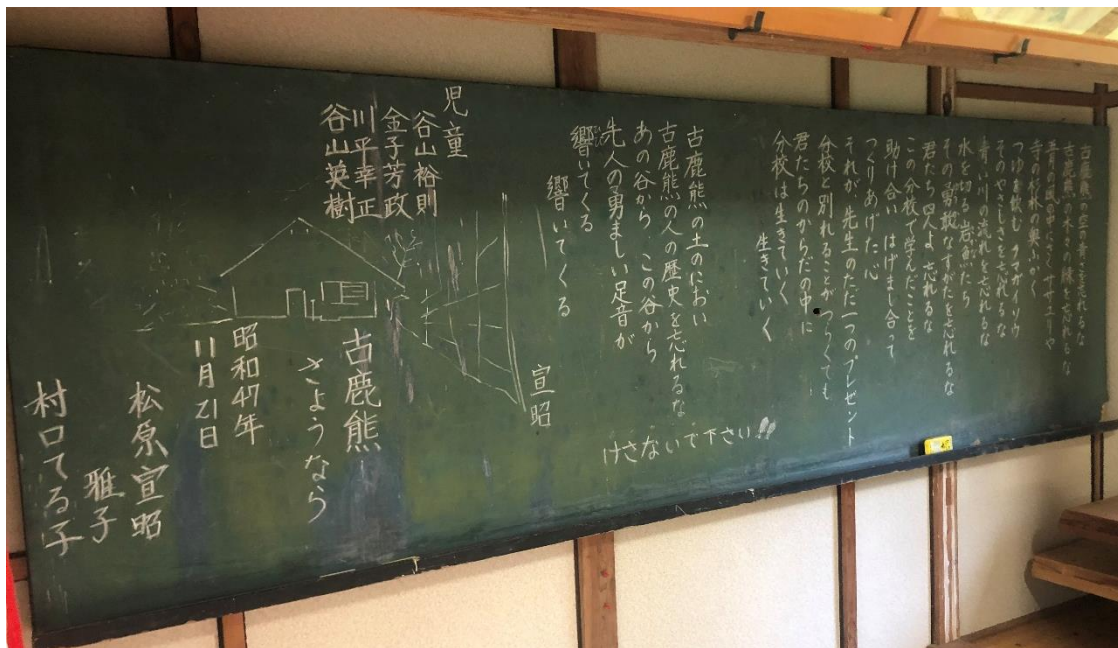


写真 11-2 古鹿熊分校に保存されている黒板

詩の内容は以下の通りだ。

古鹿熊の空の青さを忘れるな
 古鹿熊の木々の緑を忘れるな
 五月の風の中にさくササユリや
 寺の杉林の奥ふかく
 つゆを飲むクマガイソウ
 そのやさしさを忘れるな
 清い川の流れを忘れるな
 水を切る岩魚たち
 その勇敢なすがたを忘れるな
 君たち四人よ忘れるな
 この分校で学んだことを
 助け合いはげまし合って
 つくりあげた心
 それが先生のただ一つのプレゼント
 分校と別れることがつらくても
 君たちのからだの中に
 分校は生きていく
 生きていく

古鹿熊の土のにおい
古鹿熊の人の歴史を忘れるな
あの谷からこの谷から
先人の勇ましい足音が
響いてくる
響いてくる

宜昭

チョークで書き残された詩は、消えつつある部分を後から地域住民が上書きするなどはされているものの、現在でも綺麗に残っている。

2－4．松原先生夫婦の語り

当時古鹿熊分校の最後の先生だった松原先生夫婦に、電話での聞き取りをすることができた。

松原先生が古鹿熊分校に来たのは昭和 46（1971）年、前任の夫婦が引退されることうけ、松原夫婦が教員として分校に着任した。松原^{のりあき}宜昭先生は入善で生まれたこともあり、八尾のへき地で教員としての仕事をはじめた。その後、魚津市の吉島小学校へ異動。この頃、元々結婚が決まっており、宜昭さんと同じく教師であった奥様が新潟から魚津市へ来て、結婚することになった。その後、宜昭さんが 27 歳の時、奥様の雅子さんが 24 歳の時に担当することになったのが古鹿熊分校だった。

古鹿熊での生活

古鹿熊には車がやっと通れるような細い道しかなく、普通車が通ると傷だらけになったそう。そのため、松原夫妻も引っ越しの際は親戚の方の軽トラックに乗せてもらい、荷物も一緒に運んでもらったそう。古鹿熊分校には教員用宿舎があったので、2 人でそこに移住した⁵⁾。段々畑とかやぶき屋根の住宅が並ぶ古鹿熊の村から、町へ出るバス停までは約 7 km もあり、そのうえ山道だった。それでも週に 1 回土曜日には買い物や本校とのやりとりのため、片道 3 時間以上かけて歩いていたそう。

冬になると、村は雪に覆われる。松原先生が古鹿熊で冬を越したのは 1 度だけで、その際の雪は大したことにはなかったそうだがそれでも 2 m 超えるほどは積もったそう。冬場はあらかじめ大根などの保存食を雪の中に入れて置くなどして乗り越える。時にはウサギやクマをとってくれた住民もいたそう。また竹の竿を片手に角川まで 100m ほどくだった場所にある河原へ出てそこから町へ出ることもあったそう。その際は普通の道は使えないので、普段とは別の道を通る。穴倉みたいになっているところをベテランの住民のあとにつづいて通ったそう。

古鹿熊分校と子供たち

当時の古鹿熊は廃村になる1年半前ということもあり、老人と少しの子供たちしかいないような村だった。若い世代は出稼ぎに行ったり、村を離れたりしている人も多かった。そのため、子供たちを外に連れ出す機会もあまりなかったようだった。宜昭さんは「勉強を教えるときは、ものの区別をするところからだった。教科書の勉強も空を飛ぶものは鳥としかわからない子供たちだったから大変だった。」と話す。古鹿熊にはテレビはなく、子供たちの情報源は本だけだったそうだ。松原先生が持っていたビルの写真を村で一番頭がいい子に見せても、古鹿熊ではお寺が一番大きな建物だったため、サイズ感を理解することが難しかったと話していた。その一方で、一度習ったことはよく覚えている子供たちだったそうだ。

先生が古鹿熊分校で教えていたのはわずか1年と7か月ほどだったが、その日々は非常に濃密だったと話す。出稼ぎで親が家にいない子供たちが多かったので、一緒に昼食を作って学校で食べるなど、食事は一緒にとることが多かった。雅子さんは、数年前に母親を亡くした児童からまるで母親であるかのように慕われていたそうだ。運動会の時には本校の松倉小学校までみんなで歩いていった。行きの道か帰り道のどちらかで必ずクマに出会っていたが、そういう時はクマが通り過ぎるまでじっと待っていたそうだ。教室の窓から見えるシシヤマ⁶⁾と呼ばれる山でも子グマが転がって遊んでいる風景が見られ、授業中に子グマに気をとられている児童に「勉強しようね」と促していたこともあったという。宜昭さんは人懐っこくて、素直でかわいらしい子供たちから教えてもらったことがたくさんあったと話していた。

古鹿熊分校の黒板とその後

現在でも残っている古鹿熊の黒板は、集団離村の前日、昭和47（1972）年11月21日⁷⁾に、宜昭先生が夜中に一人で書き残したものだ。古鹿熊の風景や住民たちを想起させるその詩は、その時思いついたものを宜昭先生が即興で書き残したものだ。黒板には、詩と共に当時の児童4人の名前、松原夫妻の名前、村口てる子さんの名前が残っている。この村口さんという方は、分校の食事を作ってくれたり、松原夫婦に古鹿熊について様々なことを教えてくれたりと、松原夫婦を支えてくれた住民の1人だったそうだ。宜昭さんは当時を振り返り「何かを残したいという気持ちがあったんだと思う。古くは金を採って栄え、田圃や畑をつくり、この地で文化を作り上げてきた人たちが近代化のために村を追われていく。その様を目の当たりにして、かわいそうというか、まあそんな気持ちがあったね。」と話す。宜昭さん自身が黒板をみんなに披露したわけではなく、その後、地域住民が中心となって黒板を残してくれたんじゃないかと話していた。一度、分校がなくなる際に当時の教育長から電話で「黒板もなくなってしまうかもしれないがもう一度書くか。」と聞かれたそうだが、お金も使うだろうしそんなことはしなくていいと答えたという。最終的に当時の宜昭さんが残した黒板が未だに残されていることから、その時に移動していただいたんだろ

うと思うと話していた。黒板に残されている「消さないでください。」という言葉もおそらく地域住民の手によって書き加えられたものだそうだ。

松原夫婦は集団離村後、時期的にも就職先が少ないなかで、最終的に黒部の嘉例沢分校⁸⁾という冬季分校へ着任したそうだ。廃村後も2人で古鹿熊の様子を見に行ったり、「古鹿熊を語る会」⁹⁾に参加し、元住民らとバーベキューをしながら当時のことを語り合ったりしていたという。しかし、その会も年々元住民が少なくなっていることから、10年ほど前から途絶えているそうだ。

3. 松倉小学校の子ども獅子舞

3-1. 松倉小学校の子ども獅子舞——概要

松倉小学校の子ども獅子舞は昭和 56（1981）年から行われている。小学校の教員が金山谷獅子舞保存会に声をかけ、郷土学習として導入したことがはじまりだ。松倉小学校の4年生から6年生が演舞する。最初は運動会での披露が中心だったが、次第に松倉地区の文化祭、戦国のろし祭り¹⁰⁾、金山谷神明社の春祭りでも披露されるようになった。

練習は松倉小学校で郷土学習として取り入れられ、それぞれの行事が近づくと、練習をするための授業が行われるようになっていた。指導は金山谷獅子舞保存会のメンバーや演舞の経験をもつ5、6年生が行う。獅子舞保存会からは、天狗や獅子頭など各パートの練習日に都合が合う人から1人が選ばれ指導に行っていた。保存会メンバーによる指導は各行事につき2回ほどで、年に8回ほど小学校から呼ばれて教えにいていたそうだ。小学生の役割には天狗、獅子舞の獅子頭・かや・しっぽ、お囃子の笛・太鼓・鐘があり、天狗と獅子頭はオーディションによって選ばれる¹¹⁾。獅子舞の振り付けは金山谷獅子舞の「一足（ひとあし）」という足型（演目）のみで行う。一足は金山谷獅子舞の足型の中では一番簡単なものだが、それでも金山谷獅子舞特有の激しい動きがあり、習得までには時間がかかる。

子どもたちが習得する金山谷獅子舞は、明治の初めに松倉金山や河原波の人たちが能登半島の獅子舞を習い、伝えたのがはじまりである。明治 15（1882）年、当時の金山谷の青年有志であった河崎甚五郎、石橋文左衛門、雛形三郎平などの父親が習い、伝えたとされる。現在では五穀豊穰と厄払いを願い、毎年3月中旬にある、金山谷神明社の春祭りで獅子舞が奉納される。

子ども獅子舞が誕生した経緯

現在、子ども獅子舞がはじまった経緯についての詳細を知る人物は少なくなっているようで、今回の聞き取り調査では、おそらく、このように伝わったのではないかという、推察の域を出ない言い伝えのようなものが多かった。その中で、最も詳細な語りは、松倉小学校の元教員らの中で言い伝えられているものであった。これによると、その経緯は次のようなものである。はじまりは、熱心な先生が金山谷獅子舞保存会に子ども獅子舞をしたいので子

供たちに教えてもらえないかと訪ねてきたことだった。しかし、本来、獅子舞は門外不出のものであるため、その後、1年ほどかけて金山谷集落内で話し合いが行われたそう。そんな時、村の人が小学校の子供たちが段ボールで獅子頭を作っている姿を見たという。最終的に「あんなに頑張っているんだから、教えてあげてもいいんじゃないか」という話にまとまり、その後、獅子舞保存会の会員の子供が松倉小学校に入学するのと同時に導入された。



写真 11－3 春祭りで披露された子ども獅子舞の様子（高縁和也さん提供）



写真 11－4 春祭りで披露された金山谷獅子舞の様子（高縁和也さん提供）

3－2. 卒業生たちの記憶

今回の聞き取り調査では、子ども獅子舞がはじまったばかりの頃小学生だった方々をは

じめ、松倉小学校廃校間近に小学生だった方々にもお話を伺った。

初期から中期の子ども獅子舞を担っていた人々

松倉小学校で子ども獅子舞がはじまったときに小学校5年生だった左近靖徳さん（50歳）と池川雅美さん（50歳）、始まってから数年後に入学した石倉伸幸さん（42歳）にお話を伺った。左近さんと石倉さんは金山谷出身で、現在は金山谷獅子舞保存会で活動している。子ども獅子舞には左近さんはしっぽ、池川さんはかやで参加した。役職は、保存会の人から「お前やれ」というような感じで指名されて決まっていたという。当時のことを振り返り、左近さんは、「正直、小学生の時は嫌だった。力なかったしひ弱だったから。もう疲れて疲れてしょうがない。」と話した。池川雅美さんも「なんでいきなり獅子舞せんといけんのんかって感じだった。」という。それまで獅子舞を行ってこなかったこともあり、あまり気が乗らない子どもも多かったそうだ。特に、元々の金山谷の獅子舞には女性が参加しないこともあり、女子児童には「なぜ女も獅子舞をやるのか。」という気持ちがあったそうだ。

その後、大人になってから、保存会に入った左近さんと石倉さんは、指導役として子ども獅子舞に関わるようになった。いざ指導に入るようになると、自分が小学生だった頃のこととも思い出していたという。左近さんたちのように獅子舞に乗り気でいない子もいた一方で、積極的に参加する子も多かったそうだ。左近さんの息子さんたちも松倉小学校で子ども獅子舞に参加していたそうで、「息子たちは自分と違って積極的にやっていて楽しいんだろうなと思った。親とか知っとる大人も指導側にたくさんおるからっていうのもあるんだと思う。」と話していた。父親の獅子舞に憧れて同じ役割を選ぶ子も多かったそうだ。

また、オーディションで選ばれる天狗と獅子頭は金山谷の子どもになることが多かったという。子ども同士でも、こども獅子舞は元々金山谷の獅子舞だから、獅子頭と天狗は金山谷の子がするものだという共通認識のようなものがあったそうだ。

廃校約10年前の子ども獅子舞を担っていた人の記憶

廃校約10年前の子ども獅子舞を担っていた人物として、現在金山谷獅子舞保存会の最年少メンバーである石橋要明さん（19歳）にお話を伺った。石橋さんは金山谷生まれ、金山谷育ちで、松倉小学校に通っていた。子ども獅子舞では天狗を担当したそうだ。お父さんが保存会で天狗を担当していたこともあり、自ら天狗に立候補した。天狗と獅子頭（この2つは男子児童が担当）、それらに加え、獅子のしっぽはオーディションで選ばれ、これらの役職は5年生と6年生に1人ずついた。

天狗と獅子頭は、4年生でかやを担当していないとなれないというルールがあった。基本的に4年生が担当できるのは、かやと「^{がくや}楽屋」と呼ばれる太鼓、笛、鐘の3つ（いわゆるお囃子のこと）だった。当時周囲には、獅子舞に乗り気でいない児童もいたが、石橋さんは小さいころから獅子舞のビデオばかり見ていたほど獅子舞が好きだったので楽しめたそうだ。

基本的には5年生で1体、6年生で1体の獅子舞を作り、それぞれに4年生が加わった。

練習も5年生中心の獅子と6年生の中心の獅子に分かれて行った。獅子ごとの練習では、天狗、獅子、かやで1列に並び、楽屋の音楽に合わせて踊る練習を頻繁に行っていたそうだ。また、天狗は天狗同士、獅子頭は獅子頭同士で細かいところを合わせることもあった。指導は年長の5、6年生や保存会の人が行っていたが、動きがそろっているかどうかなど、経験者ではなくてもわかる範囲のことは、普段の練習で教員が指導していたそうだ。父親が保存会で獅子舞を踊っている家庭の子どもは、父親に直接教えてもらうこともあったという。石橋さんの場合は、お父さんの手作りの道具で、家でも教えてもらっていた。子ども獅子舞で笛を担当する同級生のなかには、獅子舞で笛を吹く父親から、家でも教えてもらっているという子がいたそうだ。

獅子頭と天狗は金山谷の子どもがなりやすいという話を聞いたことがあると伝えると、石橋さんも小学生のころからそういう風に思っていたそうだ。誰から言われたというわけではないが、大人になってからやるのも金山谷の人だから、獅子頭や天狗は金山谷の子どもやった方が将来につながるという話を聞いたことがあると話していた。

廃校間近の子ども獅子舞を担っていた人々の記憶

廃校間近の子ども獅子舞を担っていた人物として、中学3年生である佐々木音葉さん（15歳）、高縁楽さん（14歳）、石橋采明さん（14歳）、杉田蒼さん（15歳）、佐々木悠雅さん（15歳）、中学2年生の石橋聡一郎さん（14歳）、小学5年生の石橋環奈さん（11歳）に聞き取りを行った。彼らのうち、鹿熊出身の杉田蒼さんを除く6人は金山谷出身だ。今年の春、松倉小学校が廃校になってはじめて行われた子ども獅子舞にも彼ら全員が有志として参加している。また、小学5年生である石橋環奈さんは、松倉小学校には3年生までしか通っていないので小学校での獅子舞指導は受けていないが、一から練習して、今年の春の子ども獅子舞に参加した。

現在、中学生である6人に、松倉小学校で獅子舞を担う4年生になったときのことを尋ねると、6人ともやりたい気持ちがあったそうで、獅子舞をすることを楽しみにしていたという。佐々木音葉さんは「やっとやれたという気持ちだった。」と話す。また、鹿熊出身の杉田蒼さんは金山谷出身ではないが、子ども獅子舞で天狗を担当していた。天狗を選んだ理由については「昔から見ていてかっこいいなって思っと思った。獅子を一人で操っているのがかっこいい。」と話していた。他の代にも、金山谷出身ではない子で天狗や獅子頭を担っていた子がいたそうだ¹²⁾。オーディションの方法については、別の時間に聞き取りを行った中学1年生の石橋究明さん（12歳）にお話を聞いた。主に校長先生、教頭先生、そして獅子舞を踊る学年の担任の先生が審査していたそうだ。その他の子どもたちの語りの中には、オーディションの場に保存会の人もいたというものもあった。

6人全員が獅子舞をやりたいと思っていた理由の一つに「戦国のろし祭りで4～6年生は獅子舞をするのに1～3年生は自分で作った鎧を着て披露しなければいけなくて、それがダサいと思っていたから」というのがあった。鎧を披露する際に「われは〇〇（出身地区）

の××（名前）でござる。」といった自己紹介をして、決めポーズをすると決まっていたこともあり、特に女子は「（言葉遣いも含め）恥ずかしかった」と話していた。だからこそ、上級生の披露する獅子舞がさらにかっこよく見えたそうで、はやく自分たちも獅子舞をしたいと思っていたようだ。また、6人とも松倉小学校入学前に松倉保育園に通っていた。松倉保育園でも運動会の際に獅子舞を模したティッシュの箱を使って踊ったり、天狗の面を被ったりしていたそうで、幼いころから獅子舞への憧れがあったという。

4年生になってはじまった獅子舞の練習では、体力も必要だったが、とにかく楽しいという気持ちが大きかったようだ。全体での練習をしたり、個人個人で保存会の人に教えてもらったりしていたという。保存会の人ที่ไม่来る日には、同じ役職の6年生が下級生に教えていたようだ。楽屋の音で合わせることができない日には、録音した音源を使い、それぞれのパートで足型をあわせることもしていた。獅子舞の練習は総合の授業の中で行われるが、授業が獅子舞だとわかると「ラッキー」と思っていたと振り返る。

披露する際は、団体であることや、顔を隠している役職が多いこともあり、あまり緊張はしなかったようだ。それよりも「楽しいという気持ちが大きかった。」と話す。それでも、獅子舞を踊るのにはそれなりの体力が必要で、1日に何回も踊りを披露するのは大変だったという。特に運動会での披露では親獅子と子獅子で場所を交代して2回披露するので、「きつかった」と口々に話していた。

小学生時代に獅子舞を経験できたことについては、人数が少ない松倉小学校だからこそできたものだった。中学校の同級生に獅子舞のことを話すと、他の小学校出身の子たちは「そんなこと（獅子舞）自分たちの学校ではやってなかったよ。」と話したという。松倉小学校以外の小学校では、子供たちは小学校から祭りに参加するのではなく、習い事を通じて参加している子が多かったようだ。杉田蒼さんは「他の学校だと人数多すぎて、全員でできるってことがあんまりないと思うし、全員でできたのがよかった。」と話していた。

また、獅子舞をやっていてよかったと思うことについては、「楽しかった」という意見や「伝統を受け継ぐことができた」という意見があった。佐々木音葉さんの場合、曾祖父が太鼓、祖父が笛、父親は獅子頭を担っていた。「自分がカヤを担当したことで、4代続けられたなと思った。」と話していた。他にも、親が獅子舞をやっているから、自分もやれてうれしいという気持ちを持っている子が多かった。また、現在、金山谷獅子舞の担い手は男性のみであるが、存続危機になるくらいなら、女性であっても、ぜひ参加したいという声もあった。「子ども獅子舞はなくなるかもしれないけど、金山谷獅子舞には続いてほしいね。」という話も出てきて、伝統を失くしたくないという思いが伝わってきた。

3-4. 子ども獅子舞を支えていた人々

調査では、子ども獅子舞を保存会の一員として支えていた人や、親の視点から支えていた人たちからもお話を聞くことができた。まず最初にお話しを伺ったのは谷口直實さん（70歳）だ。直實さんは松倉地区の室田出身で婿入りしてから金山谷で過ごしている。かつては

金山谷獅子舞保存会で会長として活動していたこともある。小学校で子ども獅子舞がはじまった経緯については、滝沢孝子さんという熱心な先生が郷土学習として導入したいと保存会の方に声をかけたのがはじまりだったと話す。最初は先生の手作りの段ボールの獅子頭を使っていたそうだが、それだとすぐ壊れるからという話になり、直實さんが木製の手作りの獅子頭を寄付したそう。その後、当時金山谷獅子舞保存会の初代会長だった雛形章さんが春祭りの際などに村人のご祝儀を集め、そのお金で井波の今井幸次郎さんという人に親獅子と子獅子の2体を作ってもらい、寄付したという。その際、獅子頭に持ち手がついていなかったため、直實さんが金山谷獅子舞と同じような形式の持ち手をつけたそう。その後も何十年かに1度、獅子頭が壊れることがあると、そのたびにおそらく今井幸次郎さんやその息子さんに依頼をしていたのではないかとのことだった。獅子舞を作り直すのには多額な費用を要する。直實さんは「都会のように大手の企業がお金を寄付してくれるわけではないから、村人のご祝儀は金山谷獅子舞にとっても、子ども獅子舞にとっても重要な役割を果たしとる。」と話していた。

他にも、保存会で獅子舞を担っている現役の方々にもお話を聞くことができた。石橋建一さん（44歳）、谷口浩之さん（46歳）、佐々木裕行さん（42歳）、黒崎孝次さん（44歳）、そして、金山谷獅子舞保存会現会長の高縁和也さん（47歳）だ。この時には、3－2でもお話を伺った石倉伸幸さん（42歳）にも来ていただいた。石橋建一さんは前述の廃校間近の子ども獅子舞を担っていた石橋聡一郎さんと石橋環奈さんの父親であり、佐々木裕之さんは佐々木音葉さんの父親、高縁和也さんは高縁楽さんの父親である。また、谷口浩之さんは前述の谷口直實さんの息子である。6人のうち、婿入りして金山谷へ来た黒策孝次さん以外のメンバーは、小学生の時から子ども獅子舞に参加している。

高縁さんは小学生の時のことを振り返り、担任の先生が子ども獅子舞を始めた滝沢孝子先生だったことや、顔見知りの地域の人から獅子舞を覚えてもらうこともあり、「『やろうぜ』みたいな感じで、嫌だと思いう気持ちはなかった」と話す。石倉さんは夏休みの登校日に獅子舞の練習をして、汗をかいたあとにプールに入って帰っていたという。かつては獅子頭も手作りのものが4つあり、木枠に発泡スチロールでつくった鼻と眉毛がついていたそう。この木枠を作ったのが、おそらく谷口直實さんだったという。直實さんの息子の浩之さんは「昔、獅子舞の木枠を家でつくったの見たことある。」と当時のことを思い出していた。

大人になってから、小学校に教えに行くようになると、自分たちの時代との違いも感じたという。石橋建一さんは「自分の子どもが（獅子舞の）オーディションがあるんだという話を聞いてはじめて、今はそんなんなんだって思った。」と話す。また、高縁さんと石橋さんは金山谷獅子舞で笛を担当しているため、小学校にも笛を教えに行っていた。その際、金山谷獅子舞の難しいパートが簡単なメロディーで受け継がれていたことに気が付いたそう。

高縁さんと石橋さんは、それを金山谷獅子舞本来のものに直そうかどうか迷ったそうだが、2人の子供である聡一郎さんや楽さんが「（本来のメロディーでも）できるよ。」と言い出したこともあり、楽さんが笛の担当になった時期に直したそう。閉校の3年ほど前のこ

とだ。どういう経緯で子ども獅子舞の笛のメロディーが変わっていたのか詳しくはわからないが、本来のメロディーは難しかったこと、教えられる人も限られていたことや子供の中でこっちの方が簡単だという話が出て、変わっていったのではないかと話していた。

高縁さんは子供たちに教えている時のことを振り返り、「その時の子供たちの目はすごい真剣やよね。」と話す。去年初めて子供たちに教えたという佐々木裕之さんは、子供たちに「獅子がいかに天狗と戦っているか、獅子が生きているように感じてもらえるように」と教えたという。教え方や踊り方は人によって異なるため、自分の踊り方を押し付けるのではなく、いいところを引き出せるように心がけていたそう。

廃校約10年前の子ども獅子舞を担っていた石橋要明さんのご両親にもお話を聞くことができた。石橋洋一さん（48歳）と石橋美穂さん（48歳）だ。洋一さんは子ども獅子舞を経験しており、現在は保存会で獅子舞の担い手として活動している。美穂さんは魚津市道下地区出身で、結婚をして金山谷に嫁いできたそう。

要明さんの幼いころの話について話を聞くと、手作りの天狗の道具だけでなく、手作りの衣装もあったそうで、写真を見せてくれた。



写真 11-5 洋一さんと祖母手作りの天狗の衣装を着ている要明さん（石橋美穂さん提供）

要明さんは洋一さんの手作りの道具を使って3歳ぐらいから天狗のまねをして遊んでいたそう。小学生になって子ども獅子舞で天狗を担当するようになってからも、この道具を

使って練習していたという。母親の美穂さんは「結局ね、お祭りに子供連れていくでしょ。最初はなんか（洋一さんの天狗姿を見ても）自分の父親だというイメージじゃなくて、獅子とかも多分違う生き物に見えとって、こわいんだと思う。」と話す。しかし、要明さんが徐々に獅子舞に興味持つようになると、戦隊もののテレビ番組よりも獅子舞のビデオを毎日見せてくれと頼むようになったという。それを見た要明さんの祖母が、手作りの天狗の衣装を作ってくれたそう。この衣装を着て、獅子舞を見に行ったこともあったという。「あの子はそれくらい獅子舞が好きやったんですよ。多分じいちゃんばあちゃんも、昔から地域の伝統が受け継がれてきとること、それでそこに興味を持ってくれたっていうのがうれしかったんかなって。」と当時のことを振り返る。

石橋さんの家では要明さんだけでなく、聞き取りに応じてくれた中学3年生の采明さんと中学1年生の究明さんも子ども獅子舞を経験している。洋一さんは、この獅子舞の経験がこれから、生きていくうえで良い経験になり、また違う形でも生かせるのではないかと話す。「人と触れ合うことや人前で披露することはとてもいい経験だし、それが今後の獅子舞にも何かしらの形でつながっていくんじゃないかな。子供たちが獅子舞を素直な気持ちでやってくれてありがたいなと思う。」と子ども獅子舞をどんな気持ちで見守ってきたのかについて、親の視点から話してくれた。

松倉小学校の閉校に伴い、小学校での子ども獅子舞がなくなることを悲しむ声もたくさん聞いたそう。美穂さんはお母さん同士で子ども獅子舞の話題が出た時に、金山谷の子どもに限らず、自分の子供も獅子舞をやりたがっていたという話になったという。「やっぱり上の子たちに憧れて、将来ああやって僕たちもやりたかったなって思っとる子たちがおるっていうのは、すごい聞いています。」と話していた。

3-5. 廃校後の子ども獅子舞

子ども獅子舞は、平成31(2019)年に松倉小学校が統合され、廃校になるまで、学校の授業に取り入れられていた。学校での指導がなくなっではじめて迎えた令和2(2020)年3月の春祭りでは、松倉小学校出身の小学生と松倉小学校を卒業した中学生の有志たちで子ども獅子舞を披露した。今までのように松倉小学校では練習ができないため、郷土文化保存練習館で金山谷獅子舞を披露する大人たちと共に練習したそう。最初は参加する子供も少なかったが、参加する予定の子どもたちの声掛けなどによって次第に増えていき、最終的に20人ほどの参加者が集まった。

元々声をかけ始めたのは金山谷獅子舞保存会現会長の高縁和也さんだった。松倉小学校閉校前の1年から、閉校後の子ども獅子舞をどうしていくかという話題は様々な場所で挙がっていたという。しかし、結局、どこの団体が続けていくのか決まらないままに閉校してしまった。学校がなくなってから1年が経過しようとしていた時、令和2(2020)年1月に会長になった高縁さんが子ども獅子舞を続けることを決心し、声掛けをはじめた。金山谷だけでなく、松倉地区全体に声をかけ、次第に輪が広がっていったそう。聞き取りに応じて

くれた現在の中学3年生の子供たちも中心となって人集めをしたという。高縁さんは「なくなってしまったら、さみしいなってなると思ったから、できる範囲で動こうとした。『やろうぜみんな。まだつながっていく可能性は0じゃないよ。』って。」と話す。また、今後の子ども獅子舞について、石倉伸幸さんは「僕らが強制的に言うてもダメで、小学校でみんなで教え合いっこしていたような感じで、うまくつないでいってもらって、そのお手伝いできればなあ。」と話していた。



写真 11-6 春祭りで中学生が披露した子ども獅子舞（高縁和也さん提供）

実際に参加した子供たちに今年の子ども獅子舞に参加した感想を聞くと、小学生の時よりも自主性をもって参加できたことにやりがいを感じたという声が多かった。「小学生の時は、嫌でもやらなんかなかったけど、今は自分たちで動き出してちゃんとやったから、『あ〜やっとなる』みたいな」と小学校時代とはまた異なる感覚で楽しめたという。

また、小学校からの参加ではなくなったことでいくつかの変化もあったそう。例年は春祭りのあと、子供たちは大人たちとは違い、保存会館での飲食には参加せず、保存会からお礼の品を渡して解散していたそう。しかし、保存会の中で、今年は品物よりもみんなで一緒に楽しく食べたり飲んだりできる場が必要なのではないかという話になり、大人たちの隣に座り、みんなで食事をしたそう。子供たちみんなで食事をとることを提案したのは、娘と息子が子ども獅子舞に参加した石橋美穂さんだった。長い間一緒に遊んできた地区の子たち同士が、練習期間中に一緒に集まって楽しそうにしているのを見て、「この子供たちはこうやって集う場を設けてあげたほうが喜ぶんじゃないかなと思って」と話していた。

衣装も中学生の子供たちにはサイズが合わなかったため、例年の子ども獅子舞とは違い、

中学生のみ体操服での参加になったそうだ。

子供たちにとっても今年の獅子舞には思い入れがあったようで、「受け継いできたものを途切れさせたら申し訳ない」「さみしいし、失くしたくない」という声があった。何より、参加できてよかったと楽しそうに話す姿が印象的だった。

4. 松倉地区におけるその他の記憶

本章では、古鹿熊の黒板と松倉小学校の子ども獅子舞について主に記述してきたが、その他にも地区内で行われていた行事や消えつつある記憶に関する語りは多くあった。鉢や北山の獅子舞、各集落で行われていた盆踊り、坪野小学校の人形劇などがそれにあたる。紙幅も尽きつつあるが、以下、それらについてごく簡単に記す。

盆踊りは、松倉地区の各集落で行われていたようで、坪野集落で暮らす池川邦夫さん（80歳）は、「隣の村の若いやつらが坪野の盆踊りに喧嘩しにやってきて、そいつらの村の盆踊りまで別の日に出向いて、仕返しをしてやった。」と話していた。その当時は盆踊りの喧嘩も楽しみの一つで、喧嘩を見るために盆踊りに来ている人もいたそうだ。

鉢集落の獅子舞は一度途絶えた後、若いころ獅子舞を担っていた70代の住民らがもう一度踊ることで、一時期復活していた。今となっては4世帯ほどしか残っていない鉢集落で暮らす小西末子さん（81歳）は「一日でも長く、鉢を守っていきたい。」と自分が暮らし続けてきた鉢に対する思いを話してくれた。復活後の鉢の獅子舞の映像を見たことがある金山谷獅子舞保存会の現会長高縁和也さんは「あの衝撃映像を見た時に、うちらはまだ40代やぞってなった。70歳の人たちなんとかやっとなるがやちゃ。剣回したり、獅子頭持ったり。あれを見ると、まだ30年は踊れるやろと思った。」と話していた。現在、鉢の獅子舞の担い手はいないが、自分たちがやってきたものを残そうとする鉢住民の姿が金山谷という異なる集落の担い手に伝わり、また別の伝統をつないでいく力につながっていることに感銘を受けた。

坪野小学校の人形劇は、松倉地区の北山集落の伝説を題材にしていた。平成24（2012）年に松倉小学校へ統合された後も、元坪野小学校の児童によって、数年間続けられ、松倉地区の文化祭で披露されていたそうだ。娘が坪野小学校に通っていた清河たか美さん（51歳）は「授業の時間に山へ行ったり、プールへ行ったりとアットホームな雰囲気の学校だった。」と話していた。閉校間近の坪野小学校に通っていた方からの話は聞くことができなかったが、少人数ならではの温かい雰囲気や児童たちの様子を聞くと、古鹿熊分校にも似た、それであってまた異なる歴史を持つ、坪野小学校の記憶に少しだけ触れることができたような気がした。

結びに代えて

今回の約1年半にわたる魚津市の調査では、総勢約60名以上の方々にお話を伺った。松倉地区で生まれた人、育った人、移住してきた人、松倉地区に偶然訪れていた人など多くの出会いに恵まれた。語りの中には、古鹿熊の黒板や松倉小学校の子ども獅子舞以外にも鹿熊の刀踊りや松倉地区の文化祭、その他それぞれの集落の暮らしぶりなど様々なものがあった。そのすべてを今回の報告書で触れられないことを残念に思うが、一人一人がお話ししてくださった、魚津市や松倉地区での生活、思い出、それらすべてが私の中に残り、その結果、出来上がったのがこの報告書だと思う。

話をしてくださった方の中には、昔を懐かしむような目で古鹿熊の空を見つめる人、自分が育った村を何とか残していきたいという強い意志を持つ人、「郷土愛なんてないけどね」と言いながらも自分の村が好きでたまらないようなエピソードをたくさん話してくれる人達がいた。祭りや地域のあり方に批判的な意見を持つ人ももちろんいたが、どの方も、自分がどのように魚津市と関わってきたのか、松倉地区で暮らしてきたかをそれぞれの形で私に伝えてくださり、真摯に向き合ってくださった。

松倉地区の人口は昭和22（1947）年ごろには2,887人でピークを迎え、その後は減少傾向にある。冒頭にも述べたように、令和2（2020）年7月現在の人口は1,029人となっており、ピーク時の半分以上となっている。山間部の人口減少や少子高齢化は松倉地区に限った話ではなく、今となっては全国各地でみられる状況である。そういった中で、地域の伝統芸能や祭り、歴史的遺物を残すというのは、非常に難しく、ここ数年の間で、いつの間になくなってしまったものも多くあると思う。また、今後、このコロナ禍を受け、時代の流れと共に消えていくものもあるだろう。松倉地区の聞き取り調査の中でも、「伝統文化や田畑など、今まで自分たちがつないできたものを子どもたちに受け継いでいってほしいと思う気持ちもある。でも、親にとっては、子供がやりたいことをするのが一番で、その結果、継承されなくなるものが出てきてもいいんだ。」という話があった。

一方で、そのような状況の中でも、今できることを自分たちの手で、できる限りで残そう、守っていこうとする人たちにもたくさん出会った。とりわけ、子ども獅子舞の担い手だった中学生たちから、純粋に獅子舞が楽しくて、好きだから続けたいという話を聞いた時には、これこそ親世代が望む継承のかたちなのではないかと思った。彼らの姿こそ、鉢の獅子舞を復活させた人々のように、あるいは坪野小学校閉校後も人形劇を続けた子供たちのように、今後松倉地区で生きる人たちの記憶の中に残り、将来、文化を受け継いでいく人々の支えになっていくのではないかと思う。

この報告書を執筆するにあたり、文化人類学分野の学生たち、先生方、多くの魚津市、松倉地区の住民の皆様をはじめとする多くの方々にご協力いただいた。この場を借りてお礼申し上げたい。この報告書を手にとってくれた松倉地区の皆様や他地域の方々が松倉地区や自らのふるさとに思いをはせ、忘れつつあった、あたたかな記憶を思い返すきっかけにな

れば幸いである。

注

- 1) 牛やヤギなどを放牧し、耕作放棄地などに生えた雑草を食べさせる除草方法のこと。
- 2) この項の記述は、平成 30 (2018) 年 6 月 8 日に松倉小学校 6 年生に向けて実施された郷土学習の資料である冊子『松倉地区歴史探検』と、山村調査グループ編『村の記憶』(桂書房 1995 年)に基づく。
- 3) それ以前、吉崎さんの親世代は古鹿熊の子供たちは神宮寺で 4 年間勉強していたそうで、読み書き、そろばんを習っていたようだ。
- 4) くずの他に、ぜんまいなどもとっていたが、それらは生活の支えになるほどは売れなかったという。
- 5) 吉崎さんの話では、夫婦ではない場合は女の先生は村の誰かの宿に泊まっていたようだ。
- 6) 吉崎さんの話では「三角の山」と呼ばれていた。
- 7) 『村の記憶』では集団離村は昭和 47 (1972) 年 7 月にあったとあるが、他の元住民からの聞き取りも考慮すると同年 11 月に集団離村が行われたと思われる。
- 8) 黒部市立^{たもみ}田^{たもみ}小学校(のちに東布施小学校に併合)の分校。
- 9) その他の聞き取り調査や『村の記憶』を踏まえると、おそらく「古鹿熊を守る会」なのではないかと思われる。
- 10) 松倉城跡と升方城跡の 2 会場で 5 月の最終日曜日に開催される祭り。平成 4 (1992) 年から行われている。(令和 2 [2020] 年度は新型コロナウイルスの影響で中止)
- 11) これらに加え、しっぽもオーディションだった年や、笛以外のすべての役割がオーディションだった年があったという語りもあった。
- 12) 松倉小学校で子ども獅子舞を経験した 30 代の方も同じような語りをしていた。

参考文献

- 魚津市立松倉小学校古鹿熊分校、1972 年『あしおと 第 1 集』松原宜昭(私家版)。
魚津市立松倉小学校古鹿熊分校、1972 年『あしおと 第 2 集』松原宜昭(私家版)。
黒崎充、2018 年『松倉地区歴史探検』黒崎充(私家版)。
山村調査グループ編、1995 年『村の記憶』桂書房。
広田寿三郎、1978 年『伝説うおづ』月刊魚津同人社。
松倉小学校建設実行委員会、1978 年『魚津発祥の地 松倉 小学校沿革史』松倉小学校建設実行委員会。
松倉小学校閉校式・記念事業等実行委員会記念誌部会、2019 年『松倉小学校閉校記念誌』松倉小学校閉校式・記念事業等実行委員会記念誌部会。
松倉振興会、1991 年『十三の里 第十号』松倉振興会。

地域社会の文化人類学的調査 30
蜃気楼にうつる魚津の暮らし（第2版）

発行日：2021年2月25日

編集：野澤豊一・藤本 武

発行：富山大学人文学部文化人類学研究室

〒930-8555 富山市五福 3190

電話：076-445-6186

E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷：株式会社グラフ

〒931-8453 富山市中田 45-63